

茨城県教育財団文化財調査報告第108集

主要地方道水戸茂木線道路改良 工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

上 入 野 遺 跡

青 木 遺 跡

後 側 遺 跡

前 側 遺 跡

平成8年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第108集

主要地方道水戸茂木線道路改良 工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

かみ いり の 遺 跡
上 入 野 遺 跡
あお き 遺 跡
青 木 遺 跡
うしろ かわ 遺 跡
後 側 遺 跡
まえ かわ 遺 跡
前 側 遺 跡

平成8年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団



遺跡遠景（西から）



黄瀬戸折縁菊皿（青木遺跡第1号地下式墳内出土）

序

茨城県は、産業・経済の発展に伴う広域流通機構の整備と、県土の普遍的な発展を図るために、県内の交通体系の整備を進めております。

主要地方道水戸茂木線道路改良工事もその一環として計画されたものですが、その予定地内には、多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されています。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け、主要地方道水戸茂木線道路改良工事地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本書は、平成5年4月から10月にかけて調査を行った上入野遺跡、青木遺跡、後側遺跡及び前側遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な資料としてはもとより、教育・文化向上の一助として広く活用されますことを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理に当たり、委託者である茨城県から賜りました多大なる御協力に対し、深く感謝申し上げます。

また、茨城県教育委員会、常北町教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導・御協力いただきましたことに、衷心より感謝の意を表します。

平成8年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 橋本 昌

例 言

- 1 本書は、茨城県の委託により財団法人茨城県教育財団が平成5年4月から10月まで発掘調査を実施した上入野遺跡、青木遺跡、後側遺跡及び前側遺跡の発掘調査報告書である。遺跡の所在地は、次のとおりである。

上入野遺跡 茨城県東茨城郡常北町大字上入野字表前888-1ほか
 青木遺跡 茨城県東茨城郡常北町大字上入野字加波河内735ほか
 後側遺跡 茨城県東茨城郡常北町大字上入野字宿脇2,151ほか
 前側遺跡 茨城県東茨城郡常北町大字上入野字仲内2,471-2ほか

なお、同時に調査した仲郷遺跡については、一部調査が終了していないため、別途に報告する。

- 2 上入野遺跡、青木遺跡、後側遺跡、前側遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	磯田 勇	昭和63年6月～平成7年3月
	橋本 昌	平成7年4月～
副 理 事 長	角田 芳夫	平成3年7月～平成6年3月
	小林 秀文	平成6年4月～
	中島 弘光	平成7年4月～
専 務 理 事	中島 弘光	平成5年4月～平成7年3月
常 務 理 事	一木 邦彦	平成7年4月～
事 務 局 長	藤枝 宣一	平成4年4月～平成7年3月
	齋藤 紀彦	平成7年4月～
埋 蔵 文 化 財 部 長	安藏 幸重	平成5年4月～
埋 蔵 文 化 財 部 長 代 理	河野 佑司	平成6年4月～
企 画 管 理 課	課 長	水飼 敏夫 平成4年4月～
	課 長 代 理	根本 達夫 平成7年4月～ (平成6年4月～平成7年3月 係長)
	主 任 調 査 員	川井 正一 平成5年4月～平成6年3月
	主 任 調 査 員	海老澤 稔 平成6年4月～
	主 事	杉山 秀一 平成4年4月～平成6年3月
経 理 課	課 長	小幡 弘明 平成5年4月～
	主 査	鈴木 三郎 平成7年4月～ (平成5年4月～平成7年3月 課長代理)
	課 長 代 理	大高 春夫 平成7年4月～ (平成6年4月～平成7年3月 係長)
	主 任	飯島 康司 平成4年4月～平成6年3月
	主 任	小池 孝 平成7年4月～
調 査 課	主 事	軍司 浩作 平成5年4月～
	課 長 (部 長 兼 務)	安藏 幸重 平成5年4月～
	調 査 第 三 班 長	根本 康弘 平成5年4月～
	主 任 調 査 員	萩野谷 悟 平成5年4月～平成5年10月調査
整 理 課	調 査 員	梶山 雅彦 平成5年4月～平成5年10月調査
	課 長	山本 静男 平成7年4月～
主 任 調 査 員	池田 晃一	平成7年4月～平成8年3月整理・執筆・編集

- 3 本書で使用した記号等については、凡例を参照されたい。
- 4 本書の作成にあたり、灰釉陶器については愛知県陶磁資料館学芸課長柴垣勇夫氏に、奈良・平安時代の土器については常陸太田第一高等学校教諭浅井哲也氏に、掘立柱建物跡については埼玉県埋蔵文化財調査事業団主任調査員田中広明氏に、近世陶磁器については高業史博物館学芸部長河野一也氏に御指導いただいた。
- 5 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。
- 6 遺跡の概略

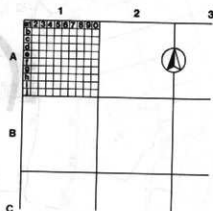
ふりがな	しゅうちゅうほうどうみともてぎせんだうろかいりょうこうちぢないまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ						
書名	主要地方道水戸茂木線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書						
副書名	上入野遺跡 青木遺跡 後側遺跡 前側遺跡						
巻次	1						
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第108集						
編著者名	池田 晃一						
編集機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 ☎029-225-6587						
発行年月日	1996(平成8)年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
上入野遺跡	茨城県東茨城郡常北町大字 上入野字表前888-1ほか	08306-14	36度 26分19秒	140度 23分36秒	19930401~ 19931031	1,524㎡	主要地方道
青木遺跡	茨城県東茨城郡常北町大字 上入野字田舎河内736ほか	08306-21	36度 26分23秒	140度 23分33秒		2,405㎡	水戸茂木線 道路改良工 事に伴う発 掘調査
後側遺跡	茨城県東茨城郡常北町大字 上入野字前編2,151ほか	08306-23	36度 26分21秒	140度 22分57秒		1,645㎡	
前側遺跡	茨城県東茨城郡常北町大字 上入野字仲内2,471-2ほか	08306-24	36度 26分19秒	140度 22分42秒		361㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
上入野遺跡	集落跡	旧石器時代 弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代	土坑 竪穴住居跡 竪穴住居跡 竪穴住居跡	3基 1軒 7軒 6軒	弥生土器 土師器・石製模造品 須恵器・紡錘車	旧石器時代のもの と思われる土坑3基確 認	
青木遺跡	集落跡 城館跡	古墳時代 奈良・平安時代 中世 近世	竪穴住居跡 竪穴住居跡 大形土坑 堀 井戸	12軒 25軒 3基 1条 4基	土師器・鉄鎌・丸玉 土師器・須恵器・灰 釉陶器 土師質土器 陶磁器・瓦質土器	奈良・平安時代の3 基の大形土坑から 計3,000点以上の土 師器の皿・埴・環類 が出土	
後側遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代 奈良・平安時代	竪穴住居跡 竪穴住居跡 竪穴住居跡	1軒 2軒 4軒	縄文土器・打製石斧 土師器・須恵器・石 鏝(丸柄)	表土中から 石鏝(丸 柄)が出土	
前側遺跡	集落跡	奈良・平安時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡	4軒 4棟	土師器・須恵器・炭 化材	庇をもつ掘立柱建物 跡1棟と焼失家屋内 よりほぞ穴のある炭 化材出土	

凡 例

- 1 遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系を原点とし、上人野遺跡 $X = +48,800m$ $Y = +50,200m$ 、青木遺跡 $X = +49,000m$ $Y = +49,960m$ 、後側遺跡 $X = +48,920m$ $Y = +49,160m$ 、前側遺跡 $X = +48,800m$ $Y = +48,720m$ の交点を基準点(A1a₁)とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C……、西から東へ1, 2, 3……とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。小調査区も同様に北から南へa, b, c……j, 西から東へ1, 2, 3……とし、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a₁区」、「B2b₂区」のように呼称した。



第1図 調査区呼称方法概念図

- 2 土層、遺構、遺物に使用した記号は、次のとおりである。

土層 攪乱-K

遺構 住居跡-S I 掘立柱建物跡-SB 土坑-SK 堀・溝-SD 井戸-SE
性格不明遺構-SX ビット-P₁~ 攪乱-K

遺物 土器-P 拓土土器-TP 土製品-DP 石器・石製品-Q 金属製品-M

- 3 土層、遺構、遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。

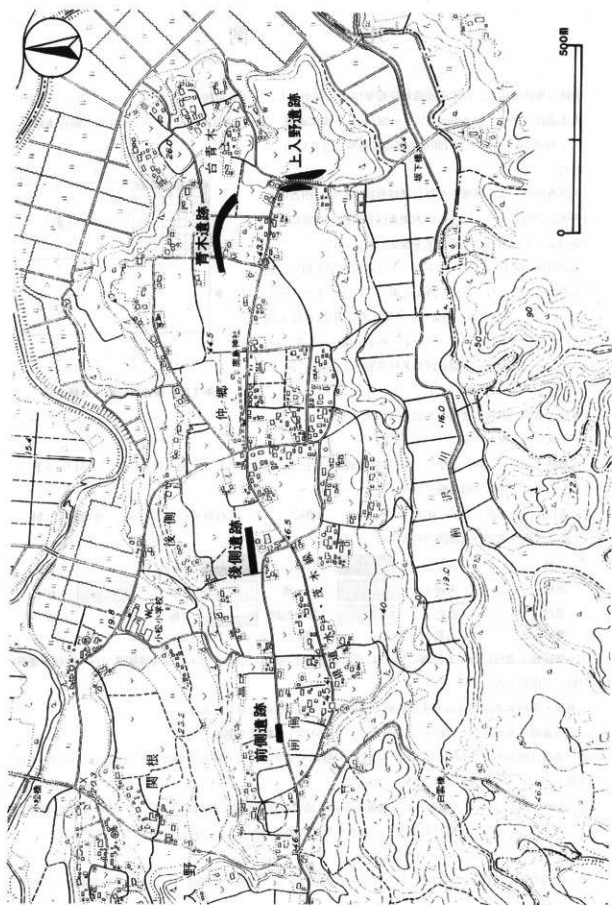
土層		= 表土		= 旧耕作土		= 貼床		= 柱痕
遺構		= 床硬化面		= 炉・竈		= 焼土		= 粘土
遺物		= 赤彩		= 黒色処理		= 軸		= 煤
	● 土器	□ 石器・石製品	○ 土製品	▲ 金属製品				

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色粘』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

- 5 遺構・遺物実測図の作成方法と掲載方法については、次のとおりである。

- 各遺構の実測図は、30分の1、60分の1、80分の1の縮尺で掲載した。
- 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては、個々にスケールで表示した。
- 「主軸方向」は、炉・竈をとめる軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。(例 N-10°-E, N-10°-W)
なお、〔 〕を付したものは推定である。
- 土器の計測値は、A-口径 B-器高 C-底径 D-高台・脚部径 E-高台・脚部高とし、単位はcmである。

なお、現存値は()で、推定値は〔 〕を付して示した。



第2図 調査区位置図

目 次

序	
例 言	
凡 例	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 上入野遺跡	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	10
1 竪穴住居跡	10
2 土坑	42
3 遺構外出土遺物	48
第4節 まとめ	50
第4章 青木遺跡	55
第1節 遺跡の概要	55
第2節 基本層序	55
第3節 遺構と遺物	57
1 竪穴住居跡	57
2 掘立柱建物跡	127
3 ビット群	129
4 土坑	135
5 地下式墳	189
6 堀及び溝	191
7 井戸	195
8 遺構外出土遺物	200
第4節 まとめ	204
第5章 後側遺跡	211
第1節 遺跡の概要	211
第2節 基本層序	211
第3節 遺構と遺物	212
1 竪穴住居跡	212

2	土坑	234
3	溝	248
4	井戸	252
5	遺構外出土遺物	255
第4節	まとめ	259
第6章	前制遺跡	263
第1節	遺跡の概要	263
第2節	基本層序	263
第3節	遺構と遺物	264
1	竪穴住居跡	264
2	掘立柱建物跡	274
3	土坑	280
4	遺構外出土遺物	281
第4節	まとめ	283
付章	自然科学分析	バリノ・サーヴェイ株式会社 285

挿 図 目 次

第1図	調査区呼称方法概念図	28
第2図	調査区位置図	30
第3図	周辺遺跡分布図	6
第4図	上入野遺跡調査区設定図	9
第5図	上入野遺跡基本土層図	10
第6図	第1号住居跡実測図	10
第7図	第2号住居跡実測図	11
第8図	第3号住居跡実測図	11
第9図	第4号住居跡実測図	12
第10図	第5号住居跡・出土遺物実測図	13
第11図	第6号住居跡実測図	14
第12図	第7・8号住居跡、第7号竈実測図	15
第13図	第7号住居跡出土遺物実測図	17
第14図	第8号住居跡出土遺物実測図	19
第15図	第9号住居跡・出土遺物実測図	20
第16図	第10号住居跡・出土遺物実測図(1)	22
第17図	第10号住居跡出土遺物実測図(2)	23
第18図	第11号住居跡・出土遺物実測図	25
第19図	第14号住居跡・出土遺物実測図	26
第20図	第15・16・18号住居跡実測図	27
第21図	第15号住居跡出土遺物実測図	28
第22図	第16号住居跡出土遺物実測図	30
第23図	第17号住居跡竈実測図	31
第24図	第17・19号住居跡実測図(1)	32
第25図	第17・19号住居跡実測図(2)	33
第26図	第17号住居跡出土遺物実測図(1)	34
第27図	第17号住居跡出土遺物実測図(2)	35
第28図	第17号住居跡出土遺物実測図(3)	37
第29図	第18号住居跡出土遺物実測図	37
第30図	第19号住居跡出土遺物実測図	38
第31図	第20号住居跡・出土遺物実測図	39
第32図	第21・22号住居跡実測図	41
第33図	第1号土坑・出土遺物実測図	42
第34図	第3号土坑・出土遺物実測図	43
第35図	第9・13号土坑実測図	44
第36図	第14～16号土坑実測図	46
第37図	第2・4～7・10～12号土坑実測図	47
第38図	遺構外出土遺物実測図	49
第39図	青木遺跡基本土層図	55
第40図	青木遺跡調査区設定図	56

第41図	第1～3号住居跡実測図	58	第79図	第42号住居跡・竈・出土遺物実測図	115
第42図	第1号住居跡出土遺物実測図	59	第80図	第43号住居跡実測図	116
第43図	第3号住居跡出土遺物実測図	60	第81図	第45号住居跡・竈・出土遺物実測図	117
第44図	第4号住居跡実測図	61	第82図	第46・48号住居跡・竈実測図	119
第45図	第4号住居跡竈・出土遺物実測図(1)	62	第83図	第46号住居跡出土遺物実測図	120
第46図	第4号住居跡出土遺物実測図(2)	63	第84図	第48号住居跡出土遺物実測図	122
第47図	第6号住居跡実測図	64	第85図	第49号住居跡・出土遺物実測図	124
第48図	第7号住居跡・出土遺物実測図	65	第86図	第51・52号住居跡・出土遺物実測図	125
第49図	第8号住居跡出土遺物実測図	66	第87図	第1号堀立柱建物跡実測図	128
第50図	第8・11号住居跡実測図(1)	68	第88図	第1号ピット群実測図	130
第51図	第8・11号住居跡(2), 第11号竈実測図	69	第89図	第2号ピット群実測図	132
第52図	第9号住居跡・竈実測図	71	第90図	第3号ピット群実測図	133・134
第53図	第9号住居跡出土遺物実測図	72	第91図	第4号土坑・出土遺物実測図(1)	136
第54図	第11号住居跡出土遺物実測図	75	第92図	第4号土坑出土遺物実測図(2)	137
第55図	第12号住居跡・竈・出土遺物実測図	77	第93図	第4号土坑出土遺物実測図(3)	138
第56図	第15～18号住居跡・出土遺物実測図	80	第94図	第4号土坑出土遺物実測図(4)	139
第57図	第19・20号住居跡・竈実測図	83	第95図	第4号土坑出土遺物実測図(5)	140
第58図	第19号住居跡出土遺物実測図	84	第96図	第4号土坑出土遺物実測図(6)	141
第59図	第20号住居跡出土遺物実測図	86	第97図	第4号土坑出土遺物実測図(7)	142
第60図	第21号住居跡・出土遺物実測図	87	第98図	第7号土坑・出土遺物実測図	148
第61図	第23号住居跡・竈実測図	89	第99図	第36号土坑・出土遺物実測図	150
第62図	第23号住居跡出土遺物実測図	90	第100図	第85号土坑・出土遺物実測図	151
第63図	第24号住居跡実測図	90	第101図	第124号土坑・出土遺物実測図	151
第64図	第25A・25B号住居跡, 第25B号竈実測図	92	第102図	第125号土坑・出土遺物実測図	153
第65図	第25A号住居跡出土遺物実測図	93	第103図	第127号土坑・出土遺物実測図	155
第66図	第25B号住居跡出土遺物実測図	95	第104図	第133号土坑・出土遺物実測図	156
第67図	第25C号住居跡・竈・出土遺物実測図	96	第105図	第142号土坑・出土遺物実測図	157
第68図	第26・27号住居跡実測図	98	第106図	第151号土坑・出土遺物実測図	159
第69図	第28号住居跡・竈・出土遺物実測図	99	第107図	第198～200号七坑実測図	160
第70図	第29号住居跡・竈・出土遺物実測図	101	第108図	第198～200号土坑出土遺物位置図	161
第71図	第30号住居跡・出土遺物実測図	102	第109図	第198号土坑出土遺物実測図(1)	163
第72図	第32号住居跡・竈・出土遺物実測図	104	第110図	第198号土坑出土遺物実測図(2)	164
第73図	第34号住居跡・出土遺物実測図	106	第111図	第198号土坑出土遺物実測図(3)	165
第74図	第36号住居跡・出土遺物実測図	107	第112図	第198号土坑出土遺物実測図(4)	166
第75図	第37号住居跡・出土遺物実測図	108	第113図	第199号土坑出土遺物実測図(1)	173
第76図	第38号住居跡・出土遺物実測図	109	第114図	第199号土坑出土遺物実測図(2)	174
第77図	第40号住居跡・竈・出土遺物実測図	111	第115図	第200号土坑出土遺物実測図(1)	178
第78図	第41号住居跡・竈・出土遺物実測図	113	第116図	第200号土坑出土遺物実測図(2)	179

第117图	第1~3·8·25·26·45~48·51·56号土坑实测图	186	第152图	第15号土坑·出土遺物实测图	238
第118图	第57·70·81·122·123·126·129~132·138·140号土坑实测图	187	第153图	第17号土坑·出土遺物实测图	239
第119图	第141·146·147·150·152·183·184号土坑实测图	188	第154图	第38·39号土坑,第39号土坑出土遺物实测图	241
第120图	第1号地下式竈·出土遺物实测图	190	第155图	第45号土坑·出土遺物实测图	242
第121图	第1号堀穴实测图(1)	192	第156图	第46号土坑·出土遺物实测图	243
第122图	第1号堀穴(2)·出土遺物实测图	193	第157图	第50号土坑·出土遺物实测图	244
第123图	第2号溝穴实测图	195	第158图	第53号土坑·出土遺物实测图	245
第124图	第3号溝穴实测图	195	第159图	第1~3·5·10·24·29·36·41A·41B·44·52号土坑实测图	247
第125图	第2号井戸·出土遺物实测图	196	第160图	第1·2号溝穴实测图	249
第126图	第3号井戸实测图	198	第161图	第1号溝出土遺物实测图	250
第127图	第4号井戸实测图	199	第162图	第2号溝出土遺物实测图	251
第128图	第5号井戸·出土遺物实测图	199	第163图	第1号井戸·出土遺物实测图	253
第129图	遺構外出土遺物实测图(1)	201	第164图	第2号井戸·出土遺物实测图	254
第130图	遺構外出土遺物实测图(2)	202	第165图	遺構外出土遺物实测图(1)	256
第131图	後側遺跡調査区設定图	211	第166图	遺構外出土遺物实测图(2)	257
第132图	後側遺跡基本土層图	212	第167图	前側遺跡調査区設定图	263
第133图	第1号住居跡·竈·出土遺物实测图	213	第168图	前側遺跡基本土層图	263
第134图	第2号住居跡·竈·出土遺物实测图(1)	216	第169图	第1号住居跡·竈穴实测图	264
第135图	第2号住居跡出土遺物实测图(2)	217	第170图	第2号住居跡·出土遺物实测图	266
第136图	第2号住居跡出土遺物实测图(3)	218	第171图	第3号住居跡·竈·出土遺物实测图(1)	268
第137图	第3号住居跡·竈穴实测图	219	第172图	第3号住居跡出土遺物实测图(2)	269
第138图	第3号住居跡出土遺物实测图	220	第173图	第4号住居跡穴实测图	271
第139图	第4号住居跡·竈·出土遺物实测图(1)	223	第174图	第4号住居跡出土遺物实测图	272
第140图	第4号住居跡出土遺物实测图(2)	224	第175图	第1号堀立柱建物跡·出土遺物实测图	276
第141图	第5号住居跡·竈·出土遺物实测图(1)	225	第176图	第2号堀立柱建物跡穴实测图	277
第142图	第5号住居跡出土遺物实测图(2)	226	第177图	第3号堀立柱建物跡·出土遺物实测图	279
第143图	第6号住居跡·竈穴实测图	228	第178图	第4号堀立柱建物跡·出土遺物实测图	280
第144图	第6号住居跡出土遺物实测图	229	第179图	第1·2·4·5A·5B·6~8·10号土坑穴实测图	281
第145图	第8号住居跡·竈·出土遺物实测图(1)	232	第180图	遺構外出土遺物实测图	282
第146图	第8号住居跡出土遺物实测图(2)	233			
第147图	第6号土坑·出土遺物实测图	235			
第148图	第7号土坑·出土遺物实测图	235			
第149图	第11·12号土坑·出土遺物实测图	236			
第150图	第13号土坑·出土遺物实测图	237			
第151图	第14号土坑穴实测图	237			

付 図 目 次

付図1 上入野遺跡遺構配置図	付図3 後側遺跡遺構配置図
付図2 青木遺跡遺構配置図	付図4 前側遺跡遺構配置図

表 目 次

表1 上入野遺跡・青木遺跡・後側遺跡・前側遺跡 周辺遺跡一覧表 …………… 5	表5 青木遺跡土坑一覧表 ……………184
表2 上入野遺跡住居跡一覧表 ……………41	表6 後側遺跡住居跡一覧表 ……………234
表3 上入野遺跡土坑一覧表 ……………46	表7 後側遺跡土坑一覧表 ……………245
表4 青木遺跡住居跡一覧表 ……………126	表8 前側遺跡住居跡一覧表 ……………274
	表9 前側遺跡土坑一覧表 ……………280

写真図版目次

上入野遺跡	P L 16 第1号住居跡, 第4号住居跡, 第9号住居跡
P L 1 遺跡全景, 2区調査終了風景	P L 17 第11号住居跡, 第11号住居跡竈, 第11号住 居跡鉄線出土状況
P L 2 第4号住居跡, 第5号住居跡, 第6号住居跡	P L 18 第12号住居跡, 第23号住居跡, 第23号住居 跡竈遺物出土状況
P L 3 第7号住居跡竈, 第8号住居跡遺物出土状 況, 第10号住居跡出入り口部	P L 19 第25A・25B・25C号住居跡, 第29号住居 跡, 第30号住居跡
P L 4 第10号住居跡, 第11号住居跡, 第15号住居跡	P L 20 第40号住居跡, 第41号住居跡, 第42号住居跡
P L 5 第16号住居跡, 第17号住居跡, 第17号住居 跡遺物出土状況	P L 21 第45号住居跡, 第46・48号住居跡, 第1号 ビット群
P L 6 第18号住居跡, 第19号住居跡, 第20号住居跡	P L 22 第2号ビット群, 第3号ビット群, 第3号 ビット群根固め石出土状況
P L 7 第1号土坑遺物出土状況, 第9号土坑, 第 13号土坑土層セクション	P L 23 第36号土坑, 第56号土坑, 第125号土坑遺 物出土状況
P L 8 第14・15・16号土坑, 第14・15号土坑	P L 24 第129号土坑, 第133号土坑, 第142号土坑
P L 9 第5・7・8号住居跡出土遺物	P L 25 第198・199号土坑遺物出土状況, 第198号 土坑種実(モモ)出土状況, 第200号土坑 遺物出土状況
P L 10 第9・10号住居跡出土遺物	P L 26 第200号土坑遺物出土状況, 第200号土坑土 層セクション(東から), 第198・199・200 号土坑
P L 11 第10・11・14・15号住居跡出土遺物	
P L 12 第17号住居跡出土遺物	
P L 13 第17・19号住居跡出土遺物	
P L 14 第19・20号住居跡, 第1号土坑, 遺溝外出 土遺物	
青木遺跡	
P L 15 遺跡全景, 遺溝確認状況	

P L 27 第1号地下式墳, 第1号堀, 第1号堀南端部ピット群

P L 28 第2号溝, 第2・5号井戸, 第4号土坑, 第3号井戸

P L 29 第4号井戸中位の横穴, 第4号井戸, 1区調査終了風景

P L 30 第1・3・4・7・8・9号住居跡出土遺物

P L 31 第9・11号住居跡出土遺物

P L 32 第12・17・19・20・21・23号住居跡出土遺物

P L 33 第25A・25B・25C・28・30・32・34号住居跡出土遺物

P L 34 第37・38・40・41・42・45・46号住居跡出土遺物

P L 35 第46・48・49・51・52号住居跡, 第4号土坑出土遺物

P L 36 第4号土坑出土遺物

P L 37 第4号土坑出土遺物

P L 38 第36・124・125・133号土坑出土遺物

P L 39 第142・198号土坑出土遺物

P L 40 第198号土坑出土遺物

P L 41 第198・199号土坑出土遺物

P L 42 第199号土坑出土遺物

P L 43 第199・200号土坑出土遺物

P L 44 第200号土坑, 第1号地下式墳, 第1号堀出土遺物

P L 45 第1号堀, 第2・5号井戸, 遺溝外出土遺物

P L 46 遺溝外, その他の出土遺物

後側遺跡

P L 47 遺跡全景, 遺溝確認状況

P L 48 第2号住居跡, 第2号住居跡遺物出土状況, 第2号住居跡竈遺物出土状況

P L 49 第3・4号住居跡, 第4号住居跡竈遺物出土状況, 第4号住居跡竈

P L 50 第5号住居跡, 第6号住居跡, 第6号住居跡遺物出土状況

P L 51 第8号住居跡, 第8号住居跡炉, 第8号住

居跡炉・床下土層セクション

P L 52 第11・12号土坑, 第13号土坑, 第14号土坑, 第17号土坑, 第45号土坑, 第46号土坑

P L 53 第53号土坑, 第1号溝, 第2号溝

P L 54 第1号井戸, 第2号井戸, 調査終了風景

P L 55 第1・2号住居跡出土遺物

P L 56 第2・3・4号住居跡出土遺物

P L 57 第5・6号住居跡出土遺物

P L 58 第8号住居跡, 第7・15・17・39・45・50号土坑, 第2号溝出土遺物

P L 59 第1・2号溝, 第1・2号井戸, 遺溝外出土遺物

P L 60 遺溝外, その他の出土遺物

前側遺跡

P L 61 遺跡全景, 遺溝確認状況

P L 62 第1号住居跡炭化材出土状況, 第1号住居跡ほぞ穴のある炭化材出土状況, 第2号住居跡遺物出土状況

P L 63 第3号住居跡, 第3号住居跡竈支脚出土状況, 第4号住居跡

P L 64 第1号掘立柱建物跡遺構確認状況, 第2号掘立柱建物跡遺構確認状況, 第3・4号掘立柱建物跡遺構確認状況

P L 65 第2・3号住居跡出土遺物

P L 66 第4号住居跡, 第1・3・4号掘立柱建物跡, 遺溝外出土遺物

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

主要地方道水戸茂木線は、茨城県水戸市と栃木県茂木町を結ぶ幹線道路として重要な役割を果たしている。しかし、近年の自動車交通量の増加に伴い交通の混雑が著しく、かつ幅員狭小箇所は常に交通の危険にさらされている現状にある。茨城県は、その早急な解消を目的として道路改良工事を計画した。

工事に先立ち、平成4年6月1日、茨城県は、茨城県教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。そこで、茨城県教育委員会は同年10月27、28日に試掘調査を実施した。その結果、工事予定地内に上入野遺跡、青木遺跡、仲郷遺跡、後側遺跡及び前側遺跡が存在することを確認し、同年12月14日、上入野遺跡ほか4遺跡が所在する旨茨城県に回答した。茨城県は、平成5年1月19日、茨城県教育委員会にその取り扱いについて協議を求めた。同年2月2日、茨城県教育委員会は、茨城県に対し、記録保存の措置を講ずる旨の回答を行い、調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県と茨城県教育財団は、埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び、平成5年4月1日から同年9月30日にかけて、上入野遺跡、青木遺跡、仲郷遺跡、後側遺跡及び前側遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

上入野遺跡、青木遺跡、仲郷遺跡、後側遺跡及び前側遺跡の発掘調査は平成5年4月1日から平成5年9月30日までの6か月間の予定で調査が開始されたが、表土除去の結果、遺構が多数確認されたことにより調査期間を1か月間延長し、10月31日までの調査となった。

なお、仲郷遺跡については一部未買地のため調査が終了しておらず別途に報告することになった。以下、仲郷遺跡を除く調査の経過について月ごとに略述する。

- 4月 発掘調査開始にあたっての諸準備を行う。8日には現地踏査を行い、その後現場事務所、倉庫等を設置した。16日から作業員を投入し、調査器材を搬入した。20日に発掘調査の円滑な進行と安全を祈願して搬入式を挙行了。同日午後から、上入野遺跡、青木遺跡、後側遺跡及び前側遺跡の試掘調査を順次行った。その結果、各遺跡に堅穴住居跡等の遺構の存在が確認された。前側遺跡では、大形の掘立柱建物跡らしい落ち込みが見られ、面積も狭いことから人力による表土除去を実施することとした。
- 5月 6、7日に前側遺跡の遺構確認作業を行った。11日に基準杭打ちを実施し、前側遺跡の遺構調査に入った。並行して19日から上入野遺跡の重機による表土除去と遺構確認作業を開始した。
- 6月 雨天の日が多く、調査の進捗が遅りがちであった。1日、上入野遺跡の表土除去、遺構確認作業終了。翌2日から青木遺跡の重機による表土除去及び遺構確認作業を開始した。4日に上入野遺跡の基準杭打ちを行い、7日から遺構調査を開始した。15日、前側遺跡の調査終了全景の写真撮影を行い、遺構調査を終了した。17日、青木遺跡の表土除去及び遺構確認作業を終了し、続いて後側遺跡の表土除去及び遺構確認作業に入った。同日、青木遺跡の基準杭打ちを実施した。28日、後側遺跡の基準杭打ちを行った。
- 7月 1日から青木遺跡の遺構調査に入った。8月までの間、上入野遺跡と青木遺跡の遺構調査が主体となった。

- 8 月 18日, 上入野遺跡の遺構調査終了。23日, 前側遺跡と上入野遺跡の航空写真撮影を実施した。青木遺跡は, 遺構が多く引き続き遺構調査を行った。
- 9 月 6日, 現地において茨城県教育委員会(文化課), 茨城県(道路建設課, 水戸土木事務所), 茨城県教育財団の関係三者が集まり, 今後の調査計画の変更(期間の延長)について協議した。11日から後側遺跡の遺構調査に入った。25日には, 後側遺跡を除き概ね調査を終了し, これまでの調査の成果をもとに現地説明会を実施した。30日, 茨城県と調査計画の変更契約を結んだ。同日, 青木遺跡の遺構調査終了。後側遺跡は, 引き続き遺構調査を行った。
- 10 月 12日, 後側遺跡の遺構調査終了。15日に青木遺跡と後側遺跡の航空写真撮影を実施した。補足調査終了後, 23日から撤収作業の準備を開始し, 31日には現場事務所を閉鎖し, 調査を完了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

上入野遺跡、青木遺跡、後側遺跡、前側遺跡は、いずれも茨城県東茨城郡常北町上入野地区に所在する。

常北町は、茨城県のほぼ中央部に位置し、北は桂村、東は那珂川をはさんで那珂町、南は水戸市及び笠間市、西は七公村に接している。

常北町の地形は、西から東に丘陵性山地、台地、沖積低地に大別される。西部の丘陵性山地は、八溝山地の南の鶏足山塊の東縁部にあたり、標高200m程度の低山が連なる。鶏足山塊は、主に砂岩、頁岩の互層からなり、一部にチャートや石灰岩をはさんでいる。また、丘陵性山地周辺部には凝灰岩、砂岩、泥岩等からなる地層が分布しており、台地の基盤岩となっている。常北町の台地は、那珂西台地あるいは石塚台地と呼ばれる洪積台地であり、市街地の大部分がここに形成されている。台地は、標高40～50m程度で低地との比高は約20mあり、急崖に囲まれている。町の東を南に流れる那珂川と東に流れる藤井川、西田川等の那珂川の支流群は、台地を開析し沖積低地を形成している。低地は主に水田に利用されている。

上入野遺跡、青木遺跡、後側遺跡、前側遺跡の所在する上入野地区は、常北町の南東部に位置し、東から南は水戸市藤井町及び成沢町に接している。各遺跡は、石塚台地南部のいわゆる上入野台地に立地する。上入野台地は、北を流れる藤井川と南を流れる前沢川によって開析された西から東に延びる舌状台地である。台地の南北幅は約500m、低地との比高は約20mで、台地の大部分は宅地及び畑地に利用されており、各遺跡の調査前の現況は畑地であった。藤井川と前沢川は台地の東側で合流し、さらにその東で那珂川へと注いでいる。流域には狭小な低地が形成され、現在は水田として利用されている。

主要地方道水戸茂木線の新路線は、水戸方面から台地の東端部南より台地上がり、旧路線の北側の台地のほぼ中央部を西へ茂木方面へと向かっている。4遺跡は、その路線上に水戸側から上入野遺跡、青木遺跡、後側遺跡、前側遺跡の順に位置している。各遺跡間の位置関係は、台地東端部にある上入野遺跡から約250m北西部に青木遺跡が、青木遺跡から約900m西に後側遺跡が、後側遺跡からさらに約500m西に前側遺跡がある。

参考文献

常北町史編さん委員会 『常北町史』 1988年 3月

萩野裕悟 「常北町上入野・青木・仲郷・後側・前側遺跡の発掘調査」『常北の文化 第17号』常北町郷土文化研究会 1994年 3月

第2節 歴史的環境

上入野遺跡、青木遺跡、後側遺跡、前側遺跡付近は、那珂川とその支流群によって開析された台地が発達し、原始、古代より恰好な居住の場として利用されてきた。そのため、4遺跡周辺には、台地上を中心に多数の遺跡が存在する。周辺の遺跡については発掘調査例が少ないためその詳細は必ずしも明らかではないが、この地域の遺跡を時代を追って概観してみたい。

旧石器時代の遺跡は、主に常北町の北部に位置する春園遺跡、片山遺跡、二本松遺跡、向原遺跡の4か所が

知られている。いずれも石器が採集されているが、その時期や性格は不明である。また、上野台地の北、那珂川右岸の水戸市十万原付近の台地上にあるドウゼンクボ遺跡<9>、二の沢遺跡<10>、十万原遺跡<16>からも旧石器時代の石器が採集されている。

縄文時代の遺跡は、周辺の遺跡の中でも数が最も多く、山間部から台地の縁辺部まで広く分布している。常北町内では、早期から晩期まで縄文時代の全期間を通して生活の拠点となった片山遺跡をはじめ、早期の小板宮方遺跡、安渡遺跡、早・前期の仲野田遺跡、早・中期の中妻遺跡<6>、那珂西遺跡<15>、上野台地上に立地する中期の関根遺跡<23>とその西にあり一部が今回の調査対象となった同じく中期の後側遺跡<3>、後期の外ノ内・天神遺跡<5>及び増井本郷遺跡<21>の10遺跡が知られている。さらに、周辺には十万原台地上に立地するドウゼンクボ遺跡、二の沢遺跡、ニガサワ遺跡<12>、十万原遺跡、藤井町遺跡<17>、清水台遺跡<19>、間駒形遺跡<20>をはじめ、埴遺跡<24>、成沢大塚遺跡<26>、下宿遺跡<31>、馬場尻遺跡<34>など那珂川右岸の台地上に多数の遺跡が確認されている。

弥生時代になると遺跡数は少なくなり、常北町内では、片山遺跡のほか風車前遺跡や那珂西台地、上野台地などで後期の遺物が採集されている程度である。周辺には、ポンポン遺跡<8>、ドウゼンクボ遺跡、馬場尻遺跡等の水戸市飯富地区や十万原地区の那珂川右岸の台地縁辺部に立地した遺跡群がある。これらの遺跡からは、中期の土器がドウゼンクボ遺跡で採集されている以外は、すべて後期の十王台式の土器が採集されている。

古墳時代の前・中期になっても常北町内の遺跡は、弥生時代と同様に数が少なく、風車前遺跡や那珂西台地、上野台地等で該期の遺物が確認されている程度である。後期になると本格的な集落形成が始まり、遺跡数は増加する。石塚地の風車前遺跡からは、多量の後期の土器とともに石製模造品、滑石製の勾玉や白玉などが出土している。また、増井古墳<22>、上青山古墳群、長峰古墳群、石塚古墳群などの古墳群も造られるようになる。周辺にも多数の遺跡が確認されている。前期の遺物が採集されている二の沢遺跡、ニガサワ遺跡、馬場尻遺跡のほか、後期の高根遺跡<32>や時期は明確ではないが清水台遺跡、成沢大塚遺跡、飯富遺跡<28>などがある。また、二の沢古墳群<11>、ニガサワ古墳群<13>、清水台古墳群<18>、成沢大塚古墳群<27>、塚山古墳群<30>、大井下古墳群<33>など多数の古墳群も築造されている。

奈良・平安時代になると遺跡数はさらに増加し、中妻遺跡、北米遺跡<7>、那珂西遺跡、増井遺跡など常北町内だけでも36か所もの遺跡が確認されている。上野野、青木、後側、前側の4遺跡においてもこの時期の住居跡等が調査されている。周辺にも前代に引き続き多数の遺跡が存在する。4遺跡の南東約6kmの那珂川右岸の台地上には台渡廃寺跡（水戸市）がある。寺は「徳輪寺」「仲寺」と呼ばれた那賀郡の「郡の寺」であり、これまでの調査で塔跡、門跡、溝、工房跡、欄列等が確認されており、さらに寺の北側には那賀郡の郡衙の存在が想定されている。また、南西約4kmの前沢川の上流域には木葉下窯跡群（水戸市）があり、現在までに1.5km四方に金山支群、三ヶ野支群、高取山支群の3支群が確認されている。これらの窯跡は、8世紀初頭から9世紀後半頃まで操業していたとみられ、各地に須恵器を供給していた。窯跡からは台渡廃寺に供給していたとみられる瓦も出土しており、本窯跡は那賀郡衙や台渡廃寺とかかわりのある官窯としての性格を有していたものと考えられている。さらに、南東約3kmの那珂川右岸の台地上には、直径12～13mの範囲内に5基の火葬骨を納めた灰骨器が密集して発見されている飯富火葬墓跡（水戸市）<29>がある。

平安時代末から中世には、この地域は常陸大掾氏、那珂氏、佐竹氏の勢力下にあり、各種の抗争の舞台となった。そのため、各氏の一族や臣下の武士たちの城館が各所に造られた。常北町内の石塚城跡や県指定史跡の那珂西城<14>は、現在でも堀や土塁の跡を留めている。上野野地区でも小字名から3か所に城館の存在が推定

されており、周辺には^{しんせい}神生館跡<25>をはじめさらに多くの城館が存在したものとと思われる。また、前側遺跡の約900m西の上入野台地西端部には小松寺があり、境内には平重盛のものと伝えられる墓がある。

近世になるとこの地域は水戸藩領となり、古来の農民に佐竹氏、大塚氏、江戸氏等の一族や家臣で帰農したもののや戦国以降に移住した武士や農民が加わり近世の村を形成した。元禄期頃から常北町域の村々は茶の生産が盛んになり、那珂川水運中継地としての河岸が置かれるなど賑わいをみせていた。

※ 文中の〈 〉内の番号は、表1、第3図中の該当番号と同じである。

参考文献

- 茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地図』 1990年 3月
 常北町史編さん委員会 『常北町史』 1988年 3月
 水戸市史編さん委員会 『水戸市史』 1963年 9月
 茨城県立歴史館 『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』 1979年 3月
 茨城県立歴史館 『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』 1991年 3月
 茨城県立歴史館 『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』 1974年 2月
 茨城県立歴史館 『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』 1995年 3月
 萩野谷悟 「常北町上入野・青木・仲郷・後側・前側遺跡の発掘調査」 『常北の文化 第17号』 常北町郷土文化研究会 1994年 3月

表1 上入野遺跡・青木遺跡・後側遺跡・前側遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	県遺跡番号	遺跡の時代					番号	遺跡名	県遺跡番号	遺跡の時代							
			旧	縄	弥	古	奈良				平安	中	近	旧	縄	弥	古	奈良
1	上入野遺跡	4576	○		○	○	○	18	清水台古墳群	120	○		○					
2	青木遺跡					○	○	19	清水台遺跡	33	○		○	○	○			
3	後側遺跡			○		○	○	20	南駒形遺跡	34	○		○	○				
4	前側遺跡						○	21	増井本郷遺跡	4581	○		○	○				
5	外ノ内・天神遺跡	4571		○		○		22	増井古墳	292			○					
6	中妻遺跡	4577		○				23	関根遺跡	4575	○		○					
7	北米遺跡	4578					○	24	塙遺跡	30	○		○	○				
8	ボンボン遺跡	2598			○			25	神生館跡	134								○
9	ドウゼンクボ遺跡	2597	○	○	○	○	○	26	成沢大塚遺跡	2641	○		○					
10	二の沢遺跡	2599	○	○	○	○	○	27	成沢町大塚古墳群	2640			○					
11	二の沢古墳群	2600				○		28	飯富遺跡	2618	○	○	○	○				
12	ニガサワ遺跡	2601		○	○	○	○	29	飯富火葬墓跡	2618				○				
13	ニガサワ古墳群	2602				○		30	塚山古墳群	119			○					
14	那珂西城跡	293					○	31	下宿遺跡	31	○							
15	那珂西遺跡	287		○			○	32	高根遺跡	2605			○	○				
16	十万原遺跡	2603	○	○	○	○	○	33	大井下古墳群	117								
17	藤井町遺跡	32		○	○			34	馬場尻遺跡	2642	○	○	○	○				



第3圖 周辺遺跡分布図

上入野遺跡

第3章 上入野遺跡

第1節 遺跡の概要

上入野遺跡は、藤井川と前沢川にはさまれた上入野台地の東側縁辺部に立地する旧石器時代から奈良・平安時代にかけての複合遺跡である。今回の調査区は、主要地方道水戸茂木線が台地に登る坂をはさんで、東側の1区と西側の2区からなっており、調査面積は1,524㎡、現況は畑地である。調査区の東側の低地は水田となっており、水田との比高は約20mである。

今回の調査で確認した遺構は、弥生時代の竪穴住居跡1軒、古墳時代の竪穴住居跡7軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡6軒、時期不明の竪穴住居跡6軒、旧石器時代の土坑3基、縄文時代の陥し穴と思われる土坑2基、その他の土坑10基である。

遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)で11箱出土している。主な遺物は、古墳時代から平安時代にかけての台付甕、器台、甕、坏、甌、高坏、壺、蓋等の土師器及び須恵器類で、その他弥生土器片、古墳時代の石製模造品等が出土している。

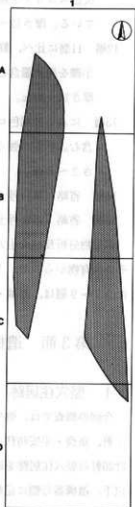
第2節 基本層序

上入野遺跡の2区南部、C1a₂区にテストピットを設定し、確認面から1.7m掘り下げ、土層の堆積状況を観察した。

なお、当遺跡についてはルーム層の重鉱物分析及び火山ガラス比分析を実施した。あわせて参照されたい。

(付章参照)

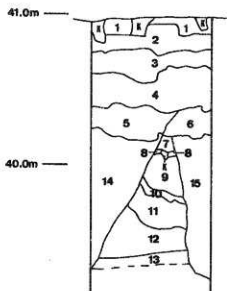
- 1層 明黄褐色ルーム土層。厚さ8～13cm。
- 2層 1層に比べ、やや黄色味がかった明黄褐色のルーム土層。硬く締まっている。厚さ10～14cm。
- 3層 2層に比べ、さらに黄色味の強い明黄褐色のルーム土層。硬く締まっている。厚さ10～23cm。
- 4層 黄褐色ルーム土層。灰色及び橙色スコリアを極微量含む。硬く締まっている。厚さ15～20cm。
- 5層 省略(第14号土坑覆土層)
- 6層 オリーブ褐色のルーム土層。灰色スコリアを極微量含む。粘性強く、硬く締まっている。厚さ11～38cm。
- 7層 黄褐色ルーム土層。赤城・鹿沼軽石(以下A8-KPと略す)を中量含む。厚さ5～15cm。
- 8層 一むい黄色ルーム土層。A8-KPを多量含む。厚さ4～8cm。
- 9層 上方が黄色、下方が黄褐色を呈すA8-KPの単純層。厚さ10～24cm。



第4図 上入野遺跡調査区設定図

- 10層 オリーブ褐色のローム土層。灰色スコリアを極微量含む。6層に比べ、色調が鮮やかで硬く締まっている。厚さ4～11cm。
- 11層 10層よりやくすんだオリーブ褐色のローム土層。灰色スコリアを極微量含む。粘性が強く、硬く締まっている。厚さ12～20cm。
- 12層 11層に比べ、鮮やかなオリーブ褐色のローム土層。小礫を極微量含む。粘性が強く、硬く締まっている。厚さ14～32cm。
- 13層 におい黄褐色ローム土層。灰白色スコリアを極微量含む。粘性が強く、硬く締まっている。確認された厚さ2～8cm。
- 14層 省略(第14号土坑覆土下層)
- 15層 省略(第15号土坑覆土)

重鉱物分析及び火山ガラス比分析の結果と上下の層序及びその含有物からみて、1～3層は、立川ローム層のⅢ層からⅣ層に、4、6層は、立川ローム層の第Ⅱ黒色帯に、7～9層は、赤城・鹿沼軽石層に相当すると考えられる。



第5図 上入野遺跡基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

今回の調査では、弥生時代の竪穴住居跡1軒、古墳時代の竪穴住居跡7軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡6軒、時期不明の竪穴住居跡6軒、計20軒の竪穴住居跡を確認した(SI-1～22, 内SI-12, 13は欠番)。以下、遺構番号順に記載する。

第1号住居跡(第6図)

位置 調査1区の南部、C1g₁区。

規模と平面形 西側が調査区外であるため、正確な規模と平面形は不明である。調査できた部分から推定すると、一辺3.8mの方形か長方形と思われる。

主軸方向 (N-10°-E)

壁 壁高は約8cmで、外傾して立ち上がる。

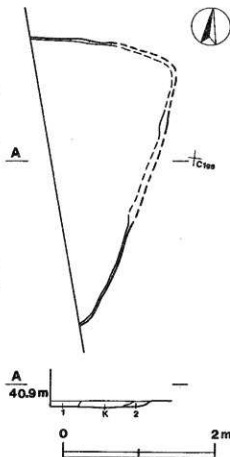
床 はほぼ平坦で、耕作による攪乱が著しく、軟弱である。

覆土 2層からなる。攪乱が著しく堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量

遺物 覆土中から土師器の細片が3点だけ出土しているが、時期は不明



第6図 第1号住居跡実測図

である。

所見 本跡は、柱穴、炉、竈等が確認されず、遺物もほとんど出土しなかったが、その形状から住居跡として扱った。時代は不明である。

第2号住居跡(第7図)

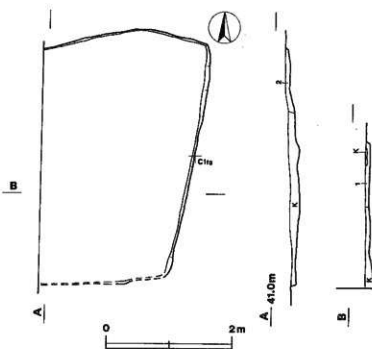
位置 調査1区の南部, C1e,区。

規模と平面形 西側が調査区外にあり、正確な規模と平面形は不明である。調査した東側部分から推定すると、一辺4.1mの不整な方形あるいは長方形と思われる。

主軸方向 [N-10°-E]

壁 壁高は5~12cmで、外傾して立ち上がる。

床 部分的にやや硬化した面が認められたが、覆土の影響のためか全体的に軟弱である。付近の確認面ルームと同様に北側に傾斜しており、緩やかな凹凸がある。



第7図 第2号住居跡実測図

覆土 覆土が著しいが2層確認された。

覆土中にルーム大ブロックを含むことから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化材微量
- 2 暗褐色 極暗褐色土ブロック中量, ロームブロック・ローム粒子少量

遺物 弥生土器片5点, 土師器片18点, 須恵器片2点及び鉄滓2点が出土している。弥生土器片は十王台式。

土師器片は平安時代のもと思われるが、いずれも細片で床面からの出土はなく、本跡に伴う遺物かは不明である。

所見 本跡は、柱穴や竈の存在が確認されない点や床が傾斜している点など住居跡と断定するには疑問が残る。時代は不明である。

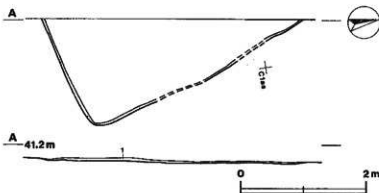
第3号住居跡(第8図)

位置 調査1区中央部西側, C1a,区。

規模と平面形 本跡は、南東側の約3分の1のコーナー部のみ確認された。方形あるいは長方形と推定されるが、その正確な規模や平面形は不明である。

主軸方向 [N-20°-W]

壁 壁は確認できなかった。



第8図 第3号住居跡実測図

床 緩やかな凹凸はあるが、ほぼ平坦である。

覆土 1層のみ確認された。堆積状況は不明。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

遺物 覆土中から土師器片3点、須恵器片2点が出土しているが、いずれも細片である。

所見 本跡は、柱穴や炉等が確認されなかったが、床面の状況や調査した部分の平面形から住居跡として扱った。時代は不明である。

第4号住居跡(第9図)

位置 調査1区の東部、C1c区。

規模と平面形 踏み固められた床と壁の一部が確認されたが、攪乱が著しく、しかも東側が調査区外にあるため、その規模や平面形は不明である。

壁 壁高は確認された所では18cmあり、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、部分的に踏み固められている。

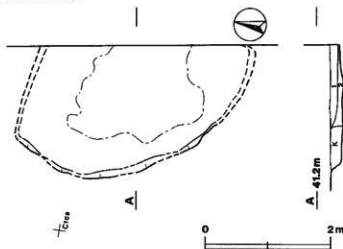
覆土 2層確認された。攪乱のため堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒色 ロームブロック・ローム粒子少量、炭化物微量
- 2 黒色 炭化物・ローム粒子微量

遺物 覆土中から縄文土器片1点、弥生土器片42点、土師器片23点及び須恵器片2点が出土しているが、いずれも細片で、本跡に伴う遺物は不明である。

所見 本跡は、柱穴、炉及び竈等が確認されていないが、床及び壁の状況から住居跡として扱った。時代は不明である。



第9図 第4号住居跡実測図

第5号住居跡(第10図)

位置 調査1区の東部、C1a区。

規模と平面形 東側が調査区外にあり、正確な規模と平面形は不明であるが、調査区東端部で北と南のコーナー部が確認されたことから、一辺3.6mの方形であることが推定される。

主軸方向 N-45°-E

壁 壁高は約14cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 中央部分がややくぼむがほぼ平坦である。あまり踏み固められておらず、全体的に軟弱である。

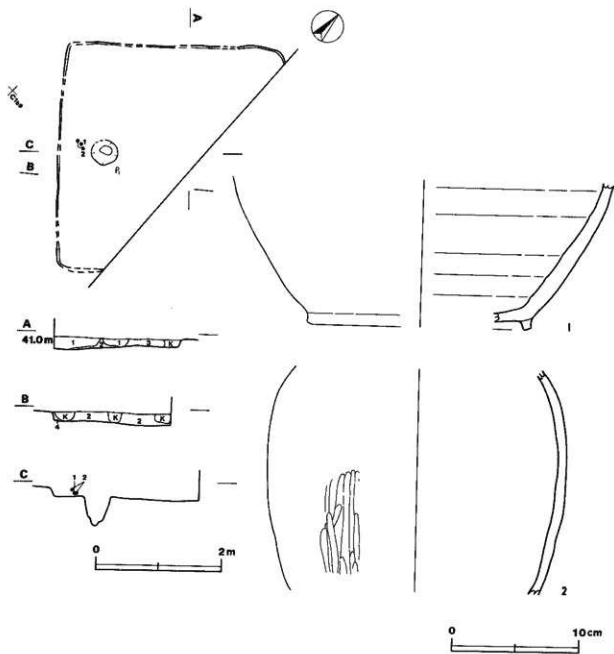
ピット 1か所(P1)。径約40cmの円形で、深さは45cmである。南西壁から70cm北側にあり、やや壁際から離れ過ぎているようだが、位置から考えると出入り口施設に伴うピット(以下、出入り口ピットと称す)と思われる。

覆土 4層からなる。堆積状況は攪乱のため不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子・ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ロームブロック微量

遺物 土師器片61点、須恵器片4点、縄文土器片1点、弥生土器片26点及び粘土塊1点が出土している。第10
 図1の須恵器壺底部片と2の土師器甕体部片は、出入りロピットと南西壁間の覆土中、下層から出土している。
 所見 本跡の時代は、出土遺物から平安時代（9世紀前半）と考えられる。本跡は、竈が確認されなかったが、
 その形状から住居跡として扱った。出入りロピットの位置から考えると、竈は調査区外の北東壁に付設され
 ている可能性がある。



第10図 第5号住居跡・出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第10図 1	壺 須恵器	B (11.6)	高台付底残片。高台は幅広くへの字状に開き高台の内側が接地する。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナテ。	長石・海綿骨針 灰白色	P L 9
		D [17.8]				P 3 5%
		E 1.0				覆土
2	壺 土師器	B (18.0)	体部片。体部下位外面は凹凸が顕著。体部中位上方に最大径を有し、体部上位は内傾する。	体部外面上部ナテ。体部外面下部縦方向のへり磨き。体部内面横ナテ。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい黄褐色	P L 9
						覆土

第6号住居跡 (第11図)

位置 調査1区の中央部東側, B1j区。

規模と平面形 東側が調査区外に, 北側が農道部にあるため, 正確な規模と平面形は不明である。ピットの配置等から推定すると, 長軸 (5.0m), 短軸 (4.4m) の長方形と思われる。

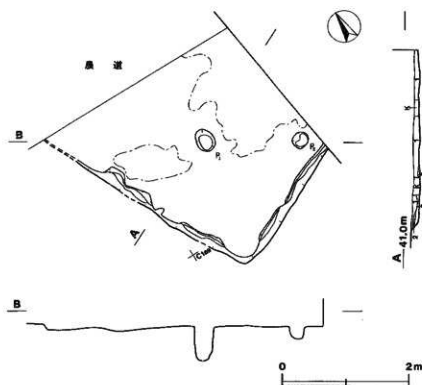
主軸方向 (N-25°-W)

壁 壁高は約12cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦で, 北側部分は攪乱により踏み固められた面が削られているが, コーナー部を除き全体的によく踏み固められている。

ピット 2か所 (P₁~P₂)。P₁は, 長径37cm, 短径26cmの楕円形で, 深さ52cmである。配置とその大きさから主柱穴と考えられる。P₂は, 径25cmの円形で, 深さ20cmである。位置からみて出入り口ピットと考えられる。

覆土 3層からなる。第2層がロームブロック層であることから埋め戻された可能性もある。



第11図 第6号住居跡実測図

土層解説

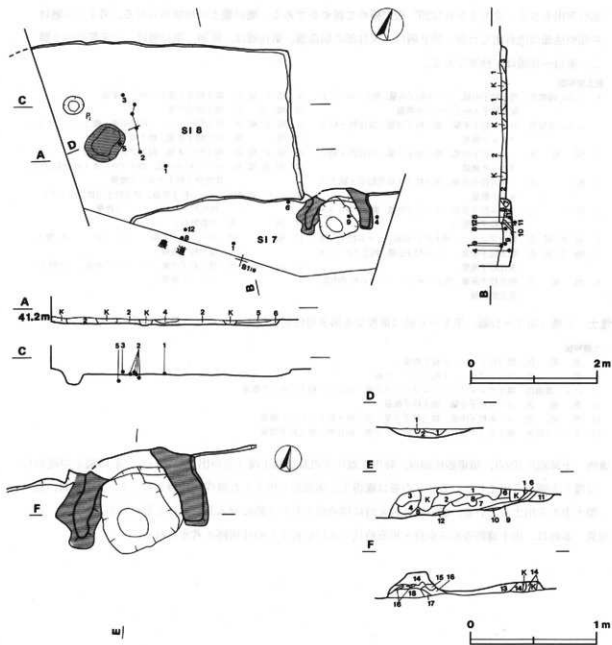
- 1 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化物微量
- 2 褐色 ロームブロック層
- 3 暗褐色 ロームブロック層、ローム粒子微量

遺物 覆土中から土師器片165点、須恵器片27点、縄文土器片1点及び弥生土器片27点が出土している。いずれも細片である。

所見 調査部分では確認されなかったが、覆土中に粘土ブロックがあることから、未調査部分に竈があることが推定される。本跡は、出土遺物が細片であるため詳細な時期を特定するのは困難であるが、遺物の主体を占める時期が奈良・平安時代（8世紀後半）であることから該期の住居跡と考えられる。

第7号住居跡（第12・13図）

位置 調査1区の中央部東側、B1h₃区。



第12図 第7・8号住居跡、第7号竈実測図

重複関係 本跡は、第8号住居跡及び第13号土坑と重複している。本跡が第8号住居跡及び第13号土坑を掘り込んでおり、本跡が3遺構の中で最も新しい。

規模と平面形 大部分が農道部や調査区外にあり、北壁の一部と竈部だけの調査であったため、正確な規模と平面形は不明である。北東コーナー部が確認されたので、竈が壁の中央部に構築されていたとすれば北壁は6.4m程度と推定される。平面形は方形あるいは長方形と思われる。

主軸方向 N-20°-W

壁 壁高は20cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦。粘土質で硬化している。

竈 北壁に付設されている。サプトレンチを入れて掘り方で掘り下げたところ床下50cmまで粘土ブロックが詰まっており、竈の作り替えが行われたものとみられる。袖部は、床面上にそのまま粘土性のロームを積み重ねて構築している。火床部は掘りくぼめられることなく、煙道部に向かって緩やかに傾斜している。煙道部の突出もなく、立ち上がりは20°程度極めて緩やかである。竈の覆土は18層からなる。第1～5層は、天井部や袖部の流れ出した層。第9層は、天井部の崩落層。第10層は、灰層。第13層は、火床部の焼土層である。第14～18層は、袖部である。

覆土層解説

1	にぶい黄褐色	焼土粒子中量、ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック微量	9	暗赤褐色	焼土粒子・焼土ブロック多量
2	にぶい黄褐色	ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化物・粘土ブロック微量	10	褐色	焼土粒子少量
3	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化物・粘土ブロック微量	11	暗赤褐色	焼土粒子・ローム粒子中量、焼土ブロック少量
4	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック微量	12	黒色	炭化粒子多量、焼土粒子微量
5	褐色	ローム粒子多量、焼土粒子中量、焼土ブロック・粘土粒子微量	13	暗赤褐色	焼土粒子多量、焼土ブロック微量
6	暗赤褐色	焼土ブロック・焼土粒子多量、ローム粒子少量	14	明黄褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・焼土粒子少量、炭化物・粘土ブロック微量
7	暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	15	にぶい黄褐色	ローム粒子多量、焼土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック微量
8	暗褐色	焼土粒子多量、焼土ブロック・ローム粒子中量、炭化物微量	16	黒色	含有物なし
			17	褐色	ローム粒子多量、ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
			18	暗褐色	焼土粒子多量、ローム粒子中量、炭化粒子・粘土ブロック微量

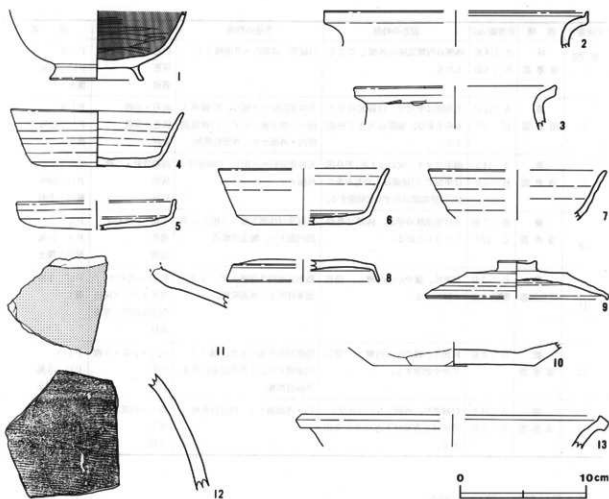
覆土 6層（第7～12層、第1～6層は重複する第8号住居跡覆土）からなる自然堆積と考えられる。

土層解説

7	黒褐色	焼土粒子・ローム粒子微量
8	褐色	ロームブロック・粘土ブロック層
9	にぶい黄褐色	焼土ブロック・ロームブロック少量、炭化物・粘土ブロック微量
10	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
11	黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化物・粘土ブロック微量
12	オリブ褐色	焼土粒子中量、ロームブロック少量、炭化物・粘土粒子微量

遺物 土師器片199点、須臾器片33点、弥生土器片7点及び粘土塊3点が出土している。第13図1の高台付杯は覆土上層から出土している。9の蓋は竈覆土と床面から出土した破片が接合した。2、10の甕は、掘り方覆土中から出土している。竈の作り替え時に埋め戻された土砂に混入したものと思われる。

所見 本跡は、出土遺物等から奈良・平安時代（8世紀後半）の住居跡と考えられる。



第13図 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第13図 1	高台付 土師器	B (5.6) D (7.6) E 1.2	平底への字状に開く高台が付く。体部下端は内響して立ち上がる。	体部外面横ナデ。体部内面横方向の響き。内面黒色処理。	白色粒・スコリア・雲母 にぶい黄褐色	PL 9 P 5 40% 覆土上層
	甕 土師器	A (21.0) B (2.8)	口縁部は強く外反し、口縁端部を上方につまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。	石英・スコリア・雲母 にぶい褐色 普通	PL 9 P 7 5% 掘り方覆土
		A (16.0) B (3.5)	口縁部は外反し、口縁端部をわずかに上方につまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	PL 9 P 6 5% 覆土
4	環 須恵器	A 13.8 B 4.5 C 8.9	平底。体部は外傾して立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	海綿骨針・小礫 灰白色 普通	PL 9 P 9 80% 覆土
	5	A (12.8) B (2.3) C (9.0)	器高が低い皿状の環。平底。体部はわずかに外傾して立ち上がる。	口縁部、体部下端内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	石英・長石・スコリア 褐色 良好	PL 9 P10 40% 覆土
		6	A (13.6) B 4.5 C (8.2)	平底。体部は外傾して直線的に立ち上がる。	口縁部、体部内・外面横ナデ。体部下端外面ヘラ削り後、ナデ。底部回転ヘラ削り。	海綿骨針・長石 灰色 良好

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第13図 7	環 須恵器	A (14.3) B (4.0)	体部は内唇気味に外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面横ナデ。	白色粒子・長石 灰色 普通	PL 9 P13 15% 覆土
8	蓋 須恵器	A (12.2) B 1.8	天井部は平坦で、口縁部はやや丸みをおび、端部は大きく屈曲する。	天井部回転ヘラ削り。口縁部上面ヘラ削り後、ナデ。口縁屈曲部内・外面ナデ。外面自然釉。	長石・小礫 灰色、黒斑 良好	PL 9 P12 20% 覆土
9	蓋 須恵器	A 14.5 B 3.0	扁平なボタン状のつまみ。天井部は平坦で、口縁部はやや丸みをおび、口縁端部はわずかに屈曲する。	天井部回転ヘラ削り。口縁部内・外面ナデ。	海鞘骨針・小礫 灰色 良好	PL 9 P14 30% 壺内・床面
10	甕 須恵器	B (1.9) C 12.7	上げ底気味の平底。体部は外傾して立ち上がる。	底面及び体部下端ヘラ削り。底部内面ナデ。酸化炎焼成。	小礫・白色粒子 橙色 普通	PL 9 P 8 10% 掘り方覆土
11	甕 灰陶器	B (3.3) 頸部径 22.8	肩部片。緩やかに内彎し、頸部に移行する。	頸部付近内外面横ナデ。下部内面平行叩き。外面灰釉。	長石・石英・スコリア 外面オリブ灰色 内面灰白色、黒斑 良好	P16 5% 覆土
12	甕 須恵器	B (8.2)	肩部片。緩やかに内彎し、頸部でやや肥厚する。	頸部付近外面叩き後、横ナデ。内面横ナデ。下部外面平行叩き。外面自然釉。	長石・石英・小礫 灰色 良好	PL 9 P17 5% 床面・覆土
13	甕 須恵器	A (24.8) B (2.6)	口縁部片。外傾しながら外反し、端部は上方及び下方にやや突出する。	内・外面横ナデ。内面自然釉。	長石・石英・小礫 灰色 良好	PL 9 P15 1% 覆土

第8号住居跡(第12・14図)

位置 調査1区の中央部、B1h区。

重複関係 本跡は、第7号住居跡及び第13号土坑と重複している。本跡が第7号住居跡に掘り込まれており、本跡が古く、第13号土坑は、本跡の床面において確認されたことから本跡が新しい。

規模と平面形 南側を第7号住居跡に掘り込まれ、東側が農道部分に延びているため、正確な規模は不明であるが、炉の位置からみると一辺4.4m程度の方形と推定される。

主軸方向 [N-75°-W]

壁 壁高は8cmで、外傾して立ち上がる。

床 はほぼ平坦である。耕作による攪乱が著しく、黒色土とロームの貼り床が部分的に残る。

ピット 長径36cm、短径28cmの楕円形で、深さ18cmである。配置からすれば柱穴と考えられるが、掘り込みが浅い点と他に柱穴が確認されなかったことを考えると柱穴とするには疑問が残る。

炉 中央部南西寄りに1か所地床炉が確認された。長径130cm、短径103cmの楕円形で、断面が皿状である。深さ7cmで、覆土は2層からなる。

炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子・ローム粒子多量

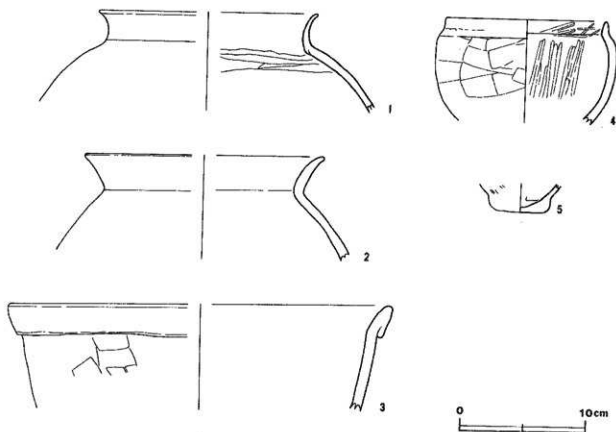
覆土 6層からなり、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、ロームブロック少量
- 4 黒色 焼土粒子・ローム粒子少量
- 5 黒色 焼土粒子・ローム粒子少量
- 6 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子・白色粒子少量

遺物 土師器片167点、縄文土器片1点及び弥生土器片7点が出土している。第14図1、2の甕と3の鉢は炉付近の床面から、4の埴は覆土上層から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から古墳時代（5世紀前半）の住居跡と考えられる。



第14図 第8号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物観察表

図取番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第14図 1	甕 土師器	A (17.4) B (7.4)	体部上方は内傾し、頸部で屈曲し、口縁部は強く外反する。	口縁部、頸部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英にふい橙色 普通	PL9 P20 10% 床面
2	甕 土師器	A (19.2) B (8.3)	体部上方は内傾し、頸部で屈曲し、直線的に外傾し、口縁部で外反する。	口縁部内・外面、頸部外面横ナデ。口縁部外面に指頭圧痕を残す。	砂粒・スフィア・長石にふい黄褐色 普通	PL9 P21 10% 床面・覆土
3	鉢 土師器	A (30.6) B (8.0)	わずかに内傾しながら外傾し、口縁部で外反する。口縁部は折り返し口縁である。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面へう削り後、ナデ。	砂粒・長石・小礫にふい橙色 普通	PL9 P19 15% 床面、積層あり
4	埴 土師器	A 12.9 B (8.2)	体部は内彎して立ち上がり、口縁部との間に縁がある。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう削り後、へうナデ。体部内面ナデ後放射状の磨き。	長石・石英にふい赤褐色 普通	PL9 P18 60% 覆土上層
5	手捏土器 土師器	B (2.4) C 4.0	やや丸みを帯びた平底。体部は底部からわずかに上方に立ち上がり、口縁は屈曲して外傾する。	内・外面板状工具によるナデ。体部外面に指頭圧痕を残す。	長石・スフィア・雲母にふい褐色 普通	PL9 P103 20% 覆土

第9号住居跡 (第15図)

位置 調査1区の北部, B1f区。

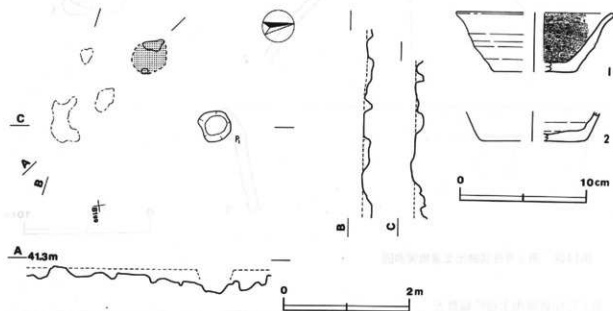
床 耕作による攪乱が著しく, 痕跡が一部残る程度である。

ピット 径は約50cmの不整形形で, 深さは床面から約40cmある。性格は不明であるが竈との位置関係から考えると貯蔵穴である可能性もある。

竈 火床部の痕跡だけが確認されたが, 周辺に竈の構築材が散乱しており, 竈であることは間違いない。床が南側にあることから北壁に付設されていたものと考えられる。その規模, 構造等は不明である。

遺物 本跡上部の攪乱土中から土器器片118点, 須恵器片41点, 縄文土器片1点及び弥生土器片5点が出土している。第15図1, 2の坏も攪乱土中からの出土である。

所見 本跡は, 竈火床部と床の一部及びピットが1か所確認されただけで, 規模, 平面形, 壁及び覆土等是不明である。ピットが貯蔵穴であれば主軸方向は北西-南東と推定される。時代は, 上部の攪乱土中から出土した遺物からみて平安時代(9世紀前半)と考えられる。



第15図 第9号住居跡・出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・構成	備考
第10図 1	坏	A [12.6]	平底。体部は内彎気味に立ち上がり外傾し, 口縁部で外反する。	口縁部, 体部内・外面横ナデ。底部回転へら削り。内面に燃糸の圧痕が残る。	長石・石英・小礫 灰色 普通	P.L.10 P.22 20% 攪乱土
	須恵器	B 4.8				
		C [6.4]				
2	坏	B (2.3)	平底。体部は直線的に立ち上がり, 外傾する。	体部内・外面横ナデ。底部糸切り後, 回転へら削り。	長石・石英・スフィヤ 灰色 良好	P.L.10 P.23 15% 攪乱土
	須恵器	C [8.5]				

第10号住居跡（第16・17図）

位置 調査1区の北部，B1e,区。

規模と平面形 北西部が攪乱され，東側が調査区外にあるため正確な規模は不明であるが，出入り口部の位置から推定すると，長軸〔5.6m〕，短軸3.6mの長方形と考えられる。

主軸方向 N-7°-W

壁 壁高は20cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦で，南壁際に出入り口部とみられる馬蹄形に巡るたかまりが確認された。出入り口部のたかまりから中央部にかけて踏み締められた硬化面がある。

ピット 6か所（P1～P6）。径12～34cmの円形で，深さは10～20cmである。P5は柱穴の可能性はあるが，その他はいずれも深さや形状から柱穴とは考えにくい。

貯蔵穴 入り口部の馬蹄形のとかまりの内側に確認され，径50cmの円形で，深さ34cmである。梯子ピットは確認されなかったが，入り口施設の下に設けられた貯蔵穴と考えられる。

覆土 7層からなり，自然堆積と考えられる。

土層解説

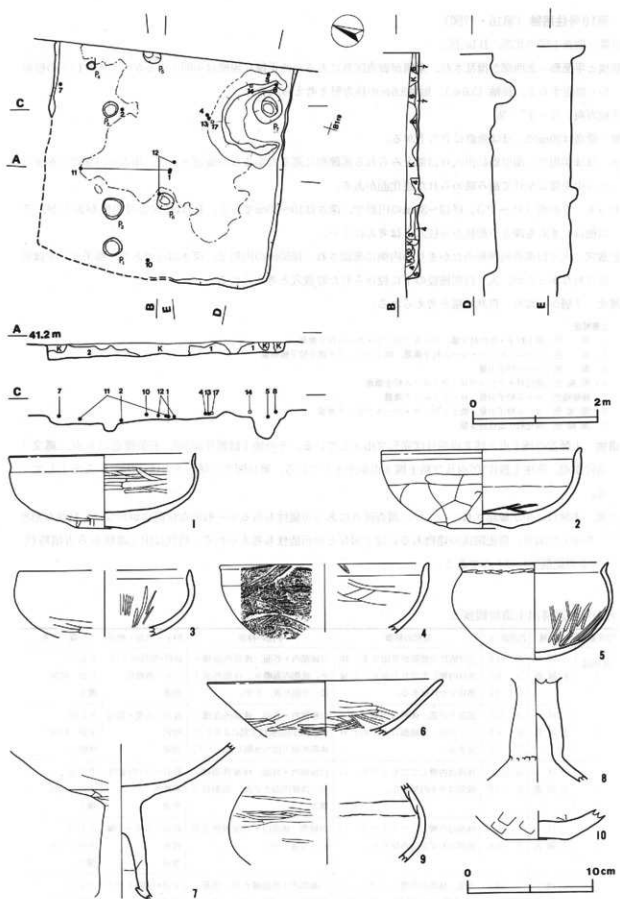
- 1 黒色 焼土粒子・炭化材少量，ロームブロック・ローム粒子微量
- 2 黒色 ロームブロック・ローム粒子微量，焼土ブロック・焼土粒子極微量
- 3 黒色 ローム粒子少量
- 4 黒褐色 炭化材・ロームブロック・ローム粒子微量
- 5 極暗褐色 ローム粒子少量，ロームブロック微量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量，焼土ブロック・ロームブロック微量
- 7 黒褐色 炭化材・炭化物少量

遺物 土師器の埴1点と埴2点がほぼ完形で出土している。その他土師器片383点，石製模造品6点，縄文土器片1点，弥生土器片107点及び粘土塊3点が出土している。第16図2の埴と5の埴は床面から出土している。

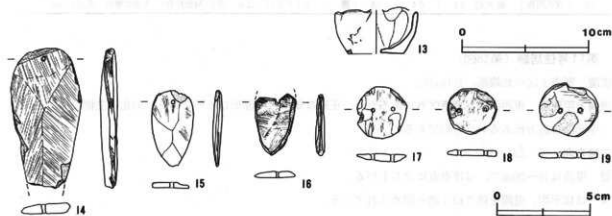
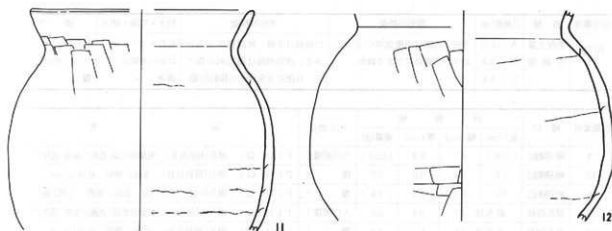
所見 本跡は，炉が確認されていない。調査区外にある可能性もあるが一般的な位置に炉がなく，特殊な形態を示しており，祭祀関係の建物あるいは工房などの可能性も考えられる。時代は出土遺物から古墳時代（5世紀前半）のものである。

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
第16図 1	埴 土師器	A 14.9	上げ底状の底部が突出する。体部は内彎して立ち上がり，口縁部はやや外反する。	口縁部内・外面，体部内面横ナデ。底部内面磨き。体部外面下位ヘラ削り後，ナデ。	砂粒・雲母・スクリア にふい黄褐色	PL10 P25 85%	
		B 6.0					
		C 4.1			普通		覆土
2	埴 土師器	A 16.1	底面上げ底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面，体部内面横ナデ。底部内面横ナデによるナデ。体部外面下位ヘラ削り後，ナデ。	長石・石英・雲母 明褐色	PL10 P26 80%	
		B 6.3					床面
		C 4.8			普通		
3	埴 土師器	A (13.6)	体部は内彎して立ち上がり，口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面，体部外面横ナデ。体部内面ナデ後，放射状の磨き。	長石・スクリア・雲母 普通	PL10 P27 10%	
		B (5.3)					覆土
4	埴 土師器	A (16.7)	体部は内彎して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部，体部内・外面横ナデによる横ナデ。	長石・石英・小礫 褐色	PL10 P28 30%	
		B (5.6)			普通		覆土
5	埴 土師器	A 12.7	丸底。体部は内彎して立ち上がり，体部上位で内傾し，口縁部は外反する。口縁部内面に縁がある。	口縁部内・外面横ナデ。体部，底面外面ナデ後，磨き，内面放射状の磨き。	雲母・石英・スクリア 浅黄褐色	PL10 P24 96%	
		B 7.7			良好		床面



第16图 第10号住居跡・出土遺物実測図(1)



第17図 第10号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第16図 6	高 土 師 器	A 18.7 B (4.4)	環部片。環部は直線的に外傾して開く。	環部上位内・外面横ナデ, 下位内・外面ナデ後, 横方向の磨き。	長石・雲母・スコリア 灰褐色 普通	PL10 P31 50% 覆土
	高 土 師 器	B (11.8)	脚部は円筒状で下方に膨らみがある。環部は下方に股があり、わずかに内彎しながら上方に開く。	環部上位内・外面ナデ, 下位外面へう削り。脚部外面縦方向の磨き。	長石・石英・雲母 にぶい黄褐色 普通	PL10 P30 50% 覆土
8	高 土 師 器	B (8.3)	脚部片。円筒状で下方に膨らみがあり、根部との接合部がくびれる。裾部はハの字状に開く。	脚部外面は縦方向のナデ。根部外面は放射状のナデ。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	PL10 P32 20% 覆土
9	埴 土 師 器	B (6.3)	扁平な球形の体部片。	体部上位内面に明瞭な輪轍痕を残す。体部外面横方向の丁寧な磨き。	長石・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	PL10 P33 20% 覆土
10	甕 土 師 器	B (2.3) C 5.2	底部片。やや上げ底気味の平底。体部は強く外傾して立ち上がる。	体部内面板状工具によるナデ。体部外面へう削り後, ナデ。底部外面ナデ。	長石・石英・スコリア にぶい褐色 普通	PL10 P36 5% 覆土
	第17図 11	甕 土 師 器	A (18.0) B (17.7)	体部はやや縦長の球形で、口縁部は内彎気味に外傾する。	口縁部内・外面, 体部内面横ナデ。体部外面板状工具による縦方向のナデ。	長石・スコリア・雲母 にぶい褐色 普通
甕 土 師 器		B (16.8)	体部は球形で、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面板状工具による粗い横ナデ。体部外面上位縦方向、下位横方向のナデ。	砂粒・雲母・スコリア 浅黄褐色 普通	PL10 P35 30% 覆土

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・構成	備考
第17図 13	手捏土器 土師器	A〔6.6〕 B 3.3 C〔4.4〕	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁は直立する鉢形。	口縁部は平縁。無調整で凹凸がある。体部内面は縁方向の指ナデ、外面には全体的に指紋付着。	長石・スコリア において赤褐色 普通	P L 10 P 37 30% 覆土

図版番号	種別	計測値				出土状況	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
14	柳形土器	(7.4)	3.3	0.8	(32.3)	入口部覆土	P L 11 Q 1 滑石(緑色片岩) 先端部欠損 表面に擦痕 孔径2.0mm
16	柳形土器	5.1	2.3	0.5	5.7	覆土	P L 11 Q 3 滑石(緑色片岩) 表面に擦痕 孔径1.5mm
16	柳形土器	3.3	2.2	0.3	(3.6)	覆土	P L 11 Q 2 黒色片岩 基部欠損 表面に擦痕 孔径2.0mm
17	双孔円板	最大径	2.7	0.4	5.0	入口部覆土	P L 11 Q 4 滑石(緑色片岩) 断面台形状 表面に擦痕 孔径2.0mm
18	双孔円板	最大径	2.6	0.3	4.4	覆土	P L 11 Q 5 滑石(緑色片岩) 表面に擦痕 孔径1.8mm
19	双孔円板	最大径	3.1	0.4	5.8	覆土	P L 11 Q 6 滑石(緑色片岩) 表面に擦痕 孔径2.0mm

第11号住居跡(第18図)

位置 調査1区の北端部、B1b区。

規模と平面形 東西両側が調査区外にあるため、正確な規模と平面形は不明である。南北の主軸長は、4.2m。

平面形は長方形あるいは方形である。

主軸方向 N-22°-W

壁 壁高は10~20cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦。壁際を除き良く踏み固められている。

竈 北壁に付設されている。煙道部が攪乱されており、その形態は不明である。火床部はわずかに皿状にぼんでいて、袖部は掘り方を黒色土で埋め戻し、その上に粘土質のロームを積んで構築されている。覆土は13層からなる。第1~3層は、袖部。

覆土層解説

1 明黄褐色	粘土質ロームブロック層	8 暗赤褐色	焼土粒子・粘土質ロームブロック多量、ローム粒子中量、炭化物散見
2 黒色	ローム粒子中量、焼土粒子微量	9 黒褐色	焼土粒子・ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化物散見
3 褐色	焼土ブロック・粘土質ロームブロック多量、ロームブロック中量	10 暗褐色	焼土粒子・ローム粒子・灰中量
4 暗褐色	焼土粒子・ローム粒子・粘土質ロームブロック多量、炭化物散見	11 赤褐色	焼土粒子多量、ローム粒子・粘土質ロームブロック微量
5 黒褐色	焼土粒子多量、ローム粒子中量、焼土ブロック少量	12 黒褐色	焼土粒子・ローム粒子中量、ロームブロック少量、焼土ブロック微量
6 黒色	ローム粒子中量、焼土ブロック・焼土粒子・ロームブロック微量	13 黒色	ローム粒子中量
7 明黄褐色	粘土質ロームブロック層		

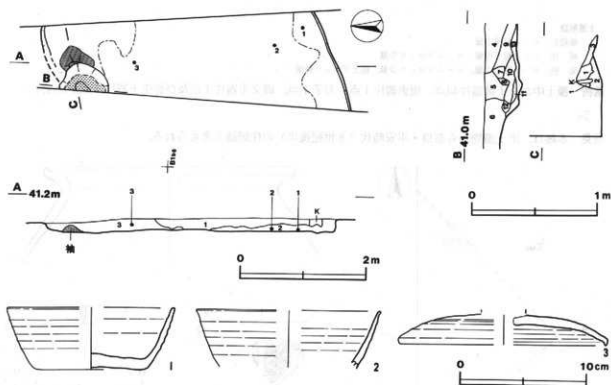
覆土 3層からなる。第1層は、自然堆積。第2、3層は、ロームブロックが多く含まれていることから人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒色	焼土粒子・ローム粒子微量
2 極暗褐色	ロームブロック・ローム粒子中量
3 暗褐色	ロームブロック多量、ローム粒子中量

遺物 覆土中から土師器片50点、須恵器片18点が出土している。第18図1、2の環は床面から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から奈良・平安時代(8世紀後半)の住居跡である。



第18図 第11号住居跡・出土遺物実測図

第11号住居跡出土遺物観察表

図取番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 1	坏 須恵器	A (13.4)	やや上げ底気味の平底。体部は	口縁部、体部内・外面横ナデ。	小礫・長石・石英	P L11
		B 5.0	わずかに内彎しながら外傾する。	底部内面渦巻き状のナデ。底部	灰色	P38 50%
		C 9.0	口縁部は直線的に開く。	回転ヘラ切り。	良好	床面
2	坏 須恵器	A (14.8)	口縁部、体部片。体部は軽く内	口縁部、体部内・外面横ナデ。	長石・石英	P L11
		B (4.6)	彎しながら外傾し、口縁端部で		灰色	P39 10%
			わずかに外反する。		良好	床面
3	蓋 須恵器	A (16.4)	天井部は平坦で口縁部はやや丸	天井部回転ヘラ削り。口縁部内・	砂粒・長石・スコリア	P L11
		B (2.4)	みをおび、口縁端部は屈曲する。	外面ナデ。	灰色	P40 40%
						覆土

第14号住居跡 (第19図)

位置 調査2区の南部、C1a₁区。

規模と平面形 本跡は、床と竈の火床部を残すだけでしかも東側が調査区外に延びているため、規模と平面形は不明である。

主軸方向 [N-45°-W]

壁 床が緩やかに傾斜しているだけで、壁は確認できなかった。

床 耕作による攪乱が著しく、踏み固められた床が一部に確認されただけで、床の大部分は削平されている。

竈 赤色硬化した火床部と構築材の粘土が痕跡程度に残るのみである。火床部は、径38cmの不整円形で掘り込みはない。

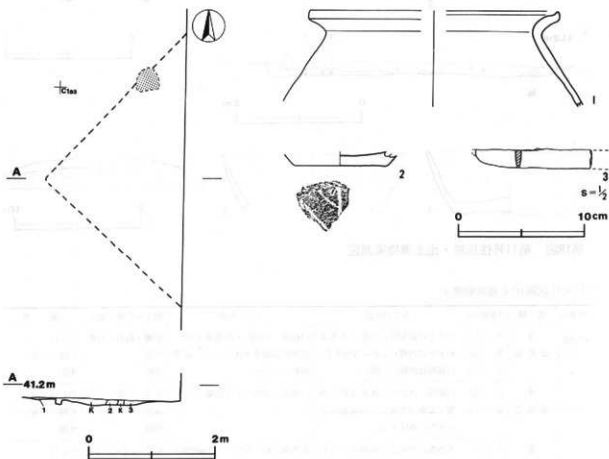
覆土 3層からなる。ローム大ブロックを含むことやその堆積状況から、人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量, 粘土ブロック微量

遺物 覆土中から土師器片48点, 須恵器片1点, 刀子1点, 縄文土器片1点及び弥生土器片4点が出土している。

所見 本跡は, 出土遺物から奈良・平安時代(8世紀後半)の住居跡と考えられる。



第19図 第14号住居跡・出土遺物実測図

第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・構成	備考
第19図 1	甕	A (20.0)	体部上位は内傾する。口縁部は強く外反し, 端部を軽く上方につまみ上げる。	口縁部, 体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 にふい褐色	P L11
	土師器	B (7.5)			普通	P41 5% 覆土
2	甕	C (7.2)	平底の底部片。体部は外傾して立ち上がる。	体部下位板状工具による縦方向のナデ。底部に本葉痕。	長石・石英・スコリア 褐色	T P 1 5% 覆土
	土師器				普通	

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
3	刀子	(6.4)	1.0	0.3	(6.0)	覆土	P L11 M1 鉄製 刀身基部及び基部欠損

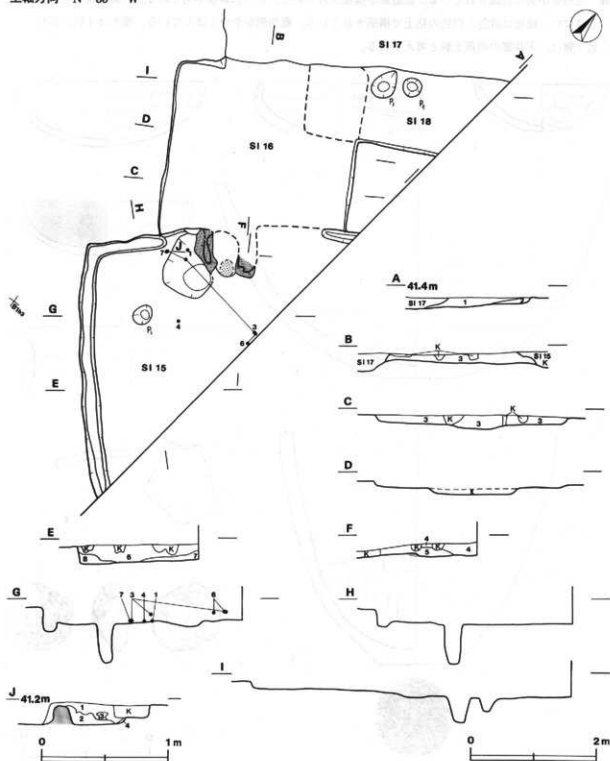
第15号住居跡（第20・21図）

位置 調査2区の中央部東側，B1g₃区。

重複関係 本跡は，第16号住居跡と重複している。本跡が第16号住居跡を掘りこんでおり，本跡が新しい。

規模と平面形 東側が調査区外に延びているため，正確な規模と平面形は不明であるが，竈や柱穴の配置から長軸4.6m，短軸4.4mの方形と推定される。

主軸方向 N-35°-W



第20図 第15・16・18号住居跡実測図

壁 壁高は22~28cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

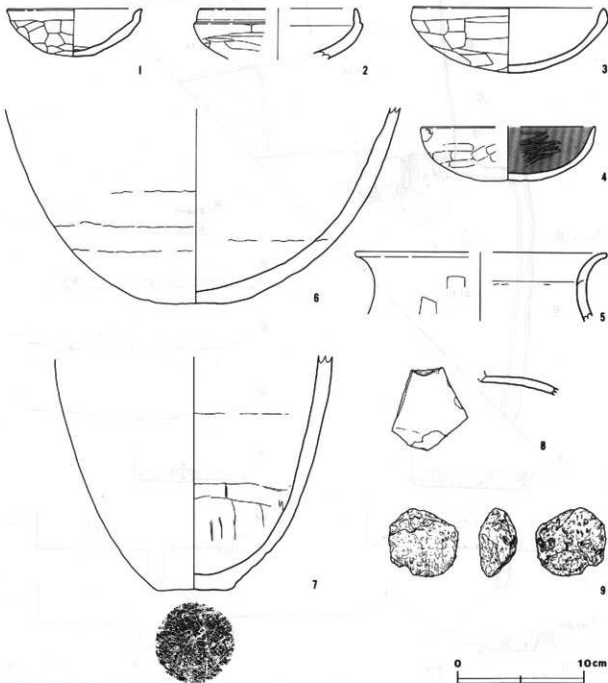
壁溝 確認した壁際にはすべて壁溝が巡っており、ほぼ全周するものと考えられる。上幅約20cm、下幅約16cm、深さ約12cmである。

床 ほぼ平坦。ロームが混じる黒色土の粘床である。

ピット 径約30cmの不整形形で、深さは62cmである。位置や深さから、柱穴と考えられる。

竈 北西壁中央に付設されている。煙道部が攪乱されており、その形態は不明である。火床部は平坦で掘り込みはない。袖部は黄色と白色の粘土で構築されている。竈西側がややくぼんでいる。覆土は4層からなる。

第1層は、天井部の崩落土層と考えられる。



第21図 第15号住居跡出土物実測図

覆土層解説

- 1 明褐色 黄色粘土・白色粘土層
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・黄色粘土ブロック・黒色土ブロック少量
- 3 暗暗褐色 ローム粒子中量、粘土粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子・ローム粒子中量

覆土 5層（第4～8層、第1層～3層は重複する第16、18号住居跡覆土）からなり、自然堆積である。

土層解説

- 4 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子・粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量
- 5 褐色 粘土粒子中量、焼土粒子・ローム粒子・粘土ブロック少量
- 6 黒褐色 ローム粒子・ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量、ロームブロック少量
- 8 黒褐色 ロームブロック中量

遺物 覆土中から土師器片210点及び弥生土器片16点が出土している。第21図4の坏は竈南側の床面、1の坏と7の甕は竈西側の覆土下層から出土。9は覆土中から出土した軽石である。重さ16.0g。弥生土器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡は、出土遺物から古墳時代（6世紀後半）の住居跡である。

第15号住居跡出土遺物観察表

図取番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第21図 1	坏 土師器	A 10.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立し、口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部・底部外面横方向のヘラ削り。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P L11 P43 100% 覆土下層
		B 3.9				
2	坏 土師器	A (12.6)	体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。口縁部と体部の境に段があり、沈線が通る。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面横方向のヘラ削り後、磨き。	長石・スコリア にぶい褐色 普通	P L11 P44 20% 覆土
		B (4.0)				
3	坏 土師器	A 15.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部・底部外面横方向のヘラ削り。	小礫・長石・スコリア にぶい褐色 普通	P L11 P96 70% 覆土中層
		B 5.2				
4	坏 土師器	A (14.1)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ後、磨き。体部・底部外面ヘラ削り後、ナデ。底部外面割離。内面黒色処理。	長石 にぶい黄褐色 普通	P L11 P97 30% 床面
		B 4.3				
5	甕 土師器	A (20.2)	口縁部片。体部上位で内傾し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位板状工具による横方向のナデ。	長石・スコリア・雲母 にぶい黄褐色 普通	P L11 P45 5% 覆土
		B (5.5)				
6	甕 土師器	B (15.5)	体部下位、底部片。不明瞭な小さな平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面ナデ。底部外面ヘラ削り後、ナデ。外面全体に二次焼成による肌荒れ。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P L11 P99 30% 覆土中層
		C 6.0				
7	甕 土師器	B (18.6)	体部下位、底部片。平底で、体部はわずかに内彎して直線的に立ち上がる。	体部内面輪轆板、板状工具による横ナデ。外面横方向のナデ、二次焼成による肌荒れ。底部木葉痕。	小礫・砂粒 にぶい褐色 普通	P L11 P98 40% 覆土下層
		C 6.0				
8	甕 須恵器	B (1.5)	胴部片。胴部は内彎してほぼ水平。	胴部内・外面ナデ。外面自然焼。	長石・スコリア 灰色 普通	P L11 P46 5% 覆土

第16号住居跡（第20・22図）

位置 調査2区の中央部東側、B1f、区。

重複関係 本跡は、第15、17及び18号住居跡と重複している。本跡が第15及び17号住居跡に掘り込まれており、本跡が古い。第18号住居跡との関係は、覆乱のため確認できなかった。

規模と平面形 他の遺構との重複のため、南北軸の長さが不明である。一辺3mの正方形か短軸3mの長方形と推定される。

主軸方向 (N-30°-W)

壁 壁高は10cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦である。特に踏み固められた硬化面は確認できなかった。

覆土 1層(第3層, 第1・2層は重複する第18号住居跡覆土)のみ確認された。

土層解説

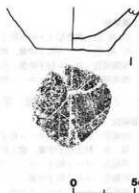
3 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量

遺物 土師器片152点及び弥生土器片12点が出土している。いずれも細片である。

所見 本跡を住居跡として扱ったが、炉やピットもなく一般的な住居跡とする

には疑問が残る。時期は、重複関係から6世紀後半の住居跡である第15及び

17号住居跡より古いことは確かである。遺物が細片であるため明確ではないが、古墳時代中期と考えられる。



第22図 第16号住居跡
出土遺物実測図

第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第22図 1	罎 土 師 器	B (3.4) C 5.8	平底の底部片。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部に二重写しになった木葉模。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	TP2 3% 覆土

第17号住居跡 (第23~28図)

位置 調査2区の中央部, B1e₃区。

重複関係 本跡は、第16, 18及び19号住居跡と重複している。本跡が第16, 18及び19号住居跡を掘り込んでおり、4遺構の中で本跡が最も新しい。

規模と平面形 東コーナー部が調査区外だが、長軸7.2m, 短軸7.0mの正方形と思われる。

主軸方向 N-32°-W

壁 壁高は20~25cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 南西壁の中央部を除き、ほぼ全周すると思われる。上幅約17cm, 下幅約6cm, 深さ約20cmである。

床 ほぼ平坦で、コーナー部を除いて全体的に硬く踏み締められている。

ピット 7か所(P₁~P₇)。P₁, P₇は攪乱の可能性ある。P₁~P₄は、径30~50cmの円形で、深さ50~65cmである。配置から、いずれも主柱穴と考えられる。P₅は、径約55cmの円形で、深さ30cmである。位置からみて出入り口ピットと考えられる。

竈 北西壁中央に付設されている。煙道部は、壁より約20cm突出している。袖部は、にぶい黄橙色の粘土によって構築されており、煙道部付近の天井部がわずかに残る。火床部は掘り込まれておらず平坦である。火床部及び袖部内壁は焼けて赤色硬化している。覆土は25層からなる。第4及び11層は、天井部の崩落層と考えられる。

覆土 6層からなり、自然堆積と考えられる。

覆土層解説	色	構成	層 号	色	構成
1	黒 褐 色	粘土ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム粒子微量	9	暗 赤 褐 色	粘土ブロック・粘土粒子中量, 焼土ブロック・焼土粒子少量
2	褐 色	粘土粒子中量, 焼土粒子・粘土ブロック少量, ローム粒子微量	10	暗 赤 褐 色	焼土粒子・粘土粒子少量
3	褐 色	粘土ブロック多量	11	明 褐 色	焼けた粘土ブロック層
4	にぶい褐色	粘土を主体とする層	12	暗 赤 褐 色	焼土粒子・粘土粒子中量, 粘土ブロック少量
5	黒 褐 色	焼土粒子・粘土粒子少量, 焼土ブロック微量	13	暗 赤 褐 色	粘土ブロック・焼土粒子・粘土粒子少量
6	黒 褐 色	灰多量, 焼土粒子少量	14	極暗赤褐色	粘土ブロック・焼土粒子・粘土ブロック・粘土粒子少量
7	褐 色	ローム粒子中量	15	暗 赤 褐 色	粘土ブロック中量, 焼土粒子・粘土ブロック少量
8	黒 褐 色	粘土ブロック・粘土粒子少量	16	極暗褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化物・ロームブロック・粘土粒子微量

- 17 黒褐色 ローム粒子・粘土ブロック・粘土粒子少量、焼土粒子微量
 18 黒褐色 粘土ブロック・粘土粒子中量、焼土粒子・ローム粒子微量
 19 暗褐色 粘土ブロック少量、粘土粒子微量
 20 明褐色 粘土多量、黒色土少量
 21 褐色 粘土極めて多量
 22 褐色 粘土極めて多量、焼土ブロック・焼土粒子微量
 23 黒褐色 粘土中量、焼土ブロック少量、焼土粒子微量
 24 黒褐色 粘土ブロック中量、焼土ブロック・焼土粒子少量、炭化物微量
 25 暗赤褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック・焼土粒子・粘土ブロック少量

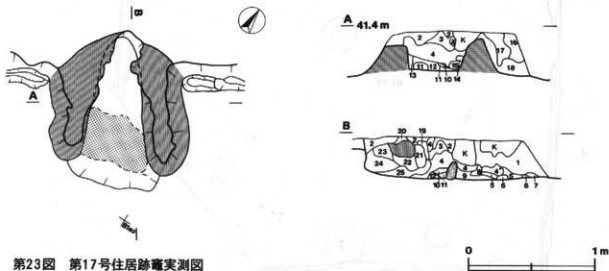
覆土 14層（第2～15層、第1層は重複する第19号住居跡覆土）からなる。第10～15層は自然堆積。第8、9層は、ロームブロックが多量に含まれることから人為堆積と考えられる。また、第5～7層は、灰層で、本跡が廃絶後半埋没した段階でくぼ地を利用して何かを燃やしたものと考えられる。

覆土土層解説

- 2 黒褐色 焼土ブロック・焼土粒子・ローム粒子・粘土ブロック少量、炭化物微量
 3 黒褐色 焼土ブロック・焼土粒子・ローム粒子・粘土ブロック微量
 4 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、炭化材微量
 5 黒褐色 灰多量、炭化物中量、焼土粒子・ローム粒子少量、土ブロック微量
 6 黒褐色 炭化材・灰多量、焼土ブロック・焼土粒子少量、ロームブロック・ローム粒子微量
 7 黒褐色 灰多量、炭化物中量、焼土粒子微量
 8 黒褐色 ロームブロック多量、ローム粒子中量
 9 黒褐色 ローム大ブロック多量、ローム粒子中量
 10 黒褐色 ローム粒子少量、ロームブロック微量
 11 暗褐色 ローム粒子中量、ロームブロック少量
 12 黒褐色 炭化材多量、焼土粒子・ローム粒子少量
 13 黒褐色 ローム粒子中量、炭化物少量、焼土ブロック微量
 14 黒褐色 ローム粒子中量
 15 黒褐色 ローム粒子中量、ロームブロック少量

遺物 覆土中から土師器片995点、須恵器片1点、石製模造品1点、支脚2点、刀子1点、弥生土器片143点、石鏃1点、紡錘車1点及び鉄滓1点が出土している。第26図1の坏はP₁の柱穴と西壁間の床面から、7の坏は竈西側の北壁際覆土中層から、正位に置かれたような状況で出土している。19の甑は1の坏の20cm南の床面から逆位に伏せたような状況で出土している。その他、覆土中から炭化材が出土しており、柱材と思われるものの樹種同定を行ったところ、クスギあるいはアベマキであるとの結果を得た（付章参照）。また、弥生土器片、石鏃及び紡錘車は重複する第18号住居跡に伴う遺物である可能性が高い。

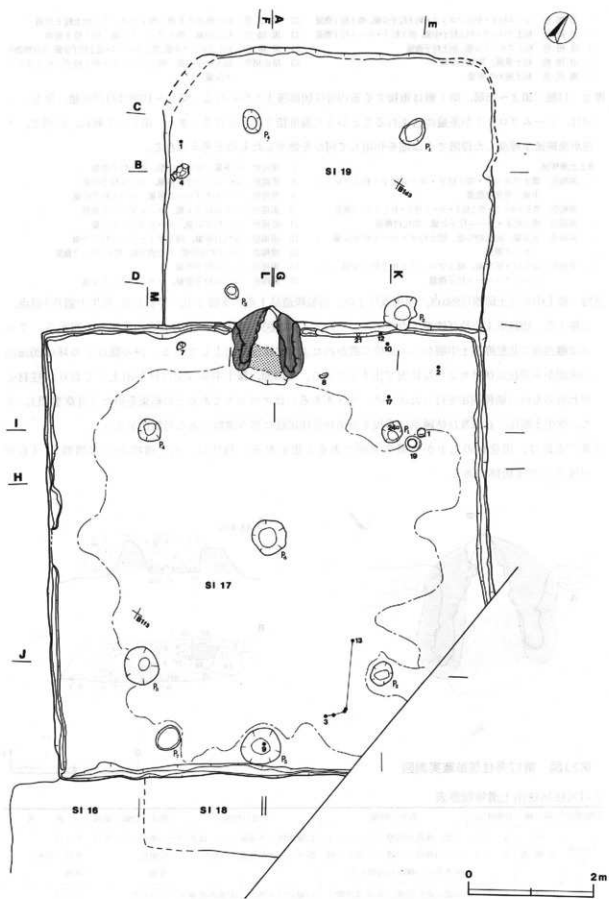
所見 本跡は、炭化材の出土から焼失家屋であると思われる。時代は、出土遺物から古墳時代（6世紀後半）の住居跡である。



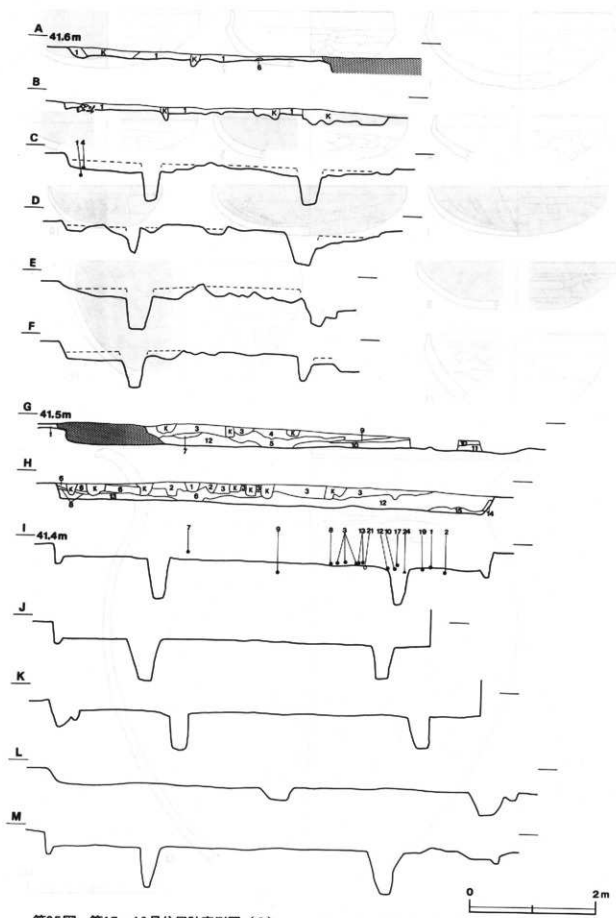
第23図 第17号住居跡電測図

第17号住居跡出土遺物観察表

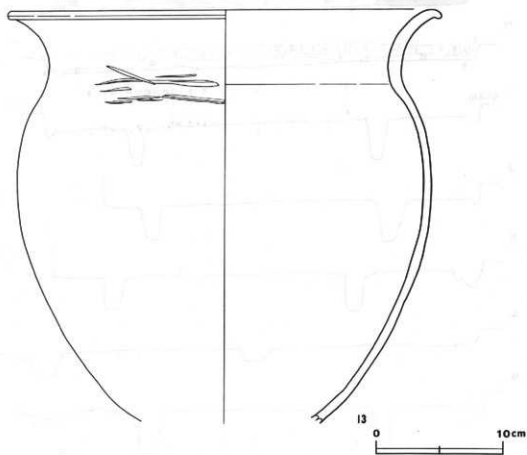
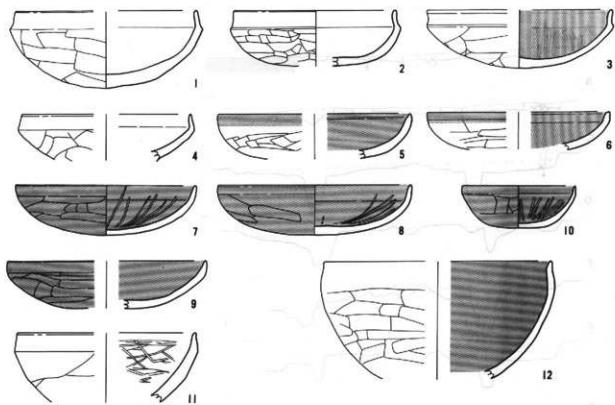
図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第26図 1	坏 土師器	A 14.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。体部外面へラ削り。	小礫・スコリア・雲母 灰褐色 普通	P L 12 P 51 70% 床面
		B 6.2				
2	坏 土師器	A 13.0	平底に近い丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面へラ削り。	スコリア にふい貴褐色 普通	P L 12 P 48 80% 床面・覆土
		B (4.5)				



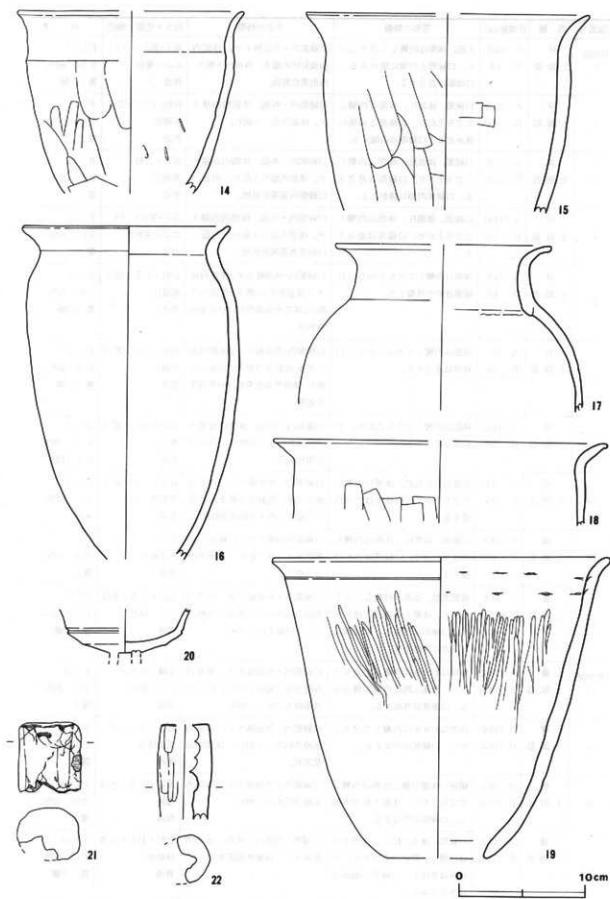
第24图 第17·19号住居跡实测图(1)



第25图 第17・19号住居跡实测图(2)

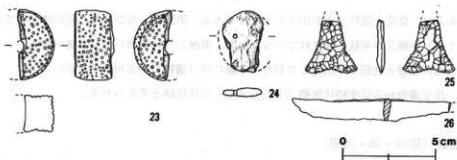


第26图 第17号住居跡出土遺物実測図(1)



第27图 第17号住居跡出土遺物実測图(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第26図 3	環 土師器	A (15.0)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境にある。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面放射状の磨き、外面へう削り。内面黒色処理。	長石・雲母・スコリアにふい褐色 普通	P L 12
		B (4.8)				P 100 60%
4	環 土師器	A (12.9)	口縁部、体部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に境がある。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面へう削り。	砂粒・スコリア・雲母 灰褐色 普通	P L 12
		B (3.9)				P 53 30%
5	環 土師器	A (15.4)	口縁部、体部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部内側に境がある。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面へう削り。内面、口縁部外面黒色処理。	長石・雲母 黒褐色 普通	P L 12
		B (3.6)				P 65 20%
6	環 土師器	A (14.6)	口縁部、体部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面へう削り。内面、口縁部外面黒色処理。	長石・雲母・スコリアにふい黄褐色 普通	P L 12
		B (3.0)				P 54 20%
7	環 土師器	A 14.5	体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面横ナデ後放射状の磨き、外面へう削り。体部外面乳乾れ。内・外面黒色処理。	砂粒・石英・雲母 黒褐色 普通	P L 12
		B 4.0				P 49 70%
8	環 土師器	A 15.4	体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面横ナデ後放射状の磨き、外面へう削り。体部外面乳乾れ。内・外面黒色処理。	砂粒・石英・雲母 黒褐色 普通	P L 12
		B 4.0				P 50 60%
9	環 土師器	A (16.0)	体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面へう削り。内・外面黒色処理。	石英・長石・雲母 黒色 普通	P L 12
		B 3.7				P 101 40%
10	埴 土師器	A 9.0	平底に近い丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面横ナデ後、放射状の磨き、外面へう削り。内・外面黒色処理。	長石・スコリア・雲母 黒褐色 普通	P L 12
		B 3.4				P 47 95%
11	埴 土師器	A (14.3)	口縁部、体部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。	口縁部外面横ナデ。口縁部、体部内面横ナデ後、磨き。体部外面へう削り。	長石・スコリア 灰黄褐色 普通	P L 12
		B (5.6)				P 56 10%
13	壺 土師器	A 34.8	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、体部上位に最大径がある。口縁部は外反し、口縁端部は下方に突出する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面斜方向のナデ。外面上位横ナデ、下位縦方向のナデ。	長石・石英・雲母 にふい褐色 普通	P L 12
		B (33.1)				P 102 60%
第27図 14	壺 土師器	A (18.1)	体部はわずかに内彎して立ち上がり、体部と頸部の境に境がある。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面斜方向の板状工具によるナデ、外面縦方向のへう削り。	小礫・長石 にふい褐色 普通	P L 12
		B (14.6)				P 61 30%
15	壺 土師器	A (22.6)	体部はわずかに内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向のへう削り。体部内面乳乾れ。	長石・スコリア 淡黄褐色 普通	P L 12
		B (15.8)				P 60 15%
16	壺 土師器	A 16.7	細長い体部の壺。体部は内彎して立ち上がり、体部上位で内傾し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向のへう削り。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P L 13
		B (25.6)				P 58 70%
17	壺 土師器	A (17.2)	口縁部、体部上位片。体部上位は内傾し、頸部が直立する。口縁部は外反し、口縁部上面がほぼ水平である。	口縁部、頸部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面乳乾れ。	砂粒・長石・石英 淡褐色 普通	P L 12
		B (13.2)				P 59 30%
18	瓶 土師器	A (26.6)	口縁部、体部上位片。体部は直立し、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面縦方向のへう削り。	長石・雲母 にふい黄褐色 普通	P L 13
		B (6.6)				P 63 10%



第28図 第17号住居跡出土遺物実測図(3)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第27図 19	土師器	A 27.0	無底式。体部は内彎して立ち上がり、口縁に向かって直線的に開く。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面縦方向の磨き。	長石・雲母・スコリアにふい散色	P L13 P66 80% 床面
		B 24.1				
		C (8.1)				
20	高須恵器	B (3.5)	環部片。環部上位。脚部欠損。脚部には透かしあり。環部は外傾して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。	口縁部、体部外面ナデ。内・外面自然軸。	長石・石英 オリブ黒色 良好	P L13 P67 15% 覆土

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
21	支脚	(5.7)	5.1		(104.2)	壁溝内	P L13 DP 2	土製 側面へう削り 二次焼成による肌荒れ
22	支脚	(7.6)	(4.3)		(64.3)	覆土	P L13 DP 3	土製 下部中空 側面へう削り 二次焼成
第28図 23	紡錘車	最大径	3.7	2.0	(14.5)	覆土	P L13 DP 1	土製 孔径7.0mm 器面全体に円形の刺突文
24	石製機織品	(3.3)	(2.2)	0.4	(2.2)	ピット内	P L13 Q10	凝灰岩 表面に擦痕 孔径1.5mm 双孔円板か
25	石鏝	(2.8)	2.8	0.4	(2.0)	覆土	P L13 Q 9	メノウ
26	刀子	(8.4)	1.0	0.4	(8.7)	覆土	P L13 M 2	鉄製 基部一部欠損

第18号住居跡(第20・29図)

位置 調査2区中央部東側, B1f区。

重複関係 本跡は、第16及び17号住居跡と重複している。第17号住居跡が本跡を掘り込んでおり、本跡が古い。

第16号住居跡との関係は、攪乱のため確認できなかった。

規模と平面形 本跡は、第17号住居跡と耕作のための攪乱によって掘り込まれ、さらに住居跡の東側が調査区外にあることから、その規模は不明である。わずかに残る南壁は直線状であることから、平面形は方形あるいは長方形になると推定される。

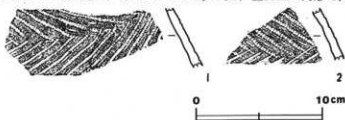
主軸方向 [N-30°-W] (あるいはN-60°-E)

壁 壁高は約6cmで、外傾して立ち上がる。

床 攪乱のため遺存状態は不良である。遺存部分は、ほぼ平坦である。

ピット 2か所(P₁~P₂)。P₁は、長径50cm、短径34cmの楕円形で、深さ40cmである。P₂は、径30cmの円形で、深さ20cmである。P₁は主柱穴と考えられる。

覆土 2層からなる。堆積状況から自然堆積と考えられる。



土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量

第29図 第18号住居跡出土遺物実測図

遺物 覆土中からは、弥生土器片3点が出土しただけである。第29図1及び2は、壺の体部片である。附加条2種(附加1条)の縄文が羽状に施されている。なお、重複している第17号住居跡の覆土中からは多量の弥生土器片とともに石鏝と紡錘車が出土しており、本跡に伴う遺物である可能性が高い。

所見 本跡は、出土遺物から弥生時代後期(十王台式期)の住居跡と考えられる。

第19号住居跡(第24・25・30図)

位置 調査2区の中央部、B1d区。

重複関係 本跡は、第17号住居跡と重複している。本跡が第17号住居跡に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 南側を第17号住居跡に掘り込まれているため、南北軸の長さが明確ではないが柱穴の位置から推定すると、一辺5.1mの隅丸方形と推定される。

主軸方向 N-28°-W(あるいはN-62°-E)

壁 壁高は10~20cmで、外傾して立ち上がる。

床 耕作による攪乱が著しく、黒色土とロームの貼床が部分的に残る。

ピット 4か所(P₁~P₄)。径20~50cmの円形あるいは楕円形で、深さは45~50cmである。配置からいずれも主柱穴と考えられる。

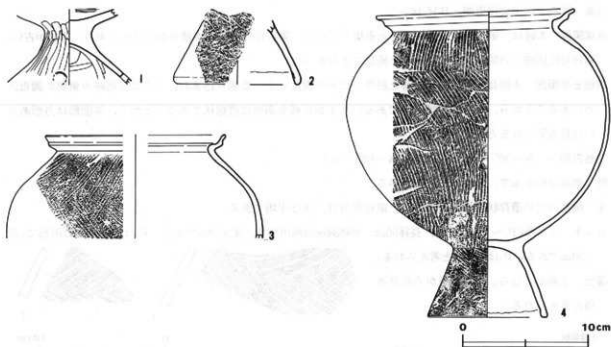
覆土 1層のみ確認された。堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒色 ロームブロック・ローム粒子少量

遺物 覆土中から土師器片93点、縄文土器片2点及び弥生土器片85点が出土している。第30図4の台付壺は西壁際の床面から横位の状態で出土している。

所見 本跡は、住居跡として扱ったが、炉が確認されておらず一般的な住居跡とは異なっている。時代は、出土遺物から古墳時代(4世紀後半)と考えられる。



第30図 第19号住居跡出土遺物実測図

第19号住居跡出土遺物観察表

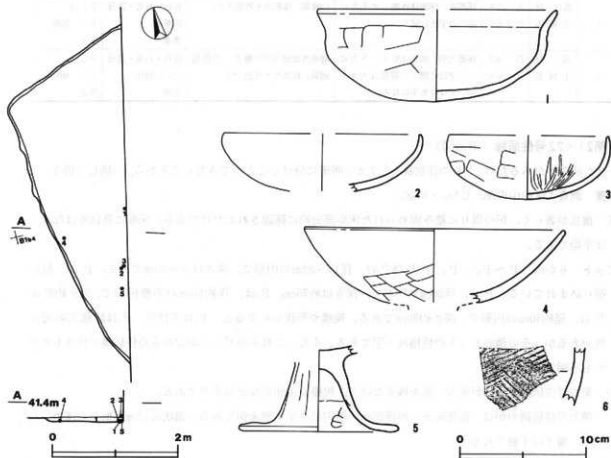
図表番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第30図 1	高坏 土師器	B (6.0)	脚部片。環部上位、脚部下位欠損。脚部はハの字状に下方へ開く。環部は皿状に開く。脚部に3孔ある。	環部内・外面磨き。脚部内面ナデ、外面縦方向の磨き。	長石・スコリア・雲母に ぶい橙色 良好	P L13 P68 50% 床面
		台付翼 土師器 D (10.1) E (5.1)	台部片。台部はハの字状に下方へ開き、端部を内側に折り返す。	台部内面ナデ、外面上位斜位のハケ目整形、下位斜位のハケ目整形後、ナデ。	長石・石英・スコリア ぶい橙色 普通	P L13 P72 5% 覆土
3	台付翼 土師器	A (14.4) B (8.2)	口縁部片。体部上位は頸部に向かって内傾する。口縁部はいわゆるS字状で口縁端部は斜め上方に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部上位内面縦方向のナデ。体部外面羽状のハケ目整形。	長石・雲母 ぶい橙色 良好	P L14 P70 5% 床面
		台付翼 土師器 A 15.9 B 24.7 D 9.7 E 5.8	台部はハの字状に開き、端部を内側に折り返す。体部は外傾して立ち上がり中位に最大径がある。口縁部はいわゆるS字状で口縁端部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ、外面羽状のハケ目整形。台部内面ナデ、外面上位斜位のハケ目整形、下位横ナデ。	長石・雲母・スコリア 体部 黒褐色 台部 ぶい橙色 普通	P L14 P69 90% 床面

第20号住居跡 (第31図)

位置 調査2区の北部, B1a区。

規模と平面形 東側が調査区外に延びているため、正確な規模や平面形は不明であるが、一辺が4.2mの正方形か長方形になると推定される。ややコーナー部の角度が開いており不整形となる。

主軸方向 (N-8°-W)



第31図 第20号住居跡・出土遺物実測図

壁 壁高は6cmで、外傾して立ち上がる。

床 耕作による攪乱が著しく、良好な床面は確認できなかった。

覆土 1層のみ確認された。堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・ローム粒子微量

遺物 覆土中から土師器片33点、縄文土器片6点及び弥生土器片2点が出土している。第31図1、2の坏及び4、5の高坏は床面から出土している。6は覆土中から出土した須恵器の甕の体部片で、外面に平行叩きが施されている。

所見 本跡は、住居跡として扱ったが、竈や柱穴等が確認されず一般的な住居跡とは異なっている。時代は、出土遺物から古墳時代（6世紀前半）と思われる。

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・装成	備考
第31図 1	坏	A (19.1)	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾して開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ、外面上位縦方向のナデ、下位へう削り後、ナデ。	砂粒・小礫・雲母 褐色 不良	P L 14
	土師器	B 7.4				床面
2	坏	A (15.6)	体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石・石英 明褐色 普通	P L 14
	土師器	B (4.6)				P 74 20%
3	坏	A (12.7)	小径の平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面ナデ、後放射状の磨き。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P L 14
		B 5.1				P 75 30%
		C 3.2				覆上
4	高坏	A 20.8	坏部片。坏部は外傾して上方に逆ハの字状に開く。	口縁部、体部内・外面ナデ。	長石・石英・雲母 明褐色 普通	P L 14
		B (6.0)				P 76 30%
5	高坏	D 12.7	坏部欠損。胴部は短く、下方にハの字状に開く。胴部は大きく開いてほぼ水平になる。	胴部外面縦方向の磨き、内面指須瓶。胴部内・外面ナデ。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P L 14
		E (6.9)				P 77 40%

第21・22号住居跡（第32図）

2か所の炉があるため、2軒の住居跡としたが、明確に分けることができないことから、一括して扱う。

位置 調査1区の中央部、Cl_a・b₂区。

床 攪乱が著しく、炉の周りに踏み固められた床が部分的に確認されただけである。床面に高低差はなく、ほぼ平坦である。

ピット 6か所（P₁～P₆）。P₁、P₂及びP₃は、径15～20cmの円形で、深さは5～20cmである。P₁は、斜位に掘り込まれている。P₄は、径20cmの円形で、深さは約75cm。P₅は、径約50cmの不整形円形で、深さ約25cm。P₆は、径約40cmの円形で、深さ約30cmである。規模や形状からすると、P₂は主柱穴、P₃は貯蔵穴の可能性があるが、その他のピットの性格は不明である。また、これらのピットがどちらの住居跡に伴うものなのかも不明である。

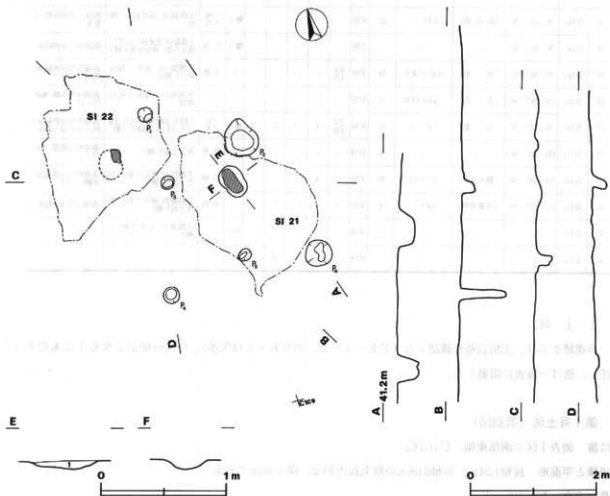
炉 第22号住居跡の炉は炉床の一部を残すだけで、規模や平面形などは不明である。

第21号住居跡の炉は、長径50cm、短径35cmの楕円形を呈す地床炉である。皿状に12cm程掘りくぼめられている。覆土は1層である。

伊土層解説

1 極暗褐色 焼土粒子多量、炭化粒子・ローム粒子微量

遺物 本跡内の攪乱土から土師器片10点、弥生土器片11点が出土しているが、本跡に伴う遺物は不明である。
 所見 本跡は、耕作による攪乱が著しく、炉と床の一部が確認されただけであるため、平面形、規模、主軸方向、壁及び覆土等は不明である。また、2か所の炉があるため、2軒の住居跡として扱ったが、床面の高低差等はなく、確実に2軒であったかは疑問が残る。本跡の時期は、出土遺物もないため不明であるが、炉を使用していることから、古墳時代中期以前と考えられる。



第32図 第21・22号住居跡実測図

表2 上入野遺跡住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	内部施設						gr・ 覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古一新)
						壁溝	注孔	竈	灶	ピット	入口			
1	C1g,	[N-10°-E]	[方形]	3.8×(3.8)	8	平坦	-	-	-	-	-	不明	土師器3	
2	C1o,	[N-10°-E]	[不整形]	4.1×(4.1)	12	傾斜	-	-	-	-	-	人為	土師器18 須恵器2 弥生土器5 鉄滓2 隴3	
3	C1a,	[N-20°-W]	[方形]	-	-	平坦	-	-	-	-	-	不明	土師器3 須恵器2 縄文土器1 弥生土器26 隴5	
4	C1e,	-	-	-	18	平坦	-	-	-	-	-	不明	土師器23 須恵器2 縄文土器1 弥生土器42 隴3	
5	C1a,	N-45°-E	方形	3.6×3.6	14	平坦	-	-	-	1	-	不明	土師器61 須恵器4 縄文土器1 弥生土器26 粘土1 隴5	平安時代(9世紀前半)
6	B1j,	[N-25°-W]	[長方形]	(5.0)×(4.4)	12	平坦	-	-	1	1	-	人為	土師器165 須恵器27 縄文土器1 弥生土器27 隴26	奈良・平安時代(8世紀後半)
7	B1h,	N-20°-W	[方形]	(6.4)×(6.4)	20	平坦	-	-	-	-	-	覆1 自然	土師器199 須恵器33 弥生土器7 粘土塊1 隴46	奈良・平安時代(8世紀後半)/S1D3-S16-本跡

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (m)	内部施設					伊・ 羅土	出土遺物	備考 新住居跡(古→新)		
						壁溝	柱穴	貯蔵穴	ε+ト	入口					
8	B1h,	[N-75°-W]	[方 形]	4.4×(4.4)	8	平坦	-	-	-	1	-	伊1	自然	土器器167 縄文土器1 弥生土器7 器4	古墳時代(8世紀前半) SI33→本跡→SI7
9	B1f,	-	-	-	-	不明	-	-	-	1	-	羅1	-	土器器118 漆器器41 縄文 土器1 弥生土器9 器11	平安時代(9世紀前半)
10	B1e,	N-7°-W	[長方形]	5.6×3.6	20	平坦	-	-	1	6	-	-	自然	土器器39 石製器器3 縄文土器 1 弥生土器37 土器器3	古墳時代(5世紀前半)
11	B1b,	N-22°-W	[長方形]	4.2×-	20	平坦	-	-	-	-	-	羅1	一部 人為	土器器50 漆器器18 器 30	奈良時代(8世紀後半)
14	C1a,	[N-45°-W]	-	-	-	不明	-	-	-	-	-	羅1	人為	土器器48 須恵器1 刀子1 縄文土器1 弥生土器4 器2	奈良時代(8世紀後半)
15	B1g,	N-35°-W	[方 形]	(4.6)×(4.4)	28	平坦	ほぼ 全周	1	-	-	-	1	自然	土器器139 弥生土器16 板石1 器37	古墳時代(8世紀後半) SI16→本跡
16	B1f,	[N-30°-W]	[方 形]	3.0×(3.0)	10	平坦	-	-	-	-	-	-	-	土器器152 弥生土器12 器19	古墳時代中期 本跡→SI 15・17
17	B1e,	N-32°-W	方 形	7.2×7.0	25	平坦	ほぼ 全周	4	-	2	1	羅1	一部 人為	土器器3 漆器器1 石製器器1 刀子1 板石1 器3 器4 器5	古墳時代(8世紀後半)SI 16・18・19→本跡
18	B1f,	[N-30°-W]	-	-	6	平坦	-	1	-	1	-	1	自然	弥生土器3 器1	弥生時代後期 本跡→SI 17
19	B1d,	[N-28°-W]	[隅丸方形]	5.1×5.1	20	不明	-	4	-	-	-	-	不明	土器器33 縄文土器2 弥生土器95 器46	古墳時代(4世紀後半) 本跡→SI17
20	B1a,	[N-8°-W]	[不整形方形]	4.2×-	6	平坦	-	-	-	-	-	-	不明	土器器33 縄文土器6 弥生土器2 器7	古墳時代(8世紀前半)
21	C1b,	-	-	-	-	平坦	-	-	-	-	-	伊1	-	土器器10 弥生土器11 器2	
22	C1a,	-	-	-	-	平坦	-	1	-	4	-	伊1	-		

2 土 坑

当遺跡からは、土坑15基を確認した（SK-1～16、内SK-8は欠番）。時代が推定できる主なものを記述し、他は一覧表に掲載した。

第1号土坑（第33図）

位置 調査1区の南部東側、C1i区。

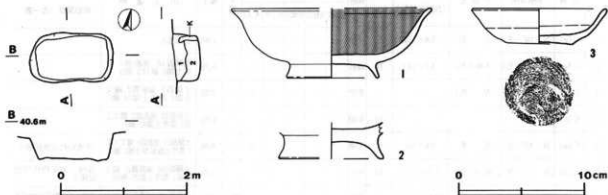
規模と平面形 長軸1.34m、短軸0.68mの隅丸長方形で、深さ40cmである。

長軸方向 N-75°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 2層からなる。2層ともロームブロックを含むことから人為堆積と考えられる。



第33図 第1号土坑・出土遺物実測図

土層解説

- 1 ぶい黄褐色 ローム粒子中量、ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
 2 オリーブ褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物・ロームブロック微量

遺物 覆土中から土師器片32点、須惠器片3点及び弥生土器片1点が出土している。第33図1、2は土師器の高台付坏片である。3は土師器の皿である。

所見 出土遺物から、平安時代（10世紀後半）の土坑と考えられる。

第1号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第33図 1	高台付坏 土師器	A (16.0)	平底にハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部外面横ナデ、内面磨き、黒色結理。底部回転糸切り、高台貼り付け後、ナデ。	石英・長石 ぶい黄褐色 普通	PL14
		B 5.6				P78 50%
		D 7.4				覆土
		E 1.2				
2	高台付坏 土師器	B (2.9)	ハの字状に開く高台部片。	底部内面ナデ。底部外面、高台部高台貼り付け後、ナデ。	長石・スコリア・小礫 灰褐色 普通	PL14
		D [8.4]				P79 20%
		E 1.9				覆土
3	皿 土師器	A 10.5	底部はわずかに突出し、体部は内彎して立ち上がる。口縁部は直線的に外反して開く。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。	砂粒・小礫・スコリア 浅黄褐色 良好	PL14
		B 2.9				P104 98%
		C 5.5				覆土

第3号土坑 (第34図)

位置 調査1区の南側中央部、Cle区。

規模と平面形 長径2.1m、短径1.88mの楕円形で、深さ40cmである。

長径方向 N-5°-E

壁面 はぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

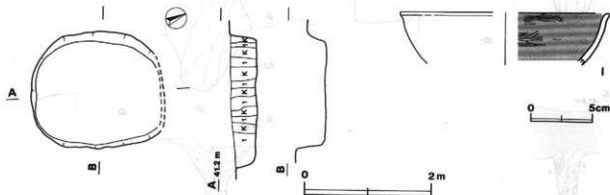
覆土 1層からなる。ロームと黒色土がブロック状に含まれることから人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子中量、黒色土ブロック少量

遺物 覆土中から土師器片18点及び須惠器片3点が出土している。第34図1は内黒の土師器の坏片である。

所見 出土遺物が細片であるため、詳細な時期は不明であるが平安時代の土坑と考えられる。



第34図 第3号土坑・出土遺物実測図

第3号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第34図 1	環 土師器	A (16.7) B (4.2)	口縁部, 体部片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部, 体部外面横ナデ, 内面磨き, 黒色処理。	長石・雲母 に お い い 黄 褐色 普通	P80 10% 覆土

第9号土坑 (第35図)

位置 調査1区の中央部西際, B1j,区。

規模と平面形 長軸不明, 短軸0.42mの細長い長方形で, 深さ104cmである。土坑上部は破壊されているが, 土層セクションからみると短軸断面はロート状であったと思われる。

長軸方向 N-64°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がり, 短軸方向の壁は上部で外傾する。長軸方向の南東壁は上部でオーバーハングしている。

底面 平坦である。

覆土 9層からなる。自然堆積である。

土層解説

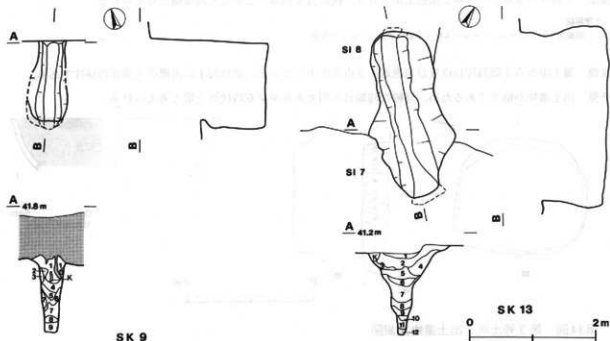
土層解説		微塵	
1 黒褐色	スコリア粒子中量, 炭化粒子・ローム粒子微量	6 褐色	ローム粒子多量, スコリア粒子少量
2 黒褐色	ローム粒子少量, スコリア粒子・砂粒微量	7 黄褐色	ローム粒子多量, スコリア粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子多量	8 暗褐色	ローム粒子多量, スコリア粒子少量
4 暗褐色	ローム粒子・スコリア粒子中量	9 黒褐色	ローム粒子少量, スコリア粒子微量
5 黄褐色	ローム粒子多量, スコリア粒子中量, A8-KP粒子		

所見 出土遺物はなかったが, その形状と覆土及びその立地の状況から縄文時代の陋し穴と考えられる。

第13号土坑 (第35図)

位置 調査1区の中央部, B1h,区。

重複関係 本跡は, 第7及び8号住居跡と重複している。第7号住居跡の竈が本跡の上に構築されていること,



第35図 第9・13号土坑実測図

また、本跡が第8号住居跡に掘り込まれていることから、3遺構の中で本跡が最も古い。

規模と平面形 長軸2.6m、短軸0.9mの細長い長方形で、深さ140cmである。短軸断面はロート状である。

長軸方向 N-43°-W

壁面 短軸方向の壁は、底面から約80cmのところまではほぼ垂直に、そこから上方は約45°の角度で外傾して立ち上がる。長軸方向の壁は、上部で内傾しオーバークラフしている。

底面 ほぼ平坦である。

覆土 12層からなる。自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、スコリア粒子微量	7 黄褐色	ローム粒子多量、スコリア粒子微量
2 オリーブ褐色	ローム粒子中量、炭化粒子・ロームブロック・スコリア粒子微量	8 極暗褐色	ローム粒子・スコリア粒子中量、ロームブロック・A8-KP粒子微量
3 明黄褐色	ローム粒子多量、ローム粒子中量、スコリア粒子微量	9 におい黄褐色	ローム粒子少量、スコリア粒子・A8-KP粒子微量
4 オリーブ褐色	ローム粒子多量、スコリア粒子・A8-KP粒子微量	10 におい赤褐色	スコリア粒子多量、ローム粒子少量、A8-KP粒子微量
5 黄褐色	ローム粒子多量、スコリア粒子少量、炭化粒子・A8-KP粒子微量	11 黒褐色	スコリア粒子・A8-KP粒子中量、ローム粒子微量
6 明黄褐色	ローム粒子多量、スコリア粒子少量、炭化粒子微量	12 黒色	ローム粒子・スコリア粒子・A8-KP粒子微量

所見 出土遺物はないが、その形状や覆土の状況から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第14号土坑（第36図）

位置 調査2区の南部、C1a₁区。

規模と平面形 長径〔1.4m〕、短径〔1.04m〕の不整楕円形で、深さ120cmである。

長径方向 N-40°-E

壁面 やや外傾して立ち上がる。

底面 U字状である。

覆土 2層（第5・14層）からなる。ブロック状の堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説（第1～4、6～13層の解説については「第2節 基本層序」参照）

- 5 黄褐色 灰色スコリア粒子極微量で、粘性普通、締まり極めて良い
14 オリーブ褐色 A8-KPブロック・A8-KP粒子中量、小礫・灰色スコリア粒子微量で、粘性、締まりともに良い

所見 本跡は、基本層序観察時に確認された。出土遺物はないが、赤城・鹿沼軽石層の約30cm上、立川ローム層の第II黒色帯に相当すると思われる第6層の上面から掘り込まれていることから旧石器時代の土坑と考えられる。

第15号土坑（第36図）

位置 調査2区の南部、第14号土坑の東隣、C1a₁区。

規模と平面形 長径〔1.0m〕、短径0.36mの不定形で、深さ94cmである。

長径方向 N-45°-E

壁面 やや外傾して立ち上がる。

底面 U字状で、南西方向に傾斜している。

覆土 1層（第15層）からなる。人為堆積と考えられる。

土層解説（第1～4、6～13層の解説については「第2節 基本層序」参照）

- 15 黄褐色 A8-KPブロック・A8-KP粒子多量で、粘性、締まりともに良い

所見 本跡は、基本層序観察時に確認された。出土遺物はないが、赤城・鹿沼軽石層の約30cm上、立川ローム

層の第Ⅱ黒色帯に相当すると思われる第6層の下面から掘り込まれていることから、旧石器時代の土坑と考えられる。

第16号土坑（第36図）

位置 調査2区の南部、第15号土坑の南隣、C1a区。

規模と平面形 長径1.3m、短径（1.04m）の不整楕円形で、深さ50cmである。

長径方向 N-12°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 U字状で、凹凸を有す。

覆土 4層（第16～19層）からなる。ブロック状の堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説（第1～4、6～13層の解説については「第2節 基本層序」参照）

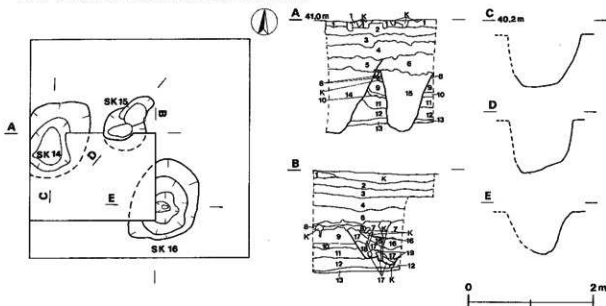
16 明黄褐色 A-B-KP粒子多量、A-B-KPブロック少量で、粘性なく、締まり良い

17 黄色 A-B-KPブロック層で、粘性弱く、締まり良い

18 オリーブ褐色 A-B-KP粒子少量で、粘性、締まりともに良い

19 黄褐色 A-B-KP粒子多量、A-B-KPブロック少量で、粘性普通、締まり良い

所見 本跡は、基本層序観察時に確認された。出土物はないが、第9層の赤城・鹿沼軽石下層から掘り込まれていることから、旧石器時代の土坑と考えられる。

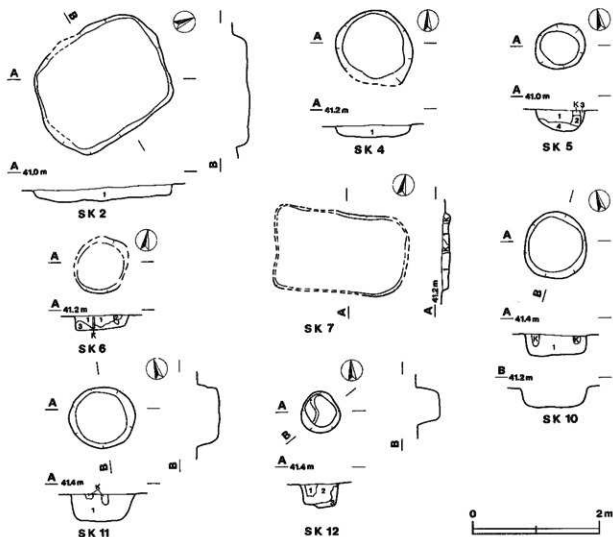


第36図 第14～16号土坑実測図

表3 上入野遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新編年表(古-新)	図版 番号
				長径×短径(m)	深さ(m)						
1	C1a	N-75°-E	楕円長方形	1.34×0.68	40	垂直	平坦	人為	土層器32 須原器3 弥生土器1	平安時代(10世紀後半)	33
2	C1ab	N-9°-W	不整長方形	2.2×1.8	20	垂直	平坦	人為	土層器21 須原器1 弥生土器4		37
3	C1ba	N-5°-E	不整長方形	2.1×1.88	40	垂直	平坦	人為	土層器18 須原器3	平安時代	34
4	C1aa	N-45°-W	不整円形	1.3×1.14	20	垂直	傾底	人為	上野遺跡28 縄文土器1 弥生土器3		37

土坑 番号	位置	長短方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	掘上	出 土 遺 物	備 考 新出陶器(古-新)	図版 番号
				長径×短径(m)	深さ(m)						
5	C1p	N-54°-E	不整形	0.86×0.76	34	外堀	U字状	人為	土師器5 粘土塊1		37
6	B1p	-	円形	0.9×0.9	24	垂直	平坦	人為	須恵器2		37
7	B1p	N-85°-E	不整形方形	2.14×1.26	14	垂直	平坦	人為	土師器5 須恵器5 弥生土器2		37
9	B1j	N-54°-W	長方形	不明×0.42	104	垂直	平坦	自然		縄文時代の竈ノ穴	35
10	B1j	-	円形	1.0×1.0	30	垂直	編織	人為	土師器1		37
11	B9k	-	円形	1.05×1.05	44	垂直	平坦	人為	土師器2 須恵器5 弥生土器1 縄文土器1		37
12	B1h	-	不整形円形	0.65×0.65	40	垂直	段差	自然	土師器1		37
13	B1h	N-43°-W	不整形方形	2.6×0.9	140	垂直	平坦	自然		縄文時代の竈ノ穴、溝部-59-57	35
14	C1a	N-47°-E	不整形円形	[1.4]×[1.04]	120	外堀	U字状	人為		旧石器時代	36
15	C1a	N-45°-E	不定形	[1.0]×[0.36]	94	外堀	U字状	人為		旧石器時代	36
16	C1a	N-42°-E	不整形円形	1.3×[1.04]	50	外堀	U字状	人為		旧石器時代	36



第37図 2・4~7・10~12号土坑実測図

SK-2 土層解説
1 褐色 ロームブロック多量、黒色土ブロック少量

SK-4 土層解説
1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

SK-5 土層解説
1 暗褐色 ローム粒子多量、ロームブロック中量
2 オリーブ褐色 ローム粒子多量、ロームブロック中量
3 オリーブ褐色 ローム粒子多量
4 黒褐色 ローム粒子中量、ロームブロック少量

SK-6 土層解説
1 黒褐色 ローム粒子少量、黄土粒子微量
2 黒色 ローム粒子微量

3 褐色 ロームブロック・ローム粒子少量

SK-7 土層解説
1 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量

SK-10 土層解説
1 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子中量

SK-11 土層解説
1 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子中量

SK-12 土層解説
1 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量
2 黒色 ロームブロック・ローム粒子微量
3 黒色 ロームブロック・ローム粒子中量

3 遺構外出土遺物 (第38図)

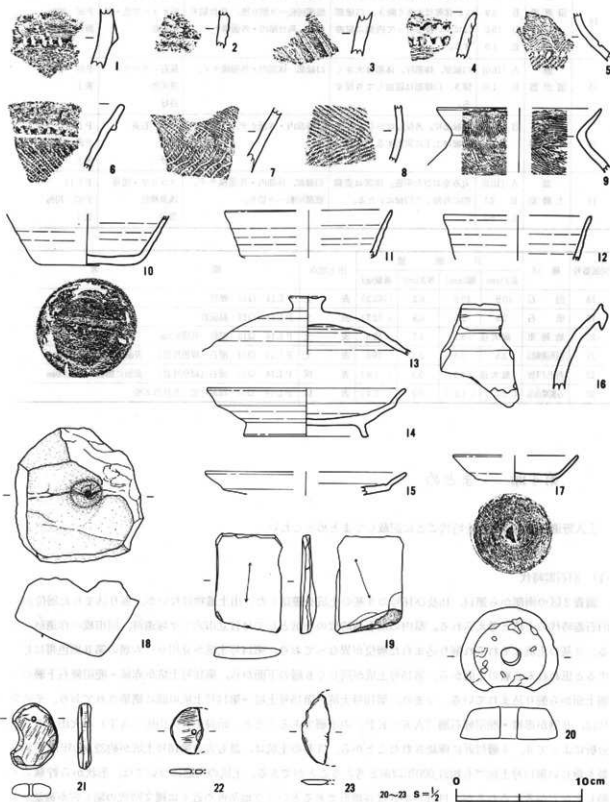
当遺跡の遺構外からは、縄文時代から平安時代にかけての遺物が出土している。主な遺物を一覧表で記載する。

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・構成	備 考
第38図 1	深鉢 縄文土器	厚さ 1.2	屈曲した体部片。横位の隆帯上に刻みが施され、隆帯より上方には沈線による文様を描く。内面には糸文が施される。	織物・砂粒 におい褐色 普通	TP 6 2% 表土
	—	厚さ 0.8	押圧縄文と円形竹管の刺突文によって文様が描かれる。	織物・石英・砂粒 におい褐色 普通	TP 5 1% 表土
2	—	厚さ 1.0	横糸文が羽状に施される。	織物 におい褐色 普通	TP 11 1% 表土
3	縄文土器	厚さ 1.0	横糸文が羽状に施される。	織物 におい褐色 普通	TP 11 1% 表土
4	広口壺 弥生土器	厚さ 0.7	二段の複合口縁部片。複合口縁下部には棒状工具による刺突文が施される。さらに下部には櫛歯状工具による波状文が施される。	雲母・石英・長石 黒褐色 普通	TP 4 1% 表土
5	壺 弥生土器	厚さ 0.7	頸部片。頸部に櫛歯状工具による波状文が施され、下端には棒状工具による刺突文が施される。体部には単節縄文が施される。	長石・雲母 灰褐色 普通	TP 8 1% 表土
6	広口壺 弥生土器	厚さ 0.5	口縁部片。地文に附加条1種(附加2条)の縄文施文後、口縁下部に隆帯が貼付される。隆帯上及び口唇部には押圧が施される。	長石・雲母・石英 におい褐色 普通	TP 7 2% 表土
7	壺 弥生土器	厚さ 0.8	体部片。附加条2種(附加1条)の縄文が羽状に施される。	長石・スコリア・雲母 におい褐色 普通	TP 9 1% 表土
8	壺 弥生土器	厚さ 0.6	体部片。附加条2種(附加1条)の縄文が羽状に施される。	長石・石英・雲母 暗赤褐色 普通	TP 10 2% 表土

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・構成	備 考
9	壺 土器	A (13.2) B (4.7)	口縁部、体部片。体部上位は内傾し、口縁部は直線的に外傾する。	口縁部、体部上位内面横方向、口縁部外面縦方向、体部上位外面斜方向のハケ目調整。	スコリア・長石 におい黄褐色 普通	PL 14 P 85 10% 表土
10	環 須恵器	B (4.1) C 8.0	平底。体部は内彎して立ち上がり、直線的に外傾する。	体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後、板状工具によるナデ。酸化炎焼成。	長石・石英・スコリア におい褐色 普通	PL 14 P 84 30% 表土
11	環 須恵器	A (13.4) B (3.8) C (10.9)	体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。	長石・海綿骨針 灰色 普通	P 86 10% 表土

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 12	坏 須恵器	A (12.0) B (3.6)	体部は直線的に外傾し、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。	長石・小礫 灰色 良好	P 87 10% 表土



第38図 遺構外出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・構成	備考
第38図 13	甕 須恵器	B (4.6)	天井部は丸みをおびる。つまみは全体が高く上唇が大きい。上面は扁平で周面がややくぼむ。	天井部回転ヘラ削り。横ナデ。	小礫・長石 灰色 良好	P L14 P 93 60% 表土
14	甕 須恵器	A 16.0 B 3.9 D 10.0 E 1.0	平底にハの字状に開く高台が付く。体部は大きく開き、口縁部はふいばをもつて内側に屈曲する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。 底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高合部内・外面横ナデ。	小礫・海綿骨針 灰オリーブ色・黒 斑多数 良好	P L14 P 90 80% 調査区外表採
15	甕 須恵器	A (16.0) B (1.9)	口縁部、体部片。体部は大きく開き、口縁部は屈曲して外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。	長石・スコリア 黄灰色 良好	P 91 5% 表土
16	甕 須恵器	B (6.8)	口縁部片。外反しながら外傾し、口縁は上下に突出する。	口縁部内・外面ナデ。	長石・石英 灰色 良好	P L14 P 95 2% 表土
17	皿 土器	A (10.0) B 2.1 C 6.3	丸みをおびた平底。体部は直線的に外傾して口縁にいたる。	口縁部、体部内・外面横ナデ。 底部回転ヘラ削り。	スコリア・雲母 浅黄褐色 普通	P L14 P 83 70% 表土

図版番号	種別	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
18	凹石	10.9	10.2	6.2	(762.2)	表 土	P L14 Q11 礫岩
19	砥石	7.8	5.3	0.9	(72.7)	表 土	P L14 Q17 凝灰岩
20	紡錘車	最大径	5.1	1.7	53.4	表 土	P L14 Q13 泥岩 孔径9.0mm
21	切球(燧石)	3.5	2.5	0.7	10.5	表 土	P L14 Q14 滑石(緑色片岩) 表面に黄斑 孔径2.0mm
22	有孔円板	最大径	(2.5)	0.3	(1.9)	表 採	P L14 Q15 滑石(緑色片岩) 表面に黄斑 孔径2.0mm
23	石製模造品	(3.7)	(1.6)	0.2	(2.4)	表 採	P L14 Q16 緑泥片岩 全体不明

第4節 まとめ

上入野遺跡の調査成果を時代ごとに記載してまとめたい。

(1) 旧石器時代

調査2区の南部から第14、15及び16号の3基の土坑を確認した。出土遺物はないが、掘り込まれた層位から旧石器時代の土坑と考えられる。泉内の旧石器時代の土坑としては日立市六ツヶ塚遺跡、同市橋の作遺跡がある。3基の土坑はそれぞれ掘り込まれた層位が異なり、第14号土坑が立川ローム層のⅡ黒色帯に相当すると思われる6層の上面から、第15号土坑が同じく6層の下面から、第16号土坑が赤城・鹿沼軽石下層の9層上面から掘り込まれている。つまり、第16号土坑→第15号土坑→第14号土坑の順に構築されており、その年代は、9層が赤城・鹿沼軽石層(A 8-KP)の下層であることから、給良Tn火山灰(AT)が火山ガラス比分析によって、4層付近に確認されたことから、3基の土坑は、最も古い第16号土坑が約32,000年近く前、最も新しい第14号土坑で約21,000年以前と考えることができる。土坑の用途については、形状から貯蔵穴や陥し穴などが考えられるが、付近が小さな谷地形であるという立地条件や近くに縄文時代の陥し穴が確認されたことから陥し穴の可能性が高いと思われる。

(2) 縄文時代

遺構は、第9号と第13号の2基の土坑を確認した。両者とも遺物は出土しなかったが、その形状と覆土の状況から縄文時代の陥し穴と考えられる。縄文時代の遺物には土器片と凹石がある。土器片は、いずれも胎土に繊維を含むことや文様が条痕文や押圧縄文であることから早期末葉の茅山下層式や前期初頭の花積下層式に比定される。土坑の構築された時期もその頃とみることができる。

(3) 弥生時代

遺構は、第18号住居跡1軒が後期の十王台式期のものと考えられる。遺物には、土器片、紡錘車及び石鏃がある。土器片は細片が多く時期を特定するのが困難であるが、ほとんどが後期の十王台式のものである。他に東中根式や二軒屋式、髷釜式等との関係が窺えるものがある。

(4) 古墳時代

竪穴住居跡7軒を確認した。4期に分けることができる。

第1期（4世紀後半）

第19号住居跡が該期の遺構である。住居跡には炉がなく一般的な住居跡とは異なっている。本跡からはほぼ完形のS字状口縁の台付甕が出土しているが、遺跡全体では本時期の遺物量は少なく、この時期、まだ本格的な集落は形成されていなかったものと考えられる。

第2期（5世紀前半）

第8及び10号住居跡が該期の遺構である（第16号住居跡も本時期のものである可能性がある）。第8号住居跡は炉を使用している。第10号住居跡は一般的な住居跡の位置に炉がないことや柱穴も明確でないことから祭祀関係の建物あるいは工房跡などの可能性も考えられる。覆土内から石製模造品が出土していることとあわせて興味深い。

第3期（6世紀前半）

第20号住居跡が該期の遺構である。住居跡として扱ったが、調査範囲内からは竈や炉、柱穴等が確認されなかった。一般的な住居跡とは異なっている。

第4期（6世紀後半）

第15及び17号住居跡が該期の遺構である。両住居跡とも比較的大型で、北壁中央部に竈を付設する。主軸方向はN-35°-WとN-32°-Wで、ほぼ同じである。調査された住居跡のうち、壁溝が確認されているものはこの2軒だけであり、当遺跡の該期の住居跡の特徴ととらえられる。

(5) 奈良・平安時代

竪穴住居跡6軒と土坑2基を確認した。3期に分けることができる（第3号土坑は平安時代と考えたが、遺物が細片であるため詳細な時期は不明である）。

第1期（8世紀後半）

第6、7、11及び14号住居跡が該期の遺構と考えられる。第7、11及び14号住居跡で竈が確認された。第14号住居跡は推定プランのため明確ではないが、他の竈は北壁中央部に付設されている。主軸方向は第14号住居跡を除いてN-20~25°-Wである。

第2期（9世紀前半）

第5及び9号住居跡が該期の遺構である。第9号住居跡は竪火床と床の一部が確認されただけでプラン等は明確でないが、第5号住居跡については主軸方向が他の時期の住居跡がほとんど北西方向にあるのに対してN-45°-Eと北東方向になるという大きな違いが見られる。また、規模の点でも一辺3.6mの方形で比較的小さい。

第3期（10世紀後半）

第1号土坑が該期の遺構である。本土坑の規模や形状、覆土の堆積状況などから墓域である可能性が高い。

以上をまとめると、上入野遺跡においては、今回の調査で旧石器時代の約32,000年前頃から平安時代（10世紀後半）の約1,000年前頃までの長期間にわたる人々の生活の痕跡を確認することができた。旧石器時代、縄文時代の間は狩猟の場として利用され、弥生時代以降になると住居が構築され居住の場として利用された。古墳時代の5世紀前半及び6世紀と奈良・平安時代の8世紀後半から10世紀後半にかけては多数の住居が構築されたものとみられる。今回の調査は道路幅の調査であったため遺跡の全容はつかめなかったが、調査区内の遺構の分布からみて調査区の東側に台地の縁辺部に沿って集落が形成されていたものと推定される。

注

- (1) 日立市教育委員会 「日立市六ツヶ塚遺跡発掘調査報告書」 『日立市文化財調査報告第4集』 1978年3月
- (2) 日立市教育委員会 「橋の作遺跡 北の台横穴墓」 『日立市文化財調査報告第9集』 1982年3月

参考文献

- 浅井哲也 「茨城県内における奈良・平安時代の土器(I・II)」 『研究ノート 創刊号・2号』 茨城県教育財団 1992・93年 7月
- 茨城県立歴史館 『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』 1991年 3月
- 櫻村宣行 「茨城県南部における鬼高式土器について」 『研究ノート 2号』 茨城県教育財団 1993年 7月
- 萩野谷悟 「常北町上入野・青木・仲郷・後側・前側遺跡の発掘調査」 『常北の文化 第17号』 常北町郷土文化研究会 1994年 3月

青 木 遺 跡

第4章 青木遺跡

第1節 遺跡の概要

青木遺跡は、上入野台地の東側、上入野遺跡から北西に約250m離れた地点に位置する。上入野遺跡との間には北東側から入る緩やかな谷がある。今回の調査区は、主要地方道水戸茂木線（新）が南から西に大きくカーブする所で、調査面積は2,405㎡である。現況は、畑地である。

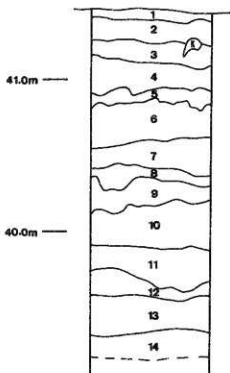
当遺跡は、縄文時代から近世までの複合遺跡で、今回の調査で確認した遺構は、古墳時代の竪穴住居跡12軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡25軒、時期不明の竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡1棟、ピット群3か所、縄文時代の陥し穴1基、その他の土坑45基、地下式城1基、堀1条、溝2条、井戸4基である。

遺物は、遺物収納箱（60×40×20cm）で91箱出土している。主な遺物は、古墳時代から平安時代にかけての壺、甕、皿、瓶、高坏、盤、蓋等の土師器、須恵器類と中・近世の土師質土器、瓦質土器、陶磁器類で、なかでも土師器の壺・皿類は3基の土坑から完形あるいは器形が分かるものだけで700点以上出土している。その他古墳時代の鉄鍔や丸玉、平安時代の灰軸陶器片等が出土している。

第2節 基本層序

青木遺跡の調査区中央部南側、B3c、d区にテストピットを設定し確認面から2.3m掘り下げ、土層の堆積状況を観察した。

- 1層 明黄褐色ローム土層。粘性は普通だが硬く締まっている。厚さ4～8cm。
- 2層 黄褐色ローム土層。粘性は普通だが硬く締まっている。厚さ13～18cm。
- 3層 オリーブ褐色ローム土層。粘性は普通だが硬く締まっている。厚さ9～16cm。
- 4層 3層よりややくすんだオリーブ褐色ローム土層。粘性、締まりともに強い。厚さ11～24cm。
- 5層 黄褐色ローム土層。A_g-KP層上層部。A_g-KPを中量含む。粘性、締まり強い。厚さ4～16cm。
- 6層 上方が明るく下方がやや暗い黄色を呈すA_g-KPの単純層。A_g-KPの下層部。粘性は非常に弱いが硬く締まっている。厚さ20～29cm。
- 7層 黄褐色ローム土層。礫を極微量含む。粘性が強く、硬く締まっている。厚さ11～26cm。
- 8層 にぶい黄色ローム土層。粘性、締まりともに強い。厚さ6～20cm。
- 9層 明黄褐色ローム土層。礫を微量含む。粘性強く、



第39図 青木遺跡基本土層図

硬く締まっている。厚さ6~24cm。

10層 ぶい黄色ローム土層。礫を極微量含む。粘性強く、硬く締まっている。厚さ20~36cm。

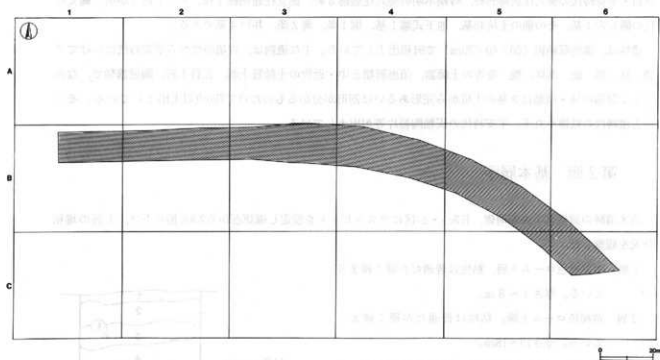
11層 黄褐色ローム土層。礫を極微量含む。粘性強く、硬く締まっている。厚さ14~30cm。

12層 明黄褐色ローム土層。礫を極微量含む。粘性強く、硬く締まっている。厚さ6~18cm。

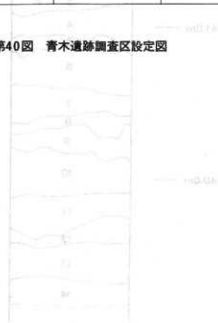
13層 12層より暗い明黄褐色ローム土層。礫を微量含む。粘性、締まりともに非常に強い。厚さ18~26cm。

14層 灰オリーブ色の砂礫層。粘性、締まりともに非常に弱い。確認された厚さ15~20cm。

上下の層序及び含有物や土質を上入野遺跡の層序と比較すると、3・4層は、立川ローム層の第Ⅱ黒色帯に、5・6層は、赤城・鹿沼軽石層に相当すると考えられる。



第40図 青木遺跡調査区設定図



調査土質基礎書木表 図40

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

今回の調査では、古墳時代の竪穴住居跡12軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡25軒、時期不明の竪穴住居跡5軒、計42軒の竪穴住居跡を確認した（S I - 1 ~ 52、内 S I - 5、10、13、14、22、31、33、35、39、44、47、50は欠番）。以下、遺構番号順に記載する。

第1号住居跡（第41・42図）

位置 調査区の東端部北側、C6a区。

重複関係 本跡の覆土中に2層の貼床を確認し、その内の上層のものを第2号住居跡、下層のものを第3号住居跡とした。構築された順序は、第1号住居跡→第3号住居跡→第2号住居跡である。

規模と平面形 北東側の大部分が調査区外に延びているため正確な規模と平面形は不明であるが、一辺約11mの方形か長方形の大形の住居跡と考えられる。

主軸方向 [N-47°-W]

壁 壁高は30~40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 確認された壁下にはすべて壁溝が巡っており、ほぼ全周するものと考えられる。上幅約24cm、下幅約10cm、深さ約14cmで、断面形はU字状である。

床 ほぼ平坦。

ピット 径約40cmの円形で、深さは20cmである。性格は不明である。

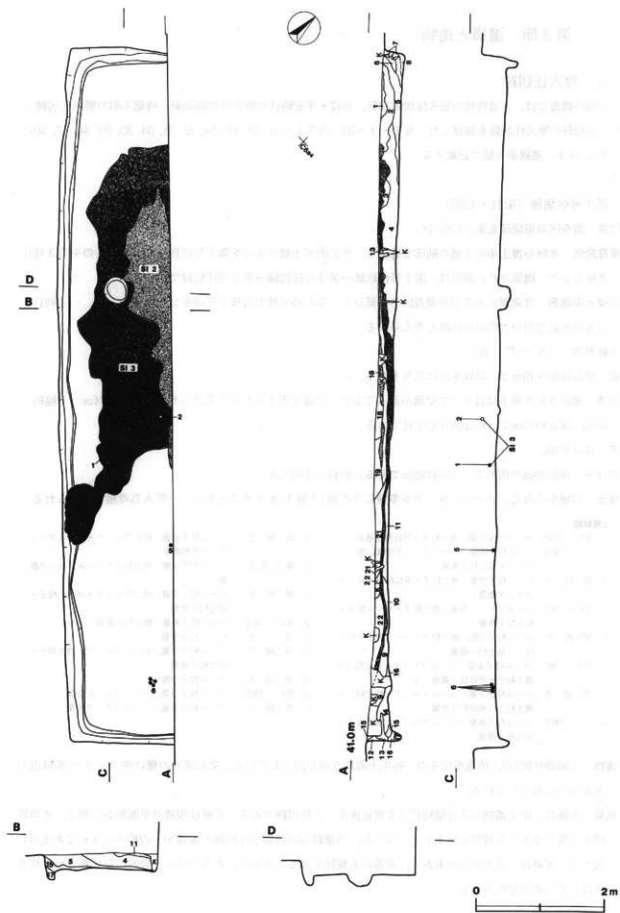
覆土 17層からなる。ロームブロックを多量に含む層(土層4)があることから、一部人為堆積と考えられる。

土層解説

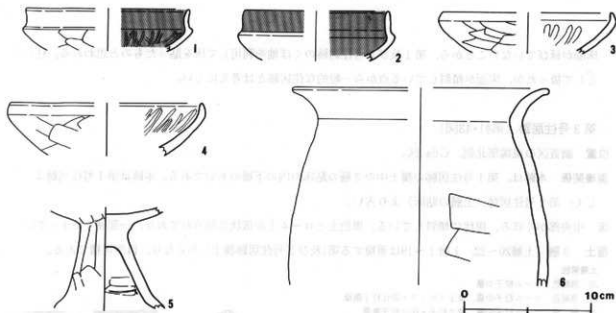
1 母オリブ褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 黒褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・ロームブロック・炭化物微量
2 オリブ褐色	ローム粒子中量、ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土粒子微量	10 暗灰黄色	ローム粒子少量、粘土粒子・ロームブロック微量
3 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ロームブロック微量	11 暗褐色	ローム粒子多量、焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
4 母オリブ褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・ローム粒子・粘土粒子微量	12 母オリブ褐色	ローム粒子多量、焼土粒子微量
5 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	13 黒色	ローム粒子少量
6 母オリブ褐色	ローム粒子中量、ロームブロック・粘土粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	14 黒褐色	ローム粒子中量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
7 黒褐色	ローム粒子少量、ロームブロック・粘土粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	15 黒褐色	ローム粒子中量
8 オリブ褐色	ローム粒子多量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	16 母オリブ褐色	ローム粒子多量、ロームブロック少量
		17 黒褐色	ローム粒子多量、ロームブロック少量

遺物 土師器片507点、須恵器片6点、弥生土器片5点が出土している。第42図6の竪は南コーナー部付近の床面上から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から古墳時代（6世紀後半）の住居跡である。正確な規模や平面形が不明で、その性格を示唆するような遺物も出土していないが、当遺跡の同時期の住居跡の規模が一辺約4~5mであるのに比べて、本跡は一辺が約11mもあり、非常に大規模であることから、あるいは、一般的な住居跡とは性格を異にしていた可能性もある。



第41图 第1~3号住居跡実測图



第42図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42図 1	土師器	A (13.0)	体部、口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ後、放射状の磨き。体部外面へラ削り。内面黒色処理。	長石・スコリア・雲母 灰黄褐色 普通	P 1 10% 覆土
	土師器	B (3.4)				
2	土師器	A (11.4)	体部、口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜がある。口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面、体部内面磨き。体部外面へラ削り。体部内面、口縁部外面黒色処理。	石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P 2 10% 覆土
	土師器	B (4.0)				
3	土師器	A (13.4)	体部、口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面放射状の磨き。体部外面へラ削り。	長石・雲母・スコリア 褐色 普通	P 3 15% 覆土
	土師器	B (3.2)				
4	土師器	A (16.2)	体部、口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面放射状の磨き。体部外面へラ削り。	砂粒・スコリア・雲母 灰黄色 普通	P 4 10% 覆土
	土師器	B (4.2)				
5	高土師器	A (20.4)	脚部、平底部片。脚部は円錐台形で脚部で大きく開く。平底部は皿状である。	平底部内面ナデ、外面へラ削り。脚部内面ナデ、外面へラ削り。	砂粒・スコリア・雲母 褐色 普通	P L 30 P 5 50% S I 3 貼床下
	土師器	E (5.9)				
6	土師器	A (20.4)	体部上位、口縁部片。体部中位に最大径がある。口縁部は外反する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面へラ削り後、ナデ。	砂粒・石英・雲母 褐色 普通	P L 30 P 6 20% 床面
	土師器	B (15.6)				

第2号住居跡 (第41図)

位置 調査区の東端部北側、C6a区。

重複関係 本跡は、第1号住居跡の覆土中の2層の貼床の内の上層のものである。本跡が第1号住居跡及び第3号住居跡(下層の貼床)の上に構築されており最も新しい。

床 南東側に傾斜している。黒色土とローム土が斑状に貼られており、硬く締まっている。

覆土 2層(土層18・19、土層1~17は重複する第1号住居跡覆土)からなり、自然堆積である。

土層解説

18 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

19 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量

遺物 土師器片47点、弥生土器片2点が出土しているが、いずれも細片である。

所見 本跡は、出土遺物から古墳時代(6世紀後半)のものと考えられる。第1号及び第3号住居跡の外側に

床面が延びていないことから、第1及び3号住居跡のくぼ地を利用して床を貼ったものと思われる。住居跡として扱ったが、床面が傾斜している点から一般的な住居跡とは考えにくい。

第3号住居跡（第41・43図）

位置 調査区の東端部北側，C6a,区。

重複関係 本跡は、第1号住居跡の覆土中の2層の貼床の内の下層のものである。本跡は第1号住居跡より新しく、第2号住居跡（上層の貼床）より古い。

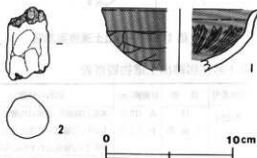
床 中央部がくぼみ、皿状に傾斜している。黒色土とローム土が斑状に貼られており、一部硬く締まっている。

覆土 3層（土層20～22、土層1～19は重複する第1及び2号住居跡覆土）からなり、自然堆積である。

土層解説

- 20 黒褐色 ローム粒子少量
21 黒褐色 ローム粒子中量、換土ブロック・炭化粒子微量
22 黒色 ローム粒子少量、換土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片33点、須恵器片3点、土製支脚1点が出土している。第43図1の環と2の支脚は本跡の貼床の床面から出土している。



所見 本跡は、出土遺物から古墳時代(6世紀後半)のものである。第2号住居跡と同様に第1号住居跡の外側に床面が延びていないことから、第1号住居跡が半埋没した時点でそのくぼ地を利用して床を貼ったものと思われる。住居跡として扱ったが、床面が傾斜している点から一般的な住居跡とは考えにくい。

第43図 第3号住居出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・構成	備考
第43図 1	環	A (12.5)	体部、口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に縁がある。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ後、放射状の磨き。体部外面へう削り。内・外面黒色処理。	砂粒・スコリア 灰黄褐色 普通	P 7 20% S I 3 貼床面
	土師器	B (5.0)				

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
2	支脚	(5.8)	3.5	3.4	(59.3)	貼床面	PL30 DP1 土製 側面へう削り指頭痕 二次焼成

第4号住居跡（第44～46図）

位置 調査区の東端部南側，C6b,区。

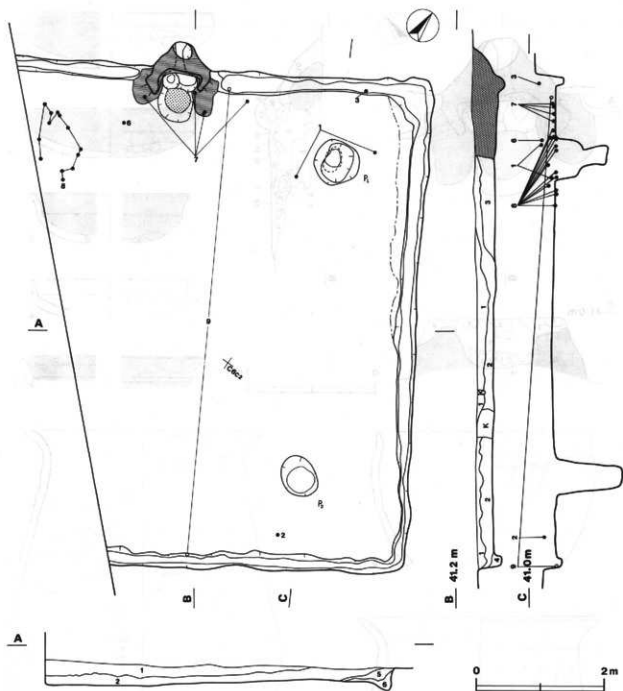
規模と平面形 南西側が調査区外に延びているため正確な規模と平面形は不明であるが、竈や柱穴の配置から一辺7.8mの方形と推定される。

主軸方向 N-36°-W

壁 壁高は20～30cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 確認された壁下にはすべて壁溝が通っており、ほぼ全周するものと考えられる。上幅約30cm、下幅約14cm、深さ約8cmで、断面形は方形である。

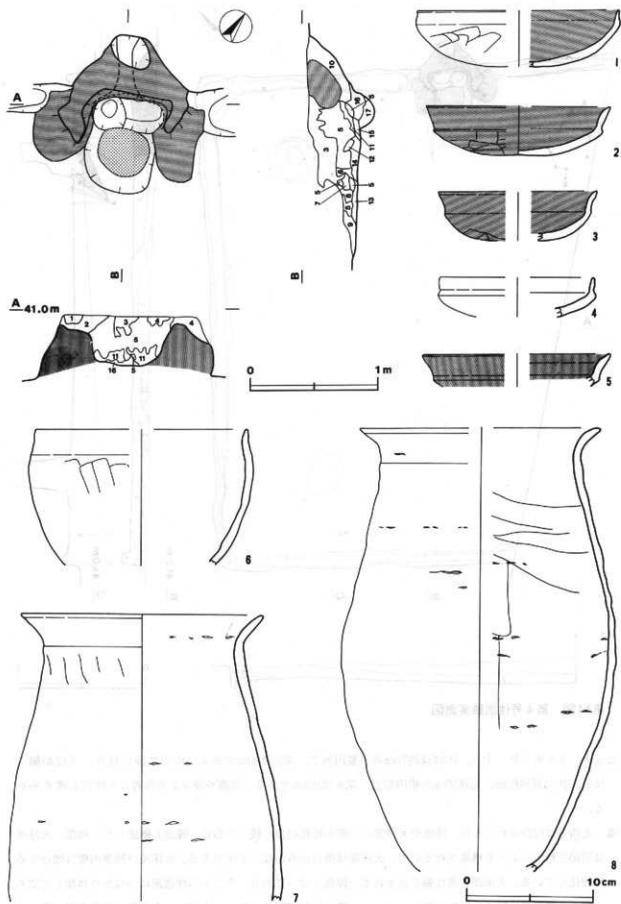
床 ほぼ平坦。床面全体が硬く踏み締められている。



第44図 第4号住居跡実測図

ピット 2か所 (P₁, P₂)。P₁は径約70cmの不整形円で、深さは80cmである。中位に段が有り、下位が細くなる。P₂は長径65cm、短径50cmの楕円形で、深さは105cmである。位置や深さから両者とも柱穴と考えられる。

竈 北西壁に付設されており、袖部や天井部の一部が比較的良く残っており、煙道も確認した。袖部、天井部は明褐色粘土によって構築されている。火床部は掘り込みがなく平坦である。火床及び袖部内壁は焼けて赤色硬化している。火床部の奥は掘り込まれて一段低くなっており、そこから煙道部につながり外傾して立ち上がる。煙道部は壁より約40cm突出している。覆土は、17層からなる。土層5は天井部の崩落土層と考えられる。



第45図 第4号住居跡窟・出土遺物実測図(1)

竈土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------|---------|--------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子微量 | 10 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | 粘土ブロック・粘土粒子中量 | 11 暗褐色 | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量 | 12 暗赤褐色 | 粘土ブロック・焼土粒子中量 |
| 4 褐色 | 粘土粒子多量 | 13 暗赤褐色 | 粘土粒子中量, 炭化物・焼土粒子少量 |
| 5 明褐色 | 粘土ブロック多量 | 14 褐色 | 粘土粒子多量, 焼土粒子少量 |
| 6 暗褐色 | 粘土粒子少量 | 15 暗赤褐色 | 焼土粒子多量 |
| 7 褐色 | 粘土ブロック・粘土粒子中量 | 16 黒褐色 | 焼土ブロック・焼土粒子中量 |
| 8 褐色 | 焼土粒子中量, 粘土粒子少量 | 17 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, ローム粒子少量 |
| 9 褐色 | 粘土ブロック・粘土粒子少量 | | |

覆土 6層からなる。ロームの大ブロックを含む層（土層2）があることから一部人为堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|---------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 黒色 | ローム粒子少量, 焼土ブロック・焼土粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック・ローム粒子中量, 粘土ブロック少量 |



0 5cm

第46図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)

遺物 土師器片297点, 須臾器片5点, 土製支脚1点, 縄文土器片1点及び弥生土器片1点が出土している。第45図7と8の甕は, 7が竈袖部や竈東側の床面から, 8が竈西側の床面から出土している。9の支脚は, 北と南の壁溝の覆土内から二つに割れて出土している。また, 竈の覆土内から植物の種子が出土したため, 同定を行ったところ, モモであることが判明した(付参参照)。

所見 本跡は, 出土遺物から古墳時代(7世紀前半)の住居跡である。竈が比較的良く残っており, 当時の本地域の竈の構造を知る参考となる。

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 1	坏 土師器	A (16.0)	体部, 口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は直立した後, わずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。体部外面へう削り。内面黒色処理。	長石・石英・スコリア に多い黄褐色 普通	P L 30
		B (4.5)				P 9 45%
2	坏 土師器	A (14.7)	底部へ口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。体部外面へう削り。内・外面黒色処理。	砂粒・スコリア・雲母 黒色 普通	P L 30
		B 3.9				P 10 30%
3	坏 土師器	A (12.6)	体部, 口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部との境に稜がある。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。体部外面へう削り。内・外面黒色処理。	砂粒・長石・石英 黒色 普通	P 11 15%
		B (3.9)				覆土上層
4	坏 土師器	A (12.4)	体部, 口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部との境に突出した稜がある。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。	長石・スコリア・雲母 橙色 普通	P 12 5%
		B (3.2)				覆土
5	坏 土師器	A (15.0)	口縁部片。体部との境に稜があり, 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	石英・長石 黒褐色 普通	P 13 10%
		B (2.6)				覆土
6	塊 土師器	A (16.7)	体部, 口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 体部上位に最大径がある。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面縦方向のナデ。体部外面へう削り。	長石・スコリア・石英 に多い橙褐色 普通	P L 30
		B (10.8)				P 14 30%
7	甕 土師器	A 19.1	体部, 口縁部片。体部中位に最大径があり, 口縁部との境にわずかに稜がある。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面, 体部内面横ナデ。体部外面へう削り後, ナデ。輪轆痕を残す。	長石・スコリア・雲母 に多い橙褐色 普通	P L 30
		B (22.7)				P 15 60%
						床面 外面露付着

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 8	壺 土師器	A (19.1)	体部、口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、体部中位に最大径がある。口縁部との境にわずかに稜がありL縁部は外反する。	口縁部内・外面、体部内面上位横ナデ、下位縦方向のナデ。体部外面ナデ。輪襷痕を残す。	長石・石英・雲母にふい橙色 普通	P1.30 P16 50% 床面 外面煤付着
		B (35.0)				

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第46図 9	支脚	18.4	8.5	4.1	602.7	覆土下層 P.L.30 D.P.2 十製 芯材抜き取り孔 側面用縦線 二次焼成	

第6号住居跡(第47図)

位置 調査区の東部南側, C5a₁区。

規模と平面形 床面と竈の火床部及び壁溝の一部が確認された。南西側が調査区外に延びているため正確な規模と平面形は不明である。竈や壁溝の位置から平面形は方形か長方形と推定される。

主軸方向 [N-5°-W]

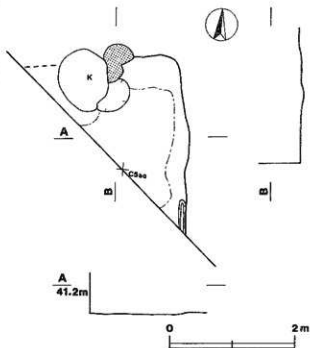
壁溝 住居の南東部にわずかに痕跡を確認した。上幅約12cm, 下幅約5cm, 深さ約4cmである。

床 ほぼ平坦。竈の前面を中心に良く踏み固められている。

竈 北壁に付設されている。火床部が残るだけでその形態は不明である。火床部は赤色硬化しており、前面にくぼみがある。

遺物 土師器片25点, 須恵器片2点, 縄文土器片1点及び弥生土器片27点が出土しているが, いずれも細片である。

所見 本跡は, 出土遺物から奈良・平安時代の住居跡と考えられるが, 遺物が細片であるため詳細な時期は不明である。



第47図 第6号住居跡実測図

第7号住居跡(第48図)

位置 調査区の東部南側, C5a₁区。

重複関係 本跡は, 第8号住居跡と重複している。本跡が第8号住居跡の上に構築されており, 本跡が新しい。

床 ほぼ平坦。ロームと黒色土が混じる貼床である。

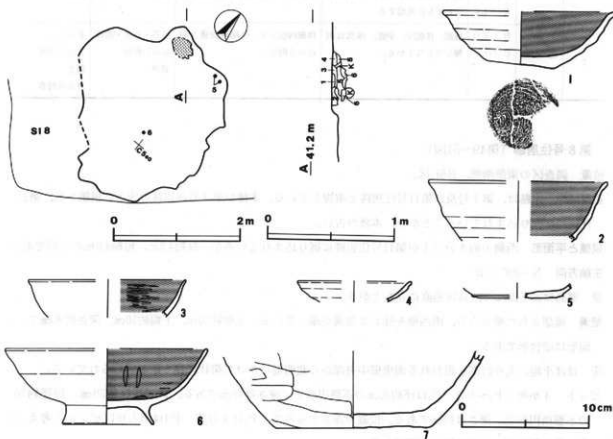
竈 床面への焼土の広がりから北壁に付設されていたものと考えられる。火床部は床面から約6cm掘りくぼめられており, 覆土がわずかに残る。覆土は, 6層からなる。土層1は天井部の崩落土層と考えられる。

覆土層解説

- | | |
|----------------------------------|------------------------------|
| 1 明褐色 粘土層 | 色粘土粒子少量 |
| 2 黒褐色 白色粘土ブロック・白色粘土粒子中量, 焼土粒子微量 | 4 黒褐色 焼土粒子中量, 焼土ブロック少量 |
| 3 黒褐色 焼土粒子・明褐色粘土粒子中量, 白色粘土ブロック・白 | 5 灰赤褐色 灰多量, 焼土粒子中量, 焼土ブロック少量 |
| | 6 赤褐色 焼土層 |

遺物 土師器片113点, 須恵器片16点, 弥生土器片2点及び鉄滓2点が出土している。第48図3の坏は覆覆土内から, 5の皿及び6の高台付坏は床面からの出土である。

所見 本跡は, 床の一部及び竈の火床部を残すだけであるため, 規模, 平面形, 主軸方向, 壁及び覆土等は不明である。出土遺物から平安時代(10~12世紀)の住居跡と考えられる。



第48図 第7号住居跡・出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第48図 1	坏	A (13.6)	底部~口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。内面黒色処理。	長石・スコリア 褐色色 普通	P L30 P17 50% 覆土
	土師器	B (4.5)				
		C 5.2				
2	坏	A (14.2)	体部、口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部外面横ナデ。体部内面ナデ後、磨き。ロクロ成形。内面黒色処理。	長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P18 15% 覆土
	土師器	B (4.2)				
3	坏	A (12.5)	体部、口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内面横方向の磨き。体部外面横ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・石英 にぶい黄褐色 普通	P19 10% 覆覆土
	土師器	B (3.0)				
4	皿	A (9.0)	体部、口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。ロクロ成形。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P20 20% 覆土
	土師器	B (1.7)				

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第48図 5	土 師 器	B (1.1) C (7.2)	底部片。底部は平底で、体部との境に縁がある。体部は内彎して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。	長石・石英・雲母 にふい黄褐色 普通	P21 20% 床面
6	高台付坏 土 師 器	A (16.0) B 6.0 D 7.3 E 1.4	高台部～口縁部片。平底に八の字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁端部がわずかに外傾する。	口縁部、体部内面ナゲ後、放射状の磨き。口縁部、体部外面横ナゲ。ロクロ成形。内面黒色処理。	長石・スクリヤ・雲母 にふい褐色 普通	P L30 P22 60% 床面
7	鉢 土 師 器	B (6.1) C (12.2)	底部、体部片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内面ナゲ。体部外面横方向のへら削り。	長石・石英・雲母 にふい褐色 普通	P L30 P25 20% 覆土 外面煤付着

第8号住居跡（第49～51図）

位置 調査区の東部南側，B5j区。

重複関係 本跡は、第7号及び第11号住居跡と重複している。本跡が第7号住居跡の床下に構築され、第11号住居跡に掘り込まれていることから、本跡が古い。

規模と平面形 西側の約4分の1が第11号住居跡に掘り込まれているが、長軸4.8m、短軸4.6mの方形である。

主軸方向 N-38°-W

壁 壁高は20～28cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 確認された壁のうち、南西壁を除いて壁溝が巡っている。上幅約20cm、下幅約10cm、深さ約6cmで、断面形は逆台形である。

床 はほぼ平坦。入り口部と思われる南東壁中央部から北西壁にかけて帯状に良く踏み固められている。

ピット 4か所（P₁～P₄）。P₁は径約20cmの不整形円で、深さは75cmである。P₂は長径約30cm、短径約20cmの不整形楕円形で、深さは15cmである。位置や深さからみて、P₂は主柱穴、P₄は出入り口ピットと考えられる。その他のピットの性格は不明である。

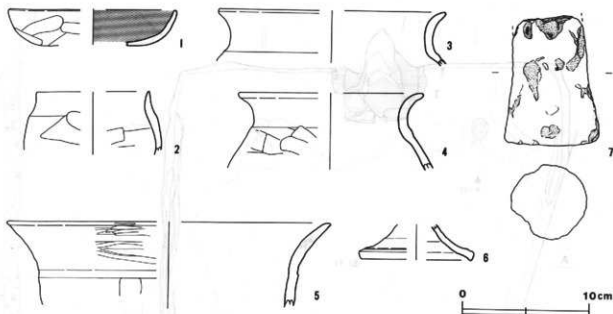
覆土 9層からなる。堆積状況から自然堆積と考えられる。

- | | |
|---|-------------------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量 | 6 黒褐色 黒色土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量、ロームブロック・焼土粒子・白色
粘土粒子・黒色土粒子微量 | 7 黒褐色 ローム粒子多量、ロームブロック中量、黒色土粒子少
量 |
| 3 薄暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 黒褐色 ローム粒子少量 |
| 4 黒色 炭化物・ローム粒子微量 | 9 暗赤褐色 ローム粒子多量 |
| 5 黒褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック・ロームブロック・
黒色土粒子少量 | |

遺物 土師器片255点、須恵器片14点、灰軸陶器片1点、弥生土器片23点及び支脚1点が出土している。第49

図1の坏は東コーナー部、2の坏は北コーナー部の床面から出土している。また、未焼成の支脚が覆土中から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から古墳時代（6世紀後半）の住居跡である。

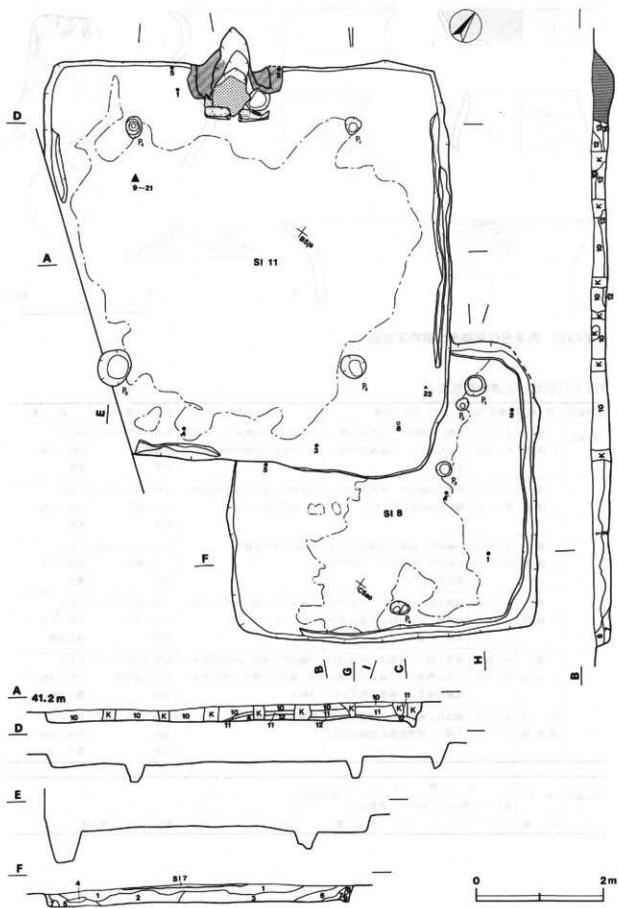


第49図 第8号住居跡出土遺物実測図

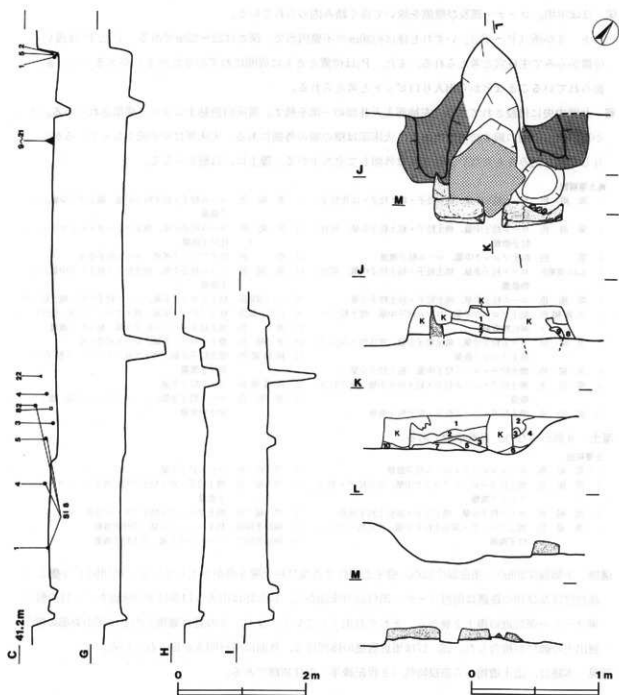
第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第49図 1	浅 土 師 器	A (13.3)	体部、口縁部片。体部は内傾して立ち上がり、口縁端部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう削り。内面黒色処理。	長石・スコリア・雲母 浅黄橙色 普通	P L 30
		B (2.9)				P 27 10%
2	浅 土 師 器	A (9.0)	体部、口縁部片。体部上位で内傾し、口縁部は直立する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面へう削り。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P L 30
		B (5.0)				P 37 5%
3	浅 土 師 器	A (18.0)	口縁部片。体部と口縁部との境にわずかに稜がある。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P L 30
		B (4.2)				P 34 5%
4	浅 土 師 器	A (14.6)	体部上位、口縁部片。体部上位は内傾し、口縁部との境に稜がある。口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。	小礫・砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P L 30
		B (6.1)				P 35 5%
5	瓶 土 師 器	A (25.7)	体部上位、口縁部片。体部はわずかに外傾し、口縁部との境に沈線が走る。口縁部は外反する。	口縁部内・外面、体部内面ナデ後、横方向の磨き。体部外面へう削り。	砂粒・長石・スコリア にぶい黄橙色 普通	P L 30
		B (6.6)				P 33 10%
6	高 環 須 恵 器	B (2.8)	脚部片。裾部で八字状に大きく開く。裾部先端に沈線が走る。	脚部内・外面横ナデ。	長石・石英 灰色 良好	P L 30
		C (8.6)				P 28 10%

図版番号	種別	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
7	支 脚	(10.3)	7.3	(5.8)	(477.1)	覆 土	P L 30 DP 3 土製 未焼成 砂粒・小礫多量



第50图 第8・11号住居跡实测图(1)



第51図 第8・11号住居跡(2)・第11号竪実測図

第9号住居跡(第52・53図)

位置 調査区の東部北側, B5i区。

規模と平面形 長軸3.8m, 短軸3.5mの長方形である。

主軸方向 N-24°-W

壁 壁高は35~45cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 北壁の西側及び南西コーナー部を除いて壁溝が巡っており, ほぼ全周する。上幅約25cm, 下幅約8cm, 深さ4~12cmで, 断面形は逆台形である。

床 ほぼ平坦。コーナー部及び壁際を除いて良く踏み固められている。

ピット 3か所 (P₁~P₃)。いずれも径は約20cmの不整形で、深さは22~25cmである。P₁とP₂は浅いが、位置からみて主柱穴と考えられる。また、P₃は位置とともに周囲にわずかなたかまりがあること、斜位に掘られていることなどから出入り口ピットと考えられる。

竈 北壁中央に付設されており、左袖部と天井部の一部を残す。黄灰白色粘土によって構築されている。床面が竈の左右の壁の線まで延びており、火床部は壁の線の外側にある。火床部はやや低くなっているがしっかりした掘り込みをもたない。煙道部は外傾して立ち上がる。覆土は、21層からなる。

覆土層解説

1	黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・粘土粒子・炭化粒子微量	11	黒褐色	ローム粒子・粘土粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量	12	黒褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量
3	黒色	粘土ブロック中量、ローム粒子微量	13	橙褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子中量
4	にぶい黄褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・粘土粒子中量、炭化物微量	14	黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
5	黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・粘土粒子少量	15	にぶい黄褐色	粘土ブロック多量、ローム粒子少量、焼土粒子微量
6	灰黄褐色	粘土ブロック多量、ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物微量	16	にぶい黄色	粘土ブロック多量、焼土ブロック少量、炭化物微量
7	黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化物・灰白色粘土ブロック微量	17	黒色	焼土粒子・ローム粒子少量、粘土粒子微量
8	黒褐色	焼土粒子・ローム粒子中量、粘土粒子少量	18	赤褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子中量
9	褐灰色	焼土粒子・ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量	19	暗褐色	焼土粒子多量、焼土ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子微量
10	黒褐色	焼土粒子・ローム粒子・粘土粒子微量	20	明黄褐色	ローム粒子多量
			21	黒褐色	ローム粒子多量、ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物微量

覆土 9層からなり、自然堆積である。

土層解説

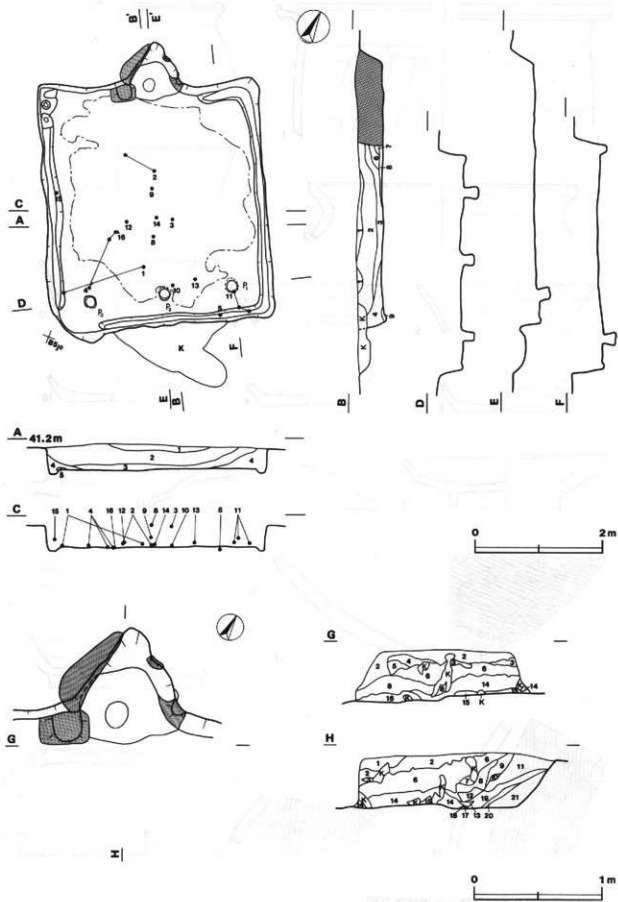
1	黒褐色	ロームブロック・ローム粒子微量	5	黒褐色	ローム粒子少量
2	黒褐色	焼土粒子・ロームブロック少量、炭化粒子・粘土ブロック微量	6	黒褐色	焼土粒子・粘土粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子微量
3	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・黒色土粒子微量	7	黒褐色	焼土ブロック・粘土ブロック少量
4	黒褐色	焼土ブロック・黒色土粒子少量、炭化物・ローム粒子微量	8	暗赤褐色	粘土ブロック少量、炭化物微量
			9	暗赤褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量

遺物 土師器片206点、須恵器片53点、弥生土器片3点及び粘土塊6点が出土している。第53図1の壺と4の高台付坏及び18の鉄鏝は南西コーナー部付近の床面から、10の坏は出入り口部付近の床面から、11の盤は南東コーナー部付近の覆土下層から、それぞれ出土している。また、2の壺は覆羅土内と住居中央部の覆土下層出土の破片が接合した。16、17は須恵器壺の体部片で、外面に平行叩きが施されている。

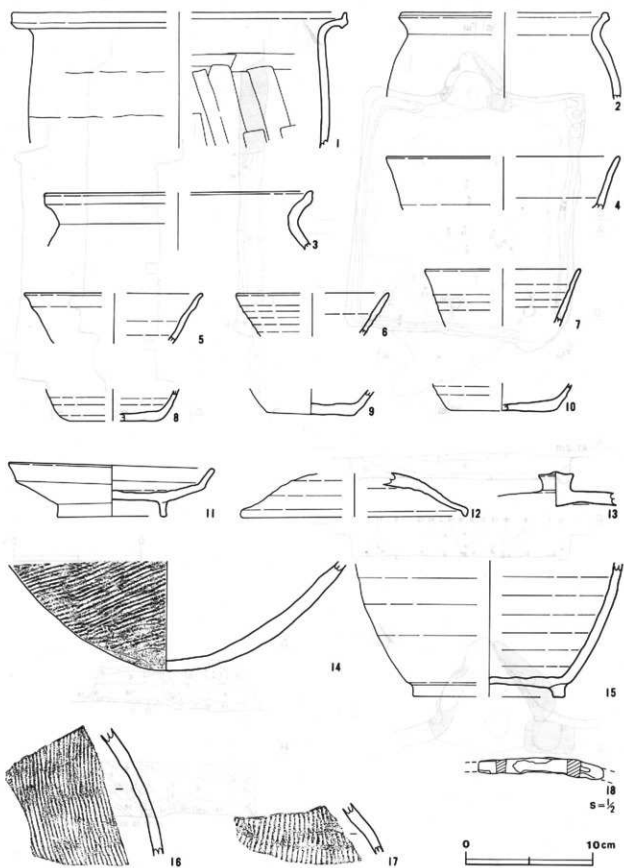
所見 本跡は、出土遺物から奈良時代(8世紀後半)の住居跡である。

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第53図1	壺	A (26.2)	体部、口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反し、口縁端部は上下に突出する。	口縁部内・外面、体部外面横ナデ。体部内面斜方向のナデ。体部外面に輪積痕を残す。	長石・スコリア・石英 浅黄褐色 普通	P L 31 P 40 10% 床面
		B (10.7)				
2	土師器	A (9.0)	体部、口縁部片。体部上位で内彎し、口縁部は外反する。口縁端部をわずかにつまみ上げ、側面に沈線を残す。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面縦方向のナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい赤褐色 普通	P L 30 P 41 16% 覆羅土・覆土下層
		B (5.0)				



第52図 第9号住居跡・竈実測図



第53图 第9号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第53図 3	甕 土師器	A (21.2)	口縁部片。口縁部は外反し、口縁部をわずかにつまろ上げる。	口縁部、体部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・スコリア 橙色 普通	P L 31
		B (4.2)				P 42 10%
4	高台付環 須恵器	A (18.4)	体部、口縁部片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 黄灰色 良好	P L 31
		B (4.2)				P 44 20%
5	環 須恵器	A (14.0)	体部、口縁部片。体部はわずかに内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。	砂粒・海綿骨針 灰黄褐色 良好	P 45 15%
		B (4.0)				壁溝内
6	環 須恵器	A (12.0)	体部、口縁部片。体部は外傾して立ち上がり、直線的に口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。	長石・海綿骨針 ぶい赤褐色 良好	P 46 15%
		B (3.4)				覆土
7	環 須恵器	A (12.4)	体部、口縁部片。体部は外傾して立ち上がり、直線的に口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。	長石・海綿骨針 灰オリーブ色 良好	P 47 15%
		B (4.5)				覆土
8	環 須恵器	B (2.5)	体部、底部片。平底。体部は底部との境に丸味をもって立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・海綿骨針 灰黄色 良好	P 48 20%
		C (8.0)				覆土
9	環 須恵器	B (1.9)	体部、底部片。平底。体部は底部との境に鋭をもち、内彎して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・海綿骨針 オリーブ灰色 良好	P 49 15%
		C (6.8)				覆土中層
10	環 須恵器	B (2.2)	体部、底部片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・海綿骨針 灰色 普通	P 50 15%
		C (8.6)				床面
11	盤 須恵器	A 16.2	平底にわずかに外方に開く高台が付く。体部は外傾し、口縁部は外反する。全体的に歪んでいる。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台貼り付け後、ナデ。見込み部分に自然輪付着。	砂粒・海綿骨針 灰色。顔貌あり 良好	P L 31
		B 4.4				P 52 90%
		D 8.7				覆土下層
		E 1.1				
12	蓋 須恵器	A (18.4)	口縁部、天井部片。天井部は平坦で口縁部は丸味をおび、口縁部は屈曲する。	天井部回転ヘラ削り。口縁部内・外面ナデ。	砂粒・海綿骨針 灰色 良好	P L 31
		B (3.4)				P 54 20%
13	蓋 須恵器	B (2.7)	天井部片。中心部が突出した蓮台形状のつまみ。天井部は平坦である。	天井部回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け。	石英・海綿骨針 褐灰色 良好	P L 31
						P 56 20%
14	甕 須恵器	B (8.3)	底部、体部片。丸底。体部は内彎して立ち上がる。	体部、底部内面指頭痕。体部外面平行叩き。底部外面ヘラ削り。	長石・海綿骨針 灰黄色 良好	P L 31
						P 57 20%
15	壺 須恵器	B (10.6)	底部、体部片。平底にたくて低い高台が付く。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・海綿骨針 褐褐色 良好	P L 31
		D (12.1)				P 58 10%
		E 1.0				覆土中層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
18	鉄 鑊	(6.6)	1.1	0.7	(12.2)	床 面	P L 46 M 2 茶部片

第11号住居跡 (第50・51・54図)

位置 調査区の東部南側, B5j,区。

重複関係 本跡は, 第8号住居跡と重複している。本跡が第8号住居跡を掘り込んでおり, 本跡が新しい。

規模と平面形 南西側の一部が調査区外に延びているが, 一辺6.4mの方形とみられる。

主軸方向 N-37°-W

壁 壁高は22~34cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 部分的に確認した。上幅約20cm, 下幅約8cm, 深さ約10cmである。

床 ほぼ平坦。壁際やコーナー部を除いて良く踏み固められている。

ピット 4か所 (P₁~P₄)。径は25~60cmの不整形あるいは楕円形で, 深さは25~64cmである。浅いものもあるが, 配置からみて主柱穴と考えられる。

竈 北西壁中央に付設されている。焚口部は凝灰岩の切石によって組まれていたとみられ, 左袖部には切石が直立した状態で, 竈前面には天井部の切石が崩落した状態で出土している。また, 右袖部には切石が立てられたと思われるピットがある。火床部は奥の方がやや低くなっているがほぼ平坦である。煙道部は約60cm突出しており, 緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は, 10層からなる。土層2は天井部の崩落土層と考えられる。

覆土層解説

- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1 黒褐色 黄褐色粘土ブロック多量 | 6 赤褐色 焼土粒子中量, 粘土粒子・ローム粒子少量 |
| 2 橙褐色 粘土ブロック層 | 7 暗赤褐色 焼土ブロック・焼土粒子中量, 粘土ブロック少量 |
| 3 暗赤褐色 粘土ブロック・焼土粒子中量, 焼土ブロック少量 | 8 暗褐色 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子・粘土粒子微量 |
| 4 暗褐色 粘土ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量 | 9 黒褐色 ローム粒子中量, 粘土ブロック少量 |
| 5 黒褐色 炭化物中量, 粘土ブロック・焼土ブロック少量 | 10 暗褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・粘土粒子少量 |

覆土 5層 (土層10~14, 土層1~9は重複する第8号住居跡覆土) からなる。ロームブロックを多量に含む層 (土層12) があることから, 一部人為堆積と考えられる。

土層解説

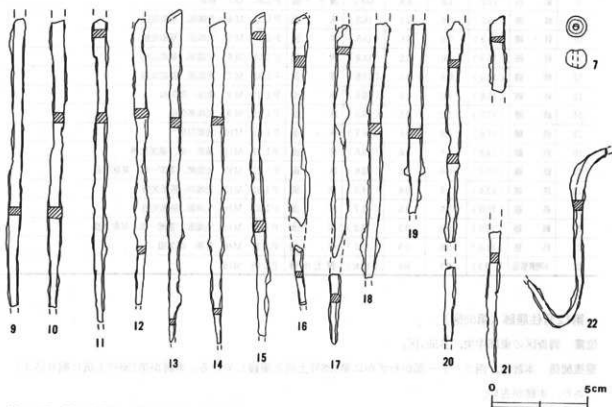
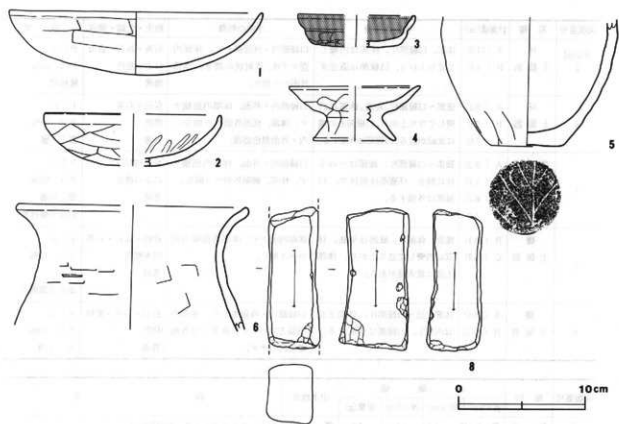
- | | |
|---------------------------------------|---|
| 10 黒褐色 焼土粒子少量, 焼土ブロック・ローム粒子・炭化物少量 | 12 暗褐色 ロームブロック多量, 焼土粒子・ローム粒子少量 |
| 11 黒褐色 焼土ブロック・ロームブロック少量, 焼土粒子・ローム粒子微量 | 13 明褐色 粘土ブロック・粘土粒子多量, ローム粒子少量, 焼土ブロック微量 |
| | 14 暗褐色 粘土粒子多量, 焼土ブロック・焼土粒子微量 |

遺物 土師器片754点, 須臾器片29点, 弥生土器片17点, 丸玉1点, 磁石1点, 鉄鏝13点, 不明鉄製品2点及び鉄滓9点が出土している。第54図1の環は竈西側の覆土下層から, 2の環は竈右袖部の壁際から, 5の環は竈西側の壁際の床面から出土している。また, P₁柱穴の南側の床面から長基で片刃の鉄鏝13点がまもって出土している。

所見 本跡は, 6世紀後半の第8号住居跡を掘り込んでいることと, 出土遺物から古墳時代 (7世紀前半) のものと考えられる。本跡からは, 多量の鉄鏝, 不明鉄製品や鉄滓などがまもって出土しており, 本跡が鉄に何らかの関係のある住居跡と考えられる。

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第54図 1	環 土師器	A (20.0) B 5.0	底部~口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外傾する。	口縁部, 体部内面磨き。口縁部, 体部, 底部外面へラ削り後磨き。底部内面乳充れ。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P L31 P 66 60% 覆土下層



第54图 第11号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第54図 2	坏 土 師 器	A〔14.0〕	体部、口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ後、放射状の磨き。体部外面へう削り。	石英・長石・雲母 にふい橙色 普通	P L 31 P 67 20% 襷袖部
		B〔4.1〕				
3	坏 土 師 器	A〔9.2〕	底部へ口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に沈膜が巡る。口縁部は外横する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部、底部外面へう削り。内・外面黒色処理。	長石・石英 黒色 青濁	P L 31 P 68 20% 覆土下層
		B 2.6				
		C〔7.0〕				
4	高 坏 土 師 器	A〔9.0〕	脚部へ口縁部片。脚部はハの字状に開き、坏底部は皿状で、口縁部は外横する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部、脚部外面へう削り。	長石・雲母・スコリ にふい橙色 普通	P L 31 P 70 25% 覆土中層 口縁部煤片着
		B〔1.7〕				
		D〔6.5〕				
		E 1.8				
5	甕 土 師 器	B〔10.1〕	底部、体部片。底部は平底。体部は内彎して立ち上がり、体部上位に最大径がある。	体部内面ナデ。体部外面縦方向のへう削り。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P L 31 P 71 40% 床面 底部木炭痕あり
		C〔5.7〕				
6	甕 土 師 器	A〔18.4〕 B〔9.7〕	体部上位へ口縁部片。体部上位は内横し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面斜方向のナデ。体部上位外面縦方向のナデ。	長石・石英・雲母 橙色 普通	P L 31 P 72 10% ビット内

図版番号	種 別	計 測 値			出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
7	丸 玉	最大径	1.1	1.1	1.6	覆 土 Q 7 ホルンフェルス 孔径3.0mm
8	砥 石	11.2	4.2	5.4	344.0	覆 土 下層 P L 31 Q 2 砂岩
9	鉄 鏝 (15.2)	0.9	0.4	(16.3)		床 面 P L 31 M 4 先端部、基部欠損
10	鉄 鏝 (15.2)	0.9	0.6	(15.8)		床 面 P L 31 M 5 先端部、基部欠損
11	鉄 鏝 (15.9)	1.0	0.5	(14.8)		床 面 P L 31 M 6 先端部、基部欠損
12	鉄 鏝 (15.0)	0.9	0.5	(13.8)		床 面 P L 31 M 7 先端部、基部欠損
13	鉄 鏝 (17.6)	1.0	0.5	(15.0)		床 面 P L 31 M 8 基部一部欠損
14	鉄 鏝 (17.0)	1.0	0.5	(16.0)		床 面 P L 31 M 9 先端部欠損
15	鉄 鏝 (17.0)	0.8	0.6	(16.7)		床 面 P L 31 M 10 基部欠損
16	鉄 鏝 (14.3)	1.1	0.6	(15.0)		床 面 P L 31 M 11 基部一部、基部欠損
17	鉄 鏝 (15.9)	0.9	0.5	(12.6)		床 面 P L 31 M 12 先端部、基部一部、基部欠損
18	鉄 鏝 (13.4)	1.2	0.6	(14.3)		床 面 P L 31 M 13 先端部、基部欠損
19	鉄 鏝 (10.0)	0.9	0.5	(11.7)		床 面 P L 31 M 14 先端部、基部欠損
20	鉄 鏝 (16.9)	0.9	0.5	(13.3)		床 面 P L 31 M 15 先端部、基部一部、基部欠損
21	鉄 鏝 (11.5)	0.9	0.5	(10.2)		床 面 P L 31 M 40 基部一部欠損
22	不明鉄製品	(9.5)	0.5	0.6	(13.6)	覆 土 中層 P L 46 M 16

第12号住居跡(第55図)

位置 調査区の東部中央、B5h区。

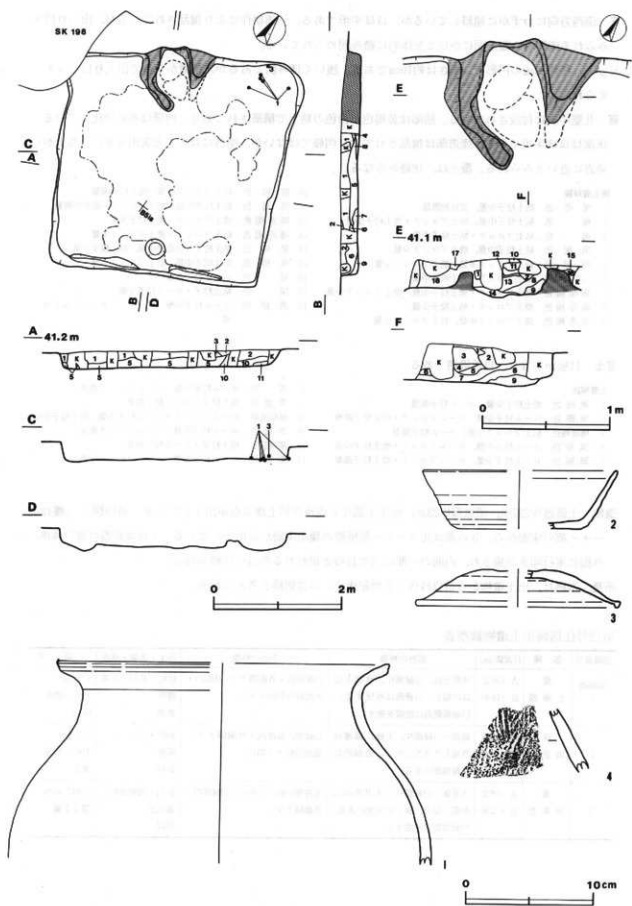
重複関係 本跡は、西コーナー部がわずかに第198号土坑と重複している。本跡が第198号土坑に覆り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.6m、短軸3.5mの方形である。

主軸方向 N-25°-W

壁 壁高は20~26cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 出入り口の両側とみられる南壁の一部を確認した。上幅約20cm、下幅約6cm、深さ約5cmである。



第55图 第12号住居跡・竈・出土遺物実測図

床 南西方向にわずかに傾斜しているが、ほぼ平坦である。一部耕作により攪乱されているが、出入り口部とみられる南壁から竈前面にかけて全体的に踏み固められている。

ピット 径約32cmの円形で、深さは約10cmである。浅いくぼみ状であるが、位置からみて出入り口ピットと考えられる。

竈 北壁中央に付設されている。袖部は黄褐色と白色の粘土で構築されており、内壁は赤色硬化している。火床部はほぼ平坦である。煙道部は攪乱されており明確ではないが、壁外にほとんど突出せず、立ち上がりは垂直に近いとみられる。覆土は、18層からなる。

覆土層解説

1 黒褐色	粘土粒子少量、炭化物微量	10 暗褐色	粘土ブロック中量、焼土粒子微量
2 褐色	粘土粒子中量、粘土ブロック・焼土粒子少量	11 黒褐色	粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化物微量
3 褐色	粘土ブロック・粘土粒子中量	12 暗赤褐色	焼土ブロック・焼土粒子多量
4 黒褐色	粘土粒子中量、焼土ブロック少量	13 暗赤褐色	粘土ブロック・焼土ブロック少量
5 明褐色	粘土ブロック多量、焼土ブロック少量	14 黒褐色	粘土粒子・炭化物中量、焼土粒子少量
6 にいり赤褐色	粘土ブロック・焼土粒子中量	15 黒褐色	粘土粒子中量、粘土ブロック少量
7 暗褐色	粘土ブロック・焼土粒子中量、焼土ブロック少量	16 褐色	ローム粒子多量
8 暗赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子少量	17 黒色	粘土粒子・ローム粒子少量
9 暗赤褐色	焼土ブロック中量、粘土ブロック少量	18 黒褐色	ローム粒子少量、粘土ブロック・ロームブロック微量

覆土 11層からなり、自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量	6 黒色	ローム粒子少量、ロームブロック微量
2 黒褐色	ローム粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量	7 黒褐色	焼土粒子・ローム粒子微量
3 暗褐色	粘土ブロック少量、ローム粒子微量	8 暗褐色	ロームブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量
4 黒褐色	ローム粒子中量、ロームブロック・焼土粒子少量	9 黒褐色	ローム粒子中量、ロームブロック微量
5 黒褐色	ローム粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量	10 黒褐色	焼土粒子・ローム粒子微量
		11 黒褐色	ローム粒子多量、ロームブロック少量

遺物 土師器片227点、須恵器片23点、弥生土器片6点及び粘土塊3点が出土している。第55図1の竈は北コーナー部の床面から、3の蓋は北コーナー部壁際の覆土下層から出土している。4は須恵器の竈の体部片で、外面に平行叩きが施され、内面の一部に当て具痕と思われる布目の圧痕が残る。

所見 本跡は、出土遺物から奈良時代（8世紀後半）の住居跡と考えられる。

第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第55図 1	土師器	A (26.2)	体部上位、口縁部片。体部上位は内傾し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面縦方向のナデ。	砂粒・長石・石英 褐色	P L 32
		B (15.8)	口縁部断面に沈跡を施す。		普通	P 80 20% 床面
2	須恵器	A (15.4)	底部～口縁部片。平底。体部は外傾して立ち上がり、直線的に口縁端部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒・スコリア 灰色	P L 32 P 82 20%
		B 4.6			良好	覆土
		C (9.6)				
3	須恵器	A (26.2)	天井部、口縁部片。天井部中心が低くなり、狭い平坦面がある。	天井部回転ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	長石・海膽骨針 黄灰色	P 84 10%
		B (2.9)	口縁端部は屈曲する。		良好	覆土下層

第15号住居跡（第56図）

位置 調査区の東部北側，B5g₁区。

重複関係 本跡は，第16号住居跡と第122号土坑と重複している。本跡が第16号住居跡と第122号土坑によって掘り込まれており，3遺構の中で本跡が最も古い。

規模と平面形 本跡は，北東側の大部分が調査区外に延びており，調査区内の南東側も第16号住居跡と第122号土坑によって掘り込まれているため，南東壁の一部を確認しただけである。規模や平面形は不明である。

壁 壁高は38cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦である。

覆土 3層からなり，自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量，炭化粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子微量
- 3 黒褐色 焼土粒子中量，焼土ブロック・黒色土粒子少量

遺物 土師器片92点，須恵器片6点が出土している。第56図2は須恵器の甕の体部片で，外面に平行叩きが施されている。

所見 本跡は，出土遺物から奈良時代（8世紀後半）の住居跡と考えられる。

第15号住居跡出土遺物観察表

図収番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図 1	環 須恵器	A (10.2) B (4.6)	体部，口縁部片。平底。体部は外傾して立ち上がり，直線的に口縁端部に至る。	口縁部，体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 灰色 良好	P802 20% 覆土

第16号住居跡（第56図）

位置 調査区の東部北側，B5g₁区。

重複関係 本跡は，第15及び17号住居跡と重複している。本跡が第15号住居跡を掘り込んでおり，第17号住居跡に掘り込まれていることから，本跡は第15号住居跡より新しく，第17号住居跡よりも古い。

規模と平面形 北東側の大部分が調査区外に延びているため正確な規模と平面形は不明であるが，一边が4.6mの方形か長方形と推定される。

壁 壁高は約35cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 確認された南西壁際にはすべて壁溝が巡っている。上幅約20cm，下幅約16cm，深さ約7cmで，断面形はU字状である。

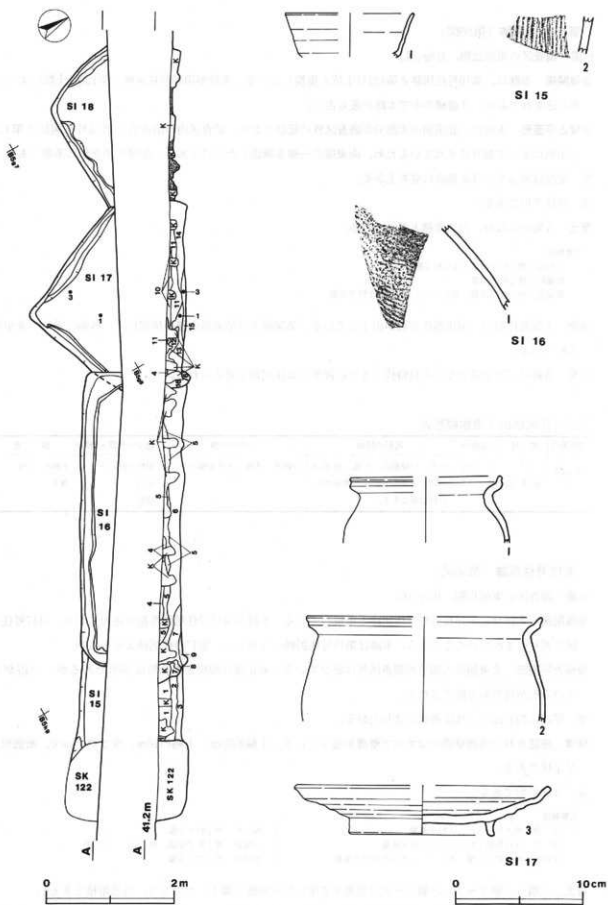
床 ほぼ平坦である。

土層解説

- | | |
|---------------------------|-----------------------|
| 4 黒色 焼土粒子・ローム粒少量 | 7 褐色 焼土粒子少量 |
| 5 黒色 灰白色粘土粒子・ローム粒微量 | 8 黒褐色 焼土粒子中量，焼土ブロック少量 |
| 6 黒褐色 焼土粒子少量，焼土ブロック・炭化粒微量 | 9 暗褐色 焼土粒子少量 |

覆土 6層（土層4～9，土層1～3は重複する第15号住居跡の覆土）からなり，自然堆積である。

遺物 土師器片6点，須恵器片1点が出土している。第56図1は須恵器の甕の体部上片片である。外面に平行叩きが施され，自然軸が付着している。



第56图 第15~18号住居跡・出土遺物実測図

所見 出土遺物が少なく、いずれも細片で、遺物から詳細な時期は特定できない。重複関係についてみると、本跡は、8世紀後半の第15号住居跡より新しく、9世紀前半の第17号住居跡より古いことから、時期は、8世紀末から9世紀初頭に位置づけられるものと考えられる。

第17号住居跡（第56図）

位置 調査区の東部北側，B5g区。

重複関係 本跡は、第16及び18号住居跡と重複している。本跡が第16及び18号住居跡を掘り込んでおり、本跡が3遺構の中で最も新しい。

規模と平面形 南西コーナー部だけを確認できた。北東側が調査区外に延びているため規模と平面形は不明である。

壁 壁高は22～24cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 南西コーナー部を除いて確認された壁際にはすべて壁溝が巡っている。上幅約20cm，下幅約7cm，深さ約12cmで、断面形はU字状である。

床 ほぼ平坦である。

覆土 7層（土層10～16，土層1～9は第15及び16号住居跡覆土）からなり、自然堆積である。

土層解説

10 黒色	ローム粒子少量，ロームブロック微量	14 極暗褐色	ロームブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量
11 黒褐色	ローム粒子中量，ロームブロック少量	15 黒色	ロームブロック・ローム粒子少量
12 暗赤褐色	焼土粒子・砂多量，黄白色粘土粒子少量	16 黒褐色	ロームブロック・ローム粒子微量
13 極暗褐色	焼土粒子・ローム粒子・砂少量		

遺物 土師器片54点，須恵器片14点及び弥生土器片1点が出土している。第56図3の竈は南西コーナー部付近の覆土下層から出土している。

所見 木跡は、調査区内に竈が確認されなかったが、覆土中に竈の構築材と思われる粘土や砂が含まれていることから、竈が付設されていたと考えられる。時期は、出土遺物から平安時代（9世紀前半）の住居跡と考えられる。

第17号住居跡出土遺物観察表

図取番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・地成	備考	
第56図 1	竈 土師器	A (12.2)	体部上位，口縁部片。体部上位は内傾する。口縁部は外反し，口縁端部は上方につまみ上げられ，側面に沈線を施す。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P.L32 P803 30% 覆土中層 外面煤付層	
		B (5.2)					
2	竈 土師器	A (18.6)	体部上位，口縁部片。口縁部は外反する。口縁端部は上方につまみ上げられ，側面に凹線を施す。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英 ぶい赤褐色 普通	P.L32 P804 10% 覆土	
		B (8.3)					
3	竈 須恵器	A (20.4)	平底に下方でわずかに開く高台が付く。体部は外傾し，口縁部は外反する。	口縁部，体部内・外面横ナデ。 底部回転ヘラ削り後，高台貼り付け。	小礫・海綿骨針 灰色 良好	P.L32 P805 60% 覆土下層	
		B 3.9					
		D 11.6					
		E 1.2					

第18号住居跡（第56図）

位置 調査区の東部北側，B5f区。

重複関係 本跡は，第17号住居跡と重複している。本跡が第17号住居跡に掘り込まれており，本跡が古い。

壁溝 南西コーナー部を除いて確認された壁面にわずかに痕跡が残る。

床 ロームブロックやローム粒子を含む黒褐色土の貼床で，ほぼ平坦である。

遺物 土師器片3点が出土しているが，いずれも細片である。

所見 本跡は，南西コーナー部とみられる床面と壁溝の一部が残るだけで，しかも北東側が調査区外に延びているため，規模，平面形，主軸方向，壁及び覆土等は不明である。第17号住居跡との重複関係から平安時代（9世紀前半）より古いと考えられるが，出土遺物が少なく細片であるため，詳細な時期は不明である。

第19号住居跡（第57・58図）

位置 調査区の東部南側，B5i区。

重複関係 本跡は，第20号住居跡と重複している。本跡が第20号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形 南西コーナー部が調査区外にあるが，長軸3.2m，短軸3.1mの方形とみられる。

主軸方向 N-20°-W

壁 壁高は6～16cmで，外傾して立ち上がる。

床 黒褐色の貼床で，ほぼ平坦である。竈前面から中央付近にかけて踏み固められている。

竈 北西壁中央に付設されており，袖部から煙道部の上面にかけて黄褐色粘土が残っている。袖部は左袖端がわずかに残る程度で，右袖部は耕作により攪乱されている。火床部はややくぼむがほぼ平坦である。煙道部は攪乱されており形態は明確でないが，壁から約30cm突出している。覆土は，9層からなる。

覆土層解説

- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック・焼土粒子・炭化物少量 | 6 黒褐色 粘土粒子少量，焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量 | 7 黒褐色 ロームブロック中量，焼土粒子・ローム粒子少量 |
| 3 黒褐色 焼土ブロック・粘土ブロック中量，焼土粒子少量 | 8 黒褐色 焼土ブロック・焼土粒子中量，粘土粒子微量 |
| 4 黒褐色 焼土ブロック・粘土粒子中量 | 9 黒褐色 粘土ブロック中量，粘土粒子少量 |
| 5 極暗褐色 焼土粒子・粘土粒子少量 | |

覆土 3層からなり，自然堆積と考えられる。

土層解説

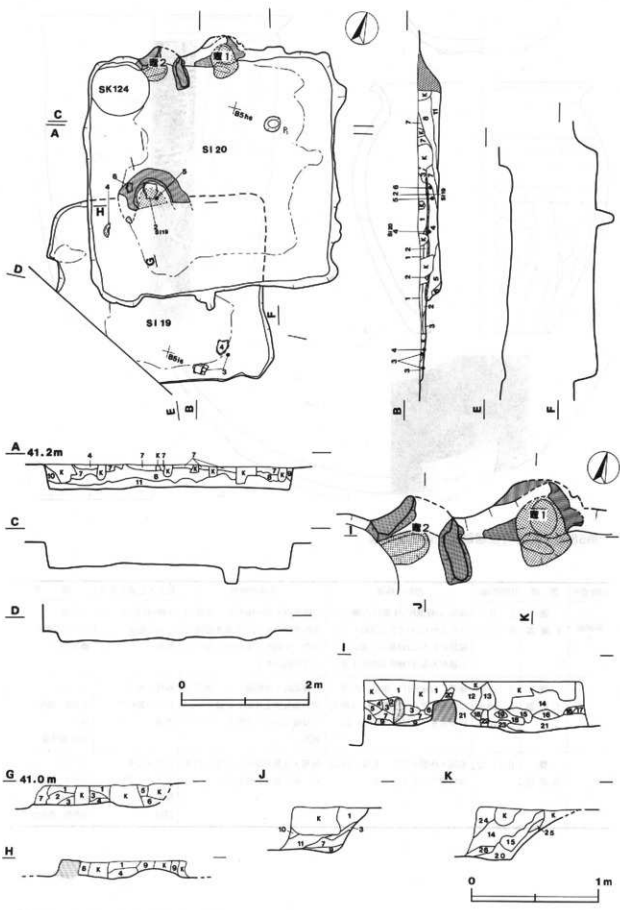
- 1 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子少量，焼土ブロック・炭化物微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量，炭化物微量
- 3 黒色 ローム粒子少量，焼土粒子微量

遺物 土師器片97点，須恵器片13点，灰釉陶器片2点及び粘土塊2点が出土している。第58図2の甕は竈の覆土内から，3と4の甕は南東コーナー部付近の床面から出土している。

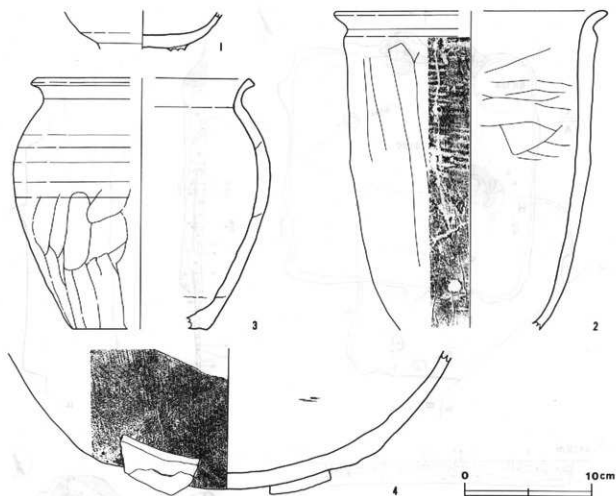
所見 本跡は，8世紀後半の第20号住居跡の上に構築されていること及びその出土遺物から平安時代（10～12世紀）の住居跡と考えられる。

第19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第58図 1	高台付坏 土師器	B (2.5)	底部，体部片。高台部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部内台貼り付け後，ナデ。ロクロ成形。	長石・スコリアにふいば褐色 普通	P807 25% 覆土



第57图 第19・20号住居跡・竈実測図



第58図 第19号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・装成	備考
第58図 2	壺 土師器	A (21.7)	体部、口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、わずかに外傾して口縁部に至る。口縁部との境にぶい接がある。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面斜方向のナデ。体部外面縦方向のへう削り。平行叩き目のような圧痕がある。	小礫・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P L32 P 815 30% 覆土
		B (25.2)				
3	壺 土師器	A (17.6)	体部、口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、体部上位に最大径がある。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部上位外面板状工具による横ナデ、下位縦方向のへう削り。ロクロ成形。	砂粒・スコリア にぶい黄橙色 普通	P L32 P 816 35% 床面 外面煤付着
		B 19.8				
		C (10.6)				
4	壺 須恵器	B (11.5)	底部・体部下位片。丸底。体部は内彎して立ち上がる。	体部・底部外面平行叩き、内面の一部にあて具痕あり。	長石・石英 灰オリーブ色 黒斑あり 良好	P L32 P 811 15% 床面 自然釉、焼き台付着

第20号住居跡（第57・59図）

位置 調査区の東部南側，B5h区。

重複関係 本跡は，第19号住居跡及び第124号土坑と重複している。本跡が第19号住居跡及び第124号土坑に掘り込まれており，本跡が3遺構の中で最も古い。

規模と平面形 長軸3.9m，短軸3.8mの方形である。

主軸方向 N-17°-W

壁 壁高は34～40cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦である。壁際を除いて全体的に良く踏み固められている。

ピット 径約25cmの円形で，深さは床面から約27cmである。位置から柱穴と考えられる。

竈 北壁中央（竈1）とその西側（竈2）の2か所に竈がある。竈1は火床部と構築材の粘土をわずかに残すだけで，袖部等はない。火床部はわずかにくぼみ，煙道部は壁から約20cm突出し，外傾して立ち上がる。竈にはぶい褐色粘上によって構築されている。第124号土坑によって左袖部が破壊されているが右袖部が残っている。火床部は平坦で，煙道部は外傾して立ち上がるが壁からわずかに突出する程度である。出土状況や土層セクションからみて，竈1から竈2に作り替えられたと考えられる。覆土は，26層からなる。土層1～11は竈2覆土，土層12～26は竈1覆土及び竈2の構築材の流れ出しの層と考えられる。

竈土層解説

1 稀暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量	14 黒褐色 粘土粒子中量，焼土粒子・炭化物微量
2 明赤褐色 粘土ブロック	15 褐色 焼土粒子多量，焼土ブロック中量
3 暗赤褐色 焼土粒子少量，焼土ブロック・粘土粒子微量	16 暗赤褐色 粘土粒子中量，焼土粒子少量，粘土ブロック微量
4 黒褐色 焼土粒子少量，焼土ブロック・粘土粒子微量	17 黒褐色 粘土粒子少量，焼土粒子微量
5 黒褐色 粘土粒子中量，焼土粒子少量，ローム粒子微量	18 ぶい褐色 粘土ブロック多量
6 褐色 粘土粒子多量，粘土ブロック中量，焼土ブロック少量	19 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子中量
7 暗赤褐色 焼土粒子中量，灰・粘土粒子少量	20 暗赤褐色 粘土粒子多量，焼土ブロック少量
8 赤褐色 粘土ブロック	21 暗赤褐色 粘土粒子中量，焼土粒子少量，炭化物微量
9 黒色 焼土粒子微量	22 黒褐色 粘土粒子・焼土粒子中量
10 黒褐色 粘土ブロック中量，焼土ブロック少量	23 褐色 粘土ブロック中量，焼土粒子少量，炭化物微量
11 黒褐色 粘土ブロック・焼土ブロック中量	24 黒褐色 ローム粒子少量
12 黒褐色 粘土ブロック・ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化物微量	25 暗赤褐色 粘土粒子・焼土ブロック中量
13 暗褐色 粘土粒子中量，粘土ブロック少量，焼土ブロック微量	26 暗褐色 粘土ブロック中量，焼土ブロック少量

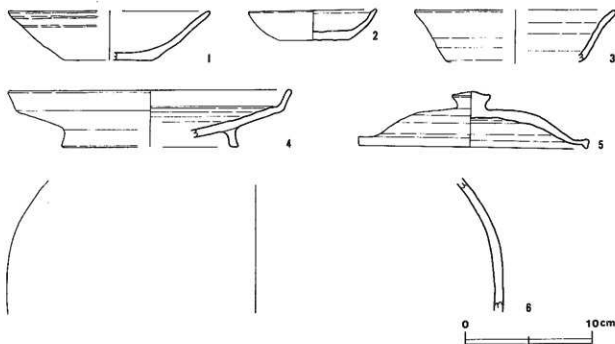
覆土 8層（土層4～11，土層1～3は重複する第19号住居跡覆土）からなる。ロームブロックを多量に含む層（土層7）があることから一部人為堆積とみられる。

土層解説

4 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化物微量	8 黒色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物微量
5 黒色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物微量	9 オリーブ褐色 ロームブロック・ローム粒子多量
6 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量	10 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子微量
7 暗褐色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化物微量	11 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化物微量

遺物 土師器片62点，須恵器片70点，縄文土器片4点，弥生土器片6点，鉄滓1点及び粘土塊5点が出土している。第59図4の盤，5の蓋及び6の甕は本跡の南西部，第19号住居跡の竈周辺の貼床下から出土している。

所見 本跡は，出土遺物から奈良時代（8世紀後半）の住居跡である。



第59図 第20号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第59図 1	坏 土器	A (15.8)	底部～口縁部片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁端部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	長石・石英 にふい橙色 普通	P 813 20% 攪乱土
		B 4.9				
		C (6.6)				
2	皿 土器	A 10.1	平底。体部は内傾して立ち上がり、口縁部は外傾する。口縁部内面にはふい壁がある。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。	石英・長石・雲母 灰黄褐色 普通	P 814 10% 攪乱土
		B 2.4				
		C 5.5				
3	坏 須恵器	A (15.8)	体部、口縁部片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。	長石・石英 灰黄色 良好	P 808 10% 覆土
		B (4.2)				
4	盤 須恵器	A 22.4	底部～口縁部片。底部は皿状で、ハの字状に開く高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。見込み部分に自然胎付着。	砂粒・長石 オリーブ灰色。黒 斑あり 良好	P L32 P 809 40% 覆土中層 (S 119貼床下)
		B 4.5				
		D (14.0)				
		E 1.5				
5	蓋 須恵器	A (18.0)	口縁部～つまみ部片。中央部が突出した家珠形つまみが付く。天井部は半出で、口縁端部は屈曲する。	天井部回転ヘリ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 灰色 良好	P L32 P 810 40% 覆土中層 (S 119貼床下)
		B 5.4				
6	蓋 須恵器	B (10.5)	体部上位片。体部上位は内傾する。	外面自然胎付着。	砂粒・長石 灰オリーブ色。黒 斑あり 良好	P 812 5% 覆土中層 (S 119貼床下)

第21号住居跡（第60図）

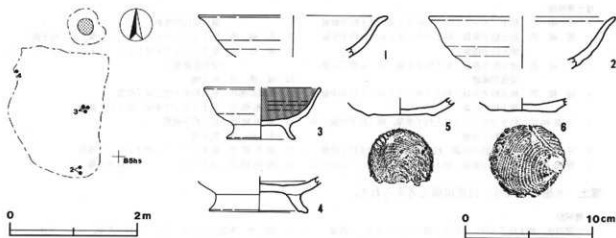
位置 調査区の東部南側，B5g区。

床 竈の前面に硬化した床面の一部を確認した。ほぼ平坦である。

竈 赤色硬化した火床部の一部を確認した。規模や形態は不明であるが，床面の広がりから住居の北側に付設されていたと考えられる。

遺物 土師器片48点，須恵器片2点及び鉄滓2点が出土している。第60図2の坏と3，4の高台付坏は床面から出土している。5，6は土師器皿の底部片である。底部に回転糸切り痕を残す。

所見 本跡は，耕作による覆乱のため竈の火床部と床面の一部を残すだけである。規模，平面形，主軸方向，壁及び覆土等は不明である。出土遺物から平安時代（10～12世紀）の住居跡と考えられる。



第60図 第21号住居跡・出土遺物実測図

第21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第60図 1	坏 土師器	A (14.8)	体部，口縁部片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部，体部内・外面横ナデ。ロクロ成形。	砂粒・長石 浅黄褐色 普通	P818 20% 覆乱土
		B 3.3				
2	坏 土師器	A (10.1)	体部，口縁部片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部，体部内・外面横ナデ。ロクロ成形。	砂粒・長石 灰黄褐色 普通	P819 15% 床面
		B (4.1)				
3	高台付坏 土師器	A (9.2)	高台部～口縁部片。高台は八字状に開き，体部は内彎して立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部，体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後，ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石・雲母 褐色 普通	P.L.32 P820 40% 床面
		B 4.1				
		D 5.5				
		E 1.2				
4	高台付坏 土師器	B (2.8)	高台部～体部片。高台は八字状に開き，接地面に凹線を施す。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。高台張り付け後，ナデ。ロクロ成形。	砂粒・長石・スクリヤ 褐色 普通	P.L.32 P817 30% 床面
		D 7.8				
		E 1.4				

第23号住居跡 (第61・62図)

位置 調査区の東部中央, B5f.区。

規模と平面形 長軸3.8m, 短軸3.2mの長方形である。

主軸方向 N-17°-W

壁 壁高は20~46cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 部分的に巡る。上幅約20cm, 下幅約10cm, 深さ4~20cmで、断面形はU字状あるいはV字状である。

床 ほぼ平坦。南東壁中央寄りにたかまりがある。位置から出入り口部と考えられる。

竈 北西壁中央に付設されている。浅黄色粘土によって構築されており、焚口部及び袖部の残りが良い。火床部は皿状でわずかにくぼむ。煙道部は壁から約60cm突出しており、緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は、16層からなる。上層10は焚口の天井部, 上層5・12・14は天井部の崩落土層と考えられる。

竈土層解説

1 黒褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量	炭化物微量	
2 黒褐色	粘土粒子多量, 粘土ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量	8 黒褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量
3 黒褐色	焼土粒子多量, 粘土粒子中量, ローム粒子少量, 炭化物微量	9 暗褐色	粘土ブロック・焼土ブロック・ロームブロック中量, 炭化物微量
4 暗褐色	粘土粒子多量, 粘土ブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子少量	10 淡黄色	粘土質
5 灰黄褐色	粘土ブロック・粘土粒子多量, 焼土粒子中量, ローム粒子少量	11 暗赤褐色	粘土粒子・焼土粒子微量
6 灰黄褐色	ローム粒子中量, 粘土粒子少量, 焼土粒子微量	12 暗赤褐色	粘土ブロック多量, 焼土粒子微量
7 暗褐色	焼土粒子多量, 焼土ブロック中量, ローム粒子少	13 暗赤褐色	粘土粒子微量
		14 赤褐色	粘土質
		15 暗赤褐色	粘土ブロック・焼土ブロック微量
		16 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子微量

覆土 8層からなり、自然堆積と考えられる。

土層解説

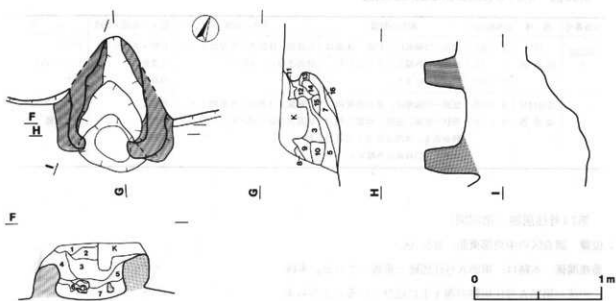
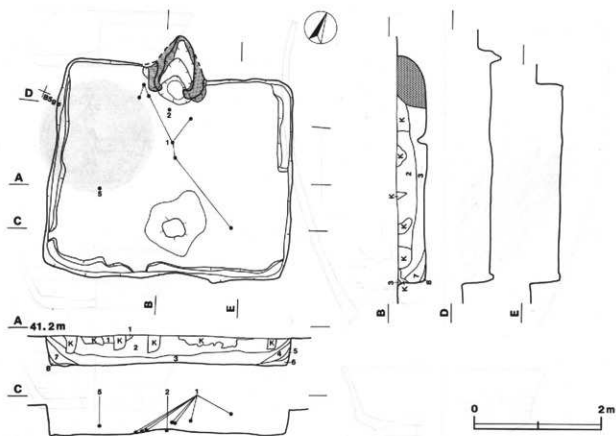
1 黒褐色	焼土粒子・ローム粒子少量, ロームブロック微量	5 褐色	黒色土ブロック・ローム粒子多量, ロームブロック中量
2 暗褐色	黒色土ブロック中量, ロームブロック少量, 焼土ブロック微量	6 黒褐色	黒色土ブロック多量, ローム粒子中量
3 暗褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子・黒色土ブロック微量	7 黒褐色	黒色土ブロック多量, ローム粒子少量
4 黒褐色	黒色土ブロック中量, ローム粒子少量	8 黒褐色	ロームブロック・ローム粒子中量

遺物 土師器片483点, 須恵器片51点, 縄文土器片1点, 弥生土器片6点及び粘土塊4点が出土している。第62図2の環は竈前の床面から, 3の環は竈覆土内から出土している。また, 1の竈は竈左袖部前の覆土下層と竈前の覆土中層の2か所から別々に出土したものが接合した。

所見 本跡は, 出土遺物から奈良時代(8世紀前半)の住居跡である。

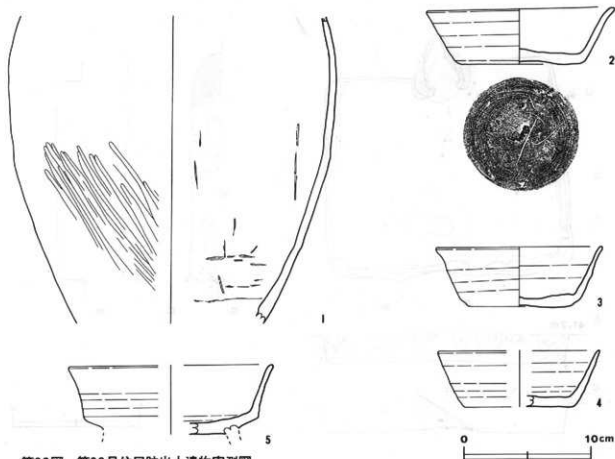
第23号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第62図 1	土師器	B (34.2)	体部片。体部は内彎して立ち上がり、体部上位に最大径がある。	体部内面。体部外面上位横ナデ。体部外面下位縦方向の磨き。	長石・石英・雲母 灰黄褐色 普通	P.L.32 P.823 30% 覆土下層へ中層
2	環 須恵器	A 14.8	平底。体部は外彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部。体部内・外面横ナデ。底面は回転ヘラ切り後、外周部のみ回転ヘラ削り。	砂粒・海綿骨針 灰色 良纤	P.L.32 P.823 80% 床面 底面へラ記号あり
		B 4.5				
		C 9.3				



第61図 第23号住居跡・竈実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第62図 3	坏	A 13.3	平底。体部は直線的に外傾し、	口縁部、体部内・外面横ナデ。	砂粒・海綿骨針	PL32
	須恵器	B 4.8	口縁部はわずかに外反する。	底部回転へう切り後、手持ちへう削り。	灰色	P824 80%
		C 8.3			良好	竈覆土



第62図 第23号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・構成	備考
第62図 4	環	A [12.8]	底部～口縁部片。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁端部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部手持ちヘラ削り。	砂粒・スコリア 灰黄色 良好	P.L.32 P.825 45% 覆土
	須恵器	B 4.5				
		C [8.6]				
5	高台付坏	A [16.2]	底部～口縁部片。高台部欠損。皿状の底部。底部と体部の境に稜がある。体部は外反して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部高台貼り付け後、回転ヘラ削り。	砂粒 灰色 良好	P.827 30% 覆土中層
	須恵器	B (5.0)				

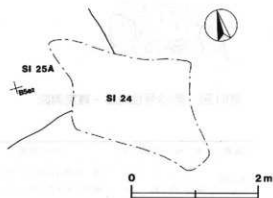
第24号住居跡（第63図）

位置 調査区の中央部東側，B5e₂区。

重複関係 本跡は，第25A号住居跡と重複している。本跡の床が第25A号住居跡の覆土上に延びていることから本跡が新しい。

床 ほぼ平坦である。

所見 本跡は，耕作による攪乱が著しく床面の一部を残すだけである。そのため規模，平面形，主軸方向，壁及び覆土等は不明である。重複関係から平安時代（10～12世紀）の第25A号住居跡よりも新しいが，伴う遺物がないため時期は不明である。



第63図 第24号住居跡実測図

第25A号住居跡（第64・65図）

位置 調査区の中央部東側，B5e区。

重複関係 本跡は，第24，25B，25C号各住居跡及び第127号土坑と重複している。本跡の床が第25C号住居跡の床面の上に構築されており，本跡の覆土上に第24号住居跡の床が延びている。また，本跡が第25B号住居跡に掘り込まれており，さらに，第127号土坑は第25B号住居跡の床面を掘り込んでいる。以上のことから，本跡は第25C号住居跡より新しく，第24，25B号各住居跡及び第127号土坑より古い。

規模と平面形 北西側が第25B及び25C号住居跡との重複によって確認できなかったため，正確な規模や平面形は不明であるが，柱穴の配置から長軸約4.3m，短軸3.5mの長方形と推定される。

主軸方向 N-16°-W

壁 壁高は15～18cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 確認した壁際にはすべて壁溝が巡っており，ほぼ全周するものと考えられる。上幅約25cm，下幅約10cm，深さ約15cmで，断面形はU字状である。

床 ほぼ平坦である。第25C号住居跡と重複する部分はロームブロックの貼床となっている。

ピット 4か所（P₁～P₄）。径約40～60cmの不整形か不整形円形で，深さは約60～90cmである。位置や深さから，柱穴と考えられる。

覆土 8層からなる。堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

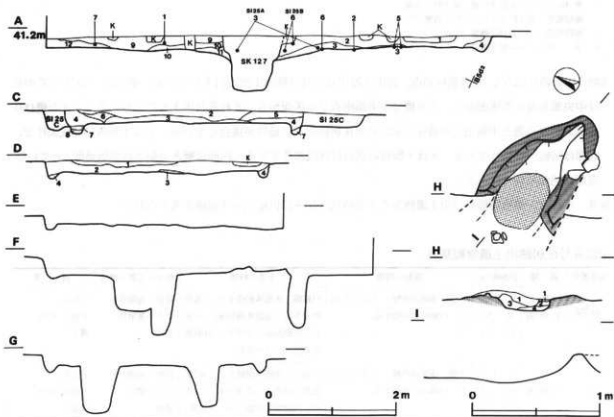
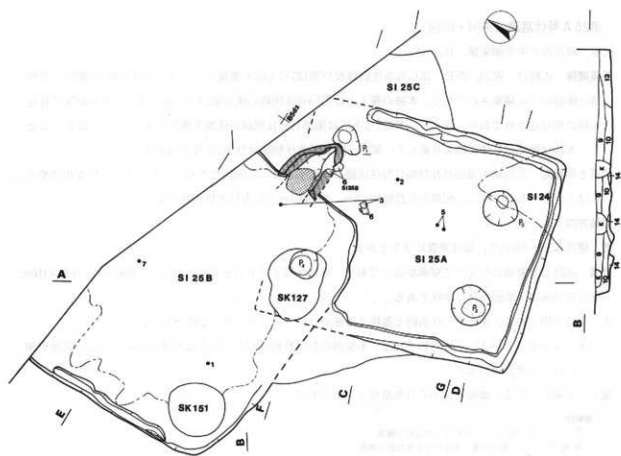
- 1 黒色 焼土粒子・ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量
- 5 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子少量
- 6 茶褐色 焼土粒子・ローム粒子微量
- 7 極暗褐色 ローム粒子微量
- 8 黒色 ローム粒子微量

遺物 土師器片451点，須恵器片70点，弥生土器片6点及び鉄滓1点が出土している。第65図2の環と6の甑は中央部北寄りの床面から，5の甕は中央部南寄りの床面から，それぞれ出土している。また，3の甕は中央部北寄りの覆土中層出土の破片と第25B号住居跡出土の破片が接合している。7は土師器の坏底部片で，底部は回転ヘラ切りである。8は土師器の高台付坏底部片である。内面に磨きが施され黒色処理されている。底部は回転糸切りである。

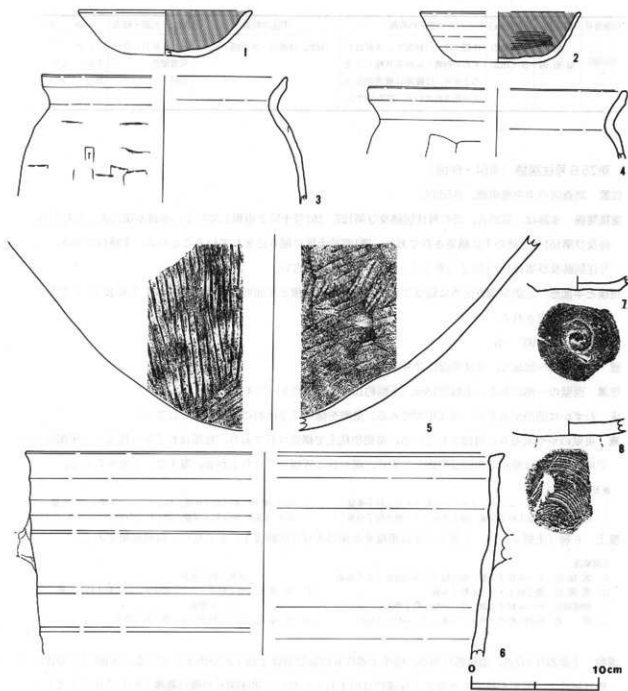
所見 本跡は，重複関係及び出土遺物から平安時代（10～12世紀）の住居跡と考えられる。

第25A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・装成	備考
第65図 1	環	A 13.8	平底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部，体部外面横ナデ。体部外面下位，底部外周回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石・海綿骨針 にぶい黄褐色 普通	P.L33 P.828，60% 覆土
	土師器	B 3.7				
		C 5.4				
2	環	A 12.7	平底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は外傾する。	口縁部，体部外面横ナデ。体部底部内面磨き。底部回転ヘラ削り。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・海綿骨針 にぶい褐色 普通	P.L33 P.829，50% 床面
	土師器	B 4.0				
		C 7.1				



第64图 第25号A·B号住居跡、第25B号竈実測図



第65図 第25A号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・構成	備考
第65図 3	甕 土師器	A (19.5) B (9.6)	体部上位、口縁部片。体部上位は内傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面縦方向のヘラ削り。	長石・雲母にふい橙色 普通	P L 33 P 831 15% 覆土中層
4	甕 土師器	A (20.6) B (5.4)	体部上位、口縁部片。体部上位は内傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面縦方向のヘラ削り。	長石・雲母・スコリアにふい橙色 普通	P 832 5% 覆土
5	甕 須恵器	B (15.5)	底部、体部下位片。丸底。体部は内傾して立ち上がる。	体部・底部外面平行叩き。内面あて具痕。	長石 灰色 良好	P L 33 P 833 15% 床面

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第65図 6	甕	A (38.0)	体部上位, 口縁部片。体部はわずかに内彎しながら外傾して立ち上がり, 口縁部は横方向につまり出されている。把手が付く。	口縁部, 体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 灰黄褐色 良籽	P L 33 P 837 5% 灰面
	須恵器	B (16.2)				

第25 B号住居跡 (第64・66図)

位置 調査区の中央部東側, B5d区。

重複関係 本跡は, 第25 A, 25 C号住居跡及び第127, 151号土坑と重複している。本跡が第25 A, 25 C号住居跡及び第151号土坑の上に構築されており, 第127号土坑に掘り込まれていることから, 本跡は第25 A, 25 C号住居跡及び第151号土坑より新しく, 第127号土坑より古い。

規模と平面形 北側が調査区外に延びているため正確な規模と平面形は不明であるが, 主軸長4.6mの方形か長方形と推定される。

主軸方向 N-90°-W

壁 壁高は13~22cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 西壁の一部にある。上幅約16cm, 下幅約10cm, 深さ約8cmである。

床 わずかに凹凸があるが, ほぼ平坦である。壁際を除いて全体的に踏み固められている。

竈 東壁のやや南寄りに付設されている。黄褐色粘土で構築されており, 袖部はわずかに残る。火床部はほぼ平坦。煙道部は壁から約80cm突出しており, 緩やかに外傾して立ち上がる。覆上は, 4層からなる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子・粘土粒子微量 3 暗赤褐色 粘土粒子中量, 粘土ブロック・焼土粒子少量
2 暗赤褐色 粘土粒子中量, 焼土ブロック・焼土粒子少量 4 におい赤褐色 粘土粒子多量, 焼土粒子中量

覆土 6層 (上層9~14, 土層1~8は重複する第25 A号住居跡覆土) からなり, 自然堆積である。

土層解説

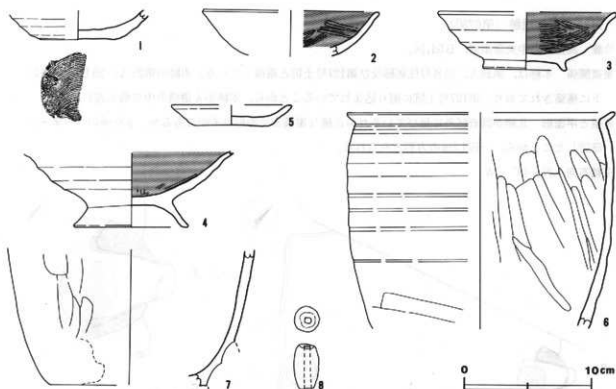
- 9 黒褐色 ローム粒子少量, 焼上粒子・灰白色粘土粒子微量 色粘土粒子微量
10 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量 13 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子・灰白色粘土粒子少量, ロームブロック微量
11 柿暗褐色 ローム粒子少量, 灰白色粘土粒子微量
12 黒色 灰白色粘土ブロック少量, ローム粒子・灰白 14 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量

遺物 土師器片247点, 須恵器片26点, 弥生土器片6点及び管状土鍾1点が出土している。床面からの出土遺物は細片で, 器形が推定できるような遺物は出土していない。第66図6の甕は覆土内から出土している。

所見 本跡は, 重複関係及び出土遺物から平安時代 (10~12世紀) の住居跡と考えられる。

第25 B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第66図 1	環	B (2.4)	底部, 体部下位片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部同軸糸切り。ロクロ成形。	長石・石英 灰黄褐色 普通	P 834 20% 覆土中層
	土師器	C (5.8)				
2	環	A (14.0)	体部, 口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面, 体部外面横ナデ。体部, 底部内面磨き。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石・海綿骨針 におい褐色 普通	P 839 10% 覆土
	土師器	B (3.6)				



第66図 第25B号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第66図 3	高台付環土師器	A (14.1)	高台部～口縁部片。高台は低く、への字状に開く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面、体部外面横ナデ。体部、底部内面磨き。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石・石英・雲母にふい黄褐色 普通	P L33 P835 60% 覆土
		B 4.6				
		D 6.6				
		E 0.8				
4	高台付環土師器	A (6.1)	高台部～体部片。への字状に開く足高の高台が付く。体部はわずかに内彎しながら外傾する。	体部外面横ナデ。体部、底部内面放射状の磨き。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。	長石・雲母 浅黄褐色 普通	P L33 P830 40% 覆土
		D 9.0				
		E 2.0				
5	皿土師器	A (9.6)	底部～口縁部片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部端部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。	長石・石英・雲母にふい黄褐色 普通	P842 30% 覆土
		B 1.7				
		C (5.9)				
6	甕土師器	A (21.2)	体部、口縁部片。体部はわずかに内彎しながら外傾して立ち上がり、短い口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面上位横ナデ、下位斜方向のナデ。体部外面上位板状工具によるナデ。下位ヘラ削り。ロクロ成形。	長石・雲母・スクリア 灰黄褐色 普通	P L33 P856 20% 覆土
		B (17.1)				
7	脚付土師器	B (10.8)	底部、体部下位片。脚部欠損。平底。体部下端に脚が付く。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面縦方向のヘラ削り。	小礫・砂粒・長石にふい黄褐色 普通	P838 5% 覆土中層 底面焼付着
		C (12.4)				

図版番号	種別	計測値			出土地点	備考
		長さ(cm)	最大径(cm)	重量(g)		
8	管状土師	3.5	2.0	13.8	覆土	P L33 DP4 孔径5.0mm

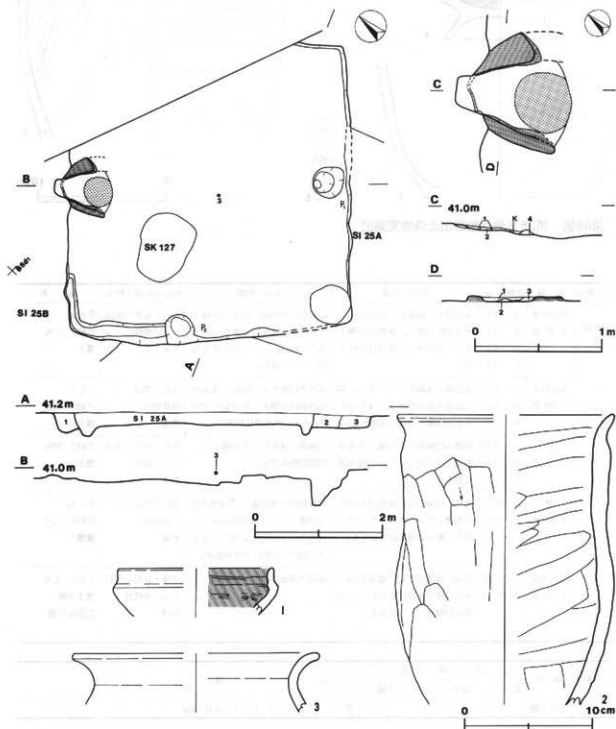
第25 C号住居跡 (第67図)

位置 調査区の中央部東側, B5d,区。

重複関係 本跡は, 第25 A, 25 B号住居跡及び第127号土坑と重複している。本跡が第25 A, 25 B号住居跡の下に構築されており, 第127号土坑に掘り込まれていることから, 本跡が4遺構の中で最も古い。

規模と平面形 北側が調査区外に延びているため正確な規模と平面形は不明であるが, 3か所のコーナー部を確認したことから, 一辺4.5mの方形とみられる。

主軸方向 N-43°-W



第67図 第25 C号住居跡・竈・出土遺物実測図

壁 壁高は19~25cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 西コーナー部にのみ確認した。上幅約25cm、下幅約15cm、深さ約5cmである。

床 ほぼ平坦である。ロームブロックの混じる暗オリーブ褐色の貼床である。

ピット 2か所(P₁、P₂)。P₁は径約50cmの円形で、深さは40cmである。南東壁中央の壁際であり、位置からみて出入り口ピットと考えられる。P₂は径約45cmの円形で、深さは18cmである。性格は不明である。

竈 北西壁中央に付設されている。第25B号住居跡によって上部を削平されており、竈の下部を残すだけである。黄褐色粘土によって構築されており、袖部は壁から約50cm内側に突出する。火床部は平坦で、煙道部に向かって緩やかに立ち上がる。煙道部は削平されており不明である。覆土は、4層からなる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子中量、焼土ブロック・ローム粒子微量
- 2 黄褐色 粘土粒子多量、粘土ブロック中量、焼土粒子少量
- 3 赤褐色 焼土粒子・ローム粒子多量、ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 4 灰褐色 灰多量、粘土粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子微量

覆土 ほとんど重複する住居跡によって削平されており、3層だけ確認した。堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 黒色 焼土粒子・ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片151点、須器器片10点、弥生土器片3点及び鉄滓1点が出土している。第25A及び25B号住居跡によって掘り込まれているため、遺物量が少ない。第67図3の竈は中央部の第25A号住居跡の床下から出土している。

所見 本跡は、重複関係及び出土遺物から古墳時代（7世紀前半）の住居跡である。

第25C号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	形状の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第67図 1	坏 土師器	A (12.2)	体部、口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面磨き、外面へら削り。内面黒色処理。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P841 10% 覆土
		B (3.5)				
2	甕 土師器	A (17.2)	体部、口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、下位に最大径がある。口縁部は外反する。	口縁部内・外面、体部内面斜方向のナデ。体部外面縦方向のへら削り。	長石・スクリア・雲母 灰黄褐色 普通	PL33 P845 30% 覆土
		B (22.5)				
3	甕 土師器	A (19.4)	体部上位、口縁部片。体部上位は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部上位内・外面横ナデ。	長石・スクリア・雲母 にぶい褐色 普通	P844 5% 覆土中層
		B (4.6)				

第26号住居跡（第68図）

位置 調査区の中央部東側、B5f区。

竈 赤色硬化した火床部を残すだけであるため、形態等は不明である。竈の南側に床の上面が剥がれたものと思われる硬化面が確認できたので、竈は住居の北側に付設されていたものとみられる。

所見 本跡は、竈の火床部と竈の構築材の一部を残すだけであるため、規模、平面形、主軸方向、壁及び覆土等は不明である。また、出土遺物がないため時期も不明である。

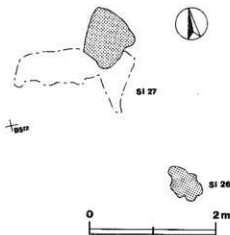
第27号住居跡（第68図）

位置 調査区の中央部東側，B5e₂区。

床 竈の南側とその西側にかけ踏み固められた床面を確認した。

竈 赤色硬化した火床部を残すだけであるため，形態等は不明である。竈の南側に床があることから，竈は住居の北側に付設されていたものとみられる。

所見 本跡は，竈の火床部と床の一部を確認しただけであるため，規模，平面形，主軸方向，壁及び覆土等は不明である。また，出土遺物がないため時期も不明である。



第68図 第26・27号住居跡実測図

第28号住居跡（第69図）

位置 調査区の中央部東側，B5e₁区。

規模と平面形 南西部に電柱があり一部を確認できなかった。そのため正確な規模や平面形は不明であるが，3か所のコーナー部を確認したことから，長軸3.0m，短軸2.8mの不整形と推定される。

主軸方向 N-3°-W

壁 壁高は12~20cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床 やや凹凸が目立つ。中央部は良く踏み固められている。

竈 北壁のやや東寄りに付設されている。黄白色粘土で構築された袖部が残存する。火床部は皿状でややくぼみ，煙道部は外傾して立ち上がる。覆土は，14層からなる。

覆土層解説

- | | |
|-----------------------------------|-----------------------------------|
| 1 極暗褐色 焼土ブロック・焼土粒子中量，粘土粒子少量，炭化物微量 | 9 暗赤褐色 焼土ブロック・焼土粒子中量，粘土粒子少量 |
| 2 極暗赤褐色 焼土粒子少量，焼土ブロック・粘土粒子微量 | 10 黒褐色 粘土粒子中量，焼土粒子少量，焼土ブロック微量 |
| 3 暗赤褐色 灰多量，粘土粒子中量，焼土粒子少量 | 11 黒褐色 粘土粒子中量，粘土ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量 |
| 4 黒褐色 焼土粒子・粘土粒子少量 | 12 極暗赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子中量，ローム粒子微量 |
| 5 明赤褐色 粘土ブロック層 | 13 暗赤褐色 焼土ブロック・焼土粒子中量 |
| 6 暗赤褐色 焼土粒子・粘土粒子少量 | 14 暗赤褐色 焼土粒子多量，粘土ブロック中量，焼土粒子少量 |
| 7 赤褐色 粘土ブロック層 | |
| 8 黒褐色 粘土ブロック中量，焼土ブロック・焼土粒子少量 | |

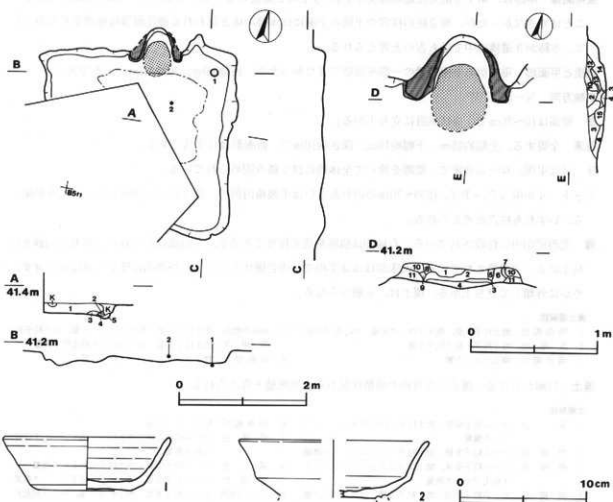
覆土 5層からなり，自然堆積とみられる。

土層解説

- | |
|------------------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量 |
| 2 暗オレンジ褐色 ローム粒子多量，ロームブロック少量，焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子微量 |
| 4 黒色 ローム粒子中量，黄白色粘土ブロック微量 |
| 5 黒褐色 ローム粒子多量，灰白色粘土粒子微量 |

遺物 土師器片36点，須恵器片23点及び弥生土器片1点が出土している。第69図1の環は北東コーナー部の床面に正位に置かれたような状況で出土している。また，2の高台付環は竈前の覆土下層から出土している。

所見 本跡は，出土遺物から奈良時代（8世紀後半）の住居跡である。



第69図 第28号住居跡・竈・出土遺物実測図

第28号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第69図 1	須恵器	A 13.8	平底。体部は下部で屈曲し、口縁部まで直線的に外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。体部下端、底部回転へ削り。	小礫・砂粒 灰色 良好	P.L.33 P.846 100% 覆土
		B 4.3				
		C 7.2				
第69図 2	高台付坏土器	A (15.1)	底部～口縁部片。高台部欠損。平底。体部下部で屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へ削り。	小礫・海綿骨針 にふい褐色 良好	P.L.33 P.847 30% 覆土下層
		B (4.6)				

第29号住居跡（第70図）

位置 調査区の中央部東側，B4e区。

重複関係 本跡は，第1号掘立柱建物跡及び第147号土坑と重複している。土層によって新旧関係を把握することはできなかったが，掘立柱の柱穴や土坑の上面には本跡の床と思われる硬化面等は確認できなかったため，本跡が3遺構の中で最も古いと考えられる。

規模と平面形 電柱があり南東壁の一部を確認できなかったが，長軸5.0m，短軸4.9mの方形である。

主軸方向 N-39°-W

壁 壁高は10～30cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 全周する。上幅約25cm，下幅約10cm，深さ約10cmで，断面形はU字状である。

床 ほぼ平坦。ロームの床で，壁際を除いて全体的に良く踏み固められている。

ピット 4か所（P₁～P₄）。径50～70cmの円形あるいは不整形円形で，深さは55～70cmである。配置や深さから，いずれも柱穴と考えられる。

竪 北西壁中央に付設されている。右袖部は痕跡を残す程度であるが，左袖部は良く残っており，山砂と白色粘土によって構築されている。火床部はほぼ平坦で，赤色硬化している。煙道部は壁から外に突出せず，緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は，6層からなる。

覆土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|--------|------------------------|
| 1 暗赤褐色 | 炭土粒子多量，焼土ブロック中量，粘土粒子少量 | 4 暗褐色 | 焼土粒子中量，焼土ブロック少量，粘土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子・粘土粒子少量 | 5 黒褐色 | 焼土粒子少量，ローム粒子・粘土粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック層 | 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量 |

覆土 11層からなる。覆土の含有物や堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

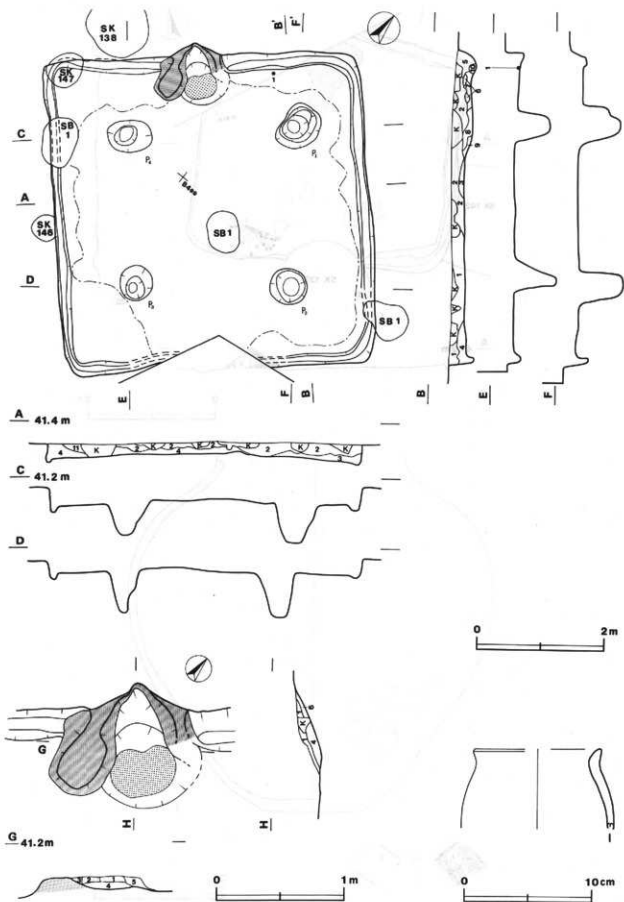
- | | | | |
|-------|--------------------------------------|-----------|------------------------------|
| 1 黒色 | ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・ロームブロック微量 | 6 明黄褐色 | 粘土ブロック層 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子多量，焼土粒子・ロームブロック微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子・粘土ブロック少量，炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子多量，焼土ブロック・ロームブロック・粘土ブロック微量 | 8 黒色 | ローム粒子少量，焼土粒子・粘土粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子多量，焼土粒子少量，粘土ブロック微量 | 9 黒褐色 | ローム粒子中量，焼土粒子・粘土ブロック微量 |
| 5 黒色 | ローム粒子・粘土粒子少量，焼土ブロック・ロームブロック・粘土ブロック微量 | 10 におい赤褐色 | ローム粒子多量，焼土粒子中量，粘土・炭化粒子微量 |
| | | 11 黒色 | ローム粒子少量，焼土粒子微量 |

遺物 土師器片262点，須恵器片13点，縄文土器片1点，弥生土器片12点，土製支脚1点及び鉄滓1点が出土している。遺物はいずれも細片である。第70図1の竪は北壁の壁溝際の床面から出土している。

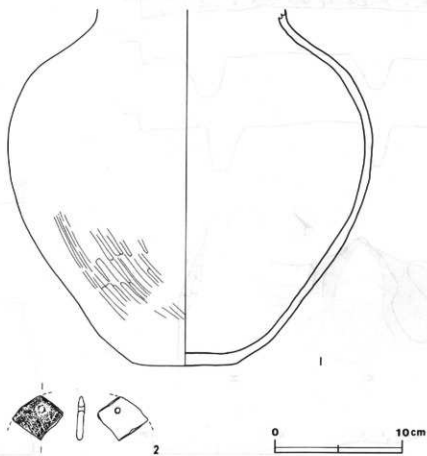
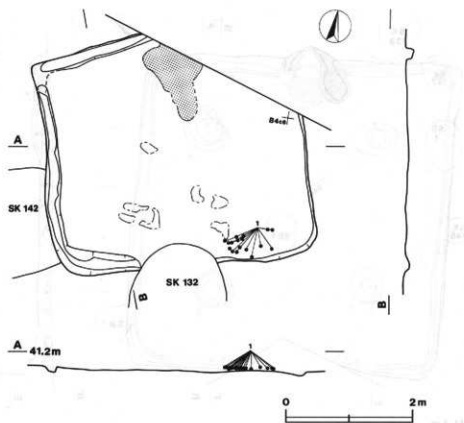
所見 本跡は，ほぼ住居跡全体を調査できたにも関わらず，完形に近い遺物が皆無である。住居廃絶時に土器類を完全に持ち去ったものと考えられる。時代は出土遺物が細片であるため，詳細な時期を特定するのが困難であるが，遺物と本跡の規模や主軸方向から古墳時代（7世紀前半）と考えられる。

第29号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第70図 1	甕 土師器	A (10.0) B (6.3)	体部上位，口縁部片。体部上位は内傾して立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部，体部内・外面横ナデ。	砂粒 褐色 普通	F848 5% 床面



第70图 第29号住居跡・竈・出土遺物実測図



第71図 第30号住居跡・出土遺物実測図

第30号住居跡（第71図）

位置 調査区の中央部東側，B4c区。

重複関係 本跡は，第132号土坑と重複している。本跡が第132号土坑によって掘り込まれており，本跡が古い。規模と平面形 本跡は，わずかな掘り込みと壁溝及び床の一部を残すだけで，北側が調査区外に延びている。

そのため正確な規模や平面形は不明であるが，3か所のコーナー部を確認したことから，長軸4.1m，短軸3.6mの不整長方形とみられる。

主軸方向 N-15°-W

壁溝 住居跡の西側を半周する。上幅約20cm，下幅約10cm，深さ約10cmで，断面形はU字状である。

床 はほぼ平坦。上面の大部分が削平されており，硬化面が部分的に残っているだけである。

竈 竈は確認できなかったが，北側の調査区際に竈の構築材と焼土の広がり認められたことから，北壁に竈が付設されている可能性が高い。

遺物 土師器片145点，須恵器片9点，弥生土器片3点及び粘土塊1点が出土している。第71図1の竈は南壁際の床面や覆土下層から破片がまとまって出土している。2の不明土製品は片面に縄文が施されており，弥生時代以前の遺物である可能性が高い。

所見 本跡は，出土遺物から古墳時代（6世紀後半）の住居跡と考えられる。

第30号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第71図 1	甕	B (28.1)	底部，体部片。平底。体部は内彎して立ち上がる。体部上位に最大径があり，頸部に向かって内縮する。	体部上位ナデ，下位斜方向の磨き。	灰石・石英・雲母 橙色 普通	P L33 P 660 50% 床面・覆土下層
	土師器 C E.2					

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
2	不明土製品	(4.1)	(3.4)	0.5	(0.5)	覆土 DP5 孔径4mm 片面に縄文あり	

第32号住居跡（第72図）

位置 調査区の中央部西側，B3c区。

規模と平面形 南側が調査区外に延びているため正確な規模と平面形は不明であるが，一辺が3.5mの方形か長方形と推定される。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は15~28cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床 はほぼ平坦である。

竈 北壁中央に付設されており，袖部は黄褐色粘土で構築されている。火床部は皿状でわずかに掘り込まれている。煙道部は緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は耕作による攪乱が著しく，堆積状況等は不明である。

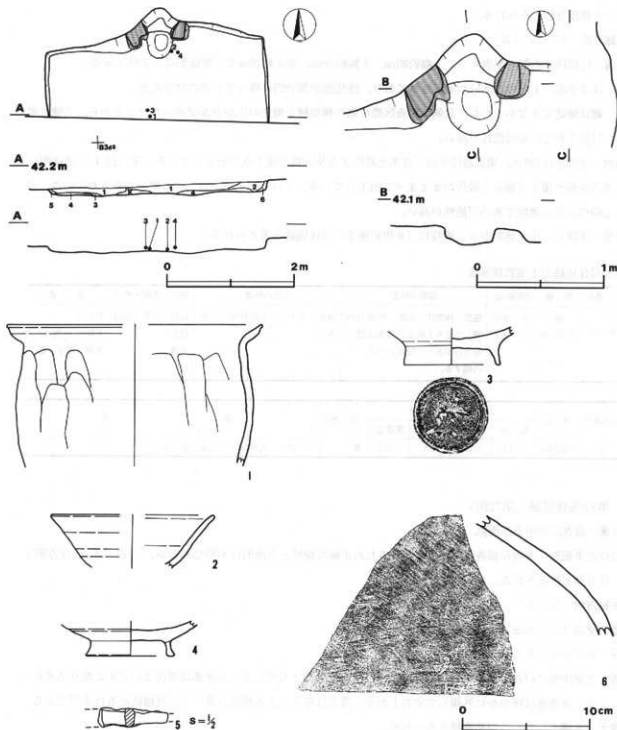
覆土 6層からなり，自然堆積とみられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------|--------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量，ロームブロック微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子中量，ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量，炭化物微量 | 5 褐色 | ローム粒子多量 |
| 3 黒褐色 | 粘土ブロック中量，ローム粒子少量，ロームブロック微量 | 6 極暗褐色 | ローム粒子少量 |

遺物 土師器片69点, 須恵器片36点, 縄文土器片1点及び刀子1点が出土している。第72図1の甕は中央部の覆土下層から, 2の環は竈前の床面から出土している。6は須恵器甕の体部片である。外面に不明瞭な平行叩きが施されている。

所見 本跡は, 出土遺物から平安時代(9世紀前半)の住居跡である。



第72図 第32号住居跡・竈出土遺物実測図

第32号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第72図 1	甕 土師器	A (20.2)	体部、口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、七位に最大径がある。口縁部は外反し、胎部をつまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面縦方向のナデ、外面へう割り後、ナデ。	長石・スコリア・雲母にふいば色普通	P 850 10% 覆土下層
		B (11.2)				
2	環 須恵器	A (13.0)	体部、口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。	長石・海綿骨針にふいば黄色良好	P L33 P 851 40% 床面 褐色の付着物あり
		B (4.3)				
3	高台付環 須恵器	B (2.9)	高台部、底部片。高台はハの字状に開く。底部は皿状で、厚手である。	底部回転へう切り。高台貼り付け後、ナデ。	長石・海綿骨針 灰オリブ色 良好	P 852 20% 覆土中層 底部へう記号あり
		D (7.6)				
		E 1.7				
4	甕 須恵器	B (2.8)	高台部、底部片。高台はハの字状に開き、接地面が広い。底部は皿状である。	底部回転へう割り。高台貼り付け後、ナデ。	長石・海綿骨針 黄灰色 良好	P L33 P 853 30% 覆土中層
		D 7.0				
		E 1.2				

図版番号	種別	計 器 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
5	刀子	(3.6)	1.0	0.5	(3.6)	覆 土	P L46 M26 鉄製 聖部片

第34号住居跡 (第73図)

位置 調査区の中央部西側、B3b₁区。

重複関係 本跡は、第150号土坑及び第2号溝と重複している。本跡が第150号土坑及び第2号溝によって掘り込まれており、本跡が3遺構の中で最も古い。

規模と平面形 南東側が第150号土坑によって掘り込まれているため正確な規模と平面形は不明であるが、長軸3.0m、短軸2.8mの不整形とみられる。

主軸方向 N-8°-W

壁 壁高は8~20cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 耕作による攪乱が著しいが、ほぼ平坦である。中央部に非常に硬く踏み固められた面が残る。

竈 確認できなかったが、北東コーナー部付近の床直上から竈の構築材や焼土などが出土したことから、この付近に竈が付設されていた可能性が高い。

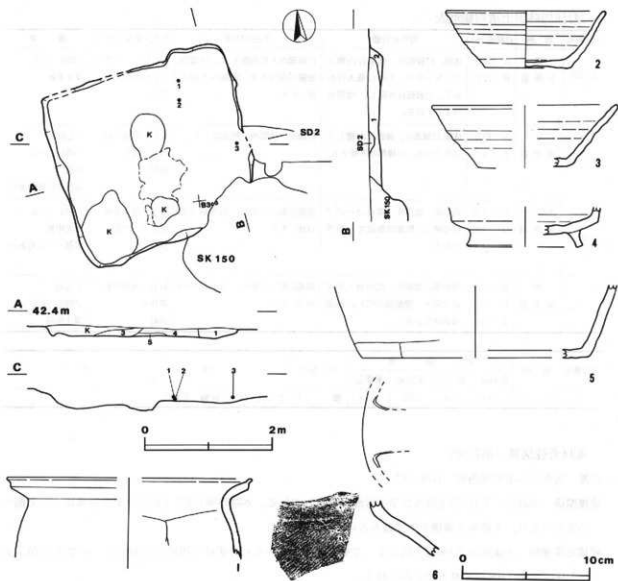
覆土 5層からなり、自然堆積とみられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼上ブロック・ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子少量
- 3 黒褐色 粘上ブロック・粘土粒子数量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・ロームブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量

遺物 上師器片17点、須恵器片13点及び粘土塊5点が出土している。攪乱が著しく遺物量が少ない。第73図2の環は北東コーナー部付近の床面から、3の環は東壁際の覆土中層から出土している。6は須恵器甕の頸部片で、外面に平行明きが施されている。

所見 本跡は、出土遺物から平安時代(9世紀前半)の住居跡である。



第73図 第34号住居跡・出土遺物実測図

第34号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第73図 1	甕 土器器	A (19.2)	体部上位。口縁部片。体部上位は内傾して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部をつまみ上げ、側面に凹線を施す。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。	長石・石英・スコリアにふい赤褐色 普通	P L33 P854 5% 覆土中層
		B (6.5)				
2	環 須恵器	A 10.7	底部～口縁部片。平底。体部はわずかに内傾しながら外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部へう切り後、外周を回転へう削り。	砂粒 灰白色 良好	P L33 P855 60% 床面
		B 4.5				
		C 6.9				
3	環 須恵器	A 14.8	底部～口縁部片。体部は外傾して立ち上がり、直線的に口縁端部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部手持ちへう削り。	小礫・長石・石英にふい黄褐色 普通	P L33 P856 60% 覆土中層
		B 5.0				
		C 7.4				
4	高台付環 須恵器	B (3.1)	高台部～体部下位片。高台は八の字状に開く。底部は皿状。体部は屈曲して外反する。	底部回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・長石 灰オリーブ色 良好	P L33 P857 30% 覆土
		D (9.2)				
		E 1.3				

調査番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第73図 5	幅 狭 須 恵 器	B (5.7) C (18.0)	底部・体部片。体部は内彎気味 に外傾する。二孔式。	体部外面横ナデ後、下端へラ削 り。	砂粒・長石・石英 灰色 良好	P.L.33 P.858 5% 覆土

第36号住居跡（第74図）

位置 調査区の中央部西側，B3c区。

規模と平面形 南側が調査区外に延びているため正確な規模と平面形は不明であるが、一辺2.7mの方形ではないかと推定される。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は6~12cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

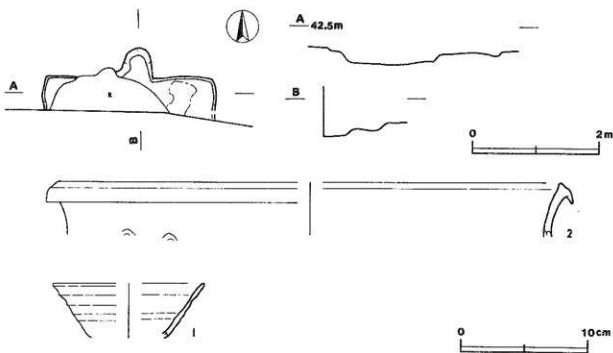
床 耕作による攪乱が著しい。残存部はほぼ平坦で、特に北東コーナー部付近は踏み固められている。

竈 北壁の中央部やや東寄りに掘り方のみを確認した。袖部や火床部は攪乱のため確認できなかった。煙道部は壁外に約40cm突出し、外傾して立ち上がる。

覆土 攪乱のため不明。

遺物 土師器片4点及び須恵器片3点が出土している。本跡の大部分が調査区外に延びており、しかも攪乱が著しい。遺物量は少ないが第74図1の環及び2の甕は覆土中からの出土である。

所見 本跡は、出土遺物が少なく、しかも細片であることから詳細な時期を特定することは困難であるが、出土遺物及び主軸方向から平安時代（9世紀前半）の住居跡と推定される。



第74図 第36号住居跡・出土遺物実測図

第36号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第74図 1	環 須恵器	A (12.0)	体部、口縁部片。体部は直線的に外傾し、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 灰色 良好	P 862 10% 覆土
		B (4.3)				
2	甕 須恵器	A (40.0)	口縁部片。口縁部は外反し、口縁部には縁帯が巡る。	口縁部内・外面横ナデ後、外面に波状沈線を施す。	砂粒・長石 灰色、黒斑あり 良好	P 863 5% 覆土
		B (4.2)				

第37号住居跡 (第75図)

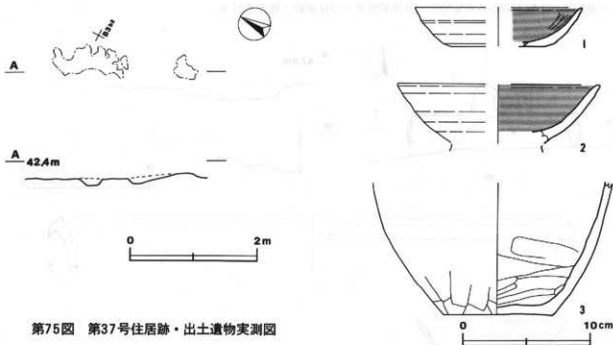
位置 調査区の中央部西側、B3b₁区。

床 踏み固められた床面が部分的に残る。

竈 竈自体は確認できなかったが、焼土や竈構築材がブロック状に散布していることから竈が付設されていたものとみられる。

遺物 床面及び床面周辺の攪乱土中から、土師器片38点、須恵器片8点、弥生土器片1点及び鉄滓1点が出土している。第75図1の環は床面から、2の高台付環及び3の甕は周辺の攪乱土中からの出土である。

所見 本跡は、焼土及び竈の構築材の散布と床面の一部を残すだけで、規模、平面形、主軸方向、壁及び覆土等は不明である。出土遺物から平安時代(10~12世紀)の住居跡と推定される。



第75図 第37号住居跡・出土遺物実測図

第37号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第75図 1	環 土師器	A (13.2)	底部~口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面放射状の磨き。体部外面横ナデ後、下廻回転へラ削り。底部回転糸切り。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石 にふい黄褐色 普通	P 864 10% 床面
		B 3.1				
		C (7.5)				

図取番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第75図 2	高台付環須恵器	A (16.1)	体部、口縁部片。高台部欠損。	口縁部内・外面、体部外面横ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石・雲母 におい褐色 普通	P 865 20% 攪乱土
		B (4.8)	体部は内甕して立ち上がり、口縁部は外傾する。			
3	甕土師器	B (10.6)	底部、体部下位片。平底。体部は内甕して立ち上がる。	体部内面ナデ。体部外面横方向、下端のみ横方向のヘリ削り。底部手持ちヘリ削り。	長石・海綿骨針 におい褐色 普通	P L34 P 866 25% 攪乱土
		C 8.6				

第38号住居跡（第76図）

位置 調査区の中央部西側、B3c₁区。

規模と平面形 南側が調査区外に延びているため正確な規模と平面形は不明であるが、一辺4.2mの方形ではないかと推定される。

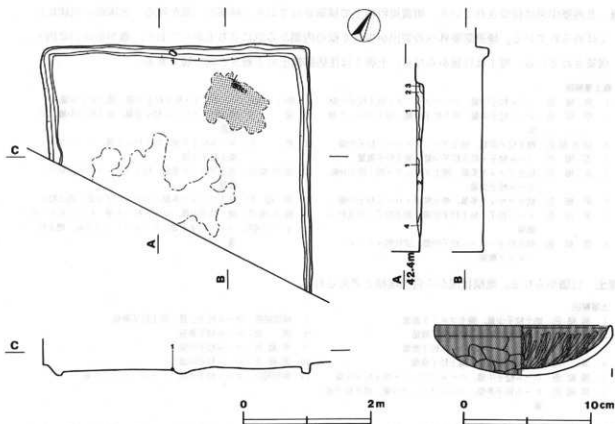
主軸方向 N-28°-W

壁 壁高は約10mで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 確認した壁下にはすべて壁溝が巡っており、ほぼ全周するものと考えられる。上幅約20cm、下幅約10cm、深さ約10cmで、断面形は逆台形である。

床 ほぼ平坦。中央部付近が踏み固められている。また、北東コーナー部付近の床面に焼土の散布が認められた。

覆土 4層からなり、自然堆積とみられる。



第76図 第38号住居跡出土遺物実測図

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 黒色 ローム粒子少量, ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量, ロームブロック微量
- 4 褐色 ロームブロック中量

遺物 土師器片6点及び須恵器片1点が出土している。第76図1の環は北壁の壁溝の覆土内から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から古墳時代（6世紀後半）の住居跡と考えられるが、調査区内では焼土の散布は見られたものの炉・竈等が確認できなかったことや柱穴もないことから一般的な住居跡とは異なっている。また、覆土が薄いことも一因と考えられるが出土遺物が非常に少ない点も本跡の一つの特徴である。

第38号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・装成	備考
第76図 1	環	A 13.9	丸底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面放射状の書き。体部外面へラ削り。内・外面黒色処理。	胎土・スコリア・雲母 黒褐色 普通	P.L.24 P.868 100%
	土師器	B 3.9				

第40号住居跡（第77図）

位置 調査区の西部東側、B2c区。

規模と平面形 一辺3.3mの方形である。

主軸方向 N-37°-W

壁 壁高は40~50cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦。中央部付近が踏み固められている。

竈 北西壁中央に付設されている。明黄褐色粘土で構築されており、袖部の一部が残る。火床部は皿状に掘りくぼめられている。煙道部壁外への突出が少なく壁の内側から急に立ち上がっており、竈が全体的に内側に構築されている。覆土は15層からなる。土層1は住居跡覆土の土層5と同一層である。

覆土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------------------|-----------|---------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量, ロームブロック・焼土粒子少量 | 9 オリーブ褐色 | ローム粒子・粘土粒子中量, 焼土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 粘土ブロック微量 | 10 褐色 | 焼土粒子・ローム粒子多量, 粘土粒子中量, 炭化物微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子多量, 焼土ブロック・ローム粒子少量 | 11 褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子中量, ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量, 焼土粒子微量 | 12 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量, 粘土ブロック中量, ローム粒子微量 |
| 5 赤褐色 | 粘土ブロック多量, 焼土ブロック・焼土粒子中量, ローム粒子少量 | 13 黒褐色 | 粘土ブロック多量, ローム粒子少量, 焼土粒子少量 |
| 6 黄褐色 | 粘土ブロック多量, 焼土粒子・ローム粒子中量 | 14 暗赤褐色 | 焼土粒中量, ローム粒子少量, 粘土ブロック微量 |
| 7 黒褐色 | ローム粒子・粘土粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 15 オリーブ褐色 | ローム粒子多量, ロームブロック中量, 焼土粒子微量 |
| 8 黒褐色 | 焼土粒子・ローム粒子中量, 炭化物・ロームブロック微量 | | |

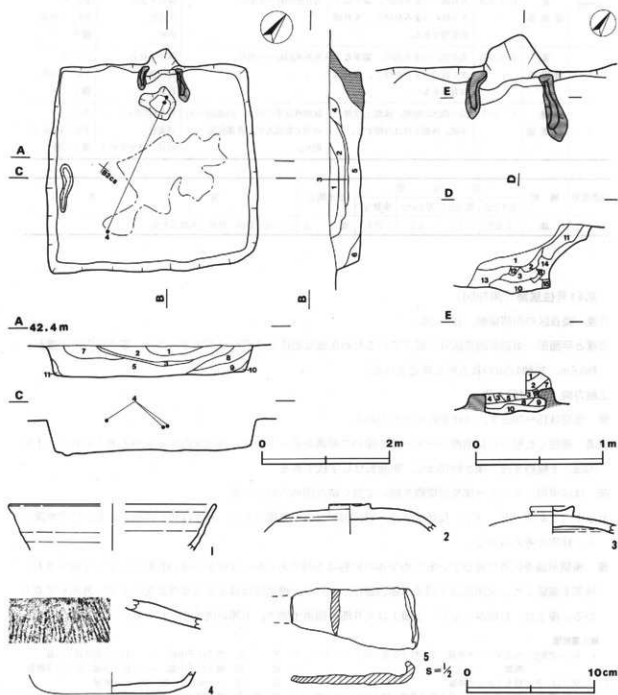
覆土 11層からなる。堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------------|---------|--------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土粒子少量, 焼土ブロック微量 | 7 極暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子微量 | 8 黒色 | ローム粒子微量 |
| 3 黒色 | ロームブロック・ローム粒子微量 | 9 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 黒色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | 10 黒褐色 | ローム粒子中量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子中量, ロームブロック・焼土粒子少量 | 11 極暗褐色 | ローム粒子多量, ロームブロック少量 |
| 6 黒褐色 | ローム粒子多量, ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | | |

遺物 土師器片162点, 須恵器片34点, 弥生土器片1点及び鉄鏝1点が出土している。第77図4の竈は竈前と南コーナー部付近の覆土上層から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から奈良時代（8世紀前半）の住居跡である。



第77図 第40号住居跡・竈・出土遺物実測図

第40号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第77図 1	坏 須恵器	A (16.4) B (3.6)	体部、口縁部片。体部はやや内彎気味に立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。	長石・石英 灰白色 普通	PL34 P869 15% 覆土

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第77図 2	産 須恵器	B (2.3)	大井部、つまみ部片。偏平なボタン状のつまみが付く。天井部は平坦である。	大井部回転へう削り。	長石・雲母 灰白色 良好	P L34 P 871 40% 覆土
3	産 須恵器	B (2.1)	大井部、つまみ部片。偏平なボタン状のつまみが付く。天井部は丸味をもつ。	大井部回転へう削り。	砂粒・長石 黄灰色 良好	P L34 P 872 20% 覆土
4	産 須恵器	C 10.3	同一側体の底部、体部上位片。平底。体部上位は内傾する。	体部外周平行叩き、内周同心円の当て具痕あり。底部回転へう削り。	石英・長石・スコリア 淡黄色 良好、酸化炭焼成	P L34 P 870A・B 30% 覆土上層

図版番号	種 別	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
5	鎌	(6.7)	3.3	0.5	(23.4)	覆 上 P L46 M26 鉄製 先端部欠損	

第41号住居跡(第78図)

位置 調査区の西部東側, B2c区。

規模と平面形 東側が調査区外に延びているため正確な規模と平面形は不明であるが、竈や柱穴の配置から長軸5.6m、短軸4.5mの長方形と推定される。

主軸方向 N-15°-W

壁 壁高は15~20cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 確認した壁下には南西コーナー部を除いて壁溝が巡っており、ほぼ全周するものと考えられる。上幅約20cm、下幅約8cm、深さ約10cmで、断面形はU字状である。

床 ほぼ平坦。コーナー部及び壁際を除いて良く踏み固められている。

ピット 2か所(P₁, P₂)。長径約45cm、短径約30cmの不整形円形で、深さは45~65cmである。位置や深さから、柱穴と考えられる。

竈 東側が調査区外に延びているため全体の形態は不明であるが、北壁から灰白色粘土によって構築された左袖部を確認した。火床部は平坦で、赤色硬化している。煙道部はほとんど壁外に突出せず、外傾して立ち上がる。覆土は、11層からなる。土層1は天井部の崩落土層で、下部が焼土化している。

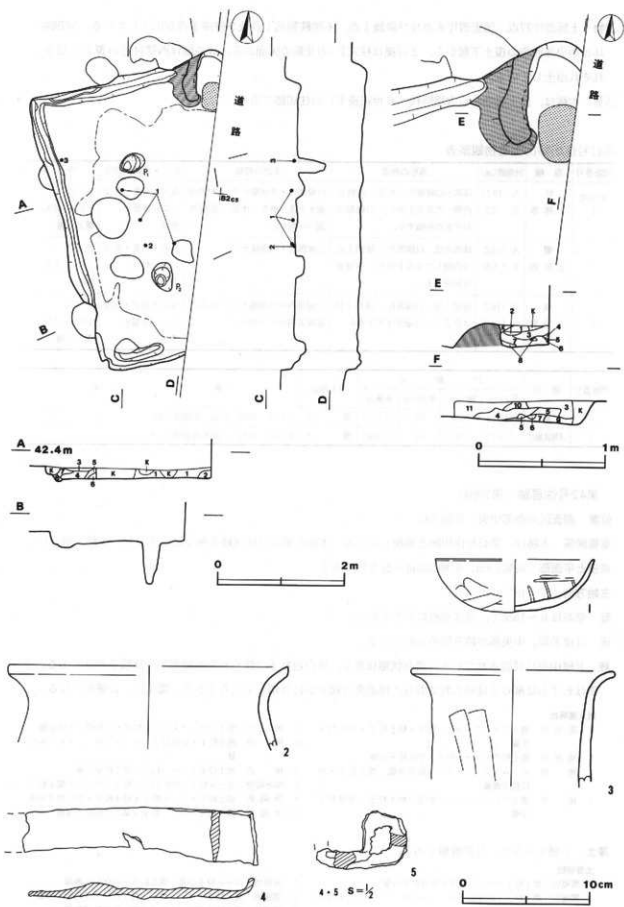
覆土層解説

1	にぶい黄褐色	粘土ブロック多量、焼土粒子中量、焼土ブロック多量	6	黒 色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量
2	灰 白 色	粘土ブロック多量	7	黒 色	焼土粒子中量、ローム粒子少量、粘土粒子微量
3	にぶい黄褐色	粘土ブロック多量、粘土粒子少量、ローム粒子微量	8	黒 色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
4	灰黄褐色	粘土ブロック・粘土粒子多量、焼土ブロック・焼土粒子少量、ローム粒子微量	9	黒 褐色	焼土粒子・ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
5	にぶい黄褐色	粘土ブロック・焼土粒子中量、粘土粒子少量、炭化粒子微量	10	暗 褐色	焼土粒子・ローム粒子少量、粘土粒子・炭化粒子微量
			11	黒 褐色	焼土粒子・ローム粒子・粘土粒子微量

覆土 8層からなり、自然堆積とみられる。

土層解説

1	黒 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	5	黒 褐色	ローム粒子少量
2	黒 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・黒色土粒子少量、粘土粒子微量	6	黒 色	ローム粒子多量
3	黒 色	焼土粒子・ローム粒子微量	7	黒 褐色	ローム粒子微量
4	黒 褐色	ローム粒子中量、ロームブロック少量、焼土粒子微量	8	極暗褐色	ローム粒子多量



第78图 第41号住居跡・竈・出土遺物実測図

遺物 土師器片77点、須恵器片6点及び鉄鏝1点、不明鉄製品1点及び鉄滓1点が出土している。第78図1の
 坏は中央部西側の覆上下層から、2の甕は柱穴P₁の北側の床面から、3の甗は西壁付近の覆土下層からそ
 れぞれ出土している。

所見 本跡は、出土遺物から古墳時代（6世紀後半）の住居跡である。

第41号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・構成	備考
第78図 1	坏	A (12.7)	底部へ口縁部片。丸底。体部は 内彎して立ち上がり、口縁部は わずかに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内 面ナデ後、磨き。体部、底部外 面へテ削り。	長石・石英・雲母 におい黄褐色 普通	P.L.34
	土師器	B (4.2)				P.873 40%
2	甕	A (22.2)	体部上位、口縁部片。体部上位 は内傾して立ち上がり、口縁部 は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母 におい褐色 普通	P.L.34
	土師器	B (6.6)				P.875 5%
3	甗	A (16.3)	体部上位、口縁部片。体部上位 は直立し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外 面縦方向のへテ削り。	長石・石英・雲母 におい黄褐色 普通	P.L.34
	土師器	B (9.2)				P.874 5%

図版番号	種別	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
4	鏝	(13.2)	3.0	0.5	(37.6)	覆 土	P.L.46 M29 鉄製 先端部欠損
5	不明鉄製品	(4.7)	(2.1)	0.6	(10.6)	覆 土	P.L.46 M31 部木質部残存

第42号住居跡（第79図）

位置 調査区の西部中央、B2b、区。

重複関係 本跡は、第43号住居跡と重複している。本跡が第43号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.3m、短軸2.85mの長方形である。

主軸方向 N-18°-W

壁 壁高は8～15cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦。中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央に付設されている。遺存状態は悪く、灰白色粘土で作られた右袖部が一部残るだけである。火床部はわずかに掘りくぼめられており、煙道部は緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は、10層からなる。

覆土層解説

1 黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子・炭化粒子少量	5 褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・灰少量
		6 褐色	焼土粒子・炭化粒子・ロームブロック・ローム粒子少量
2 暗褐色	焼土粒子・ローム粒子・炭化粒子少量	7 褐色	焼土粒子・ローム粒子・炭化粒子少量
3 褐色	ロームブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量		8 暗赤褐色
4 褐色	焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子・炭化粒子少量	9 黒褐色	焼土粒子・ローム粒子・粘土粒子・炭化粒子少量
		10 黒褐色	焼土粒子・ローム粒子少量、炭化粒子微量

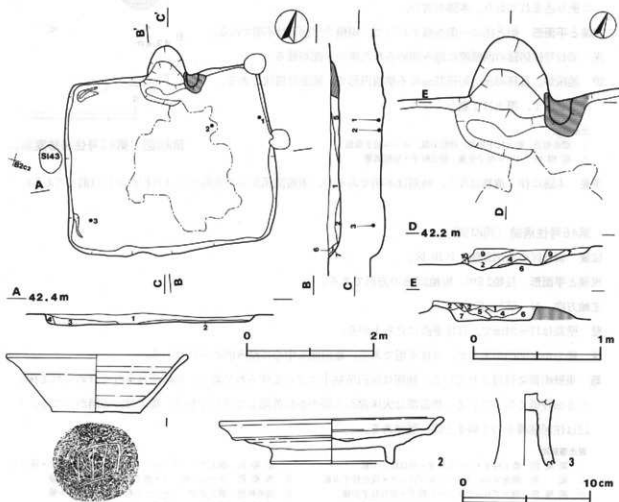
覆土 7層からなり、自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色	焼土粒子・ローム粒子・炭化粒子少量	4 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子・ロームブロック・ローム粒子少量	6 黒褐色	焼土粒子・ローム粒子少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子・ロームブロック・ローム粒子少量		7 褐色

遺物 土師器片99点、須恵器片39点及び弥生土器片1点が出土している。第79図1の坏は東壁際の床面から、2の盤は竈前の覆土下層から、3の高盤は南西コーナー部の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、出土遺物から平安時代（9世紀前半）の住居跡である。



第79図 第42号住居跡・竈・出土遺物実測図

第42号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第79図 1	坏 須恵器	A 14.3 B 4.6 C 7.0	口縁部一部欠損。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り。	砂粒・海綿骨針 灰オリーブ色 良好	P L34 P876 90% 床面 底部へう記号あり
2	盤 須恵器	A 17.7 B 3.7 D 9.7 E 1.3	口縁部一部欠損。高台はほぼ直立する。体部は外傾し、屈曲して口縁部に至る。口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へう削り後、高台貼り付け。	小礫・海綿骨針 灰色 良好	P L34 P877 95% 覆土下層
3	高盤 須恵器	B (5.7)	脚部片。脚部は下方に向かってラッパ状に開く。	脚部外面横ナデ。	長石 灰オリーブ色 良好	P878 20% 覆土上層

第43号住居跡 (第80図)

位置 調査区の西部中央、B2c区。

重複関係 本跡は、第42号住居跡と重複している。本跡が第42号住居跡に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 炉と床の一部を残すだけで、規模や平面形は不明である。

床 第42号住居跡の西壁際に踏み固められた床の一部が残る。

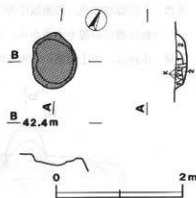
炉 地床炉。長径43cm、短径35cmの不整形円形で、断面は皿状である。

深さ9cmで、覆土は2層からなる。

土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子多量、砂粒少量、ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・砂粒微量

所見 本跡に伴う遺物はなく、時期は不明であるが、重複関係から平安時代（9世紀前半）以前と考えられる。



第80図 第43号住居跡実測図

第45号住居跡 (第81図)

位置 調査区の西部北側、B2b区。

規模と平面形 長軸2.6m、短軸2.5mの方形である。

主軸方向 N-65°-E

壁 壁高は17~24cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 緩やかな凹凸があるが、ほぼ平坦である。竈前面を中心に踏み固められている。

竈 東壁南側に付設されている。袖部は灰白色粘土によって作られており、火床部は掘りくぼめられて床面より8cm程低くなっている。煙道部は火床部から緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は、12層からなる。土層12は住居跡覆土の土層4と同一層である。

竈土層解説

- | | |
|--|-------------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子・炭化粒子少量 | 7 赤褐色 焼土ブロック・ロームブロック・炭化粒子・灰少量 |
| 2 褐色 焼土ブロック・ロームブロック・炭化粒子少量 | 8 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 | 9 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 4 黒褐色 焼土ブロック・ロームブロック・焼土粒子・ローム粒子・炭化粒子少量 | 10 暗赤褐色 焼土ブロック少量 |
| 5 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・灰少量 | 11 暗赤褐色 焼土粒子・ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 6 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・灰少量 | 12 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |

覆土 4層からなり、自然堆積とみられる。

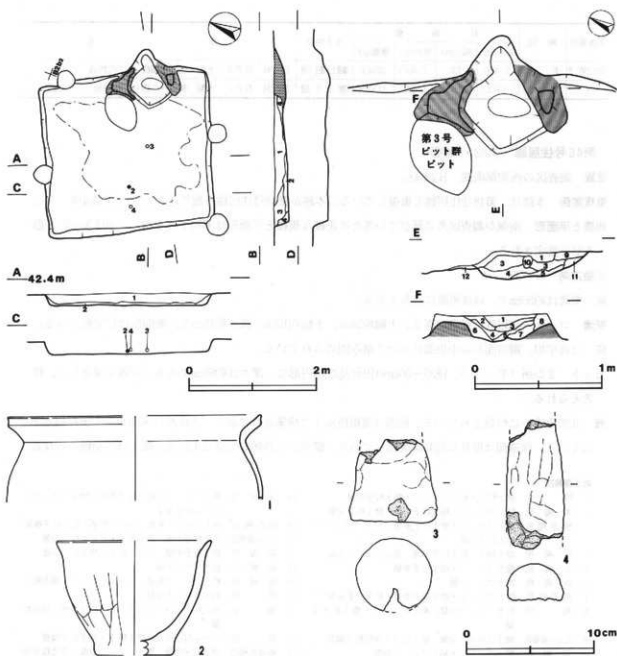
土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片49点、須恵器片3点、弥生土器片3点及び土製支脚2点が出土している。第81図1の竈は竈覆土内から、2の鉢は中央部東寄りの覆土下層から、4の土製支脚は東壁寄りの覆土下層から出土している。

また、3の土製支脚は竈覆土内と中央部覆土下層出土の破片が接合した。

所見 本跡は、出土遺物から平安時代（9世紀前半）と推定されるが、隣接する同時期の第42号住居跡に比べ、竈の位置や規模に差があること、また、本跡と第42号住居跡とが接近しすぎていることから2軒の住居跡には時間差があるものと考えられる。



第81図 第45号住居跡・竈・出土遺物実測図

第45号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第81図 1	甕 土師器	A (20.0) B (6.7)	体部上位。口縁部片。体部上位は内傾して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部はわずかにつまみ上げられる。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英 による橙色 普通	PL34 P879 10% 甕覆土
2	鉢 土師器	A (12.2) B 9.1 C (6.2)	底部～口縁部片。やや突出した平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面縦方向のヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	PL34 P880 40% 覆土下層

図版番号	種別	計測値				出上地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第81図	3 支脚	(4.6)	7.0	(6.2)	(269.7)	覆土・覆土層	P.L.34 D.P.6 上製 側面指頭痕 二次焼成
4	支脚	(10.2)	(4.6)	(2.9)	(134.0)	覆土下側	P.L.34 D.P.7 上製 側面へっ削り、指頭痕 二次焼成

第46号住居跡 (第82・83図)

位置 調査区の西端部南側, B2d区。

重複関係 本跡は、第48号住居跡と重複している。本跡が第48号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と平面形 南側が隅点以外に延びているため正確な規模と平面形は不明であるが、一辺5.3mの方形が長方形と推定される。

主軸方向 N-23°-W

壁 壁高は約50cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 コーナー部以外に壁溝が巡る。上幅約25cm, 下幅約10cm, 深さ約15cmで、断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦。竈前面から中央部にかけて踏み固められている。

ピット 2か所 (P₁, P₂)。径35~50cmの円形及び楕円形で、深さは約60cmである。位置や深さから、柱穴と考えられる。

竈 北壁東寄りに付設されている。袖部は黄褐色粘土で構築されており、火床部は床面から7cm程掘り下げられている。煙道部は壁外に約40cm突出しており、緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は、23層からなる。

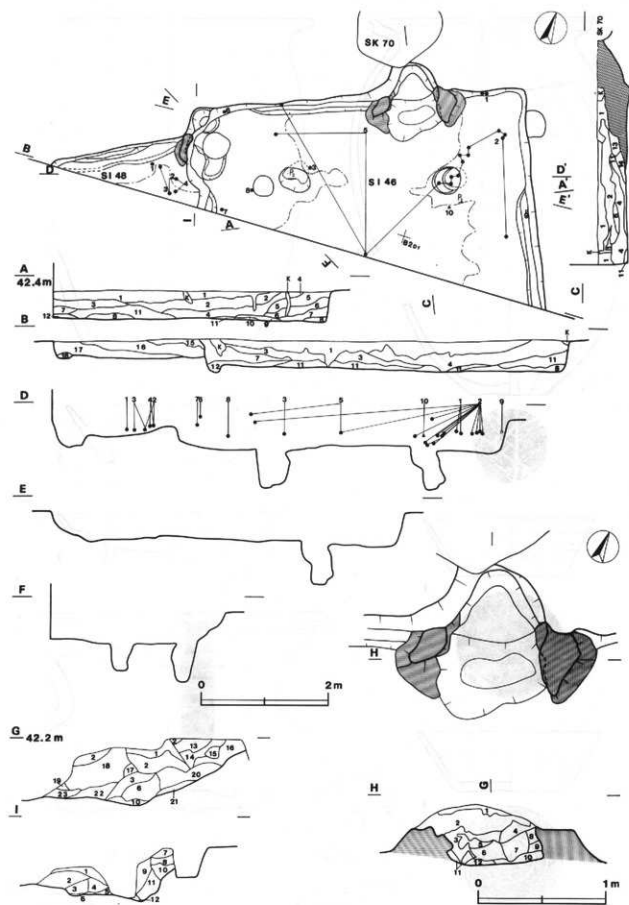
覆土層解説

- | | |
|-------------------------------------|---|
| 1 黒色 焼土粒子・粘土ブロック・粘土粒子少量 | 13 黄褐色 粘土ブロック・粘土粒子多量, 焼土ブロック少量, ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 粘土ブロック・粘土粒子中量, 焼土粒子少量 | 14 暗赤褐色 焼土ブロック多量, ローム粒子・粘土粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 焼土ブロック・焼土粒子多量, 粘土ブロック・粘土粒子少量 | 15 におい黄褐色 粘土粒子中量, 焼土粒子・ローム粒子少量 |
| 4 暗褐色 焼土粒子・粘土粒子多量, 焼土ブロック少量 | 16 黒褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・粘土粒子少量 |
| 5 赤褐色 焼土ブロック・焼土粒子多量 | 17 黄褐色 粘土ブロック層 |
| 6 赤褐色 焼土ブロック層 | 18 暗褐色 粘土ブロック多量, ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 7 暗赤褐色 焼土ブロック・焼土粒子中量, 粘土粒子少量 | 19 黒色 粘土ブロック少量 |
| 8 褐色 粘土ブロック中量, 焼土ブロック・焼土粒子少量 | 20 褐色 焼土粒子・ローム粒子・粘土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 9 におい赤褐色 粘土ブロック中量, 粘土粒子・炭化粒子微量 | 21 黒色 ローム粒子少量, 焼土粒子・粘土粒子微量 |
| 10 黒褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量 | 22 暗赤褐色 焼土粒子中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 11 暗赤褐色 ローム粒子中量, 焼土ブロック・粘土ブロック少量 | 23 褐色 粘土ブロック多量, 焼土ブロック少量, ロームブロック微量 |
| 12 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック中量 | |

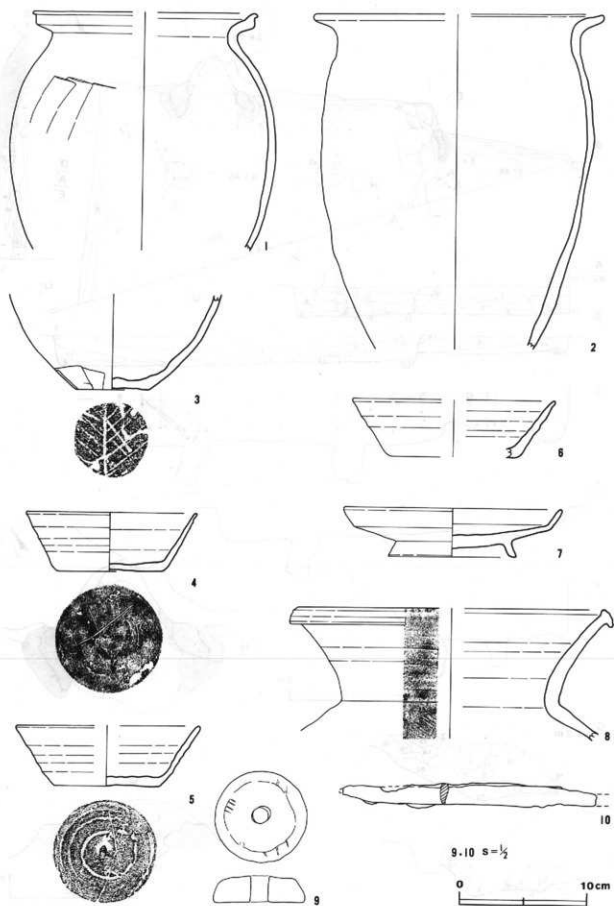
覆土 14層からなり、自然堆積である。

土層解説

- | | |
|-----------------------------------|---|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗オリーブ褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化物微量 |
| 2 暗オリーブ褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 8 オリーブ褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子少量, 粘土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量, 焼土ブロック微量 | 9 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量, 粘土粒子微量 |
| 4 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土ブロック・焼土粒子微量 | 10 におい褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・粘土粒子少量 |
| 5 暗灰黄色 ローム粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 11 黒色 焼土粒子・ローム粒子・粘土粒子微量 |
| 6 オリーブ黒色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | 12 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| | 13 暗灰黄色 粘土粒子多量, 粘土ブロック中量, ローム粒子少量, 焼土ブロック微量 |
| | 14 オリーブ黒色 焼土粒子・ローム粒子少量, 粘土粒子微量 |



第82图 第46·48号住居跡・竪実測図



第83图 第46号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片244点, 須恵器片149点, 弥生土器片3点, 石製紡錘車1点, 刀子1点及び粘土塊2点が出土している。第83図4の環は北東コーナー部の床面から, 7の盤は西壁付近の覆土中層から出土している。また, 9の紡錘車は東壁際の覆土中層, 10の刀子は柱穴P₁の南側の覆土中層から出土している。なお, 2の甕は覆土下層から上層にかけて流れ込んだように出土しており, 3の甕とともに古い機相のものであり, 重複する第48号住居跡に伴う遺物の可能性もある。

所見 本跡は, 出土遺物から奈良時代(8世紀後半)の住居跡である。

第46号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第83図 1	土師器	A (17.8)	体部, 口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 中位に最大径がある。口縁部は外反し, 端部をつまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜方向のナデ。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P L 34 P 882 20% 覆土中層
		B (18.7)				
2	土師器	A (23.0)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり, 体部上位に最大径がある。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア 褐色 普通	P L 34 P 881 70% 床面～覆土上層
		B (26.4)				
3	土師器	B (7.5)	底部, 体部片, 平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面下端横方向のヘラ削り。	砂粒・長石・石英 にふい褐色 普通	P L 34 P 883 20% 覆土中層 底部木炭痕あり
		C 5.9				
4	須恵器	A 13.5	口縁部一部欠損, 平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部, 体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ切り後, 手持ちヘラ削り。	小礫・長石・石英 灰白色 良好	P L 34 P 884 95% 床面 底部ヘラ記号あり
		B 4.6				
		C 8.3				
5	須恵器	A (14.5)	底部～口縁部片, 平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部部に至る。	口縁部, 体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。	長石・海輪骨針 灰色 良好	P L 34 P 885 40% 覆土中・上層 底部ヘラ記号あり
		B 4.8				
		C 8.3				
6	須恵器	A (16.1)	体部, 口縁部片。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部部に至る。	口縁部, 体部内・外面横ナデ。	長石・スコリア 灰色 良好	P 886 20% 覆土上層
		B 4.5				
		C (10.0)				
7	須恵器	A (17.3)	口縁部一部欠損。高台はハの字状に開く。体部は外傾して立ち上がり, 屈曲して口縁部に至る。	口縁部, 体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り後, 高台貼り付け。	砂粒・長石・石英 黄灰色 良好	P L 34 P 888 60% 覆土上層
		B 3.9				
		D 10.0				
		E 1.3				
8	須恵器	A (24.2)	体部上位～口縁部片。体部上位は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。口縁部部に縁帯が通る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面平行叩き。	長石 灰白色 良好	P 889 5% 覆土中層
		B (10.3)				

図版番号	種別	計測値			出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
9	紡錘車	最大径	4.8	1.5	45.3	覆土中層 P L 35 Q 6 粘板岩 孔径3mm
10	刀子	(13.4)	1.5	0.4	(14.7)	覆土中層 P L 46 M 32 鉄製 基部一部欠損

第48号住居跡（第82・84図）

位置 調査区の西端部南側、B1d区。

重複関係 本跡は、第46号住居跡と重複している。本跡が第46号住居跡に掘り込まれており、本跡が古い。
規模と平面形 東側が第46号住居跡によって掘り込まれ、南側が調査区外に延びているため、規模や平面形は不明である。

主軸方向 N-24°-W

壁 壁高は約25cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁が確認できた北壁西側には壁溝がある。上幅約25cm、下幅約10cm、深さ約5cmである。

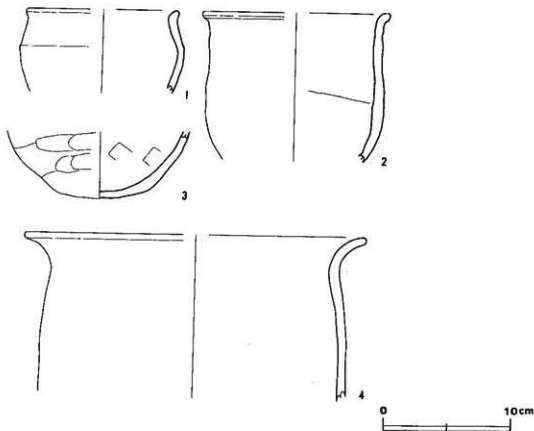
床 ほぼ平坦。踏み固められた部分がある。

竈 北壁に付設されている。第46号住居跡と新しい2基のピットによって東側半分が壊されている。袖部は褐色粘土で構築された左袖部だけが残る。火床部及び煙道部の形態は不明である。覆土は、12層からなる。

覆土層解説

- | | |
|-------------------------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量、ローム粒子微量 | 7 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・粘土ブロック微量 |
| 2 褐色 粘土ブロック層 | 8 褐色 粘土粒子中量、粘土ブロック少量、焼土ブロック微量 |
| 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土ブロック・粘土ブロック少量 | 9 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量 |
| 4 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土ブロック・粘土粒子少量 | 10 黒褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック・粘土ブロック少量 |
| 5 暗褐色 焼土ブロック・焼土粒子少量、粘土ブロック微量 | 11 暗赤褐色 焼土粒子・粘土粒子少量 |
| 6 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量 | 12 黄褐色 粘土粒子中量、黒色土粒子少量 |

覆土 4層（土層15～18、土層1～14は重複する第46号住居跡覆土）からなり、自然堆積である。



第84図 第48号住居跡出土遺物実測図

土層解説

- 15 黒色 ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量
 16 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・粘土粒子微量
 17 黒色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
 18 暗オリーブ褐色 ローム粒子多量

遺物 土師器片34点及び須恵器片2点が出土している。第84図1の塊、2、3の甕及び4の甕はいずれも遺周辺の覆土下層から出土している。

所見 本跡は、重複関係及び出土遺物から古墳時代（6世紀後半）の住居跡と考えられる。

第48号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	形状の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第84図 1	埴 土師器	A (12.1)	体部上位、口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に綾がある。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・スコリア 黒色 普通	P.L.35
		B (6.0)				P.892 5%
2	甕 土師器	A (14.8)	体部、口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面斜方向のナデ。	砂粒・長石・スコリア 黒褐色 不良	P.890 20%
		B (11.7)				覆土下層
3	甕 土師器	B (5.5)	底部、体部下位片。丸味をもった平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内面板状工具によるナデ。体部外面、底部ヘラ削り。	小礫・砂粒・スコリア 黒色 普通	P.L.35
		A (27.0)				P.893 15%
4	甕 土師器	A (27.0)	体部上位、口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜方向のナデ。	砂粒・スコリア ふい黄褐色 普通	P.L.35
		B (12.9)				P.891 5%

第49号住居跡（第85図）

位置 調査区の西端部北側，B1b区。

規模と平面形 本跡は、南東コーナー部を確認しただけで大部分が調査区外にある。そのため正確な規模や平面形は不明であるが、出入り口ピットの位置からみて一辺3.2mの方形ではないかと推定される。

主軸方向 [N-81°-W]

壁 壁高は約8cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁が確認できた東壁北側には壁溝がある。上幅約20cm、下幅約10cm、深さ約5cmである。

床 ほぼ平坦。調査部分の北側はハードロームブロックが多く比較的硬いが、南側は黒色土で軟弱である。踏み固められた部分はない。

ピット 長径70cm、短径50cmの不整楕円形で、深さ52cmである。位置から出入り口ピットと考えられる。

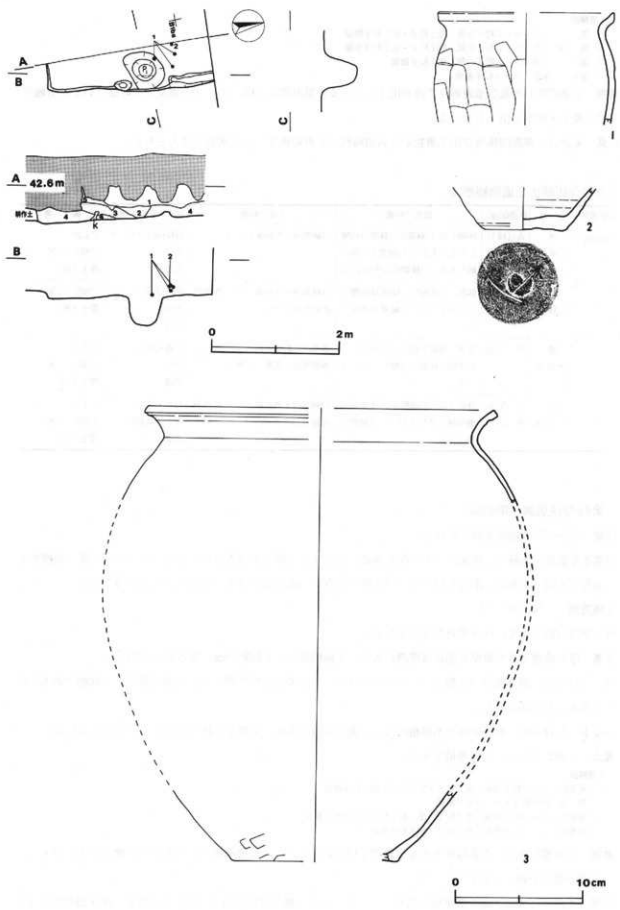
覆土 4層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子・炭化粒子微量
 2 黒色 焼土粒子・ローム粒子微量
 3 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、粘土粒子・炭化粒子微量
 4 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量

遺物 土師器片9点、須恵器片5点及び鉄滓1点が出土している。第85図2の坏及び3の甕は出入り口ピット付近の覆土中層から出土している。

所見 本跡は、床面に竈の構築材が散布していることから竈が付設されていたとみられる。出土遺物から平安時代（9世紀前半）の住居跡と考えられる。



第85图 第49号住居跡・出土遺物実測図

第49号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第86図 1	甕 土師器	A 14.0	体部上位, 口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。口縁端部をわずかにつまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向のへう削り。	長石・雲母・スコリアにふい橙色 普通	P L 35
		B (8.8)				P 894 5%
2	坏 須恵器	B (3.4)	底部, 体部片。やや突出した平底。体部は外傾する。	体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り。	小礫・砂粒・長石 灰色 良好	P L 35
		C 6.4				P 961 40%
3	甕 須恵器	A (35.8)	体部下位, 口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。口縁端部に幅の狭い縁帯が通る。	口縁部内・外面横ナデ。	小礫・長石・石英 灰色 良好	P L 35
		B (71.4)				P 967 10%
		C (26.4)				覆土中層

第51・52号住居跡（第86図）

2か所の竈が確認されているため2軒の住居跡としたが, 明確に分けることができないことから一括して扱う。

位置 調査区の東部中央, B5g_a・h_a区。

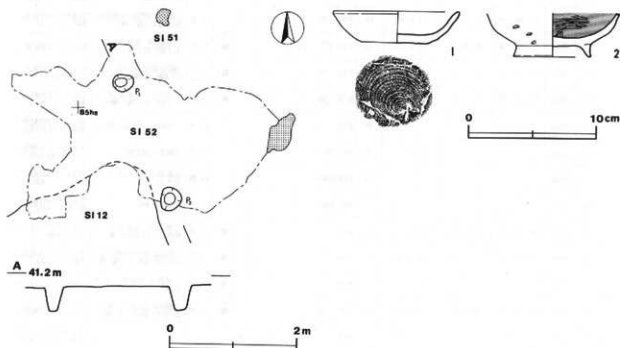
重複関係 第12号住居跡と重複している。本跡の床が第12号住居跡の覆土上に延びていることから, 本跡が新しい。

床 ほぼ平坦で, よく踏み固められている。

ピット 2か所 (P₁, P₂)。径30~40cmの不整形で, 深さは35~40cmである。規模や形状からすると, 柱穴である可能性があるが, どちらの住居跡に伴うものかは不明である。

竈 第51・52号住居跡の2か所の竈とも赤色硬化した火床部が残るだけで, その規模や形態などは不明である。

遺物 床面及び周辺の攪乱土中から土師器片333点, 須恵器片13点, 縄文土器片1点, 灰軸陶器片1点が出土している。第86図1の皿及び2の高台付坏は床面からの出土である。



第86図 第51・52号住居跡・出土遺物実測図

所見 本跡は、床と2か所の竈の火床部が残るだけであるため、規模や平面形、主軸方向、壁及び覆土等是不明である。また、2か所の竈があるため、2軒の住居跡として扱ったが、床面の高低差はなく、確実に2軒であったかは疑問が残る。本跡の時期は、出土遺物から平安時代(10~12世紀)と推定される。

第51・52号住居跡出土遺物観察表

図表番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色澤・装成	備考
第86図 1	皿	A 10.0	口縁部一部欠損。平表。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直線的に外積する。	口縁部・体部内・外面儀ナデ。	長石・スクリア に多い黄褐色	P.L.35
	土師器	B 2.8		底面に転承切り。ロクロ成形。	普通	P.896 90%
	C 5.4					床面
2	高台付環土断面	B (3.5) D 6.1 E 0.9	高台部、体部片。高台は卜端がわずかに開く。体部は内彎して立ち上がる。	体部内面磨き。体部外面儀ナデ。底面高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・スクリア に多い緑色 普通	P.L.35 P.896 75% 床面 体部外面積あり

表4 青木遺跡住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長短×短)	取高 (m)	内部施設				竈	覆土	出土遺物	備考 新田開張(古→新)
						壁	等	土	入口				
1	C6a	[N-47°-W]	[方形]	11.0 × -	43	平垣	全周	0	1	-	一部人為	土師器207 須磨器6 赤土器29 礎石5	古墳時代(6世紀後半) 本跡→S13→S15
2	C6a	-	-	-	-	平垣	全周	0	0	-	自然	土師器47 赤土器2	古墳時代(6世紀後半) S11→S12→本跡
3	C5a	-	-	-	-	平垣	全周	0	0	-	自然	土師器93 須磨器3 支脚1	古墳時代(6世紀後半) S11→本跡→S12
4	C6a	[N-38°-W]	[方形]	7.8 × (7.8)	30	平垣	全周	0	0	-	一部人為	土師器89 須磨器5 赤土器1 赤土器18 支脚 礎石5	古墳時代(7世紀後半)
5	C5a	[N-5°-W]	[方形]	-	-	平垣	一部	0	0	-	一部人為	土師器25 須磨器3 赤土器1 赤土器27 礎石5	奈良・平安時代
7	C5a	[N-12°-W]	-	-	-	平垣	一部	0	0	-	一部人為	土師器113 須磨器16 赤土器2 赤土器2 礎石2	奈良・平安時代(10~12世紀) S18→本跡
8	B5p	[N-38°-W]	[方形]	4.8 × 4.6	28	平垣	一部	0	2	-	自然	土師器55 須磨器14 赤土器1 赤土器2 支脚1 礎石1	古墳時代(6世紀後半) S18→S17→11
9	B5a	[N-24°-W]	[長方形]	3.8 × 3.5	45	平垣	一部	2	0	-	一部人為	土師器206 須磨器53 赤土器3 赤土器3 礎石1	古墳時代(6世紀後半)
11	B5p	[N-37°-W]	[方形]	6.4 × 6.4	34	平垣	一部	4	0	-	一部人為	土師器1 須磨器10 赤土器1 赤土器1 支脚1 礎石1	古墳時代(6世紀後半) S18→本跡
12	B5a	[N-26°-W]	[方形]	3.8 × 3.8	30	平垣	一部	0	0	-	自然	土師器227 須磨器23 赤土器 赤土器6 赤土器17 礎石2	奈良時代(8世紀後半) 本跡→S119
15	B5p	-	-	-	-	平垣	一部	0	0	-	自然	土師器92 須磨器6 礎石1	奈良時代(8世紀後半) 本跡→S116/SK122
16	B5p	-	-	4.6 × -	30	平垣	全周	0	0	-	自然	土師器6 須磨器1	平安時代(8~9世紀) S119→本跡→S117
17	B5p	-	-	-	24	平垣	全周	0	0	-	自然	土師器54 須磨器14 赤土器 赤土器1	平安時代(9世紀後半) S18→本跡
18	B5c	-	-	-	-	平垣	全周	0	0	-	自然	土師器3 礎石4	平安時代(9世紀前半)以前 本跡→S117
19	B5a	[N-26°-W]	[方形]	3.2 × (3.1)	16	平垣	一部	0	0	-	一部人為	土師器97 須磨器13 赤土器 赤土器2 赤土器7 礎石4	平安時代(10~12世紀) S120→本跡
20	B5a	[N-17°-W]	[方形]	3.9 × 3.8	40	平垣	一部	0	0	-	一部人為	土師器22 須磨器10 赤土器 赤土器1 赤土器1 赤土器1 礎石1	奈良時代(9世紀後半) 本跡→S119/SK124
21	B5p	-	-	-	-	平垣	一部	0	0	-	一部人為	土師器48 須磨器2 赤土器 赤土器1	平安時代(11~12世紀)
23	B5c	[N-17°-W]	[長方形]	2.8 × 3.2	46	平垣	一部	0	0	-	自然	土師器46 須磨器15 赤土器 赤土器1 赤土器1 赤土器1 礎石1	奈良時代(8世紀後半)
24	B5a	-	-	-	-	平垣	一部	0	0	-	自然	-	平安時代(10~12世紀) 以前 S120a→本跡

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	坪面	内部施設				歩・覆土	出土遺物	備考 新旧関係(A~F)		
							壁溝	土柱穴	礎穴	入口					
25A	B5e ₁	N-16°-W	[長方形]	4.3 × -	16	平坦	全周	4	-	-	-	自然	土師器461 須恵器70 弥生土器6 鉄滓1 銅器5	平安時代(10~12世紀) S125C→本跡→S124・2 S125A・27	
25B	B5d ₁	N-90°-E	[方形]	4.6 × -	22	平坦	一部	-	-	-	-	覆1	自然	土師器247 須恵器205 弥生土器6	平安時代(10~12世紀) S125A・28CSK151→本跡、SK127
25C	B5d ₁	N-45°-W	方形	4.5 × 4.5	20	平坦	一部	-	1	-	-	覆1	不明	土師器191 須恵器149 弥生土器5 鉄滓1 銅器12	古墳時代(9世紀前半) 本跡→S125A・25H,SK127
26	B5f ₁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	覆1	-	土師器2 須恵器2	
27	B5e ₁	-	-	-	-	平坦	-	-	-	-	-	覆1	-	土師器36 須恵器23 弥生土器1 銅器5	
28	B5e ₁	N-3°-W	不整形	3.0 × 2.8	20	凹凸	-	-	-	-	-	覆1	自然	土師器36 須恵器23 弥生土器1 銅器5	奈良時代(8世紀後半)
29	B4e ₁	N-39°-W	方形	5.0 × 4.9	30	平坦	全周	4	-	-	-	覆1	自然	土師器262 須恵器13 彌文土器1 弥生土器12 文器1 鉄滓1 銅器1	古墳時代(9世紀前半) 本跡→S115,SK147
30	B4c ₁	N-15°-W	不整形	4.1 × 3.6	-	平坦	一部	-	-	-	-	覆1	-	土師器145 須恵器2 弥生土器5 土器1 銅器1	古墳時代(9世紀後半) 本跡→SK129
32	B3e ₁	N-0°	[方形]	3.5 × -	14	平坦	-	-	-	-	-	覆1	自然	土師器69 須恵器36 彌文土器1 刀子1 銅器7	平安時代(9世紀前半)
34	B3b ₁	N-8°-W	不整形	3.0 × 2.8	30	平坦	-	-	-	-	-	覆1	自然	土師器17 須恵器13 弥生土器1 銅器5	平安時代(9世紀前半) 本跡→SK150・S12
36	B3e ₁	N-0°	[方形]	2.7 × -	12	平坦	-	-	-	-	-	覆1	-	土師器4 須恵器3	平安時代(9世紀前半)
37	B3b ₁	-	-	-	-	凹凸	-	-	-	-	-	覆1	-	土師器35 須恵器8 弥生土器1 鉄滓1 銅器2	平安時代(10~12世紀)
38	B3c ₁	N-28°-W	[方形]	4.2 × -	10	平坦	全周	-	-	-	-	-	自然	土師器6 須恵器1 銅器1	古墳時代(6世紀後半)
40	B2e ₁	N-37°-W	方形	3.3 × 3.3	50	平坦	-	-	-	-	-	覆1	自然	土師器163 須恵器34 弥生土器2 鉄滓1 銅器2	古墳時代(9世紀前半)
41	B2e ₁	N-22°-W	[長方形]	3.6 × 4.5	20	平坦	全周	2	-	-	-	覆1	自然	土師器77 須恵器6 鉄滓1 不明鉄製品1 鉄滓1 銅器1	古墳時代(9世紀後半)
42	B2b ₁	N-18°-W	長方形	3.3 × 2.85	15	平坦	-	-	-	-	-	覆1	自然	土師器99 須恵器39 弥生土器1 銅器6	平安時代(9世紀前半) S145→本跡
43	B2e ₁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	砂1	-	-	平安時代(9世紀前半)以前 本跡→S142
45	B2b ₁	N-65°-E	方形	2.6 × 2.5	24	平坦	-	-	2	-	-	覆1	自然	土師器19 須恵器3 弥生土器3 文器3 銅器1	平安時代(9世紀前半)
46	B2d ₁	N-25°-W	[方形]	5.3 × -	50	平坦	一部	(2)	1	-	-	覆1	自然	土師器244 須恵器149 弥生土器3 鉄滓5 刀子1 針1 銅器3	古墳時代(9世紀後半) S148→本跡
48	B1d ₁	N-29°-W	-	-	25	平坦	一部	-	-	-	-	覆1	自然	土師器34 須恵器2 銅器1	古墳時代(9世紀後半) 本跡→S146
49	B1b ₁	N-81°-W	[方形]	3.6 × -	8	傾斜	一部	-	-	-	-	覆1	自然	土師器9 須恵器6 鉄滓1 銅器1	平安時代(9世紀前半)
51-52	B5b ₁	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	覆1	-	土師器333 須恵器13 灰桶陶器1 彌文土器片1	平安時代(10~12世紀) S112→本跡

2 掘立柱建物跡

今回の調査では、時期不明の掘立柱建物跡1棟を確認した(SB-1)。以下、その特徴について記載する。

第1号掘立柱建物跡(第87図)

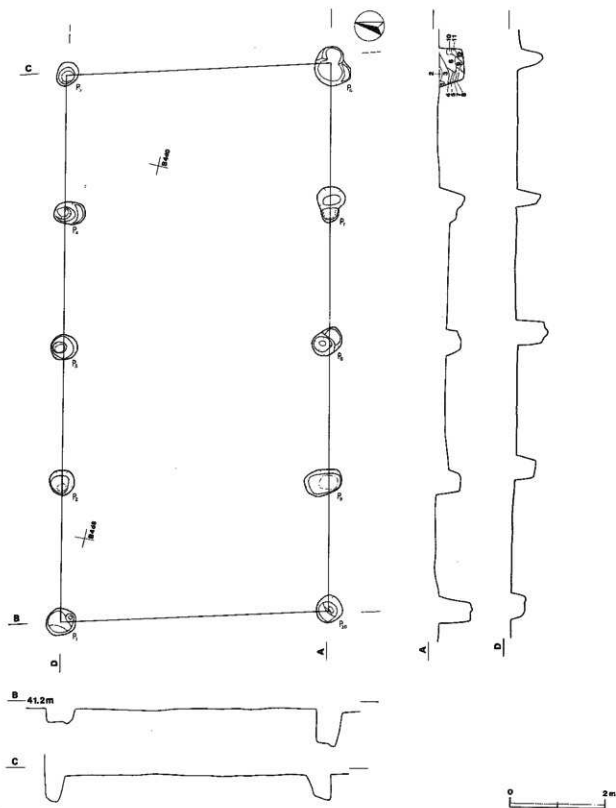
位置 調査区の中央部東側、B4d₁区。

重複関係 本跡は、第29号住居跡と重複する。本跡が第29号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模 東西4間(約11m)、南北1間(約5.6m)の建物で、柱間寸法は桁行2.7~3.0m、梁行5.6mである。柱穴の掘り方は平面形が、径40~50cmの円形か、長径60~80cm、短径50~60cmの楕円形で、深さは30~70cmである。柱根を上面で捉えることはできなかったが、P₁、P₂、P₃の底面に柱を立てたと思われる硬化面が認められた。

長軸方向 N-80°-E

覆土 人為堆積。P₁の土層観察によると、柱まわりはロームブロック混じりの褐色土及び黒褐色土(土層7～12)によって囲まれており、柱を抜き取った後に黒色土(土層4～6)が流れ込んだものとみられる。



第87図 第1号掘立柱建物跡実測図

覆土土層解説 (P₁)

- 1 極暗褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量
- 3 黒色 ローム粒子中量, ロームブロック少量
- 4 黒色 ロームブロック・ローム粒子中量
- 5 黒色 ローム粒子少量, ロームブロック微量
- 6 黒色 ロームブロック少量

- 7 褐色 ロームブロック・ローム粒子中量
- 8 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子中量
- 9 黒褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量
- 10 暗褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量
- 11 黒褐色 ロームブロック中量, ローム粒子少量
- 12 黒色 ローム粒子中量, ロームブロック少量

遺物 弥生土器, 土師器, 須恵器の細片が少量出土している。

所見 本跡は, 当初土坑と考え, SK-134~137・139・143~145・148・149として調査したが, 配列や規模から掘立柱建物跡と判明したため遺構番号を変更した。時代は, 出土遺物から奈良・平安時代以降のものと推定されるが, 正確な時期や性格等は不明である。

3 ビット群

今回の調査では, 3か所のビット群を確認した。建物あるいは柵列等の可能性があるが, 対応関係を把握することができなかったため, ここではビット群として扱う。以下, その特徴について記載する。

第1号ビット群(第88図)

位置 調査区の中央部東側, C6b₁区付近。

規模 東西約10m, 南北約8mの範囲に14か所のビット(P₁~P₁₄)を確認した。ビットの平面形は, 径30~60cmの円形あるいは楕円形で, 深さは10~50cmである。

覆土 人為堆積。P₁₄には柱痕が認められ, そのまわりは突き固められている。また, P₁も層状に突き固められている。

覆土土層解説

P₁

- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量, 黄土粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子多量

P₂ (1~4層はP₁覆土)

- 5 黒褐色 ローム粒子少量, ロームブロック微量
- 6 黒色 ロームブロック・ローム粒子微量

P₃

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, ロームブロック微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量
- 3 黒色 ロームブロック・ローム粒子少量
- 4 褐色 ロームブロック多量
- 5 黒色 ロームブロック・ローム粒子少量
- 6 褐色 ロームブロック多量

P₄

- 1 褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子中量
- 3 褐色 ロームブロック多量

P₅

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量, ローム粒子微量

P₆

- 1 黒色 ローム粒子・A E-K P 粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子多量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量, ローム粒子少量

P₇

- 1 黒色 ローム粒子少量, 炭化物・A E-K P 粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量, ローム粒子少量

P₈

- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子中量

P₉

- 1 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子中量
- 4 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子中量

P₁₀

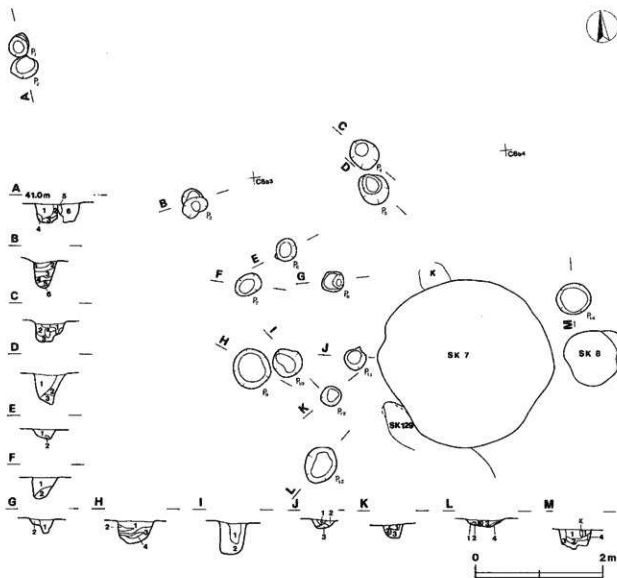
- 1 黒褐色 ローム粒子少量, ロームブロック・炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量

- P_a
- 1 黒褐色 ロームブロック中量、ローム粒子微量
 - 2 暗褐色 ローム粒子中量
 - 3 黒色 ロームブロック・ローム粒子微量
- P_a
- 1 黒褐色 ローム粒子少量
 - 2 極暗褐色 ローム粒子中量
 - 3 黒褐色 ローム粒子中量、ロームブロック少量

- P_b
- 1 黒褐色 ローム粒子中量、ロームブロック少量
 - 2 褐色 ロームブロック多量
 - 3 暗褐色 ローム粒子中量
 - 4 褐色 ロームブロック多量
- P_b
- 1 黒褐色 ローム粒子中量、ロームブロック少量
 - 2 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量
 - 3 暗褐色 ローム粒子多量、ロームブロック少量

遺物 弥生土器、土師器、須恵器の細片が少量出土している。

所見 本跡は、当初土坑番号を付して、SK-9~20・23・24として調査したが、対応関係は把握できないもののピットが集中していることから遺構番号を変更し、ピット群として扱った。本跡の大部分のピットは、P_a、P_aが示すように柱が立てられていたものと考えられるが、その性格は不明である。時代は、出土遺物から奈良・平安時代以降のものと考えられるが、正確な時期は不明である。



第88図 第1号ピット群実測図

第2号ピット群(第89図)

位置 調査区の中央部、B3b,区付近。

規模 東西約6m,南北約9mの範囲に22か所のピット(P₁~P₂₂)を確認した。ピットの平面形は、径25~60cmの円形あるいは一辺約40cmの方形で、深さは浅いもので5~30cm,深いもので40~70cmである。

覆土 土層セクションの採図はしなかったが、覆土は、黒色土あるいは黒褐色土にローム土が混入している。人為堆積と考えられる。

所見 本跡は、当初2棟の掘立柱建物跡と考え、SB-3・4として調査したが、対応関係が把握できないことから遺構番号を変更し、ピット群として扱った。本跡のピットの中で深さの深いものについては、断面形からみても柱が立てられていたと考えられるが、出土遺物もなく本跡の性格、時期ともに不明である。ただし、本跡の東側にある第1号溝は中世の城館跡に伴う堀とみられ、堀の西側が城館内と考えられることから本跡もその城館跡に伴う遺構である可能性は高い。

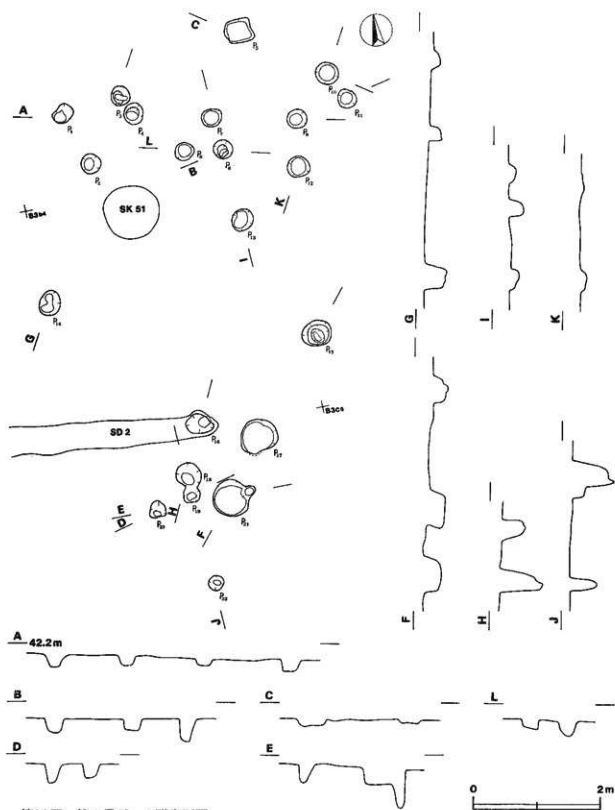
第3号ピット群(第90図)

位置 調査区の西部、B2b,区付近。

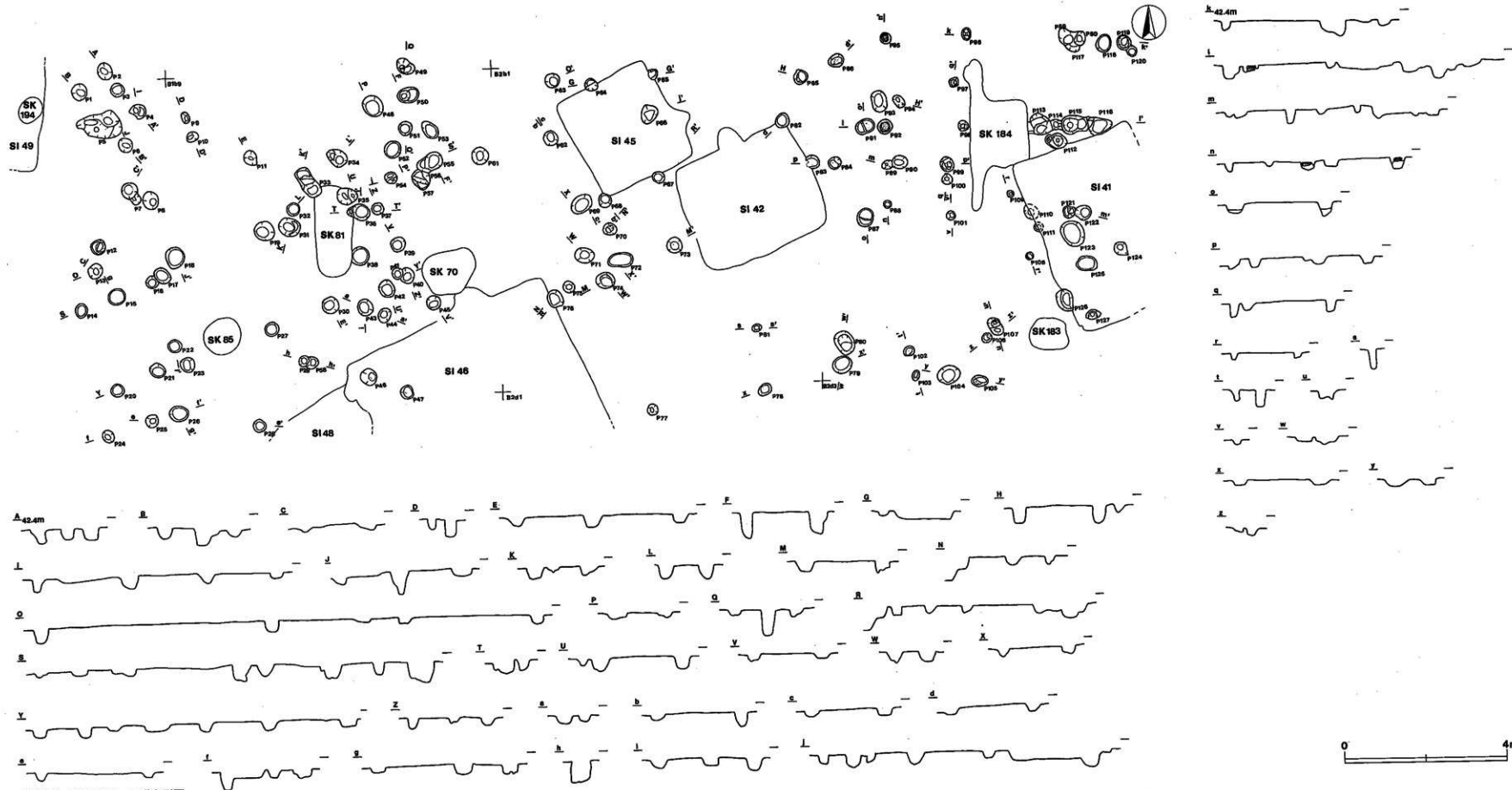
規模 東西約25m,南北約10mの範囲に125か所のピット(P₁~P₁₂₅)を確認した。ピットの平面形は、大部分のものが径20~50cmの円形あるいは楕円形である。深さは5~20cmの浅いものが多いが、中には50~60cmの深さのものもある。P₈₈、P₉₀からは根固め石と思われる偏平な石が出土している。

覆土 土層セクションの採図はしなかったが、覆土は、黒色土あるいは黒褐色土にローム土が混入している。人為堆積と考えられる。

所見 本跡は、当初掘立柱建物跡と考え、SB-2として調査したが、対応関係が把握できないことから遺構番号を変更し、ピット群として扱った。本跡のピットの中で深さの深いものについては、断面形からみても柱が立てられていたと考えられる。また、P₈₈、P₉₀のように根固め石が入っているものがあり、浅いピットでも柱が立っていた可能性がある。しかし、その対応関係がつかめないため、本跡の性格は不明である。P₈₈、P₈₉、P₉₀から奈良・平安時代の土師器及び須恵器片が出土しているため、他のピットの中にも、奈良・平安時代のものが含まれている可能性があるが、本跡の位置が中世城館の郭内と考えられることから、本跡もその城館跡に伴う遺構である可能性が高い。



第89図 第2号ピット群実測図



第90図 第3号ビット群実測図

4 土坑

当遺跡からは、土坑45基を確認した（SK-1～200、内一覧表に掲載した番号のもの。それ以外のものは、欠番、あるいは第1号刺立柱建物跡、第1～3号ピット群に改称した）。ここでは、時期が推定できる主なものを記述し、他は一覧表に掲載する。

第4号土坑（第91～97図）

位置 調査区の中央部南側、B4c区。

重複関係 本跡は、第5号土坑及び第5号井戸と重複している。本跡が第5号土坑及び第5号井戸を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸4.2m、短軸3.0mの隅丸長方形で、深さ130cmである。

長軸方向 N-90°

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 わずかに中央部でくぼむ鍋底状である。

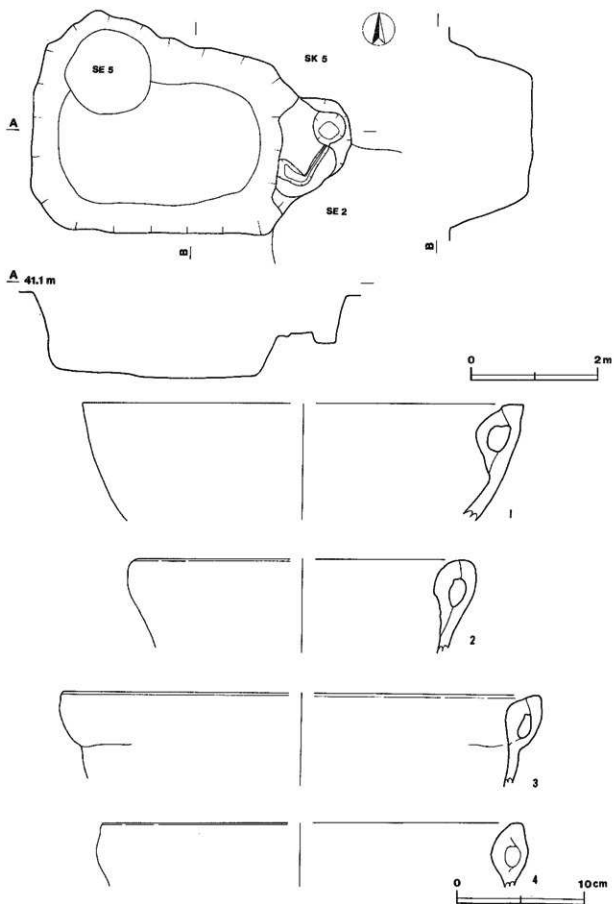
覆土 2層からなる。上層はロームブロックを含む褐色土層で、下層は上をほとんど含まない掘り弁大の礫層である。掘ると礫層が崩れてしまうため採図できなかった。礫層は意識的に埋設されたものと思われる。上層にも多量のロームブロックが含まれていることから人為堆積と考えられる。

遺物 陶磁器や土器類は、陶磁器片245点、瓦質土器片148点、土師質土器片653点、土師器片176点及び須恵器片290点が出土している。その他の遺物として、瓦、磁石、石臼、寛永通寶、鉄滓等が出土している。遺物は礫層中から出土しており、一括廃棄されたものと思われる。

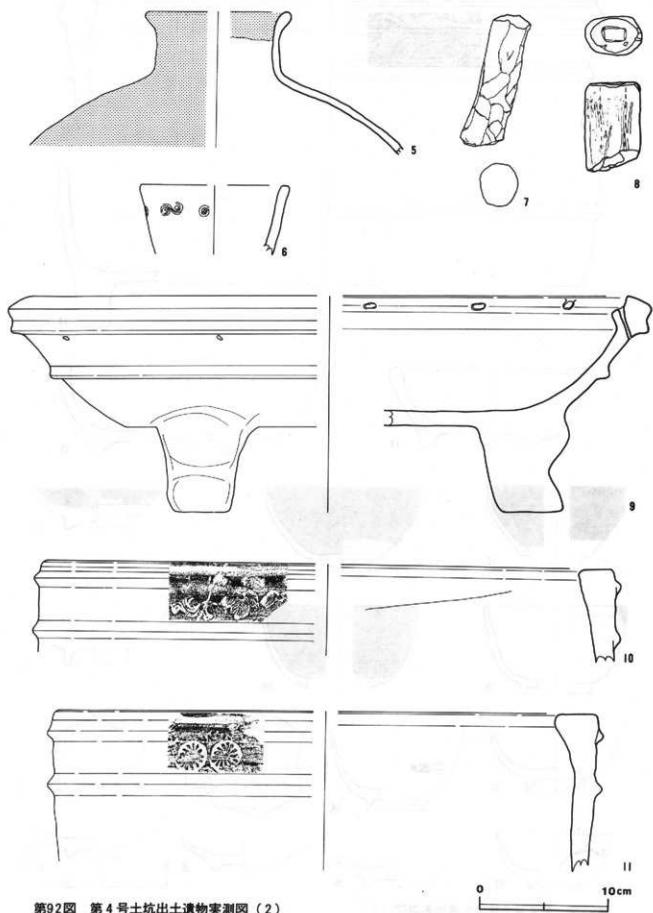
所見 本跡は、当初性格不明遺構（SX-1）として調査したが、大形の土坑状の遺構であることから、遺構番号を変更し、土坑（SK-4）として扱った。礫層の存在と東に接して第2号井戸があることを考え合わせると排水施設という可能性が考えられる。時期は、出土した陶磁器類が15世紀後半から18世紀前半にかけて生産されたものであることから江戸時代（18世紀前半）と推定される。

第4号土坑出土遺物観察表

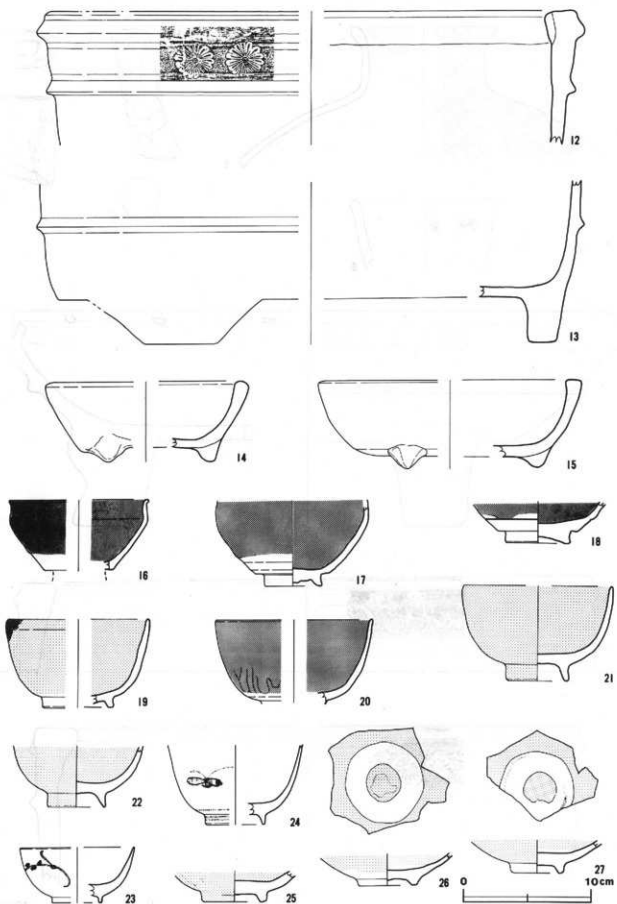
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第91図 1	内耳竇 土師質土器	A (35.0) B (9.1)	体部上位、口縁部片。体部は内 彎して立ち上がる。口縁部は 肥厚する。	口縁部内・外面、体部内面横ナ デ。	長石・雲母 黒褐色 普通	P 972 10% 覆土 外面煤付着
2	内耳竇 土師質土器	A (26.8) B (7.4)	体部上位、口縁部片。体部は内 彎して立ち上がり、口縁部がわ ずかに膨らむ。口縁部はわず かに肥厚する。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母・石英 にぶい褐色 普通	P L 35 P 974 5% 覆土 外面煤付着
3	内耳竇 土師質土器	A (38.0) B (7.2)	体部上位、口縁部片。体部は内 彎して立ち上がり、口縁部が膨 らむ。口縁部はわずかに肥厚 する。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母 褐灰色 普通	P L 35 P 975 5% 覆土 外面煤付着
4	内耳竇 土師質土器	A (33.2) B (5.1)	口縁部片。口縁部が膨らむ。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P L 35 P 977 5% 覆土



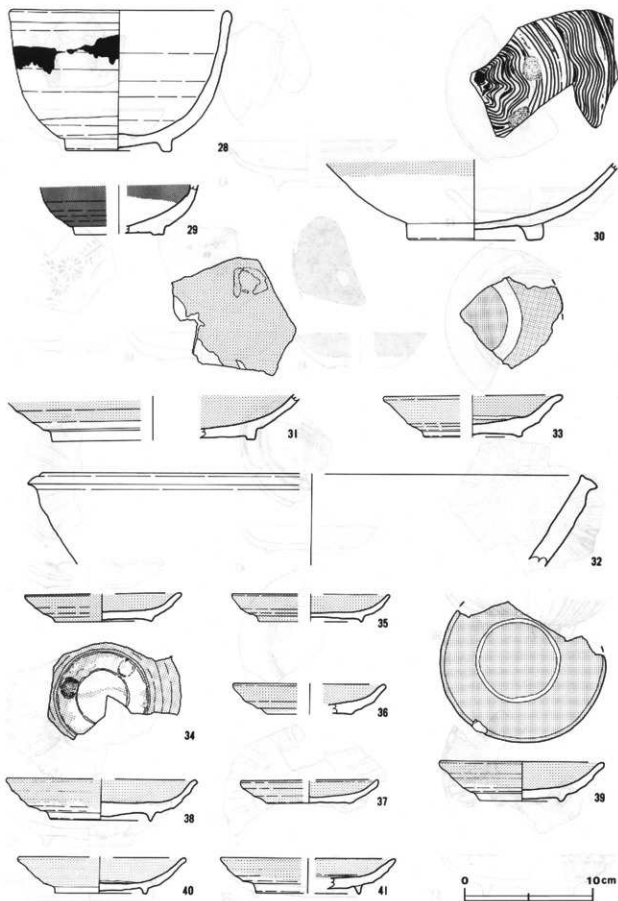
第91图 第4号土坑·出土遗物实测图(1)



第92图 第4号土坑出土文物实测图(2)

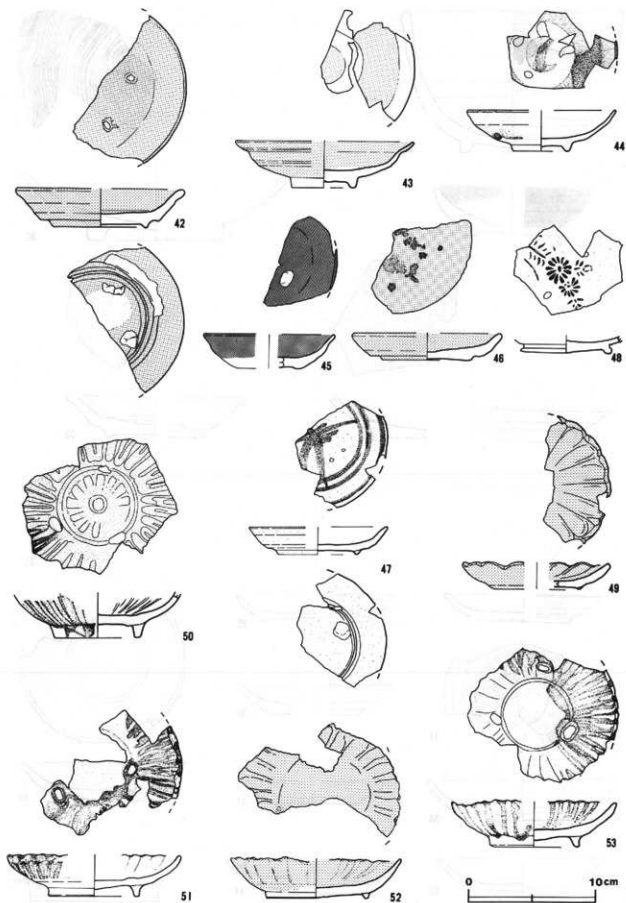


第93图 第4号土坑出土遗物实测图(3)

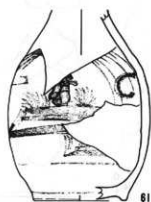
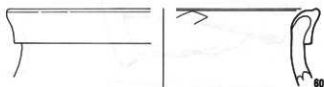
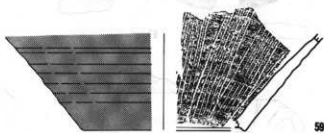
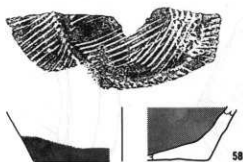
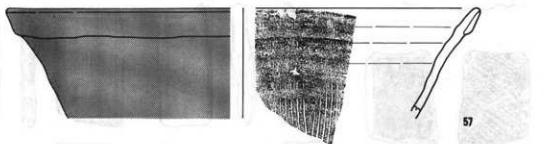
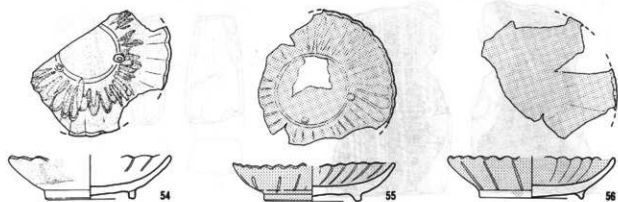


第94图 第4号土坑出土文物实测图(4)

63 国家博物馆出土文物图录 2010年

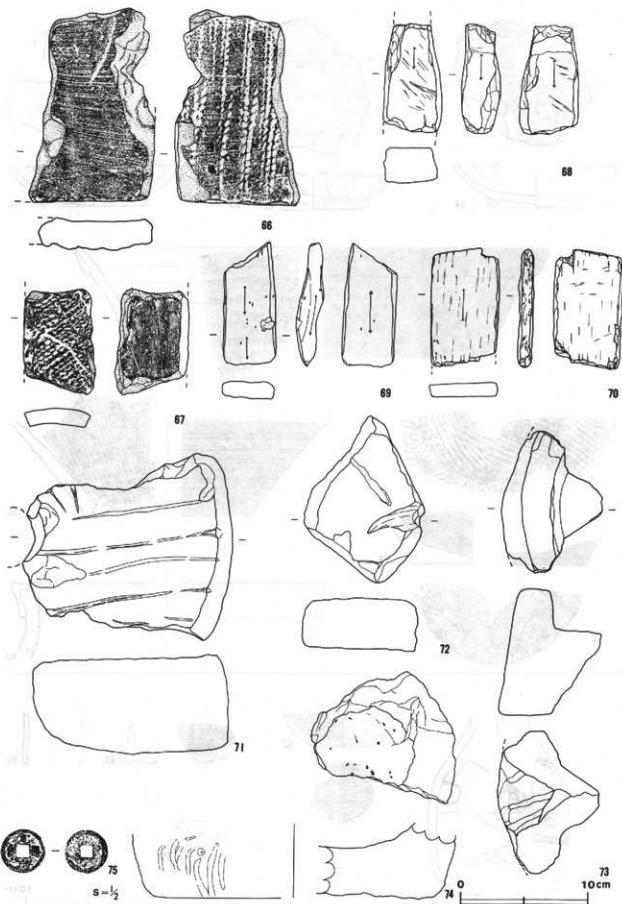


第95图 第4号土坑出土遗物实测图(5)



第96图 第4号土坑出土物实测图(6)

国家文物局出土文物普查队 编



第97图 第4号土坑出土文物实测图(7)

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第92図 5	壺 土師瓦土器	A (11.4)	体部上位、口縁部片。体部は内傾して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部内面～体部外面赤彩。	長石・スコリア 橙色 良好	P.L.35
		B (11.0)				P.962 10% 覆土
6	香 炉 土師瓦土器	A (11.8)	体部、口縁部片。体部は外傾して立ち上がり、直線的に口縁端部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。体部外面上位に横S字状の沈線文が描かれる。	長石・雲母 にぶい橙色 普通	P.L.35
		B (5.5)				P.979 20% 覆土
7	脚付土器 土師瓦土器	長さ (10.0)	脚部片。接地面に丸味をもつ。裾部でやや広がる棒状で、断面形は楕円形である。	脚部外面へう削り、指線汪痕。	長石・雲母・石英 にぶい橙色 普通	P.L.35 P.980 5% 覆土
8	不明土器 瓦質土器	長さ (7.0)	把手部片。断面形は楕円形で中を長方形の孔が通る。	把手部外面磨き。	砂粒・長石 灰色 普通	P.L.35 P.978 20% 覆土
9	火 鉢 瓦質土器	A (50.5)	脚部は3単位で獣足型である。体部は内彎して立ち上がり、口縁部外面の上下に各1条の隆帯が通る。口縁部内面にも1条の隆帯を貼付し、その上面には外面まで貫通した孔が通る。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部の隆帯間に型押しによる三つ巴の文様を施す。	長石・石英 黄灰色 普通	P.L.35
		B (17.0)				P.963 30% 覆土
10	火 鉢 瓦質土器	A (44.7)	口縁部片。口縁部は肥厚し、内側が内傾する。口縁部の上下に各1条の隆帯が通る。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部の隆帯間に型押しによる桐葉の文様を施す。	長石 灰色 普通	P.L.35
		B (7.2)				P.964 15% 覆土
11	火 鉢 瓦質土器	A (42.3)	口縁部片。口縁部は肥厚し、内側が内傾する。口縁部の上下に各1条の隆帯が通る。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部の隆帯間に型押しによる菊花の文様を施す。	長石 オリーブ黒色 普通	P.L.35
		B (11.9)				P.965 15% 覆土 二次焼成痕
第93図 12	火 鉢 瓦質土器	A (42.2)	口縁部片。口縁部は肥厚し、内側が内傾する。口縁部の上下に各1条の隆帯が通る。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部の隆帯間に型押しによる菊花の文様を施す。	長石 黄灰色 普通	P.L.36
		B (10.5)				P.966 10% 覆土
13	火 鉢 瓦質土器	B (12.6)	脚部～体部片。脚部は逆台形で、体部は外傾し、1条の隆帯が通る。	二次焼成による肌荒れ著しい。脚部、隆帯上にナデ痕を残す。	石英・長石 灰黄色 普通	P.L.36
		C (40.0)				P.967 30% 覆土
		E 3.5				
14	火 鉢 瓦質土器	A (16.0)	脚部～口縁部片。脚部は逆円錐形で、体部は内彎して立ち上がる。口縁部は肥厚する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。	長石・石英 灰黄色 普通	P.L.36
		B (6.4)				P.970 30% 覆土
		C (10.8)				
		E 1.9				
15	火 鉢 瓦質土器	A (20.8)	脚部～口縁部片。脚部は逆円錐形で、体部は内彎して立ち上がる。口縁部は肥厚する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部外周回転へう削り。	石英・長石 灰色 普通	P.L.36
		B 7.0				P.971 25% 覆土
		C (15.3)				
		E 1.7				
16	碗 陶 器	A (11.0)	天目形。底部、口縁部片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は内傾し、端部は外反する。	底部削り出し。内面～体部外面中位鉄輪。体部外面下位～高台部無輪。	長石 (胎土)灰白色 (輪)赤黒色 良好	P.1012 20% 覆土 瀬戸・美濃
		B 5.5				
17	碗 陶 器	B (6.0)	天目形。高台部～口縁部下位片。輪高台で、体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口縁部は内傾する。	削り出し高台。内面から体部外面中位鉄輪。体部下位～高台部無輪。	長石・石英 (胎土)淡黄色 (輪)赤黒色 良好	P.L.37
		D 4.5				P.1011 30% 覆土
		E 0.9				瀬戸・美濃

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第93図 18	碗 陶器	B (5.5)	高台部～体部下位片。高台は内 反りて、体部は外傾する。	削り出し高台。内面～体部外面 下位鉄軸。体部下端～高台部化粧 がけ。	長石・石英 (胎土)淡黄色 (軸)黒褐色 良好	P 1073 20% 覆土 瀬戸・美濃
		D 5.1				
		E 1.0				
19	碗 陶器	A (11.2)	やや腰の張った丸形。高台部～ 口縁部片。輪高台で、体部は内 彎して立ち上がり、口縁部はわ ずかに内傾する。	削り出し高台。内面～体部外面 下位長石軸。口縁部の一部鉄軸。 体部外面下端～高台部無軸。器 表面貫入。	長石 (胎土)灰白色 (胎土)青灰色・青緑色 良好	P L 37 P 1018 40% 覆土 瀬戸・美濃
		B 7.0				
		D (5.6)				
		E 0.9				
20	碗 陶器	A (12.4)	やや腰の張った丸形。体部、口 縁部片。体部は内彎して立ち上 がり、口縁端部に至る。	内面～体部外面下位鉄軸。口縁 部のみ鉄軸上に灰軸。体部外面 下端化粧がけ。	石英・長石 (胎土)淡黄色 (軸)黒褐色・灰黄色 良好	P 1013 30% 覆土 瀬戸・美濃
		B (6.6)				
21	碗 陶器	A (12.0)	丸形。高台部～口縁部片。輪高 台で、体部は内彎して立ち上 がり、口縁端部に至る。	削り出し高台。高台部下面を除 く全面に灰軸。高台下面に砂付 着。器表面貫入。	長石 (胎土)淡黄色 (軸)淡黄色 良好	P L 37 P 1017 50% 覆土 瀬戸・美濃
		B 7.5				
		D (5.0)				
		E 1.3				
22	碗 陶器	B (4.9)	丸形。高台部～体部片。輪高台 で、体部は内彎して立ち上がる。	削り出し高台。高台部下面を除 く全面に灰軸。器表面貫入。	長石 (胎土)灰白色 (軸)ぶい・黄褐色 良好	P L 37 P 1016 50% 覆土 瀬戸・美濃
		D 4.6				
		E 1.1				
23	碗 磁器	A (9.0)	丸形。高台部～口縁部片。輪高台 で、体部は内彎して立ち上がり、 口縁部に至る。底部の器厚が厚く、 口縁部に向かって徐々に薄くなる	染付。全面に透明釉。体部外面 に貝須による草花文を手描き。 高台内面に砂付着。	黒色微粒子 (胎土)透明 (軸)灰白色・青灰色 良好	P L 37 P 1019 40% 覆土 肥前
		B 4.3				
		D (4.5)				
		E 0.5				
24	碗 磁器	B (6.4)	やや腰の張った丸形。高台部～ 体部片。体部は内彎して立ち上 がる。	染付。体部外面に貝須による虫 文を手描き。高台内面に砂付着。	黒色微粒子 (胎土)灰白色 (軸)透明・青灰色 良好	P L 37 P 1079 25% 覆土 肥前
		D (4.7)				
		E 0.8				
25	碗 磁器	B (2.4)	高台部、体部片。輪高台で、体 部は内彎して立ち上がる。	青磁。高台部内面無軸。体部外 面に蓮華文を内彫り。	長石 (胎土)灰白色 (軸)緑灰色 良好	P 1082 5% 覆土 中国
		D (5.1)				
		E 0.8				
26	鉢 磁器	B (2.5)	高台部、体部下位片。断面形が 逆台形の輪高台で、体部は内彎 して立ち上がる。	青磁。見込み輪ハゲ部及び高台 部に鉄化粧がけ。	長石 (胎土)灰白色 (軸)明緑灰色 良好	P 1080 30% 覆土 肥前
		D 4.6				
		E 0.5				
27	鉢 磁器	B (2.6)	高台部、体部下位片。断面形が 逆台形の輪高台で、体部は内彎 して立ち上がる。	青磁。見込み輪ハゲ部及び高台 部に微細な砂粒付着。	長石 (胎土)灰白色 (軸)明緑灰色 良好	P 1061 30% 覆土 肥前
		D 4.1				
		E 0.8				
第94図 28	鉢 陶器	A 17.6	口縁部一部欠損。やや腰の張っ た丸形。輪高台で、体部は内彎 して立ち上がり、口縁端部は肥 厚し玉縁形になる。	内面～体部外面下位長石軸。体 部外面上位帯状に細鉄軸。体部 外面下端～高台部無軸。	長石 (胎土)灰白色 (軸)灰白色・青緑色 良好	P L 36 P 982 70% 覆土 瀬戸・美濃
		B 11.1				
		D 8.5				
		E 1.0				
29	鉢 陶器	B (3.8)	高台部、体部下位片。幅広の低 い高台で、体部は内彎して立ち 上がる。	体部内・外面に強いロクロ目。 削り出し高台。体部内・外面鉄 軸。見込み部分、体部外面下位 ～高台部外面化粧がけ。	長石・石英 (胎土)ぶい・褐色 (軸)暗褐色 良好	P 1078 15% 覆土 肥前
		D (7.0)				
		E 0.7				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第94図 30	鉢 陶器	B (6.0)	高台部、体部下位片。幅広い輪高台で、体部は内彎して立ち上がる。	三鳥手。見込み部分全体に白泥塗布後、波状文を線引き。体部外面下位～高台部無釉。見込み部分に砂目。	長石・石英 (胎土)に白い褐色 (釉)透明・白色 良好	P L37 P1010 20% 覆土 紀前
		D 10.6				
		E 1.3				
31	鉢 陶器	B (3.5)	大平鉢。高台部、体部下位片。低い輪高台で、体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	削り出し高台。内面～高台部側面灰釉。高台部内面無釉。見込み部分に目紋。	長石 (胎土)灰白色 (釉)灰色 良好	P1075 10% 覆土 瀬戸・美濃
		D (16.0)				
		E 0.8				
32	鉢 陶器	A (45.0)	厚鉢。体部、口縁部片。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口縁端部は外方にわずかにつまみ出される。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面平滑。無釉。	砂粒・長石・石英 (胎土)に白い赤褐色 (器表面)明赤褐色 良好	P1070 5% 覆土 常滑
		B (7.5)				
33	皿 陶器	A (14.2)	高台部～口縁部片。輪高台。体部は屈曲して外傾し、口縁部は外反する。	志野。削り出し高台。内面～体部下位長石釉。見込み輪ハゲ。体部下端～高台部無釉。	長石 (胎土)淡黄色 (釉)灰白色 良好	P1001 20% 覆土 瀬戸・美濃
		B 3.8				
		D (7.8)				
		E 0.6				
34	皿 陶器	A (12.5)	高台部～口縁部片。内反りの高台。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	志野。体部外面ロクロ目。削り出し高台。内面～高台部内面外周長石釉。高台部内面中心無釉。高台内面に目紋。	長石 (胎土)淡黄色 (釉)灰色 良好	P995 40% 覆土 瀬戸・美濃
		B 2.2				
		D 7.8				
		E 0.4				
35	皿 陶器	A (12.4)	高台部～口縁部片。断面形が逆三角形の低い輪高台。体部は内彎して立ち上がり、口縁端部に至る。	志野。体部外面下に強いロクロ目。削り出し高台。全面長石釉。貫入。見込み及び高台内面に目紋。	長石 (胎土)灰白色 (釉)灰白色 良好	P1004 30% 覆土 瀬戸・美濃
		B 2.2				
		D 8.1				
		E 0.5				
36	皿 陶器	A (12.0)	高台部～口縁部片。内反りの高台。体部は外傾して立ち上がり、中位に横がある。口縁部はわずかに外反する。	志野。削り出し高台。内面～高台外面長石釉。紋肌。高台内面無釉。	長石 (胎土)淡黄色 (釉)灰白色 良好	P1002 40% 覆土 瀬戸・美濃
		B 2.4				
		C (6.0)				
37	皿 陶器	A (11.8)	高台部～口縁部片。内反りの高台。体部は内彎して立ち上がり、口縁端部に至る。	志野。削り出し高台。内面～体部外面下端長石釉。高台内面無釉。見込み及び高台内面に目紋。	長石 (胎土)淡黄色 (釉)灰白色 良好	P1003 40% 覆土 瀬戸・美濃
		B 1.9				
		C (6.7)				
38	皿 陶器	A (14.9)	高台部～口縁部片。断面形が逆三角形の輪高台。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	体部外面に強いロクロ目。内面～外面下位灰釉。体部外面下端～高台部無釉。見込みに重ね焼きの高台痕。	長石 (胎土)灰白色 (釉)灰白色 良好	P997 40% 覆土 瀬戸・美濃
		B 3.3				
		D (8.0)				
		E 0.6				
39	皿 陶器	A 13.0	口縁部、体部一部欠損。断面形が逆三角形の輪高台。体部は内彎して立ち上がり、上位に横がある。口縁部はわずかに外反する。	体部外面下に強いロクロ目。削り出し高台。内面～体部外面中位灰釉。体部外面下位～高台部無釉。見込みに重ね焼きの高台痕。炭化物付着。	長石 (胎土)灰白色 (釉)灰黄色 良好	P L37 P991 70% 覆土 瀬戸・美濃
		B 3.1				
		D 6.6				
		E 0.5				
40	皿 陶器	A (13.3)	高台部分～口縁部片。断面形が逆台形の輪高台。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	体部外面にロクロ目。削り出し高台。内面～体部外面下位灰釉。体部外面下端～高台部無釉。見込みに重ね焼きの高台痕。	長石 (胎土)灰黄色 (釉)灰オリーブ色 良好	P996 50% 覆土 瀬戸・美濃
		B 2.8				
		D 7.2				
		E 0.5				
41	皿 陶器	A (13.6)	高台部～口縁部片。断面形が逆三角形の輪高台。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	体部外面にロクロ目。削り出し高台。内面～体部外面中位灰釉。体部外面下位～高台部無釉。見込みに重ね焼きの高台痕。	長石 (胎土)灰白色 (釉)灰オリーブ色 良好	P994 25% 覆土 瀬戸・美濃
		B 2.6				
		D (8.1)				
		E 0.7				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
第95図 42	皿 陶器	A (13.4)	高台部～口縁部片。断面形が逆三角形の輪高台。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。	削り出し高台。内面～高台部内面外周灰釉。高台部内面中心部無釉。見込み及び高台内面に目痕。体部外面下端に融着物。	長石 (胎土)灰黄褐色 (釉)灰オリーブ色 良好	P 992 40% 覆土 瀬戸・美濃	
		B 3.1					
		D 7.4					
		E 0.5					
43	皿 陶器	A (14.0)	高台部～口縁部片。断面形が逆三角形の小さな輪高台。体部は内彎して立ち上がり、口縁部で屈曲する。	体部外面クロロ目。削り出し高台。内面～体部外面下位灰釉。体部外面下端～高台部無釉。見込み輪ハゲ。	長石 (胎土)灰白色 (釉)灰白色 良好	P 999 20% 覆土 瀬戸・美濃	
		B 3.7					
		D (5.0)					
		E 0.8					
44	皿 陶器	A (12.0)	高台部～口縁部片。断面形が逆三角形の小さな輪高台。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	削り出し高台。内面～体部外面下位緑釉。体部外面下端～高台部無釉。見込み輪ハゲ。見込みに4か所の目痕。	黒色微粒子 (胎土)灰白色 (釉)オリーブ色 良好	P L 37 P 1000 30% 覆土 肥前	
		B 3.3					
		D 4.5					
		E 0.6					
45	皿 陶器	A (10.4)	高台部～口縁部片。内反りの高台。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	体部外面クロロ目。削り出し高台。内面～体部外面中位灰釉。体部外面下位～高台部化整がけ。見込みに目痕。	長石・石英 (胎土)淡黄色 (釉)オリーブ色 良好	P 1015 40% 覆土 瀬戸・美濃	
		B 2.8					
		C (5.0)					
46	皿 陶器	A (11.8)	高台部～口縁部片。内反りの高台。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	鉄絵志野。体部外面下位クロロ目。削り出し高台。内面～高台部面長石釉。見込みに鉄絵による文様。高台部内面無釉。	長石 (胎土)オリーブ色 (釉)灰白色 良好	P L 37 P 1007 40% 覆土 瀬戸・美濃	
		B 2.2					
		C 7.2					
47	皿 陶器	A (10.8)	高台部～口縁部片。断面形が逆三角形の低い輪高台。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	鉄絵志野。体部外面下位クロロ目。付け高台。全面長石釉。見込みに鉄絵による歯竹文を手摺き。見込み及び高台内面に目痕。	長石 (胎土)淡黄色 (釉)淡黄色・黒褐色 良好	P L 37 P 1009 40% 覆土 瀬戸・美濃	
		B 2.2					
		D (6.2)					
		E 0.4					
48	皿 陶器	B (1.4)	高台部。体部下位片。断面形が方形の輪高台。高台側面に沈線が走る。体部は内彎気味に外傾する。	灰釉滑釉。削り出し高台。見込み部灰釉。滑釉による鉄絵の草花文。体部外面下位～高台部無釉。見込みに目痕3か所。	長石 (胎土)淡黄色 (釉)淡黄色・黒褐色 良好	P L 37 P 1008 40% 覆土 瀬戸・美濃	
		D 7.3					
		E 0.5					
49	皿 陶器	A (11.8)	菊皿。高台部～口縁部片。幅が狭く低い輪高台。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	志野。菊花形に型打ちし、口縁部を花卉状にへうで切り込みを入れる。付け高台。高台中心部を絵く全面に長石釉。	長石 (胎土)淡黄色 (釉)灰白色 良好	P 989 20% 覆土 瀬戸・美濃	
		B 2.1					
		D (7.0)					
		E 0.3					
50	皿 陶器	B (3.6)	菊皿。高台部～体部片。断面形が方形の輪高台。体部は内彎して立ち上がる。	黄瀬戸刷緑釉流し。菊花形に型打ち。見込みに菊花文。内面～体部外面下位灰釉。一部刷緑釉。高台内面無釉。見込みに目痕3か所。	長石 (胎土)淡黄色 (釉)淡黄色・黒褐色 良好	P L 37 P 984 55% 覆土 瀬戸・美濃	
		D 6.8					
		E 1.0					
51	皿 陶器	A (13.7)	菊皿。高台部～口縁部片。断面形が方形の輪高台。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	黄瀬戸刷緑釉流し。菊花形に型打ち。内面～体部外面下位灰釉。口縁部内外面刷緑釉。体部外面下端～高台内面無釉。見込みに目痕。	長石 (胎土)淡黄色 (釉)淡黄色・黒褐色 良好	P L 37 P 987 30% 覆土 瀬戸・美濃	
		B 3.2					
		D 7.1					
		E 0.7					
52	皿 陶器	A (13.4)	菊皿。高台部～口縁部片。幅が狭く低い輪高台。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	灰釉。菊花形に型打ちし、口縁部花卉状の切り込み。付け高台。内面～体部外面下位灰釉。体部外面下端～高台内面無釉。見込みに目痕。	長石 (胎土)淡黄色 (釉)オリーブ黄色 良好	P 988 40% 覆土 瀬戸・美濃	
		B 3.1					
		D 8.0					
		E 0.5					
53	皿 陶器	A (13.2)	菊皿。高台部～口縁部片。断面形が方形の輪高台。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	灰釉刷緑釉流し。菊花形に型打ち。内面～体部外面下位灰釉。口縁部内外面刷緑釉。体部外面下端～高台内面無釉。見込みに目痕3か所。	長石 (胎土)灰黄褐色 (釉)淡黄色・黒褐色 良好	P L 37 P 983 60% 覆土 瀬戸・美濃	
		B 3.5					
		D 7.1					
		E 0.8					

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第96図 54	皿 陶器	A (12.8)	菊皿。高台部～口縁部片。断面形が方形の輪高台。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外縁する。	灰釉輪縁輪流し。菊花形に型打ち。内面～体部外面下位灰釉。見込みに銅線軸。体部外面下端～高台内面無軸。見込みに目肌。	長石 (胎土)灰白色 (釉)灰白・青灰色 良好	P L37 P 985 55% 覆土 瀬戸・美濃
		B 3.5				
		D 7.0				
		E 0.8				
55	皿 陶器	A (12.9)	菊皿。高台部～口縁部片。断面形が方形の輪高台。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外縁する。	灰釉。菊花形に型打ち。口縁部に花卉状の切り込み。内面～高台部裏面灰釉。高台内面無軸。見込みに目肌。	長石 (胎土)灰白色 (釉)灰オリーブ色 良好	P 986 50% 覆土 瀬戸・美濃
		B 3.1				
		D 7.7				
		E 0.5				
56	皿 陶器	A (13.2)	菊皿。高台部～口縁部片。断面形が逆三角形の輪高台。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	灰釉。菊花形に型打ち。付け高台。内面～体部外面下位灰釉。体部外面下端～高台内面無軸。	長石 (胎土)灰黄色 (釉)灰オリーブ色 良好	P 990 30% 覆土 瀬戸・美濃
		B 3.2				
		D 8.2				
		E 0.6				
57	深鉢 陶器	A (37.4)	体部上位～口縁部片。体部は内彎気味に外傾し、口縁部で肥厚する。	口縁部外面に粘土粒付。体部内面に6条1単位の條目。体部内面～外面鉄軸。	長石 (胎土)灰白色 (釉)暗褐色 良好	P 1020 10% 覆土 瀬戸・美濃
		B (8.7)				
58	深鉢 陶器	B (4.3)	底部～体部下位片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転糸切り。体部内面、見込み部分に7条1単位の條目。内面～底部外周鉄軸。底部中心無軸。	長石 (胎土)淡黄色 (釉)暗褐色 良好	P L37 P 1021 10% 覆土 瀬戸・美濃
		C (13.8)				
59	深鉢 陶器	B (7.6)	体部下位片。体部はわずかに外反して立ち上がる。	体部外面顕著なクロロ目。体部内面に6条1単位の條目。体部内・外面鉄軸。	長石 (胎土)灰黄褐色 (釉)暗褐色 良好	P 987 10% 覆土 瀬戸・美濃
		C (13.0)				
60	甕 陶器	A (24.8)	頸部、口縁部片。頸部は内傾し、口縁部は直立する。口縁部には縁帯がめぐる。	口縁部内・外面横ナデ。紐造り。無軸。	長石 (胎土)褐色 良好	P 1068 5% 覆土 常滑
		B (6.0)				
61	磁器	B (15.1)	ラッキョウ形磁器。高台部～頸部片。断面形が逆台形の低い輪高台。体部はやや長い球状で、狭肩である。	染付。外面全体に透明釉。内面無軸。体部外面に呉須によって草や藤(?)を手描き。高台下面に砂付着。	黒色微粒子 (胎土)灰白色 (釉)明滑灰色・青灰色 良好	P L37 P 1024 30% 覆土 肥前
		D 7.3				
		E 0.3				
62	茶入れ 陶器	B (2.7)	底部、体部下位片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面下位クロロ目。底部回転糸切り。内面鉄軸。体部下位、底部無軸。	長石・石英 (胎土)灰色 (釉)暗褐色 良好	P L37 P 1014 40% 覆土 瀬戸・美濃
		C 4.8				
63	水瀝 陶器	B (3.2)	魚形。エラ、胸ビレ部片。	型造り。外面鉄軸。内面、底面無軸。	長石・石英 (胎土)灰黄色 (釉)暗褐色 良好	P L37 P 1025 20% 覆土 瀬戸・美濃
		C (4.2)				
64	灰吹 陶器	B (4.2)	筒形。体部下位片。体部はわずかに内傾して立ち上がる。	体部外面透明釉。細かい貫入。内面無軸。	長石 (胎土)灰白色 (釉)透明 良好	P 1026 20% 覆土 不明
		C (3.3)				
65	仏飯器 陶器	B (3.3)	脚部、環底部片。中空の脚部で、裾部がラッパ状に開く。	環部内面～脚部外面中位灰釉。貫入。脚部外面下位～脚部内面無軸。	長石 (胎土)灰白色 (環)灰白色・オリーブ黄 良好	P 1077 40% 覆土 瀬戸・美濃
		C (3.3)				

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第97図 66	平瓦	(15.3)	(9.9)	2.6	(430.5)	覆土 P.L.36 D.P.8	凸面に縄目叩き
67	丸瓦	(8.4)	(5.8)	1.5	(81.4)	覆土 D.P.9	凹面に布当痕 凸面に縄目叩き
68	砥石	(8.6)	4.7	3.1	(187.1)	覆土 P.L.36 Q.10	凝灰岩
69	砥石	(9.7)	4.3	2.2	(98.0)	覆土 P.L.36 Q.11	凝灰岩
70	砥石	(9.4)	5.5	1.2	(116.5)	覆土 P.L.36 Q.12	凝灰岩
71	石臼	推定径 (33.5)		7.9	0.729.0	覆土 P.L.36 Q.13	安山岩 下白片
72	石臼	最大長 (13.1)		4.1	(435.3)	覆土 P.L.36 Q.14	安山岩 上白片
73	石臼	推定径 (26.0)		10.0	(618.8)	覆土 P.L.36 Q.15	安山岩 上白片
74	埴壇	現存高 (5.9)		推定底径 (22.0)		覆土 P.L.36 Q.17	礫岩 内面は熱を受け平滑
75	銅銭	径 2.3		1.0	3.2	覆土 P.L.46 M.36	青銅製 寛永通寶

第7号土坑 (第98図)

位置 調査区の東端部中央, C6b区。

重複関係 本跡は, 第129号土坑と重複している。本跡が第129号土坑の上に構築されていることから本跡が新しい。

規模と平面形 長径2.7m, 短径2.65mの円形で, 深さ50cmである。

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

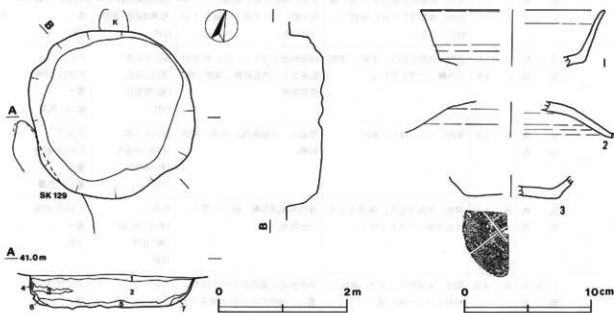
底面 鍋底状である。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|--------|--------------------|
| 1 黒色 | ローム粒子微量 | 5 黒色 | ローム粒子少量, ロームブロック微量 |
| 2 黒色 | ローム粒子少量, 炭化物・ロームブロック微量 | 6 黒色 | ロームブロック中量, ローム粒子少量 |
| 3 黒色 | ローム粒子微量 | 7 極暗褐色 | ローム粒子中量, ロームブロック少量 |
| 4 極暗褐色 | ローム粒子中量, ロームブロック微量 | | |

覆土 7層からなる。自然堆積と考えられる。

遺物 土師器片223点, 須恵器片56点及び弥生土器片11点が出土している。第98図3は須恵器杯の底部片で, 底部にヘラ記号が施されている。



第98図 第7号土坑・出土遺物実測図

所見 本跡は、出土遺物から奈良時代（8世紀後半）の土坑と考えられる。

第7号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第99図 1	高台付杯 須恵器	A (14.6)	体部、口縁部片。高台部欠損。	口縁部、体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石	P897 5% 覆土
		B (4.4)	体部は屈曲して外傾し、口縁部はやや外反する。	体部下端回転へう削り。	灰色 良好	
2	蓋 須恵器	B (2.8)	天井部片。天井部は丸味をもつ。	天井部回転へう削り。	小礫・海輪骨針 灰黄色 良好	P898 10% 覆土

第36号土坑（第99図）

位置 調査区の東部南側，B5i区。

規模と平面形 径約0.9mの円形で、深さ103cmまで掘り下げたが底面には達しなかった。土坑上部の周囲には厚さ約20cm、幅約30cmの範囲でドーナツ状に粘土と黒色土が貼られている。

壁面 垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 9層からなる。土層1～3は貼られた粘土及び黒色土。土層4～9は自然堆積と考えられるが、土層8には小礫が多量に含まれていることから、あるいは一部人為堆積の可能性もある。

土層解説

- | | |
|-------------------------------------|-----------------------------|
| 1 灰黄色 粘土層 | 6 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・小礫微量 |
| 2 黒色 ローム粒子少量 | 7 黒色 ローム粒子少量 |
| 3 黒色 粘土ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子微量 | 8 黒褐色 小礫少量、ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 4 黒褐色 ローム粒子・小礫少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 黒色 ローム粒子中量、小礫少量、ロームブロック微量 |
| 5 黒褐色 ローム粒子少量、粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子・小礫微量 | |

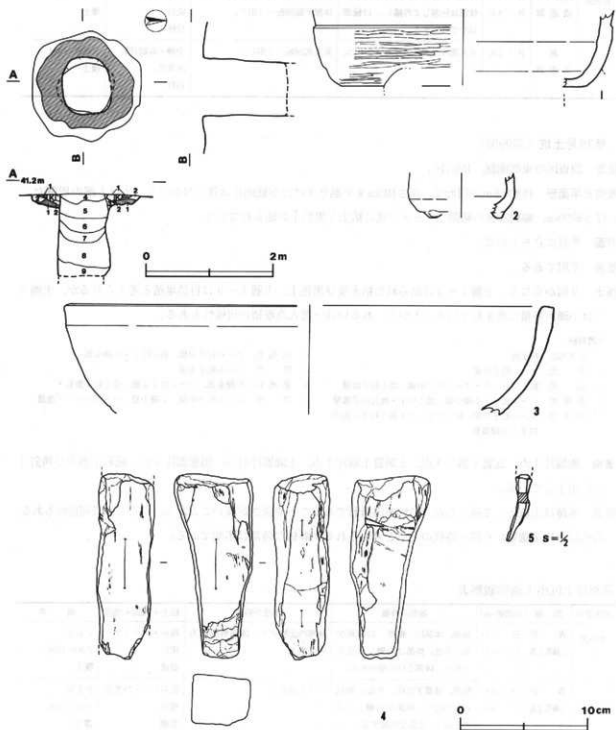
遺物 陶器片1点、瓦質土器片3点、土師質土器片1点、土師器片41点、須恵器片4点、砥石1点及び角釘1点出土している。

所見 本跡は土坑として扱ったが、形状が円筒形であることや深さが深いことから、井戸である可能性もある。時代は、出土遺物から江戸時代のものと考えられるが詳細な時期は不明である。

第36号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第99図 1	香伊 土師質土器	B (6.1)	底部、体部片。脚部、口縁部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、体部上位に段がある。	体部内面横ナデ。体部外面横方 向の磨き。	長石・スコリア	P L38 P900 10% 覆土
		C (19.4)			褐色 普通	
2	香伊 土師質土器	B (3.6)	底部、体部下位片。平底に瘤状の足が付く。体部は内彎して立ち上がり、上方で内傾する。	ロクロ成形。	長石・スコリア・雲母	P L38 P901 10% 覆土
		C 6.8			褐色 普通	
3	土師 瓦質土器	A (38.7)	体部、口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、11線端部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外 面下端回転へう削り。	砂粒・長石・石英	P L38 P902 5% 覆土 体部外面露付着
		B (8.6)			灰色 普通	

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第99図 4	磁石	14.5	6.3	4.5	518.2	覆土	P L 38 Q 8 凝灰岩
5	角釘 (3.5)	(0.8)	0.5	2.2	覆土	P L 46 M 34 鉄製	



第99図 第36号土坑・出土遺物実測図

第85号土坑 (第100図)

位置 調査区の西端部, B1c区。

規模と平面形 径0.9mの円形で、深さ15cmである。

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 鍋底状である。

土層解説

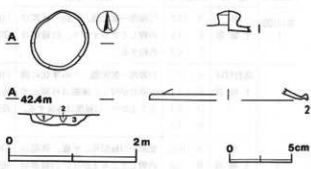
- 1 黒色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、ロームブロック微量

覆土 3層からなる。堆積状況は不明である。

遺物 土師器片1点、須恵器片2点が出土している。

第100図 第85号土坑・出土遺物実測図

所見 本跡は、出土遺物から奈良時代(8世紀前半)の土坑と考えられる。



第85号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第100図 1	蓋 須恵器	B (1.5)	つまみ部片。小ぶりの宝珠形 つまみが付く。	つまみ貼り付け後、側面ナデ。	長石 灰色 良好	P909 5% 覆土
2	蓋 須恵器	A (12.6) B (0.9)	口縁部片。口縁端部は屈曲する。	口縁部内・外面横ナデ。	長石 黄灰色 良好	P910 5% 覆土

第124号土坑 (第101図)

位置 調査区の東部南側, B5h区。

重複関係 本跡は、第20号住居跡と重複している。本跡が第20号住居跡の竈を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と平面形 径約0.9mの円形で、深さは確認面から約55cmである。

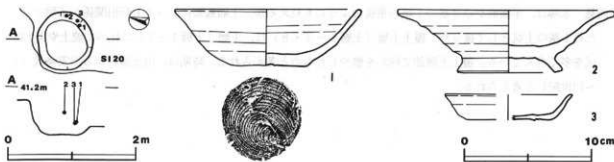
壁面 外傾して立ち上がる。

底面 鍋底状である。

覆土 不明である。

遺物 土師器の坏、高台付坏及び皿各1点と土師器片2点が出土している。第101図1の坏、2の高台付坏及び3の皿は覆土中層からの出土である。

所見 出土遺物から、平安時代(10~12世紀)の土坑と考えられる。



第101図 第124号土坑・出土遺物実測図

第124号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第101図 1	環 土師器	A 14.7	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	砂粒・長石 に い い 黄 褐色 良好	P L38 P912 70% 覆土中層
		B 4.5				
		C 6.2				
2	高台付環 土師器	A 17.2	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	砂粒・長石・スコリア 浅黄褐色 良好	P L38 P913 70% 覆土中層
		B 5.1				
		D 8.3				
		E 1.2				
3	皿 土師器	A (10.0)	底部～口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	砂粒・長石 浅黄褐色 良好	P L38 P914 40% 覆土中層
		B 2.0				
		C (6.8)				

第125号土坑 (第102図)

位置 調査区中央部北側, B4b, 区。

規模と平面形 平面形はいびつな鍵穴形で、北側が長軸1.7m, 短軸1.6mの方形, 南側が長径3.1m, 短径1.6mの楕円形である。全長は3.2m, 深さは10～30cmである。

長軸方向 N-6°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 北側の方形部では南側に傾斜しており、南側の楕円形部では凹凸がある。ピットが6か所(P₁～P₆)ある。P₁～P₅は径20～40cmの円形で、深さは8～30cmである。P₆は一辺60cmの方形で、深さは10cmである。これらのピットが本跡に伴うものであるかは不明である。

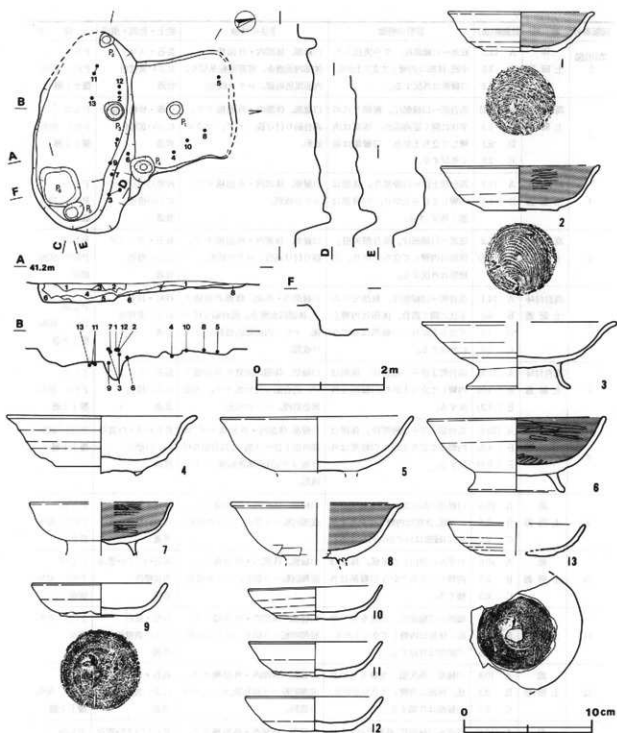
覆土 8層からなり、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 オリーブ褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 にい黄褐色 焼土ブロック中量, 焼土粒子・ローム粒子少量, 炭化物微量
- 3 暗灰黄色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量, ロームブロック微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 黒色 ローム粒子少量, ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土ブロック微量
- 8 黄灰色 灰多量, ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片780点, 須恵器片52点, 灰釉陶器片4点, 羽釜片1点及び眞鍮片1点が出土している。第102図4, 5, 8の高台付環及び10の皿は北側の方形部の, 6の高台付環及び9, 11, 13の皿は南側の楕円形部の床面及び覆土下層から出土している。

所見 本跡は、平面形から2基の上坑の重複のようにも見えるが、土層観察によっても新旧関係が不明であるため1基の土坑として扱った。覆土上層(土層1～3・8)は、下層(土層4～7)に比べて焼土や炭化物, 灰を多く含んでいる。覆土上層部で何かを燃やしたものと考えられる。時期は、出土遺物から平安時代(10～12世紀)と考えられる。



第102図 第125号土坑・出土遺物実測図

第125号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第102図 1	坏	A 11.5	完形。やや突出した平底。体部	口縁部、体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石	P L 38
	土師器	B 4.5	は内彎して立ち上がり、口縁部	底部回転糸切り。ロクロ成形。	にぶい黄褐色	P 922 100%
		C 6.2	はわずかに外反する。		普通	覆土上層

図説番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第102図	環土師器	A 12.5	底部～口縁部片。やや突出した	口縁部、体内内・外面横ナデ。 体内内面磨き。底部回転承切り。 内面黒色処理。ロクロ成形。	長石・スコリア にぶい黄褐色 普通	P L 38 P 915 60% 覆土上層
		B 3.5	平底。体部は内彎して立ち上がり、			
		C 5.8	口縁部は外反する。			
3	高台付環土師器	A [16.0]	高台部～口縁部片。唇部で八の	口縁部、体内内・外面横ナデ。 高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	小塵・砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通	P L 38 P 917 40% 覆土上層
		B 5.3	字状に開く足高台。体部は内			
		D 8.1	彎して立ち上がり、口縁部は強			
		E 2.0	く外反する。			
4	高台付環土師器	A 15.2	高台部上位～口縁部片。体部は	口縁部、体内内・外面横ナデ。 ロクロ成形。	砂粒・長石・スコリア にぶい褐色 普通	P L 38 P 918 70% 底面
		B (4.5)	内彎して立ち上がり、口縁部は 強く外反する。			
5	高台付環土師器	A 15.2	底部～口縁部片。高台部欠損。	口縁部、体内内・外面横ナデ。 貼り付け高台。ロクロ成形。	長石・スコリア にぶい褐色 普通	P L 38 P 920 50% 底面
		B (4.3)	体部は内彎して立ち上がり、口 縁部は外反する。			
6	高台付環土師器	A 14.1	高台部～口縁部片。唇部で八の	口縁部内・外面、体部外面横 ナデ。体内内面磨き。高台貼り付 け後、ナデ。内面黒色処理。ロク ロ成形。	砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通	P L 38 P 916 60% 覆土下層
		B 6.0	字状に開く高台。体部は内彎し			
		D 7.6	て立ち上がり、口縁部はわずか			
		E 1.5	に外反する。			
7	高台付環土師器	A (11.5)	高台部上位～口縁部片。体部は	口縁部、体内内面磨き、外面横 ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内 面黒色処理。ロクロ成形。	長石・スコリア にぶい褐色 普通	P L 38 P 919 50% 覆土上層
		E (1.2)	内彎して立ち上がり、口縁部は外 反する。			
8	高台付環土師器	A [13.5]	高台部上位～口縁部片。体部は	口縁部、体内内・外面横ナデ。体 部外面下位へう削り。高台貼り付 け後、ナデ。内面黒色処理。ロク ロ成形。	長石・スコリア・雲母 にぶい褐色 普通	P 921 20% 覆土下層
		B (4.8)	内彎して立ち上がり、口縁部は外 反する。			
		E (0.6)				
9	土師器	A 10.8	口縁部一部欠損。わずかに突出し	口縁部、体内内・外面横ナデ。 底部回転へう切り。ロクロ成形。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P L 38 P 923 95% 底面
		B 2.6	た平底。体部は内彎して立ち上			
		C 6.6	り、口縁部はわずかに外反する。			
10	土師器	A 10.5	わずかに突出した平底。体部は	口縁部、体内内・外面横ナデ。 底部回転へう切り。ロクロ成形。	長石・スコリア・雲母 黄褐色 普通	P L 38 P 924 95% 底面
		B 2.7	内彎して立ち上がり、口縁部は外 反する。			
		C 6.3				
11	土師器	A 10.1	底部～口縁部片。丸味をもつ平	口縁部、体内内・外面横ナデ。 底部回転へう切り。ロクロ成形。 普通	砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通	P 925 70% 底面
		B 2.8	底。体部は内彎して立ち上がり、			
		C 6.5	口縁部は外反する。			
12	土師器	A 10.8	口縁部一部欠損。丸味をもつ平	口縁部、体内内・外面横ナデ。 底部回転へう切り後、ナデ。ロク ロ成形。	長石・スコリア にぶい黄褐色 普通	P L 38 P 926 90% 覆土上層
		B 2.7	底。体部は内彎して立ち上がり、			
		C 6.3	口縁部は外反する。			
13	土師器	A (10.8)	底部～口縁部片。底部はわずかに	口縁部、体内内・外面横ナデ。 底部回転へう切り。ロクロ成形。 底部中央に焼成後、穿孔。	長石・スコリア・雲母 にぶい黄褐色 普通	P L 38 P 927 60% 底面
		B 2.6	突出した平底。体部は内彎して立			
		C (5.9)	ち上がり、口縁部は外反する。			

第127号土坑（第103図）

位置 調査区中央部東側、B5d区。

重複関係 本跡は、第25A、25B、25C号各住居跡と重複している。本跡が3住居跡の中で最も新しい第25B号住居跡を掘り込んでいることから本跡が4遺構の中で最も新しい。

規模と平面形 第25A号住居跡の柱穴と一部重複しているため、正確な規模と平面形は不明だが、径約0.8mの円形と推定される。深さは第25B号住居跡の床面から60cmである。

壁面 垂直に立ち上がる。

底面 鍋底状である。

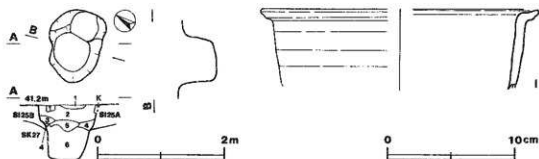
覆土 6層からなり、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|----------------------|------------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子微量 | 4 黒褐色 ローム粒子多量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量 | 5 黒色 ローム粒子微量 |
| 3 黒色 ローム粒子微量 | 6 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、ロームブロック微量 |

遺物 土師器片19点、須恵器片3点が出土している。覆土中から出土した第103図1の甕はクロロによって成形されている。

所見 本跡は、出土遺物から平安時代(10~12世紀)の土坑と考えられる。



第103図 第127号土坑・出土遺物実測図

第127号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・装成	備考
第103図 1	甕 土師器	A (21.9) B (6.2)	体部上位、口縁部片。体部はわずかに内彎しながら外傾して立ち上がり、短い口縁部は外反する。	口縁部内・外面、体部外面横ナデ。体部内面斜方向のナデ。クロロ成形。	長石・雲母 灰黄褐色 普通	P832 10% 覆土

第129号土坑(第118図)

位置 調査区の東端部、C6c₁区。

重複関係 本跡は、第7号土坑と重複している。本跡が第7号土坑に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 長径2.25m、短径0.6mの細長い楕円形で、深さ100cmである。

長径方向 N-50°-W

壁面 ほぼ垂直である。北西から北東壁にかけては上方で一部オーバーハングしている。

底面 緩やかな凹凸がある。

覆土 6層からなり、自然堆積である。

土層解説

- | | |
|--------------------------------|---------------------------|
| 1 黄褐色 ロームブロック・ローム粒子多量、スコリア粒子中量 | 4 におい黄褐色 ローム粒子多量、スコリア粒子微量 |
| 2 明黄褐色 ローム粒子多量、スコリア粒子少量 | 5 黄褐色 ローム粒子多量 |
| 3 明黄褐色 ローム粒子多量、スコリア粒子微量 | 6 黒褐色 ローム粒子少量 |

所見 本跡は、出土遺物はないが、その形状や覆土の状況から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第133号土坑 (第104図)

位置 調査区の中央部南側, B4d区。

規模と平面形 長軸2.35m, 短軸2.05mの隅丸長方形で, 深さ40cmである。

長軸方向 N-15°-W

壁面 ほぼ垂直である。

底面 緩やかな凹凸があるがほぼ平坦である。東壁際に浅いピットがある。

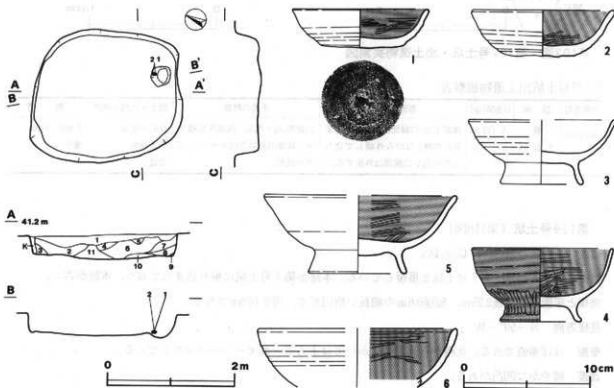
覆土 11層からなり, 一部人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------------------------|------------------------------|
| 1 極暗褐色 ロームブロック・ローム粒子少量 | 7 黒色 ロームブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒色 ローム粒子少量, ロームブロック微量 | 8 黒色 ロームブロック・ローム粒子少量 |
| 3 黒色 ローム粒子少量 | 9 褐色 ロームブロック多量 |
| 4 黒褐色 ローム粒子微量 | 10 黒褐色 ローム粒子少量 |
| 5 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 11 黒色 炭化粒子・ローム粒子微量 |
| 6 黒色 ローム粒子少量, 炭土粒子微量 | |

遺物 土師器片55点, 須恵器片7点, 羽釜1点及び弥生土器片1点が出土している。第104図1, 2の環は土坑内ピットの覆土上層からの出土である。

所見 本跡は, 出土遺物から平安時代(10~12世紀)の土坑と考えられる。



第104図 第133号土坑・出土遺物実測図

第133号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第104図 1	環 土師器	A 11.5	口縁部一部欠損。やや突出した	口縁部内・外面, 体部外面横ナデ。	長石・スクリヤ・雲母 にふい黄褐色 普通	P L38 P 936 75% ピット覆土
		B 3.1	平底, 体部は内彎して立ち上がり,	体部内面磨き。底部凹陥ヘラ切り。		
		C 6.6	口縁端部に至る。	内面黒色処理。クロロ成形。		

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第104図 2	坏 土師器	A 11.4	口縁部一部欠損。やや丸味をもった平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面、体部外面横ナデ、体部内面磨き、底部回転ヘラ切り。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石・スコリア・雲母にふい黄褐色 普通	P937 70% ビット覆土
		B 3.7				
		C 4.9				
3	高台付坏 土師器	A (11.7)	高台部～口縁部片。ハの字状に開く高台。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	砂粒・長石・スコリア 淡黄褐色 普通	P L38 P940 35% 覆土 体部内面煤付着
		B 5.1				
		D 6.5				
		E 1.7				
4	高台付坏 土師器	A (11.3)	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	体部内面、体部外面下位磨き。内・外面黒色処理。ロクロ成形。	長石・石英 黒色 普通	P L38 P938 70% 覆土
		B 5.8				
		D 6.5				
		E 1.4				
5	高台付坏 土師器	A (15.2)	高台部～口縁部片。ハの字状に開く高台。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	体部内面横方向、見込み放射状の磨き。体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石・雲母 にふい黄褐色 普通	P939 30% 覆土
		B 6.2				
		D 7.7				
		E 1.9				
6	高台付坏 土師器	A (15.7)	体部～口縁部片。高台部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面、体部外面横ナデ。体部内面磨き。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石 にふい黄褐色 普通	P941 30% 覆土
		B (4.7)				

第142号土坑 (第105図)

位置 調査区の中央部東側、B4c1区。

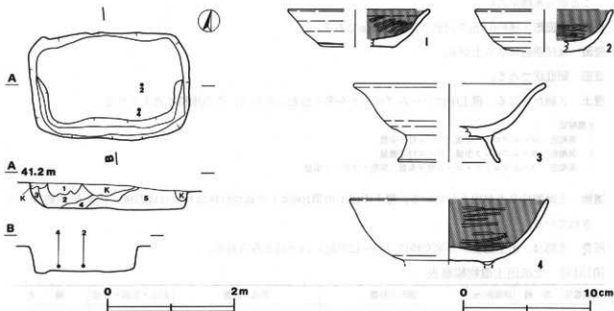
規模と平面形 長軸2.5m、短軸1.65mの隅丸長方形で、深さ40cmである。

長軸方向 N-76°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。南側半分の壁下に浅い溝が巡る。

覆土 5層からなり、自然堆積と考えられる。



第105図 第142号土坑・出土遺物実測図

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子少量, ロームブロック・焼土粒子微量
 2 暗褐色 ローム粒子少量, ロームブロック・白色粘土粒子微量
 3 黒褐色 ローム粒子中量
 4 黒色 ローム粒子微量
 5 黒褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量, 焼土粒子微量

遺物 土師器片60点, 須臾器片11点, 灰釉陶器片1点及び弥生土器片1点が出土している。第105図2の環及び3の高台付環は土坑東側の覆土下層から出土している。

所見 本跡は, 出土遺物から平安時代(10~12世紀)の土坑とみられる。

第142号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第105図 1	環 土師器	A (11.1)	底部~口縁部片。平底。体部は	口縁部, 体部外面横ナデ。体部	長石・スコリア・雲母	P942 40% 覆土
		B 3.0	内彎して立ち上がり, 口縁部は外	内面磨き。底部回転ヘラ切り。	にふい黄褐色	
		C (5.8)	反する。	内面黒色処理。ロクロ成形。	普通	
2	環 土師器	A (11.0)	底部~口縁部片。やや丸味をもつ	口縁部, 体部外面横ナデ。体部	砂粒・長石・雲母	P943 35% 覆土下層
		B 3.3	た平底。体部は内彎して立ち上	内面磨き。底部回転ヘラ切り。	浅黄褐色	
		C (6.3)	がり。口縁部に至る。	内面黒色処理。ロクロ成形。	普通	
3	高台付環 土師器	A (15.2)	高合部~口縁部片。ハの字状に	口縁部, 体部内・外面横ナデ。	小粒・砂粒・長石	P L39 P944 40% 覆土
		B 6.3	開く高台。体部は内彎して立ち	高台貼り付け後, ナデ。ロクロ	褐色	
		D (8.1)	上がり, 口縁部は外反する。	成形。	普通	
		E 2.1				
4	高台付環 土師器	A (15.8)	底部~口縁部片。高合部欠損。	口縁部, 体部外面横ナデ。体部	砂粒・長石	P L39 P945 30% 覆土下層
		B (5.2)	体部は内彎して立ち上がり, 口	内面磨き。内面黒色処理。ロク	にふい黄褐色	
			縁部に至る。	ロ成形。	普通	

第151号土坑(第106図)

位置 調査区の中央部東側, B4d区。

重複関係 本跡は, 第25B号住居跡と重複している。本跡の上に第25B号住居跡の硬化した床面が延びていることから本跡が古い。

規模と平面形 径約0.9mの円形で, 深さ60cmである。

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 鍋底状である。

覆土 3層からなる。覆土中にロームブロックを多く含むことから, 人為堆積と考えられる。

土層解説

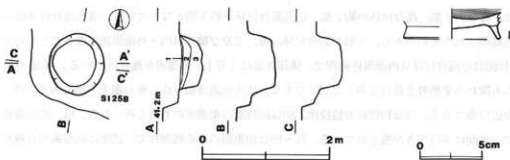
- 1 黒褐色 ロームブロック中量, ローム粒子少量
 2 黒褐色 ロームブロック少量, ローム粒子微量
 3 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子多量, 黒色土ブロック少量

遺物 土師器片9点が出土している。覆土中出土の第106図1の高台付環はロクロ成形後, 内面黒色処理が施されている。

所見 本跡は, 出土遺物から平安時代(10~12世紀)の土坑とみられる。

第151号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第106図 1	高台付環 土師器	B (2.1)	高台部, 底部片。ハの字状に開	高台貼り付け後, ナデ。内面黒	長石・スコリア	P947 30% 覆土
		D (7.7)	く低い高台。	色処理。ロクロ成形。	にふい褐色	
		E 1.0			普通	



第106図 第151号土坑・出土遺物実測図

第198号土坑 (第107～112図)

位置 調査区の東部中央, B5h区。

重複関係 本跡は, 第12号住居跡及び第199号土坑と重複している。本跡が第12号住居跡及び第199号土坑を掘り込んでおり, 3遺構の中で本跡が最も新しい。

規模と平面形 長軸3.5m, 短軸3.4mの隅丸方形で, 北東部に半円形の張り出し部がある。深さは110cmである。

長軸方向 N-89°-W

壁面 垂直に立ち上がる。

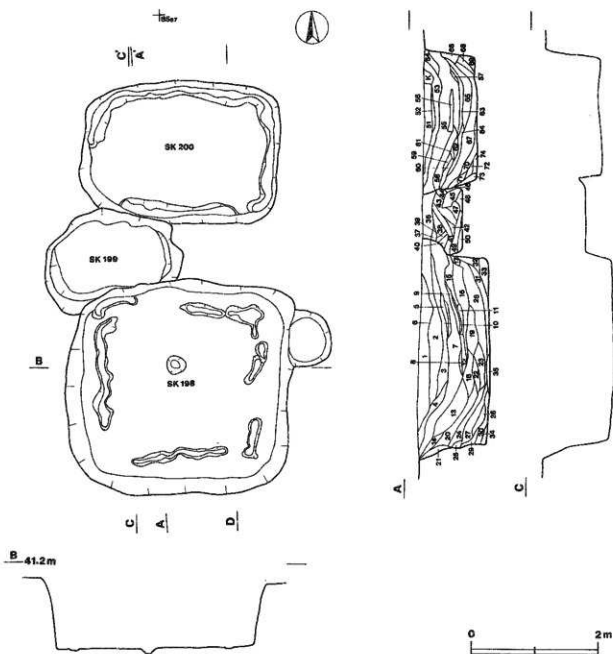
底面 西側へわずかに傾斜するがほぼ平坦である。壁から約20cm離れたところを壁に沿って浅い溝が巡る。また, 中央部北寄りには浅いピットがある。

覆土 35層からなる。覆土中に大量の土器類とともに粘土, 焼土, ローム及び灰を含むことから, 人為堆積である。

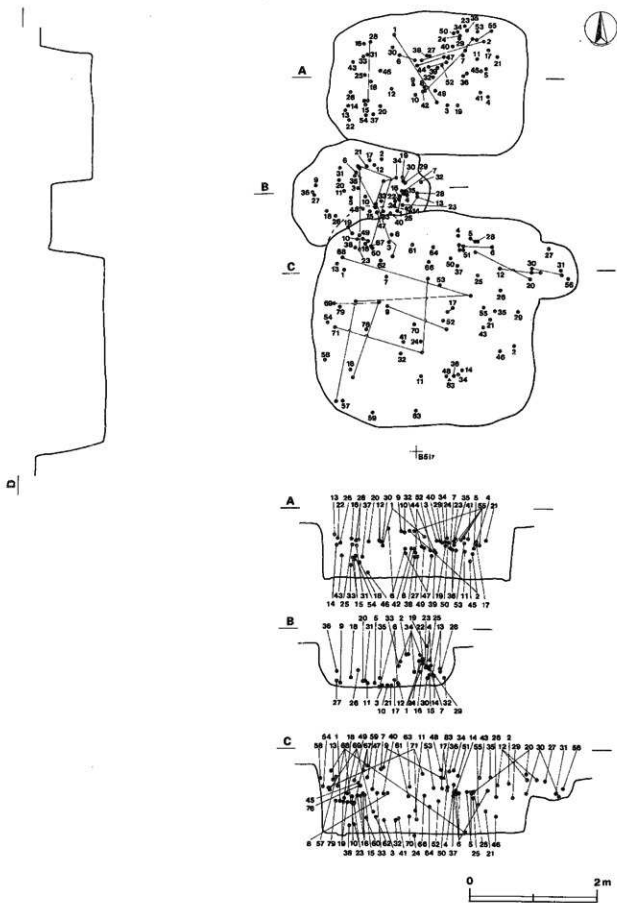
土層解説		16	褐色	ロームブロック層	
1	黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	17	褐色	ロームブロック・ローム粒子・粘土粒子少量
2	黒褐色	炭化物中量, 土器小片・焼土粒子少量, 炭化粒子微量	18	黒褐色	土器片多量, 炭化物少量, 焼土粒子・ローム粒子微量
3	黒褐色	土器小片・炭化物中量, 焼土粒子微量	19	黒褐色	ロームブロック中量, ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
4	黒褐色	炭化粒子・ロームブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量	20	黒褐色	土器小片・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
5	黒褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量	21	黒褐色	炭化粒子・ローム粒子少量, 焼土粒子微量
6	黄褐色	ロームブロック層	22	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子・灰微量
7	黒褐色	ロームブロック・ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量	23	黒褐色	ロームブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量
8	黒褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量	24	黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量
9	黒褐色	ローム粒子・灰少量	25	褐色	ロームブロック多量
10	黒褐色	ローム粒子微量	26	黒褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・ローム粒子微量
11	黄褐色	粘土ブロック層	27	黒褐色	焼土粒子・ローム粒子少量, ロームブロック微量
12	黒褐色	土器小片・炭化物少量, 焼土粒子微量	28	黒褐色	焼土粒子・ローム粒子微量
13	黒褐色	ローム粒子中量, ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	29	褐色	ロームブロック多量
14	黒褐色	土器完形品多量, ローム粒子少量, 焼土粒子微量	30	黒褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子微量
15	黒褐色	土器片中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量	31	黒褐色	焼土粒子少量, ローム粒子微量
			32	黒褐色	ロームブロック・ローム粒子中量
			33	黒褐色	焼土粒子・ローム粒子少量
			34	黒褐色	粘土ブロック中量, 焼土粒子少量
			35	オリーブ褐色	粘土ブロック層

遺物 土器器片12,614点, 須恵器片169点, 灰軸陶器片13点, 羽釜片4点及び置電片2点の土器類とともに支脚, 不明土製品, 鉄製品等が出土している。須恵器片は細片が多く前代までの遺物の混入品とみられる。土器器片はロクロ成形によるもので, 完形あるいは半完形ものが下層から上層にかけて多量に出土している。

器種構成は、皿が約7割、高台付坏が約2割、足高高台付坏が約1割となっている。皿と高台付坏のなかには内面黒色処理されたものがあり、小形の高台付坏、蓄、壺及び甕には内・外面黒色処理されたものが少数ある。第110図31の高台付坏は内面黒色処理で、体部外面に「万上」の墨書が施されている。多量の遺物が出土したにも関わらず墨書土器はこの1点だけである。出土位置は張り出し部の覆土下層である。79、80は灰軸陶器の広口壺である。79は10世紀の埴投産、80は同時期の東濃産のものとみられる。84、85は須恵器甕の体部片で、外面に平行叩きが施されている。86～89は須恵器の坏の底部片で、底部に回転糸切り痕が残されている。



第107図 第198～200号土坑実測図(1)

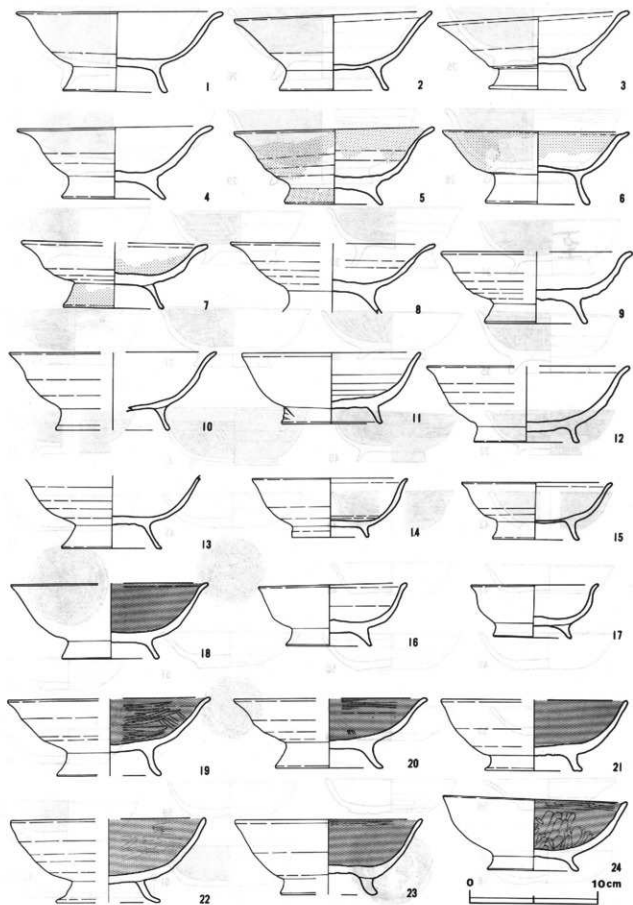


第108图 第198~200号土坑出土遺物位置圖(2)

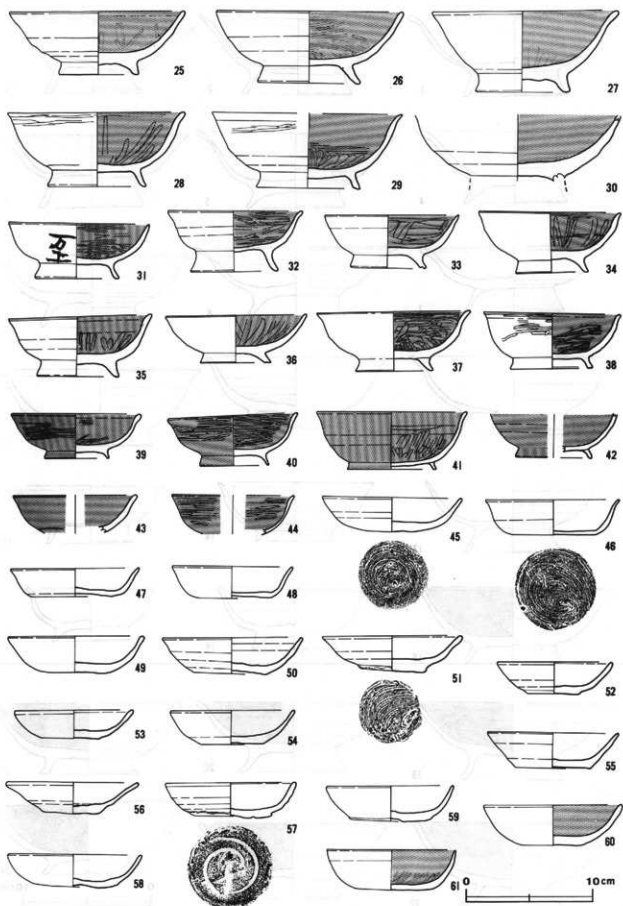
所見 本跡は、当初住居跡と考え、S I-13Aとして調査したが、大形の土坑であることが判明したため遺構番号を変更した。完形の土師器の高台付坏及び皿類が多量に出土していることから土器類を投棄するための土坑とみられる。時期は、出土遺物から平安時代(10~12世紀)のものと考えられる。

第198号土坑出土遺物観察表

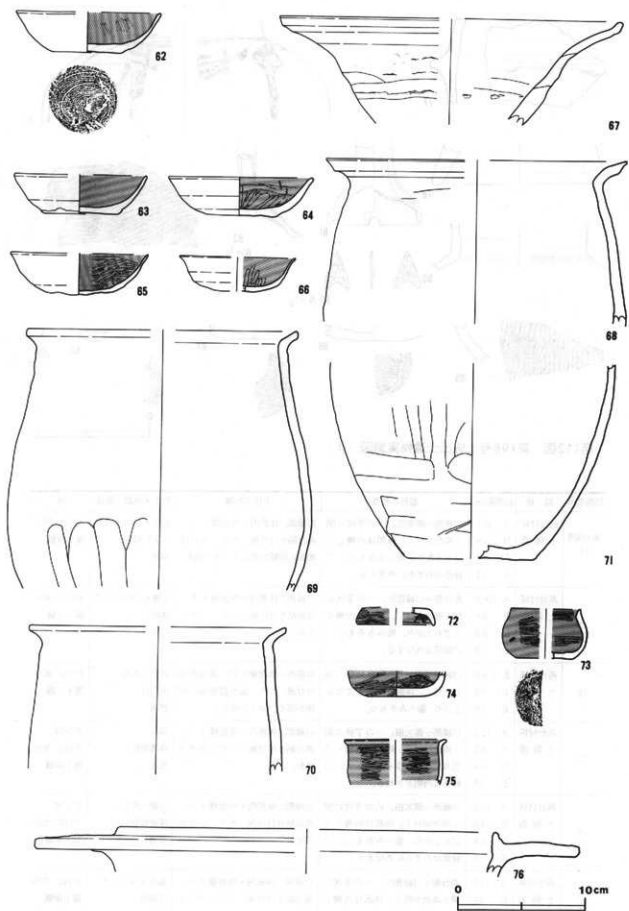
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第109号 1	高台付坏 土師器	A 16.6	完形。ハの字状に開く足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	小礫・長石 浅黄褐色 普通	P L 39 P 86 100% 覆土中層
		B 6.5				
		D 8.4				
		E 1.8				
2	高台付坏 土師器	A 15.4	口縁部一部欠損。ハの字状に開く足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	小礫・長石 浅黄褐色 普通	P L 39 P 87 98% 覆土上層
		B 6.2				
		D 8.7				
		E 1.6				
3	高台付坏 土師器	A 15.0	口縁部一部欠損。ハの字状に開く足高の高台が付く。体部は直線的に外彎して立ち上がり、口縁部は外反す	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	小礫・砂粒・長石 浅黄褐色 普通	P L 39 P 88 90% 覆土下層
		B 6.3				
		D 7.6				
		E 1.9				
4	高台付坏 土師器	A 15.5	口縁部一部欠損。ハの字状に開く足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	小礫・長石・スコリア 浅黄褐色 普通	P L 39 P 90 90% 覆土上層
		B 5.8				
		D 8.3				
		E 1.7				
5	高台付坏 土師器	A 15.6	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	砂粒・長石・スコリア 浅黄褐色 普通	P L 39 P 93 75% 覆土中層 内・外面横付着
		B 6.1				
		D 7.7				
		E 1.3				
6	高台付坏 土師器	A 14.7	高台部、口縁部一部欠損。ハの字状に開く足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通	P 99 60% 覆土中層 内・外面横付着
		B 5.8				
		D 8.2				
		E 2.4				
7	高台付坏 土師器	A (14.8)	高台部~口縁部。ハの字状に開く足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	長石 浅黄褐色 普通	P 113 35% 覆土上層 内・外面横付着
		B 5.2				
		D (8.0)				
		E 1.9				
8	高台付坏 土師器	A (16.0)	高台部~口縁部片。ハの字状に開く足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	砂粒・長石・スコリア にぶい褐色 普通	P 121 40% 覆土中層
		B (5.5)				
		E (1.7)				
9	高台付坏 土師器	A (15.1)	高台部~口縁部片。ハの字状に開く足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。高台接地面に凹線が通る。ロクロ成形。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P 126 40% 覆土上層
		B 5.7				
		D 8.1				
		E 2.0				
10	高台付坏 土師器	A (16.4)	高台部~口縁部片。ハの字状に開く足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	小礫・長石 浅黄褐色 普通	P 132 40% 覆土中層
		B 6.1				
		D (9.0)				
		E 1.7				



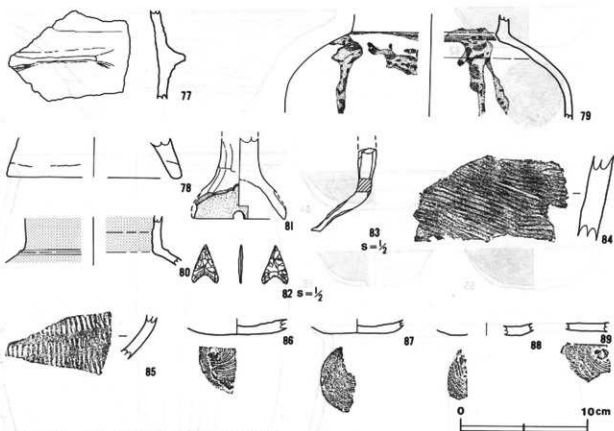
第109图 第198号土坑出土文物实测图(1)



第110图 第198号土坑出土遗物实测图(2)



第111图 第198号土坑出土文物实测图(3)



第112図 第198号土坑出土遺物実測図(4)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第109図 11	高台付環土師器	A 14.1	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。高台接地面に凹線が走る。ロクロ成形。	砂粒・長石・石英 灰白色 普通	P100 70% 覆土中層
		B 5.6				
		D 7.8				
		E 1.1				
12	高台付環土師器	A [16.0]	高台部～口縁部片。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	小礫・長石・スコリア 淡褐色 普通	P103 45% 覆土上層
		B 6.0				
		D 8.3				
		E 1.2				
13	高台付環土師器	B (5.8)	口縁部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。	体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。高台接地面に凹線が走る。ロクロ成形。	砂粒・長石 灰白色 普通	P122 60% 覆土上層
		D 7.9				
		E 1.9				
14	高台付環土師器	A 12.1	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。口縁部は内削ぎされる。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	長石 淡黄褐色 普通	P L39 P135 90% 覆土中層
		B 4.7				
		D 5.8				
		E 0.9				
15	高台付環土師器	A 11.9	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	小礫・長石 淡黄褐色 普通	P L39 P137 85% 覆土中層
		B 4.5				
		D 6.8				
		E 1.3				
16	高台付環土師器	A 11.7	高台部～口縁部片。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	長石・スコリア 灰褐色 普通	P141 70% 覆土中層
		B 5.0				
		D 6.7				
		E 1.4				

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備 考
第109図 17	高台付環 土 師 器	A 10.0	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	砂粒・長石・スクリア にぶい黄褐色 普通	P L39 P139 80% 覆土中層
		B 4.4				
		D 6.1				
		E 1.2				
18	高台付環 土 師 器	A (15.6)	高台部→口縁部片。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通	P177 50% 覆土中層
		B 5.9				
		D 7.7				
		E 1.5				
19	高台付環 土 師 器	A (16.0)	高台部→口縁部片。ハの字状に開く足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内面ナデ後、磨き。口縁部、体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通	P179 50% 覆土中層
		B 6.1				
		D (8.2)				
		E 1.8				
20	高台付環 土 師 器	A (15.1)	高台部→口縁部片。ハの字状に開く足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部外面横ナデ。体部内面ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通	P180 40% 覆土
		B 5.5				
		D 8.4				
		E 2.0				
21	高台付環 土 師 器	A (14.6)	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。高台接地面に凹線が走る。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石 にぶい黄褐色 普通	P181 50% 覆土
		B 5.6				
		D 7.6				
		E 1.3				
22	高台付環 土 師 器	A (15.4)	高台部→口縁部片。ハの字状に開くやや足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部外面横ナデ。体部内面磨き。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石 褐色 普通	P183 30% 覆土
		B 6.6				
		D (8.2)				
		E 1.7				
23	高台付環 土 師 器	A 14.6	高台部→口縁部片。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部外面横ナデ。口縁部内面磨き。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石 にぶい黄褐色 普通	P185 40% 覆土
		B 5.9				
		D (7.6)				
		E 1.3				
24	高台付環 土 師 器	A 14.5	完形。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面、体部外面横ナデ。体部内面放射状のナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石 浅黄褐色 普通	P L39 P166 100% 覆土下層
		B 5.8				
		D 7.0				
		E 1.1				
第110図 25	高台付環 土 師 器	A 13.9	高台部、口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面、体部外面横ナデ。体部内面放射状のナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P L39 P167 90% 覆土中層
		B 5.0				
		D 6.2				
		E 1.0				
26	高台付環 土 師 器	A 14.7	高台部、口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面磨き。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石 褐色 普通	P L39 P169 90% 覆土中層
		B 5.7				
		D 8.0				
		E 1.4				
27	高台付環 土 師 器	A 14.6	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面放射状の磨き。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石・雲母 明灰褐色 普通	P L39 P170 90% 覆土上層
		B 5.4				
		D 7.5				
		E 1.5				
28	高台付環 土 師 器	A 13.9	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面磨き。体部内面放射状のナデ。体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石 浅黄色 普通	P L39 P172 85% 覆土中層
		B 5.9				
		D 7.8				
		E 1.4				

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・装成	備 考
第110図 29	高台付環 土 師 器	A (14.9)	高台部へ口縁部片。ハの字状に 開く高台が付く。体部は内彎し て立ち上がり、口縁部はわずかに 外反する。	口縁部内・外面、体部外面上位磨 き。体部内面放射状の磨き。体部 外面下位横ナデ。高台貼り付け後 ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石・スコリア・雲母 浅黄色 普通	P L39 P174 70% 覆土中層
		B 5.9				
		D 8.2				
		E 1.3				
30	高台付環 土 師 器	B (5.0)	体部片。高台部、口縁部欠損。 体部は内彎して立ち上がる。	体部外面横ナデ。底部回転糸切 り後、高台貼り付け。内面黒色 処理。ロクロ成形。	砂粒・長石 内黄褐色 普通	P192 60% 覆土
		A 11.1	口縁部一部欠損。ハの字状に開 く高台が付く。体部は内彎して 立ち上がり、口縁部はわずかに 外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内 面横方向、見込み部分放射状の 磨き。高台貼り付け後、ナデ。 内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石 内黄褐色 普通	P L39 P147 80% 覆土中層 墨書「万上」
31	高台付環 土 師 器	A 11.1	口縁部一部欠損。ハの字状に開 く高台が付く。体部は内彎して 立ち上がり、口縁部はわずかに 外反する。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部、 体部内面磨き。高台貼り付け後、 ナデ。内面黒色処理。ロクロ成 形。	砂粒・長石 内黄褐色 普通	P L40 P144 96% 覆土下層
		B 4.5				
		D 6.6				
		E 1.3				
32	高台付環 土 師 器	A 10.5	口縁部一部欠損。ハの字状に開 くやや高さの高台が付く。体部は 内彎して立ち上がり、膨らみをも つ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部、 体部内面磨き。高台貼り付け後、 ナデ。内面黒色処理。ロクロ成 形。	砂粒・長石 内黄褐色 普通	P L40 P146 98% 覆土中層 見込みに朱色付着
		B 4.9				
		D 6.9				
		E 1.5				
33	高台付環 土 師 器	A 10.6	高台部、口縁部一部欠損。ハの 字状に開く高台が付く。体部は 内彎して立ち上がり、膨らみをも つ。口縁部は外横する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内 面放射状のナデ。高台貼り付け 後、ナデ。高台接地面に凹線が通 る。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石 浅黄褐色 普通	P L40 P149 90% 覆土上層
		B 4.3				
		D 5.9				
		E 1.0				
34	高台付環 土 師 器	A 11.3	口縁部一部欠損。ハの字状に開 く高台が付く。体部は内彎して 立ち上がり、膨らみをもつ。口 縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部外面横ナデ。口縁 部内面横方向の磨き。体部内面 放射状のナデ。高台貼り付け後、 ナデ。内面黒色処理。ロクロ成 形。	小礫・長石 内黄褐色 普通	P L40 P150 80% 覆土上層
		B 5.0				
		D 5.9				
		E 1.0				
35	高台付環 土 師 器	A 11.3	口縁部一部欠損。ハの字状に開 く高台が付く。体部は内彎して 立ち上がり、口縁部はわずかに 外反する。	口縁部、体部外面横ナデ。体部 内面放射状のナデ。高台貼り付 け後、ナデ。内面黒色処理。ロ クロ成形。	砂粒・長石 浅黄色 普通	P L40 P151 80% 覆土上層
		B 5.0				
		D 6.4				
		E 1.1				
36	高台付環 土 師 器	A 11.1	口縁部一部欠損。ハの字状に開 く高台が付く。体部は内彎して 立ち上がり、口縁部は外横する。	口縁部、体部外面横ナデ。体部内 面放射状のナデ。高台貼り付け 後、ナデ。高台接地面に凹線が通 る。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石・雲母 内黄褐色 普通	P L40 P155 90% 覆土中層
		B 3.8				
		D 5.5				
		E 0.8				
37	高台付環 土 師 器	A 12.0	高台部、口縁部一部欠損。ハの 字状に開く高台が付く。体部は 内彎して立ち上がり、口縁部は 外反する。	口縁部、体部外面横ナデ。体部 内面丁寧な磨き。高台貼り付け 後、ナデ。内面黒色処理。ロク ロ成形。	砂粒・長石 内黄褐色 普通	P L40 P157 70% 覆土下層
		B 4.7				
		D 6.0				
		E 1.0				
38	高台付環 土 師 器	A 10.8	体部、口縁部一部欠損。ハの字 状に開く高台が付く。体部は内 彎して立ち上がり、口縁部はわ ずかに外反する。	口縁部外面、体部内面磨き。体 部外面横ナデ。高台貼り付け後、 ナデ。内面黒色処理。ロクロ成 形。	砂粒・長石・雲母 内黄褐色 普通	P L40 P200 99% 覆土
		B 4.6				
		D 6.6				
		E 0.9				
39	高台付環 土 師 器	A 10.3	口縁部一部欠損。ハの字状に開 く高台が付く。体部は内彎して 立ち上がり、膨らみをもつ。口 縁部はわずかに外反する。	内面一体部外面上位丁寧な磨き。 体部外面下位横ナデ。高台貼り 付け後、ナデ。内・外面黒色処 理。ロクロ成形。	小礫・長石・雲母 黒色 普通	P L40 P201 80% 覆土中層
		B 3.5				
		D 5.1				
		E 0.7				
40	高台付環 土 師 器	A 10.3	口縁部一部欠損。ハの字状に開 く高台が付く。体部は内彎して 立ち上がり、膨らみをもつ。口 縁部はわずかに外反する。	内面一体部外面上位丁寧な磨き。 体部外面下位横ナデ。高台貼り 付け後、ナデ。内・外面黒色処 理。ロクロ成形。	砂粒・長石 黒色 普通	P L40 P201 80% 覆土中層
		B 4.1				
		D 5.4				
		E 0.8				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第110図 41	高台付環土師器	A (11.8)	高台部～口縁部片。ハの字状に開く低い高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。口縁部は外反する。	内面～体部外面面平滑、光沢あり。体部内面磨き。口縁部内面～体部外面磨き不明瞭。貼り付け高台。内・外面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石 黒色 良好	P L40 P202 50% 覆土下層
		B 4.5				
		D (7.0)				
		E 0.5				
42	高台付環土師器	B (3.6)	高台部、体部片。ハの字状に開く低い高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。	体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内・外面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石 黒色 普通	P L40 P422 25% 覆土
		D (6.2)				
		E 0.8				
43	高台付環土師器	A (9.8)	口縁部、体部片。高台部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	内面～体部外面中位平滑、磨き不明瞭。体部外面下位横ナデ。内・外面黒色処理。ロクロ成形。	長石 黒色 普通	P L40 P427 15% 覆土上層 器面に朱色付着物
		B (3.0)				
44	高台付環土師器	A (9.6)	口縁部、体部片。高台部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	内面～体部外面丁寧な磨き。内・外面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石 黒色 普通	P L40 P426 20% 覆土
		B (3.1)				
45	皿土師器	A 11.0	完形。丸底に近い平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	小粒・砂粒・長石 淡黄褐色 普通	P L40 P231 100% 覆土中層
		B 2.7				
		C 4.0				
46	皿土師器	A 10.7	完形。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り後、ナデ。ロクロ成形。	砂粒・長石・スクリア 淡黄褐色 普通	P L40 P235 100% 覆土
		B 2.3				
		C 5.8				
47	皿土師器	A 10.1	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	砂粒・長石 淡黄褐色 普通	P L40 P246 95% 覆土
		B 2.2				
		C 6.6				
48	皿土師器	A 9.5	完形。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	砂粒・長石 淡褐色 普通	P245 100% 覆土上層
		B 2.5				
		C 5.7				
49	皿土師器	A 10.6	完形。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	砂粒・長石・スクリア 淡褐色 普通	P L40 P207 100% 覆土上層
		B 3.0				
		C 5.7				
50	皿土師器	A 11.0	完形。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P211 100% 覆土中層
		B 2.9				
		C 5.6				
51	皿土師器	A 11.1	完形。突出した平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	砂粒・長石・スクリア にぶい褐色 普通	P L40 P226 100% 覆土上層
		B 2.9				
		C 5.2				
52	皿土師器	A 9.3	完形。突出した平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	長石 にぶい褐色 普通	P L40 P230 100% 覆土中層
		B 2.6				
		C 4.2				
53	皿土師器	A 9.3	完形。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	塵・砂粒・長石 淡黄褐色 普通	P233 100% 覆土中層
		B 2.3				
		C 4.4				
54	皿土師器	A 9.8	完形。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	砂粒・長石・雲母 淡黄褐色 普通	P L40 P237 100% 覆土上層
		B 2.7				
		C 4.9				
55	皿土師器	A 10.5	完形。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P239 100% 覆土中層
		B 2.8				
		C 6.0				

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第110図 56	土師器	A 10.4	口縁部一部欠損。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転承切り。ロクロ成形。	砂粒・長石 褐色 普通	P L40 P258 90% 覆土中層
		B 2.4				
		C 4.6				
57	土師器	A 10.3	完形。突出して丸味を帯びた平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。ロクロ成形。	小礫・長石 浅褐色 普通	P L40 P393 100% 覆土上層
		B 2.8				
		C 6.2				
58	土師器	A 10.6	完形。丸味を帯びた平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。ロクロ成形。	砂粒・長石 浅黄褐色 普通	P394 100% 覆土上層
		B 2.6				
		C 6.6				
59	土師器	A 10.0	口縁部一部欠損。丸味を帯びた平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ切り。ロクロ成形。	砂粒・長石・スコリア 灰黄褐色 普通	P L40 P397 75% 覆土上層
		B 2.9				
		C 6.4				
60	土師器	A 11.1	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部外面横ナデ。見込み部分放射状のナデ。底部回転承切り。内面黒色処理。ロクロ成形。	小礫・長石 ぶい黄褐色 普通	P L41 P405 85% 覆土下層
		B 3.2				
		C 4.8				
61	土師器	A 10.1	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部外面横ナデ。見込み部分放射状のナデ。底部回転承切り。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石 浅黄褐色 普通	P L41 P406 80% 覆土中層
		B 3.2				
		C 6.0				
第111図 62	土師器	A [11.3]	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部外面横ナデ。体部内面放射状のナデ。底部回転承切り。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石・雲母 ぶい黄褐色 普通	P407 60% 覆土下層
		B 3.2				
		C 5.4				
63	土師器	A [10.5]	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部外面横ナデ。底部回転承切り。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石 淡褐色 普通	P L41 P408 50% 覆土上層
		B 3.1				
		C 6.0				
64	土師器	A 11.5	底部へ口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部外面横ナデ。体部内面放射状のナデ。底部回転承切り。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石 ぶい黄褐色 普通	P410 60% 覆土中層
		B 3.1				
		C 5.6				
65	土師器	A [10.8]	底部へ口縁部片。丸底に近い平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部外面横ナデ。体部内面磨き。底部回転承切り。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石 ぶい褐色 普通	P415 40% 覆土
		B 3.3				
		C [5.6]				
66	土師器	A [9.2]	底部へ口縁部片。丸底に近い平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部外面横ナデ。体部内面放射状の磨き。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石・雲母 灰黄褐色 普通	P L41 P423 35% 覆土中層
		B 2.7				
		C [4.4]				
67	土師器	A (27.0)	体部へ口縁部片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反し、端部は上方につまみ上げられる。	口縁部内・外面、体部外面上位横ナデ。体部外面下位ヘラ削り。輪轆み痕を残す。	砂粒・長石・スコリア ぶい褐色 普通	P L41 P436 40% 覆土中層
		B (8.3)				
68	土師器	A (23.9)	体部上位へ口縁部片。体部上位は内傾し、口縁部は外反する。口縁端部はつまみ上げられる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。	砂粒・長石 浅黄褐色 普通	P L41 P437 25% 覆土下層
		B (12.9)				
69	土師器	A (21.4)	体部下位へ口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、体部中位に最大径がある。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位縦方向のヘラ削り。	砂粒・長石 浅黄褐色 普通	P L41 P438 25% 覆土下層
		B (20.5)				
70	土師器	A (20.4)	体部上位へ口縁部片。体部上位は内傾し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面、体部外面横ナデ。	砂粒・長石 浅黄褐色 普通	P L41 P441 10% 覆土下層
		B (11.6)				
71	土師器	A (15.5) C (10.2)	底部、体部片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面中位縦方向、下位横方向のヘラ削り。体部内面ナデ。	砂粒・長石 ぶい褐色 普通	P L41 P440 10% 覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第111図 72	蓋 土師器	A (5.0)	口縁部～天井部片。断面形は台形で、天井部は平坦である。	器面全体に丁寧な磨き。内・外面黒色処理。	長石 黒色 普通	P L 40 P 439 10% 覆土
		B 1.3				
73	小形壺 土師器	A (5.4)	底部～口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、体部中に最大径がある。口縁部は直立する。	体部内面～底部外面磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・長石 黒色 普通	P L 40 P 431 40% 覆土 体部外面粉痕
		B 4.9				
		C (4.6)				
74	小形壺 土師器	B (2.0)	底部、体部下位片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	器面全体に磨き。内・外面黒色処理。ロクロ成形。	長石 黒色 普通	P L 40 P 430 20% 覆土 器面に朱色付着物
		C 4.8				
75	小形壺 土師器	A (8.0)	体部～口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	器面全体に丁寧な磨き。内・外面黒色処理。	長石 黒色 普通	P L 40 P 433 10% 覆土
		B (3.6)				
76	羽蓋 土師器	A (29.6)	フバ部、口縁部片。口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にふい色 普通	P L 41 P 445 5% 覆土上層 鈔上面炭化物付着
		B (3.5)				
第112図 77	塵囷 土師器	B (7.6)	体部、把手部片。体部は内彎して立ち上がる。板状の把手が付く。	体部内・外面ナデ。	砂粒・長石・スコリア 灰黄褐色 普通	P L 41 P 448 5% 覆土
78	台付土器 土師器	B (3.2)	台部片。ハの字状に開く台部。	台部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・スコリア にふい色 普通	P L 41 P 451 5% 覆土
		D (13.8)				
79	広口壺 灰釉陶器	B (8.1)	体部上位、頸部片。体部上位は内傾し、頸部は直立する。	頸部、体部内・外面横ナデ。外面灰釉。	長石 (胎土)褐灰色 (釉)灰オリーブ色 良好	P L 41 P 1083 10% 覆土中層
80	広口壺 灰釉陶器	B (3.9)	体部上位、頸部片。頸部は直立する。	頸部、体部内・外面横ナデ。内・外面灰釉。	長石 (胎土)灰白色 (釉)灰オリーブ色 良好	P L 41 P 1084 5% 覆土

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
81	不明土製	(6.4)	[7.4]	—	(50.6)	覆土	P L 41 D P 10 端部に円形の抉り
82	石鏝	2.0	1.4	0.3	0.4	覆土	P L 41 Q 3 チャート
83	角釘	(4.4)	(1.0)	(0.7)	(6.8)	覆土	P L 46 M 18 鉄製

第199号土坑 (第107・108・113・114図)

位置 調査区の東部中央、B5g区。

重複関係 本跡は、第198及び200号土坑と重複している。本跡が第198及び200号土坑に掘り込まれており、3遺構の中で本跡が最も古い。

規模と平面形 長径2.2m、短径1.3mの不整形円形で、深さ70cmである。

長径方向 N-75°-E

壁面 垂直に立ち上がる。

底面 鍋底状である。

覆土 15層(土層36~50、土層1~35は重複する第198号土坑覆土)からなる。覆土中に多量の土器類とともに粘土やロームを含むことから、人為堆積とみられる。

土層解説

36	黒褐色	土器片中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量	43	黒褐色	土器片・炭化粒子少量、ローム粒子微量
37	黒褐色	炭化物中量、焼土粒子・ローム粒子少量	44	黒褐色	ローム粒子中量、粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
38	黒褐色	焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ロームブロック・ローム粒子少量	45	褐色	ロームブロック層
39	黒褐色	ロームブロック・ローム粒子中量	46	黒色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
40	黒褐色	炭化粒子・ロームブロック・ローム粒子少量	47	黒褐色	土器片多量、ロームブロック少量
41	黒褐色	土器完形品多量、炭化物中量、焼土粒子微量	48	黒色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
42	黒褐色	炭化物少量、焼土粒子微量	49	黒褐色	焼土粒子・ローム粒子少量、炭化物・炭化粒子微量
			50	黒色	ロームブロック少量、ローム粒子微量

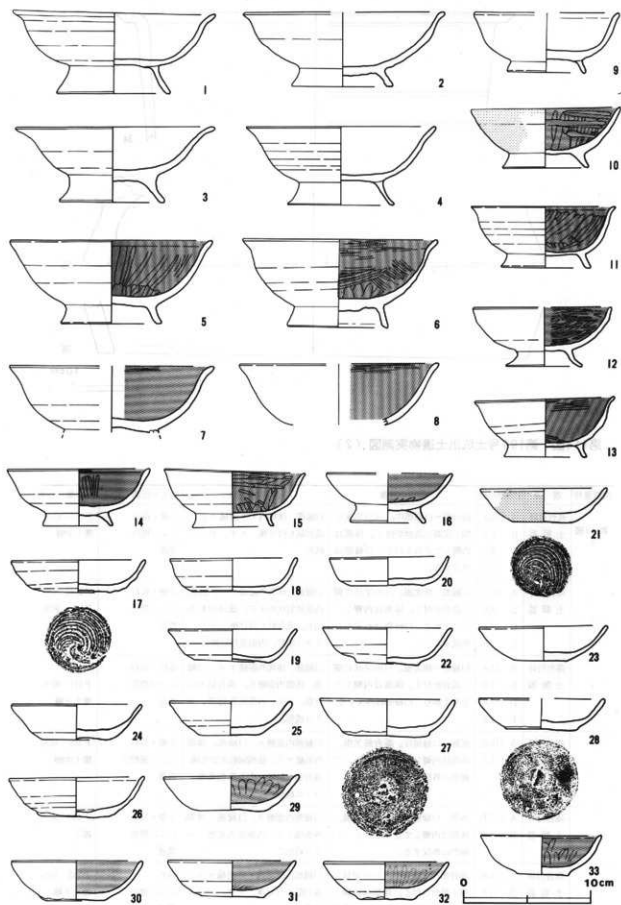
遺物 土師器片462点、須恵器片3点、他に置竈片等が出土している。須恵器片は混入品とみられる。

土師器はロクロ成形によるもので、器種構成は皿が約6割、高台付杯が約3割、足高高台付杯が約1割となっている。皿と高台付杯には内面黒色処理されたものがある。北側底面出土の第113図21の皿には口縁部の内・外面を中心に煤が付着しており、灯明皿として使用されたものと思われる。

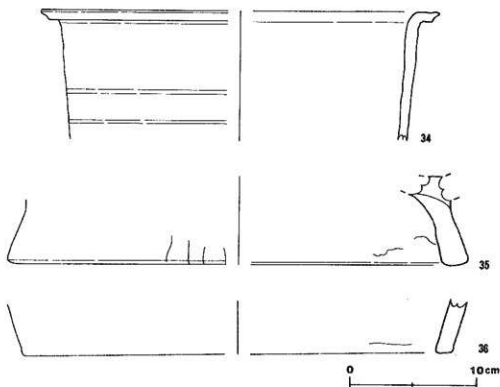
所見 本跡は、当初住居跡の一部と考え、S I-13Bとして調査したが、土坑であることが判明したため遺構番号を変更した。本跡からは、完形の土師器の高台付杯及び皿類が多量に出土している。本跡は土器類を投棄するための土坑とみられる。時期は、出土遺物から平安時代(10~12世紀)のものと考えられる。

第199号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
第113図 1	高台付杯 土師器	A 16.1	高台部~口縁部片。ハの字状に開く足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は深く外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底面回転未切り。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	砂粒・長石・雲母 淡黄褐色 普通	P L41 P461 60% 覆土下層	
		B 6.3					
		D 9.0					
		E 2.3					
2	高台付杯 土師器	A (15.8)	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	小礫・長石・スフィア 淡黄褐色 普通	P L41 P97 60% 覆土上層	
		B 5.9					
		D 8.0					
		E 1.3					
3	高台付杯 土師器	A 15.7	口縁部一部欠損。ハの字状に開く足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	砂粒・長石 淡黄褐色 普通	P L42 P94 70% 覆土下層	
		B 6.0					
		D 8.3					
		E 2.1					



第113图 第199号土坑出土遗物实测图(1)



第114図 第199号土坑出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第113図 4	高台付環 土 器	A 14.9 B 6.2 D 8.5 E 1.8	高台部～口縁部片。ハの字状に開く足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	小礫・長石にふい橙褐色普通	P460 60% 覆土中層
	高台付環 土 器	A 16.1 B 6.6 D 7.8 E 1.5	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部外面横ナデ。体部内面放射状のナデ。底部回転糸切り。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。内面黒色処理。	小礫・長石にふい橙褐色普通	PL42 P168 90% 覆土下層
	高台付環 土 器	A 15.4 B 7.0 D 7.8 E 1.8	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部外面横ナデ。口縁部、体部内面磨き。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石にふい橙褐色普通	PL42 P171 85% 覆土下層
	高台付環 土 器	A (16.3) B (5.2)	底部～口縁部片。高台部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内面磨き。口縁部、体部外面横ナデ。底部回転糸切り後、高台貼り付け。内面黒色処理。ロクロ成形。	小礫・長石にふい黄褐色普通	P485 40% 覆土中層
	高台付環 土 器	A (15.7) B (4.8)	体部、口縁部片。高台部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内面磨き。口縁部、体部外面横ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	小礫・長石にふい橙褐色普通	P486 30% 覆土
9	高台付環 土 器	A (11.6) B 4.8 D 6.2 E 1.1	高台部～口縁部片。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	長石にふい橙褐色普通	P142 50% 覆土下層

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備 考
第113図 10	高台付環 土 師 器	A 11.9	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内面磨き。口縁部、体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	小礫・長石・洗黄褐色 普通	P L42 P148 90% 覆土下層 外面保付着
		B 4.8				
		D 6.7				
		E 1.2				
11	高台付環 土 師 器	A 11.5	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内面磨き。口縁部、体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通	P L42 P152 70% 覆土下層
		B 4.8				
		D 7.1				
		E 1.1				
12	高台付環 土 師 器	A [11.0]	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内面磨き。口縁部、体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石・海綿骨針 褐色 普通	P L42 P153 60% 覆土
		B 4.7				
		D 6.0				
		E 1.2				
13	高台付環 土 師 器	A 11.1	高台部→口縁部片。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内面磨き。口縁部、体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	小礫・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P481 70% 覆土下層
		B 4.8				
		D 6.6				
		E 1.1				
14	高台付環 土 師 器	A 11.2	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	内面は口縁部横方向、体部放射状の磨き。口縁部、体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	小礫・長石・雲母 洗黄色 普通	P L42 P482 70% 覆土下層
		B 4.5				
		D 5.5				
		E 1.1				
15	高台付環 土 師 器	A 11.1	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	内面は口縁部横方向、体部放射状の磨き。口縁部、体部外面横ナデ。口縁部外面一部磨き。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P483 70% 覆土下層
		B 4.7				
		D 6.2				
		E 1.1				
16	高台付環 土 師 器	A [10.0]	高台部→口縁部片。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部外面横ナデ。体部内面放射状の磨き。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P L42 P484 40% 覆土中層
		B 3.9				
		D 6.0				
		E 1.3				
17	皿 土 師 器	A 10.7	完形。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転承切り。ロクロ成形。	砂粒・長石 褐色 普通	P L42 P212 100% 覆土下層
		B 2.6				
		C 5.3				
18	皿 土 師 器	A 10.1	完形。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転承切り。ロクロ成形。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P L42 P236 100% 覆土
		B 2.8				
		C 6.3				
19	皿 土 師 器	A 10.1	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転承切り。ロクロ成形。	砂粒・長石 洗黄褐色 普通	P L42 P463 98% 覆土上層
		B 2.7				
		C 6.0				
20	皿 土 師 器	A 9.4	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。回転承切り。ロクロ成形。	底面 砂粒・長石 洗黄褐色 普通	P L42 P261 90% 覆土下層
		B 2.3				
		C 5.9				
21	皿 土 師 器	A 10.1	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転承切り。ロクロ成形。	長石・雲母 にぶい褐色 普通	P L42 P435 96% 覆土下層 煤付燻灯明皿
		B 2.8				
		C 4.7				
22	皿 土 師 器	A 10.2	完形。底面は突出した平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転承切り。ロクロ成形。	長石・スコリア にぶい黄褐色 普通	P L42 P462 100% 覆土中層
		B 3.0				
		C 4.9				

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第113図 23	甌 土 師 器	A 10.2	完形。小さな平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。 底部回転糸切り。ロクロ成形。	小礫・長石・雲母 にふい橙褐色 普通	P 464 100% 覆土中層
		B 2.8				
		C 4.1				
24	甌 土 師 器	A 10.2	完形。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。 底部回転糸切り。ロクロ成形。	小礫・長石・スコリア にふい黄褐色 普通	P 465 100% 覆土中層
		B 2.9				
		C 5.3				
25	甌 土 師 器	A 9.8	完形。底部はやや突出した平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。 底部回転糸切り。ロクロ成形。	小礫・長石 にふい黄褐色 普通	P L 42 P 466 100% 覆土中層
		B 2.7				
		C 4.9				
26	甌 土 師 器	A 10.7	完形。底部はやや丸味を帯びた平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。 底部回転ヘラ切り。ロクロ成形。	砂粒・長石 にふい黄褐色 普通	P L 42 P 390 100% 覆土中層
		B 3.2				
		C 5.6				
27	甌 土 師 器	A 10.7	完形。底部はやや突出し、丸味を帯びた平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。 底部回転ヘラ切り。ロクロ成形。	小礫・長石 にふい橙褐色 普通	P L 42 P 391 100% 覆土下層
		B 3.0				
		C 6.0				
28	甌 土 師 器	A [10.0]	底部～口縁部片。底部はやや丸味を帯びた平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。 底部回転ヘラ切り。ロクロ成形。	砂粒・長石 にふい褐色 普通	P 480 40% 覆土中層
		B 2.5				
		C 6.0				
29	甌 土 師 器	A 10.8	完形。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部外面横ナデ。体部内面放射状の磨き。底部回転糸切り。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石・雲母 にふい黄褐色 普通	P L 42 P 489 100% 覆土中層
		B 3.4				
		C 5.3				
30	甌 土 師 器	A 10.3	底部～口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部外面横ナデ。底部回転糸切り。内面黒色処理。ロクロ成形。	小礫・長石 淡黄色 普通	P L 42 P 490 60% 覆土下層
		B 3.2				
		C 4.8				
31	甌 土 師 器	A 10.2	底部～口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部外面横ナデ。体部内面磨き。底部回転糸切り。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石 にふい橙褐色 普通	P L 42 P 409 60% 覆土下層
		B 2.9				
		C 4.8				
32	甌 土 師 器	A [9.0]	底部～口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部外面横ナデ。体部内面放射状の磨き。底部回転糸切り。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石・雲母 にふい黄褐色 普通	P L 42 P 491 50% 覆土下層
		B 3.0				
		C 4.5				
33	甌 土 師 器	A 9.6	口縁部一部欠損。やや突出した平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部外面横ナデ。体部内面放射状のナデ。底部回転糸切り。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石・雲母 にふい黄褐色 普通	P L 42 P 404 98% 覆土中層
		B 3.1				
		C 4.0				
第114図 34	甌 土 師 器	A (31.5)	体部上位。口縁部片。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は屈曲して横方向に張り出す。	口縁部、体部内・外面横ナデ。 ロクロ成形。	砂粒・長石 にふい褐色 普通	P L 42 P 439 26% 覆土下層
		B (10.2)				
35	土師器 土 師 器	B (7.0)	ハの字状に開く唇部片。器形は不明。	底部に唇部を貼付。唇部内・外面横ナデ。	長石・スコリア・雲母 にふい褐色 普通	P L 42 P 449 5 % 覆土下層
		D (36.3)				
		E 5.1				
36	甌 土 師 器	B (4.1)	唇部片。唇部は外傾して立ち上がる。	唇部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 にふい褐色 普通	P L 43 P 450 5 % 覆土下層
		C (34.0)				

第200号土坑 (第107・108・115・116図)

位置 調査区の東部中央, B5g,区。

重複関係 本跡は, 第199号土坑と重複している。本跡が第199号土坑を掘り込んでおり, 本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.1m, 短軸2.2mの隅丸長方形で, 深さ85cmである。

長軸方向 N-88°-W

壁面 垂直に立ち上がる。

底面 緩やかな凹みがあるがほぼ平坦である。壁下に浅い溝が巡る。

覆土 24層(土層51~74, 土層1~50は重複する第198・199号土坑覆土)からなる。覆土中に多量の土器類とともに粘土, ローム及び灰を含むことから, 人為堆積とみられる。

土層解説

51	暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量	62	黒褐色	ローム粒子中量
52	黒色	ローム粒子中量, 灰少量	63	にぶい褐色	ローム粒子多量, 炭化物・ロームブロック少量, 焼土粒子・粘土粒子微量
53	褐色	ローム粒子炭化粒子多量, ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	64	黒褐色	ロームブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量
54	黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量	65	黒色	炭化物・炭化粒子多量, ローム粒子中量, 焼土粒子微量
55	黒色	土器片多量, ローム粒子・礫少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	66	暗褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
56	黒褐色	土器片多量, ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	67	黒褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子微量
57	黒色	炭化粒子多量, 焼土粒子・炭化物・ローム粒子微量	68	黒色	ローム粒子中量, 焼土粒子微量
58	黒色	土器片多量, 炭化物中量, 焼土粒子・ロームブロック・粘土ブロック少量	69	暗褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
59	にぶい黄褐色	粘土ブロック多量, 焼土粒子微量	70	黒褐色	ローム粒子中量, ロームブロック少量
60	黒褐色	焼土粒子・ローム粒子・粘土ブロック少量	71	黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量
61	黒褐色	ローム粒子中量, 粘土ブロック少量	72	黒褐色	ローム粒子少量
			73	黒褐色	焼土粒子中量, ロームブロック少量
			74	黒褐色	焼土粒子・ローム粒子少量

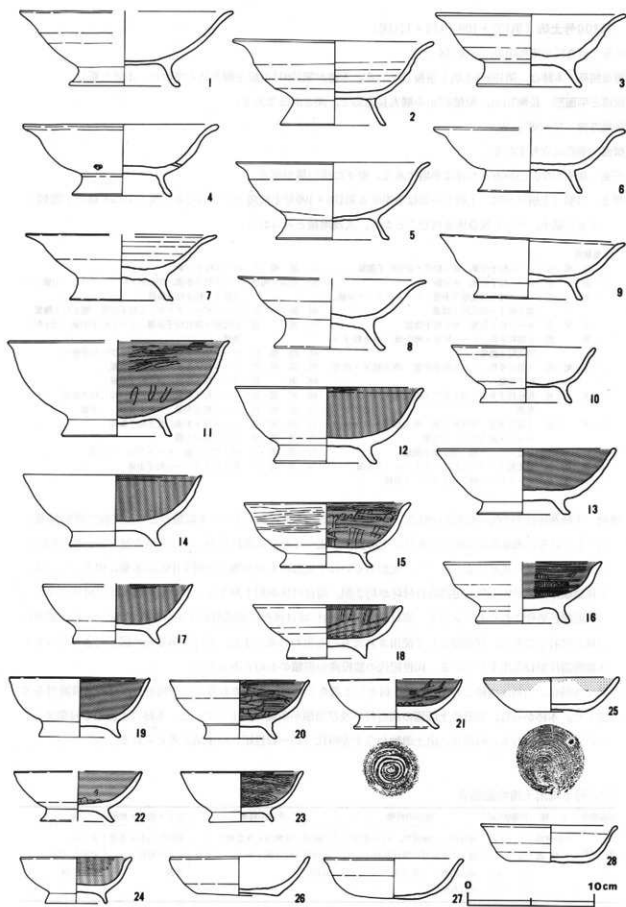
遺物 土師器片12,117点, 須恵器片84点, 灰軸陶器片13点及び羽釜片3点の土器類とともに支脚や鉄製品等が出土している。須恵器片は細片であり, 土師器片に比べて非常に点数が少ないことから混入品と考えられる。

土師器片はロクロ成形によるもので, 完形あるいは半完形のものが覆土中層を中心に多量に出土している。器種構成は, 皿が約7割, 足高高台付坏が約2割, 高台付坏が約1割となっている。皿と高台付坏のなかには内面黒色処理されたものがある。第115図4の高台付坏は体部に焼成前に1か所穿孔されている。25の皿は煤が付着しており, 灯明皿として使用されたものと思われる。また, 細片であるため図示できなかったが灰軸陶器片が13点出土している。10世紀代の猿投産の壺類のものともみられる。

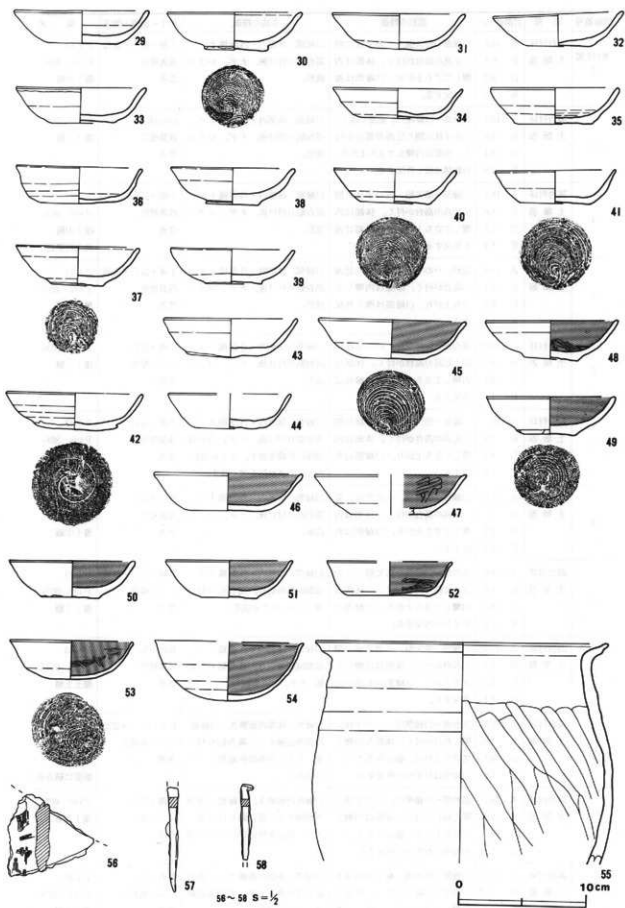
所見 本跡は, 当初住居跡と考え, SI-14として調査したが, 土坑であることが判明したため遺構番号を変更した。本跡からは, 完形の土師器の高台付坏及び皿類が多量に出土している。本跡は土器類を投棄するための土坑とみられる。時期は, 出土遺物から平安時代(10~12世紀)の土坑と考えられる。

第200号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
第115図 1	高台付坏 土師器	A (16.8)	高台部一円縁部片。八の字状に開くやや足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部, 体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後, ナデ。ロクロ成形。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P L43 P 502 60% 覆土中層	
		B 6.0					
		D 8.7					
		E 1.5					



第115图 第200号土坑出土物实测图(1)



第116图 第200号土坑出土文物实测图(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第115図 2	高台付環土師器	A 15.8	口縁部一部欠損。ハの字状に開く足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	小礫・長石・雲母 浅黄褐色 普通	P L 43 P 494 85% 覆土中層
		B 6.8				
		D 8.2				
		E 2.0				
3	高台付環土師器	A 15.4	高台部→口縁部片。底部が厚く、ハの字状に開く足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	砂粒・長石・スコリア 浅黄褐色 普通	P 507 70% 覆土上層
		B 5.6				
		D 8.4				
		E 1.9				
4	高台付環土師器	A 15.4	口縁部一部欠損。ハの字状に開く足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	小礫・長石 浅黄褐色 普通	P L 43 P 496 90% 覆土中層 焼成前穿孔1か所
		B 5.6				
		D 7.7				
		E 1.7				
5	高台付環土師器	A 16.2	完形。ハの字状に開くやや足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	小礫・長石・雲母 浅黄褐色 普通	P L 43 P 492 100% 覆土中層
		B 6.1				
		D 8.8				
		E 1.5				
6	高台付環土師器	A [15.2]	高台部→口縁部片。ハの字状に開く足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	小礫・長石 にぶい褐色 普通	P 508 60% 覆土上層
		B 5.1				
		D 8.4				
		E 1.7				
7	高台付環土師器	A [15.1]	口縁部一部欠損。ハの字状に開く足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。高台接地面に凹線を施す。ロクロ成形。内面にロクロ目を強く残す。	小礫・長石 浅黄褐色 普通	P L 43 P 498 80% 覆土中層
		B 5.2				
		D 8.2				
		E 1.8				
8	高台付環土師器	A [14.8]	口縁部一部欠損。ハの字状に開く足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	砂粒・長石 浅黄褐色 普通	P L 43 P 503 60% 覆土中層
		B 5.6				
		D 8.7				
		E 2.3				
9	高台付環土師器	A [14.6]	高台部、口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P L 43 P 499 60% 覆土上層
		B 4.9				
		D 8.6				
		E 1.2				
10	高台付環土師器	A 11.5	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	砂粒・長石・雲母 浅黄褐色 普通	P L 43 P 495 95% 覆土上層
		B 4.4				
		D 7.3				
		E 1.4				
11	高台付環土師器	A [17.5]	高台部→口縁部片。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内面磨き。口縁部、体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石・スコリア・雲母 にぶい黄褐色 普通	P L 43 P 748 60% 覆土中層 断面に研ぎ疵あり
		B 7.6				
		D 8.7				
		E 1.6				
12	高台付環土師器	A 14.7	高台部→口縁部片。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内面磨き。口縁部、体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	小礫・長石 にぶい褐色 普通	P 746 60% 覆土上層
		B 6.0				
		D 8.1				
		E 1.3				
13	高台付環土師器	A 14.2	口縁部一部欠損。裾が突出するハの字状の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。口縁部は外彎する。	口縁部、体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石・スコリア にぶい黄褐色 普通	P L 43 P 743 70% 覆土上層
		B 5.9				
		D 7.3				
		E 1.0				

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第115図 14	高台付環 土 師 器	A 14.0	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。口縁部は内傾ぎされる。	口縁部内面磨き。口縁部、体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	小礫・長石 にぶい黄褐色 普通	P L43 P747 60% 覆土中層
		B 5.7				
		D 7.2				
		E 1.2				
15	高台付環 土 師 器	A 13.0	高台部→口縁部片。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面磨き。体部内面ナデ。体部外面横ナデ。底部回転糸切り。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石・スコリア 淡黄色 普通	P L43 P745 60% 覆土
		B 5.1				
		D 7.1				
		E 1.1				
16	高台付環 土 師 器	A [12.7]	高台部→口縁部片。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。口縁部は外反する。	口縁部、体部内面磨き。口縁部、体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石・砂粒 浅黄褐色 普通	P752 40% 覆土上層
		B 4.9				
		D [7.5]				
		E 1.4				
17	高台付環 土 師 器	A [11.8]	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。口縁部は内傾ぎする。	口縁部内面磨き。口縁部、体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石・スコリア 浅黄色 普通	P L43 P740 85% 覆土中層
		B 4.7				
		D 6.8				
		E 1.0				
18	高台付環 土 師 器	A 11.7	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。口縁部は外傾する。	口縁部、体部内面ナデ後、磨き。口縁部、体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石・雲母 浅黄色 普通	P L43 P742 70% 覆土下層
		B 4.1				
		D 6.2				
		E 1.1				
19	高台付環 土 師 器	A 11.1	高台部→口縁部片。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内面磨き。口縁部、体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	小礫・長石 にぶい褐色 普通	P L43 P741 70% 覆土中層
		B 4.7				
		D 6.4				
		E 1.2				
20	高台付環 土 師 器	A 11.0	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内面磨き。体部内面ナデ。口縁部、体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	小礫・長石・スコリア 浅黄褐色 普通	P L43 P739 90% 覆土中層
		B 4.6				
		D 5.6				
		E 1.2				
21	高台付環 土 師 器	A [10.5]	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内面放射状のナデ。口縁部、体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石・スコリア 浅黄褐色 普通	P L43 P749 65% 覆土上層
		B 3.9				
		D 6.7				
		E 1.1				
22	高台付環 土 師 器	A [10.0]	高台部→口縁部片。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。口縁部は外傾する。	口縁部内面磨き。体部内面放射状のナデ。口縁部、体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通	P750 50% 覆土上層
		B 3.9				
		D 5.7				
		E 1.0				
23	高台付環 土 師 器	A 9.6	口縁部一部欠損。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、膨らみをもつ。口縁部は外傾する。	口縁部、体部内面磨き。口縁部、体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石・スコリア・雲母 にぶい黄褐色 普通	P L43 P738 95% 覆土上層
		B 4.0				
		D 5.0				
		E 0.8				
24	高台付環 土 師 器	A 8.8	完形。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内面磨き。口縁部、体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P L43 P737 100% 覆土上層
		B 3.7				
		D 4.8				
		E 0.8				
25	皿 土 師 器	A 11.9	完形。平底。体部はわずかに内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P L43 P790 100% 覆土中層 灯明皿焼付着
		B 2.8				
		C 5.4				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第115図 26	土師器	A 11.0	完形。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	小磯・砂粒・長石 浅黄褐色 普通	P L 43 P 545 100% 覆土中層
		B 3.1				
		C 6.3				
27	土師器	A 10.9	完形。丸底に近い平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り後、ナデ。ロクロ成形。	長石・スコリア・雲母 にふい橙褐色 普通	P L 44 P 730 100% 覆土中層
		B 3.3				
		C 6.5				
28	土師器	A 10.9	底部へ口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	長石・石英・雲母 浅黄褐色・黒色 普通	P 591 60% 覆土上層
		B 2.9				
		C 6.5				
第116図 29	土師器	A 10.8	完形。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	小磯・長石 浅黄褐色 普通	P 543 100% 覆土中層
		B 2.7				
		C 5.5				
30	土師器	A 10.6	底部へ口縁部片。底部は突出した平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	長石・スコリア にふい黄褐色 普通	P 583 60% 覆土中層
		B 3.1				
		C 5.0				
31	土師器	A 10.5	完形。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	砂粒・長石 にふい橙褐色 普通	P 535 100% 覆土中層
		B 2.9				
		C 4.3				
32	土師器	A 10.3	完形。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	砂粒・長石・スコリア にふい橙褐色 普通	P L 44 P 525 100% 覆土中層
		B 2.7				
		C 5.4				
33	土師器	A 10.3	完形。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	小磯・長石・スコリア にふい橙褐色 普通	542 100% 覆土下層
		B 2.8				
		C 5.3				
34	土師器	A 10.2	完形。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	小磯・長石・雲母 にふい黄褐色 普通	P L 44 P 526 100% 覆土中層
		B 2.4				
		C 6.0				
35	土師器	A 10.2	完形。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	砂粒・長石・雲母 にふい橙褐色 普通	P L 44 P 533 100% 覆土上層
		B 2.9				
		C 6.2				
36	土師器	A 10.0	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	長石・雲母 にふい橙褐色 普通	P L 44 P 559 90% 覆土中層
		B 2.9				
		C 6.3				
37	土師器	A 9.8	完形。突出した平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	小磯・長石 にふい橙褐色・黒色 普通	P L 44 P 529 100% 覆土中層
		B 3.2				
		C 4.2				
38	土師器	A 9.8	完形。突出した平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	長石・石英 浅黄褐色 普通	P L 44 P 537 100% 覆土中層
		B 3.0				
		C 4.2				
39	土師器	A 9.8	口縁部一部欠損。突出した平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	長石・スコリア 浅黄褐色 普通	P 580 90% 覆土中層
		B 2.7				
		C 4.4				
40	土師器	A 9.8	完形。平底。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	小磯・長石 橙褐色 普通	P L 44 P 759 100% 覆土中層
		B 2.8				
		C 5.4				
41	土師器	A 9.5	完形。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	小磯・長石・スコリア にふい橙褐色 普通	P L 44 P 549 100% 覆土上層
		B 2.7				
		C 5.7				

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第116図 42	土 師 器	A 10.8	完形。突出して丸味を帯びた平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部外面横ナデ。底部回転へう切り。ロクロ成形。	長石・雲母 浅黄色 普通	P L44 P729 100% 覆土中層
		B 3.0				
		C 6.7				
43	土 師 器	A 10.4	完形。丸味を帯びた平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部外面横ナデ。底部回転へう切り。ロクロ成形。	小礫・長石 にぶい橙色 普通	P L44 P728 100% 覆土中層
		B 3.1				
		C 6.4				
44	土 師 器	A 9.7	口縁部一部欠損。丸味を帯びた平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部外面横ナデ。底部回転へう切り。ロクロ成形。	長石 にぶい黄褐色 普通	P733 60% 覆土中層
		B 2.8				
		C 5.8				
45	土 師 器	A 11.7	底部～口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部外面横ナデ。底部回転余切り。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石・雲母・スフィア 浅黄褐色 普通	P L44 P760 85% 覆土下層
		B 3.1				
		C 4.9				
46	土 師 器	A 11.7	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部外面横ナデ。底部回転余切り。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P L44 P761 80% 覆土下層
		B 3.0				
		C 5.6				
47	土 師 器	A (12.0)	底部～口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部外面横ナデ。体部内面放射状の磨き。底部回転余切り。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石 明褐色 普通	P767 50% 覆土中層
		B 3.2				
		C (6.0)				
48	土 師 器	A (10.5)	底部～口縁部片。突出した平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部外面横ナデ。体部内面磨き。底部回転余切り。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石・雲母 浅黄褐色 普通	P765 55% 覆土
		B 3.2				
		C 4.2				
49	土 師 器	A 10.2	底部～口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部外面横ナデ。底部回転余切り後、外周部へう削り。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P L44 P763 60% 覆土中層
		B 3.1				
		C 4.0				
50	土 師 器	A 10.0	口縁部一部欠損。やや突出した平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部外面横ナデ。底部回転余切り。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙褐色 普通	P L44 P762 80% 覆土中層
		B 2.9				
		C 4.8				
51	土 師 器	A 10.0	底部～口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部外面横ナデ。底部回転余切り。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石・スフィア にぶい橙色 普通	P764 55% 覆土
		B 3.0				
		C 4.5				
52	土 師 器	A (9.0)	底部～口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。器厚が薄い。	口縁部、体部外面横ナデ。体部内面横方向、見込み部分放射状の磨き。底部回転余切り。内面黒色処理。ロクロ成形。	長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P768 40% 覆土中層
		B 2.7				
		C 6.6				
53	土 師 器	A 9.8	完形。丸味を帯びた平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部外面横ナデ。体部内面磨き。底部回転余切り。内面黒色処理。ロクロ成形。	小礫・砂粒・長石 浅黄色 普通	P L44 P766 100% 覆土中層
		B 3.0				
		C 4.0				
54	土 師 器	A (11.0)	底部～口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部外面横ナデ。内面黒色処理。ロクロ成形。	砂粒・長石・雲母 浅黄褐色 普通	P774 30% 覆土中層
		B 4.7				
55	土 師 器	A 23.2	体部中位～口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、体部中位に最大径がある。口縁部は外反し、口縁端部はつまみ出される。	口縁部内・外面、体部外面横ナデ。体部内面斜方向のナデ。ロクロ成形。	小礫・砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P L44 P791 30% 覆土中層 二次焼成肌荒れ
		B (17.0)				

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第11図 56	不明鉄製品	(4.3)	(4.6)	0.8	(15.6)	覆土	P.L.46 M19 木賃邸残存
57	角釘	(5.5)	(0.6)	0.5	(3.4)	覆土	P.L.46 M20 鉄製
58	角釘	(4.0)	0.8	0.4	1.8	覆土	P.L.46 M24 鉄製

表5 青木遺跡土坑一覽表

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新開開区(古→新)	図版 番号
				長さ×幅径(m)	深さ(m)						
1	C5c	N-7°-E	楕円形	0.62×0.48	30	垂直	段差	人為	土師器5 須恵器1		117
2	B2b	N-90°	長方形	1.92×0.75	5	外傾	編成	不明		中世 粘土貼土坑	117
3	B3d	-	[円形]	-	-	外傾	-	自然		S111号地下式層一本跡	117
4	B4c	N-90°	楕円長方形	4.2×3.0	130	外傾	編成	人為	陶磁器245 瓦質土器148 土師質土器63 土師器176 須恵器290	江戸時代(18世紀前半) S15-S15→本跡 跡水施設か	91
5	B4c	N-0°	楕円長方形	(1.5)×(1.5)	60	外傾	平坦	人為		S2(古)→本跡→S2(新)-SK4	125
7	C6b	-	円形	2.7×2.65	50	垂直	編成	自然	土師器223 須恵器56 弥生土器11 陶器32	奈良時代(8世紀後半) 本跡→SK12	98
8	C6b	-	円形	0.75×0.7	23	外傾	編成	人為	土師器7 須恵器3		117
25	B4c	-	不定形	(1.8)×0.8	55	垂直	平坦	人為	鉄押1	S13→本跡	117
26	B5j	-	円形	0.55×0.55	30	垂直	U字状	人為			117
36	B9a	-	円形	0.9×0.82	(102)	垂直	-	自然	瓦質土器3 土師質土器1 陶器1 土師器41 須恵器4	貝戸の可能性有	99
45	B4e	-	円形	0.62×0.6	36	垂直	傾斜	人為	須恵器1	柱礎有	117
46	B3a	-	円形	0.76×0.75	8	外傾	傾斜	不明			117
47	B4e	-	-	(0.86)×-	(27)	外傾	U字状	人為	土師器3 須恵器1		117
48	B3a	-	円形	0.46×0.45	10	外傾	U字状	人為			117
51	B2b	-	円形	0.85×0.85	32	内傾	段差	自然	土師器17 須恵器6 陶器2		117
56	B2b	N-77°-W	長方形	1.22×0.56	5	外傾	編成	不明	須恵器1 陶器1	中世 粘土貼土坑	117
57	B2c	-	円形	1.0×1.0	25	垂直	平坦	人為	土師器6 須恵器3 陶器1	中世 粘土貼土坑	118
70	B1c	N-80°-E	楕円形	1.35×1.1	65	外傾	U字状	不明			118
81	B1c	N-0°	楕円長方形	2.2×0.9	5	垂直	平坦	不明	土師器8 須恵器4		118
85	B1c	-	円形	0.9×0.9	15	外傾	編成	不明	土師器1 須恵器2	奈良時代(8世紀前半)	100
122	B5g	-	[円形]	1.2×(1.2)	46	垂直	編成	自然	土師器1	S115→本跡	118
123	B6j	-	円形	0.5×0.5	48	垂直	U字状	人為	土師器1		118
124	B6h	-	円形	0.9×0.9	55	外傾	編成	不明	土師器2	平安時代(10~12世紀) S100→本跡	101
125	B4b	N-6°-E	楕円形	3.5×	30	外傾	凹凸	自然	土師器740 須恵器12 須恵器4 土師質土器2 羽柴1 鹿嶋1 他	平安時代(10~12世紀)	102
126	B5b	N-85°-W	楕円形	0.75×0.55	10	外傾	平坦	-	土師器26		118
127	B5d	-	円形	0.8×(0.8)	60	垂直	編成	自然	土師器19 須恵器3	平安時代(10~12世紀) S125C→S125A→S125B→本跡	103
129	C6c	N-50°-W	長楕円形	2.25×0.6	100	垂直	凹凸	自然		縄文時代の陥し穴 本跡→SK7	118

土坑 番号	位置	長短方向 (長軸方向)	平面形	縦 横		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 新記録係(古一新)	図版 番号	
				長短×短横(m)	深さ(cm)							
130	C3a ₁	-	[円形]	1.5×1.5	50	外傾	凹凸	-			118	
131	C3a ₁	-	[円形]	1.2×1.2	55	垂直	平坦	-			118	
132	B4c ₁	-	円形	1.8×1.5	35	垂直	平坦	人為			118	
133	B4d ₁	N-15°-W	隅丸長方形	2.35×2.05	40	垂直	平坦	一部人為 土師器55 須恵器7 羽釜1 赤土土器1	平安時代(10~12世紀)		104	
136	B4d ₁	N-90°	楕円形	1.0×0.9	60	垂直	U字状	土師器5 須恵器2		柱板有	118	
140	B3c ₁	N-10°-W	[隅丸長方形]	1.3×1.0	35	垂直	凹凸	-			118	
141	B4c ₁	N-43°-W	楕円形	0.8×0.6	30	外傾	傾斜	-	土師器32 須恵器4 赤土土器1		119	
142	B4c ₁	N-76°-E	隅丸長方形	2.5×1.65	40	垂直	平坦	自然 土師器60 須恵器11 灰輪陶器1 赤土土器1	平安時代(10~12世紀)		106	
146	B4a ₁	-	円形	0.4×0.4	-	-	-	-			119	
147	B4d ₁	-	円形	0.55×0.5	-	-	-	-			118	
150	B3c ₁	N-67°-W	楕円形	3.0×1.9	55	外傾	凹凸	人為		B3H→本跡	119	
151	B4d ₁	-	円形	0.95×0.9	60	垂直	傾斜	人為	土師器9	平安時代(10~12世紀) 本跡→S125d	106	
152	B2a ₁	-	[円形]	1.1×1.1	-	-	凹凸	-	土師器1 須恵器1 鉄押1		中世 粘土貼土坑	119
183	B2c ₁	N-85°-E	楕円形	1.0×0.8	30	外傾	U字状	自然			119	
184	B2b ₁	N-0°	不整形方形	1.6×1.4	18	外傾	凹凸	人為	土師器1 須恵器2		119	
198	B5h ₁	N-80°-W	隅丸長方形	2.5×2.4	110	垂直	平坦	人為	土師器12,614 須恵器169 灰輪陶器13 羽釜4 甕2 鉄釘5 支脚1 他	平安時代(10~12世紀) S112・SK199→本跡	107	
199	B5g ₁	N-75°-E	不整形方形	2.8×1.3	70	垂直	傾斜	人為	土師器482 須恵器3	平安時代(10~12世紀) 本跡→SK198・200	107	
200	B5g ₁	N-88°-W	隅丸長方形	3.1×2.2	85	垂直	平坦	人為	土師器12,117 須恵器64 灰輪陶器9 羽釜3 支脚2 他	平安時代(10~12世紀) SK199→本跡	107	

SK-1 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量, ロームブロック微量
- 4 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック中量
- 5 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子少量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量
- 7 黒褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量

SK-3 土層解説

- 1 棕褐色 焼土粒子・ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 4 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量
- 5 棕褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量, ロームブロック微量
- 7 褐色 ロームブロック多量, ローム粒子中量

SK-25 土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量
- 3 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量

SK-26 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量

SK-45 土層解説

- 1 黒色 ローム粒子中量, ロームブロック少量
- 2 黒色 ロームブロック・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子中量
- 4 黒色 ローム粒子少量, ロームブロック微量
- 5 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量
- 6 黒褐色 ローム粒子多量, ロームブロック中量

SK-47 土層解説

- 1 黒色 ローム粒子少量
- 2 黒色 ローム粒子微量
- 3 黒色 ロームブロック・ローム粒子中量
- 4 黒色 ローム粒子少量, ロームブロック微量
- 5 黒色 ローム粒子少量

SK-48 土層解説

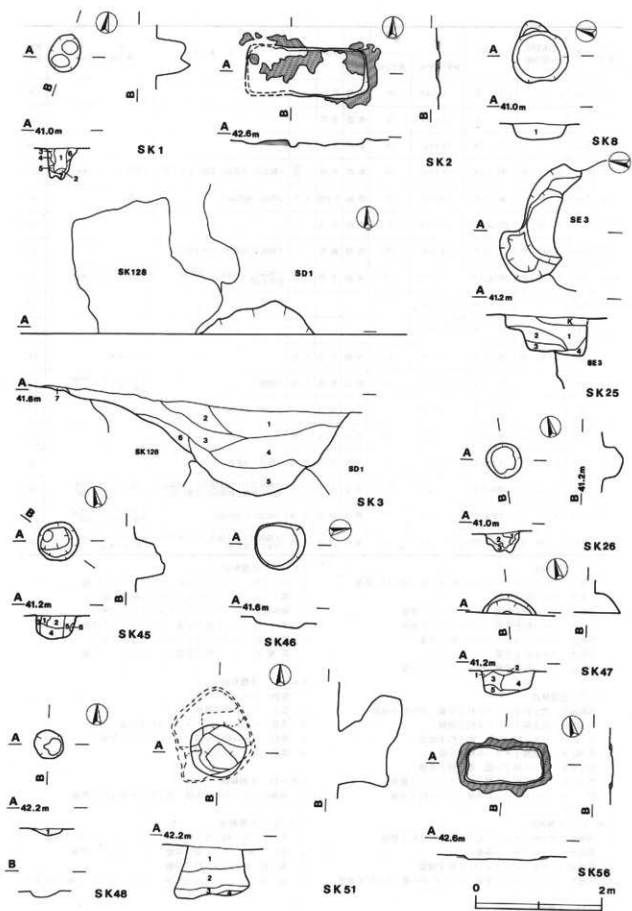
- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

SK-51 土層解説

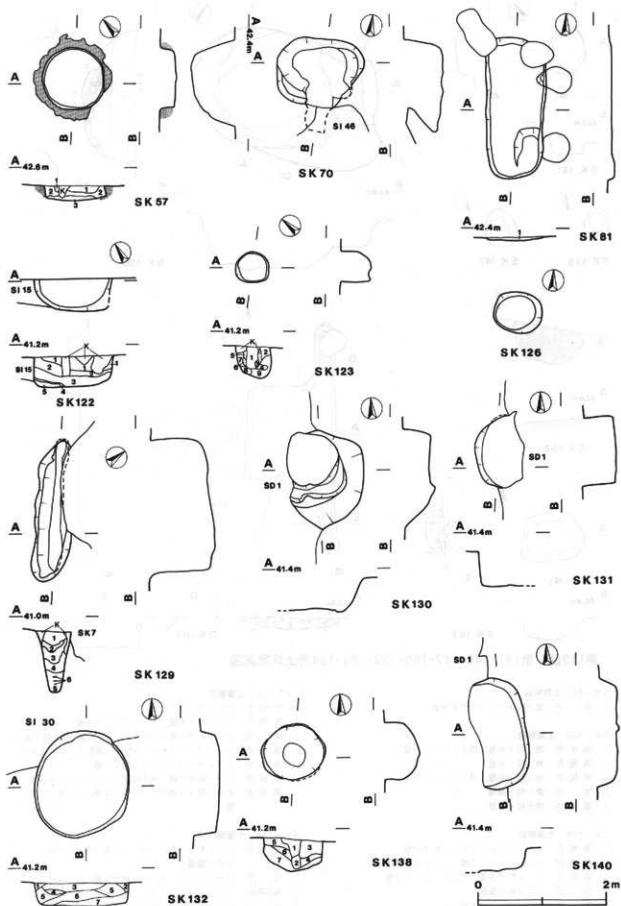
- 1 黒色 焼土粒子・ロームブロック・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 黄褐色 ローム粒子多量, ロームブロック中量, Ag-KPブロック少量

SK-57 土層解説

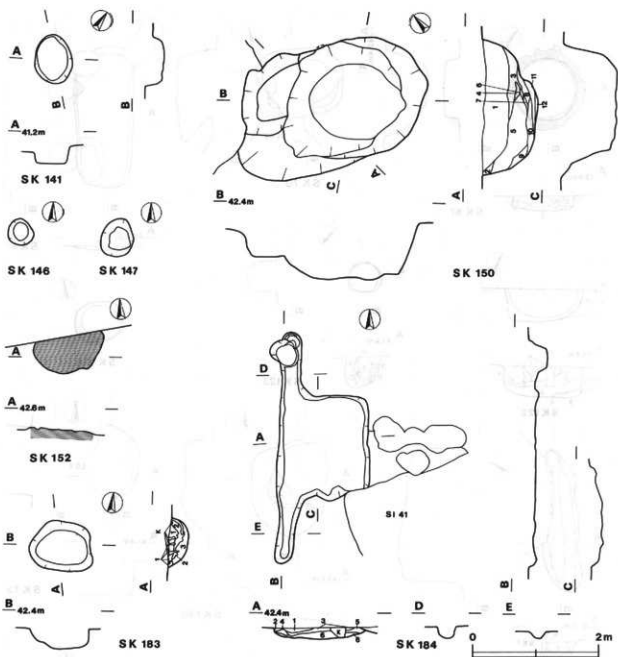
- 1 黒褐色 ローム粒子中量, 粘土ブロック少量
- 2 暗灰黄色 粘土ブロック中量, ローム粒子・小礫少量
- 3 黒色 ローム粒子中量, ロームブロック微量



第117图 第1~3·8·25·26·45~48·51·56号土坑实测图



第118图 第57·70·81·122·123·126·129~132·138·140号土坑实测图



第119図 第141・146・147・150・152・183・184号土坑実測図

SK-81 土層解説

- 1 黒色 焼土粒子・ローム粒子微量

SK-122 土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子中量, 焼土ブロック少量
- 2 黒褐色 焼土粒子少量
- 3 暗褐色 焼土粒子中量, 焼土ブロック少量
- 4 黒色 焼土粒子微量
- 5 黒褐色 焼土粒子少量

SK-123 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子中量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量, ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量, ロームブロック中量
- 4 黒色 ローム粒子微量
- 5 褐色 ロームブロック多量
- 6 黒色 ローム粒子微量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量, ロームブロック微量
- 8 暗褐色 ローム粒子中量, ロームブロック微量
- 9 褐色 ロームブロック多量

SK-132 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック多量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量
- 3 黒色 ロームブロック中量, ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 4 黒色 ロームブロック・ローム粒子・黒色土ブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量
- 6 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・ロームブロック少量
- 7 黒褐色 ローム粒子・黒色土ブロック中量, ロームブロック少量

SK-138 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・粘土ブロック中量, ロームブロック・粘土粒子微量
- 2 黒色 ロームブロック・ローム粒子少量
- 3 極暗褐色 ロームブロック・ローム粒子・粘土粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量, ローム粒子少量, 粘土粒子微量
- 6 黒褐色 ロームブロック中量, ローム粒子少量
- 7 黒色 ローム粒子少量, ロームブロック微量

SK-150 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, 小礫少量, 焼土粒子・粘土ブロック微量
- 2 黄褐色 ロームブロック・ローム粒子多量, 礫少量
- 3 オリーブ褐色 ローム粒子多量, ロームブロック・礫少量
- 4 暗灰黄色 粘土ブロック多量, ローム粒子少量
- 5 オリーブ褐色 小礫多量, ローム粒子中量
- 6 黄褐色 粘土ブロック・粘土粒子多量, ローム粒子中量
- 7 明黄褐色 ロームブロック層
- 8 暗オリーブ褐色 ロームブロック・ローム粒子多量
- 9 黄褐色 ロームブロック層
- 10 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・ローム粒子微量
- 11 オリーブ褐色 ロームブロック・ローム粒子多量, 礫少量, 焼土粒子微量

12 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子微量

SK-183 土層解説

- 1 黄褐色 ローム粒子・スコリア粒子多量
- 2 明黄褐色 ローム粒子多量, スコリア粒子中量
- 3 黄褐色 ローム粒子多量

SK-184 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック多量
- 3 黒色 ロームブロック・ローム粒子微量
- 4 黒色 ローム粒子微量
- 5 黒色 ローム粒子極微量
- 6 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量

5 地下式墳

今回の調査では, 中世の地下式墳1基を確認した。以下, その特徴や主な遺物について記載する。

第1号地下式墳(第120図)

位置 調査区の中央部南側, B3c区。

重複関係 本跡は, 第3号土坑と重複する。本跡が第3号土坑に掘り込まれており, 本跡が古い。

主軸方向 N-78°-E

竪坑 上面は径約0.8mの半円形で, 深さは150cmである。底面は主室に向かって緩やかに傾斜しており, 長軸0.6m, 短軸0.55mの隅丸長方形である。長軸方向はN-85°-Wである。

主室 南側が調査区外に延びているため正確な規模や平面形は不明であるが, 長軸2.2~3.6m, 短軸約1.5mの長方形と推定される。底面は平坦で, 北側の天井部の一部が残存している。底面から天井部までの高さは120cm, 確認面から底面までの深さは160cmである。長軸方向はN-6°-Wである。

壁 竪坑, 主室ともほぼ垂直に立ち上がっている。

覆土 12層からなり, 自然堆積と考えられる。土層5~9は天井部の崩落土層とみられる。

土層解説

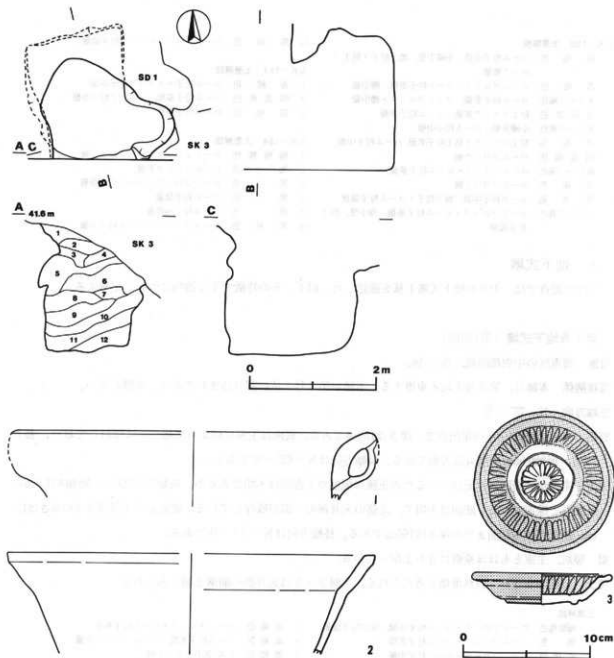
- | | | | |
|--------|-------------------------|--------|--------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック・ローム粒子多量 |
| 2 褐色 | ロームブロック・ローム粒子多量 | 8 暗褐色 | ローム粒子多量, ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・ローム粒子中量 | 9 黄褐色 | A-E-KPブロック層 |
| 4 褐色 | ロームブロック・ローム粒子多量 | 10 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 5 黄褐色 | ロームブロック層 | 11 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 6 黄褐色 | ロームブロック多量, 黒褐色土少量 | 12 暗褐色 | ローム粒子中量 |

遺物 土師器片23点, 土師質土器片9点及び陶器1点が出土している。第120図3の黄瀬戸の折縁菊皿は完形である。

所見 本跡は, 当初土坑と考え, SK-128として調査したが, 地下式墳であることが判明したため遺構番号を変更した。出土遺物から中世(16世紀後半)のものと考えられる。

第1号地下式墳出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第120図 1	内耳 銅 土師質土器	A (28.9)	口縁部片。口縁部が膨らみ, 口	口縁部内面横ナデ, 外面指環状。	長石・雲母 淡黄褐色	P L44
		B (5.8)	縁部が肥厚する。		普通	P933 5% 覆土 外面煤付着



第120図 第1号地下式城・出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
第120図 2	内耳輪 土師質土器	A (29.0)	体部上位、口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部で屈曲して外傾する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面指頭痕。	長石・石英・雲母 橙色	P L44 P934 5%	
		B (7.9)			普通		
3	皿 陶器	A 11.2	折縁菊皿。断面形が逆台形の低い輪高台。体部は外傾し、口縁部は横方向に屈曲する折縁。口縁端部は玉縁状である。	黄瀬戸。体部内面を丸のみで菊 花状に削ぐ。削り出し高台。見 込みに菊の印花。体部内面～高 台側面灰釉。内ハゲ。底面に輪 トラン痕。	長石 (胎土)淡黄色 (釉)淡黄色	P L44 P935 100%	
		B 2.5					
		D 5.6					
		E 0.3					覆土

6 堀及び溝

今回の調査では、堀1条、溝2条を確認した(SD-1~3)。以下、その特徴や主な遺物について記載する。

第1号堀 (第121・122区)

位置 調査区の中央部, B3b区。

重複関係 本跡は、第3, 130, 131, 140号各土坑と重複する。本跡が第3号土坑に掘り込まれており、本跡が古い。第130, 131及び140号各土坑との新旧関係は不明である。

規模と形状 断面形は逆台形状で、西側に段がある。上幅3.5~4.7m, 中段幅0.6~1.8m, 下幅0.7~1.0m, 深さ120~170cmで、確認した長さ11.3mである。南側は底面が一段低くなっており、5か所のピット(P₁~P₅)が確認された。木橋等の施設に伴うものである可能性が考えられる。

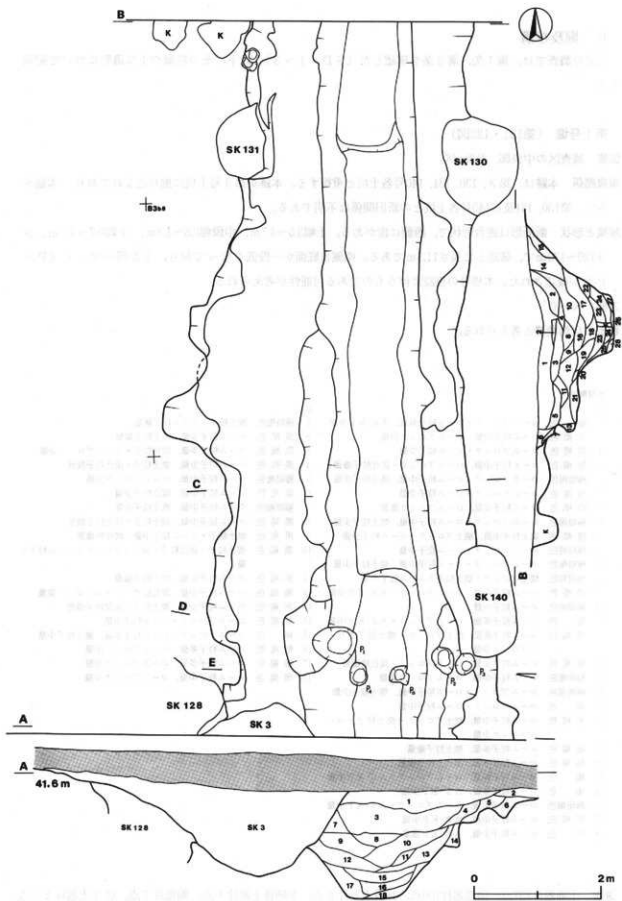
方向 N-0°

覆土 自然堆積と考えられる。

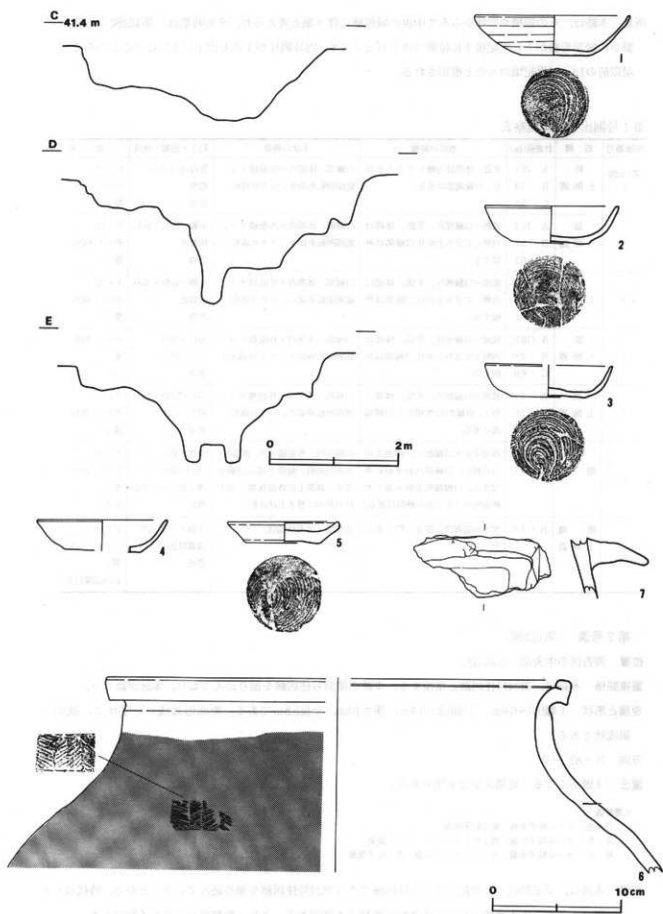
土層解説

A	B
1 褐色 ロームブロック・ローム粒子多量, A E-K P少量	1 極暗褐色 焼土粒子・ローム粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量	2 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
3 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量	3 黒褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子・ロームブロック少量
4 黒褐色 ローム粒子中量, ロームブロック・炭化粒子微量	4 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
5 極暗褐色 ロームブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子少量	5 極暗褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量
6 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量	6 黒褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量
7 暗褐色 ローム粒子少量, ロームブロック微量	7 極暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量
8 極暗褐色 ロームブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子少量	8 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
9 暗褐色 焼土粒子中量, 焼土ブロック・ローム粒子少量	9 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量, 炭化物微量
10 極暗褐色 ロームブロック・ローム粒子少量	10 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・ロームブロック・ローム粒子少量
11 極暗褐色 ロームブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子少量	11 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
12 極暗褐色 焼土ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量	12 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子・ロームブロック微量
13 暗褐色 ローム粒子中量, ロームブロック・A E-K P少量	13 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
14 極暗褐色 ローム粒子少量	14 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量
15 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック・A E-K P中量	15 褐色 ロームブロック・ローム粒子多量, 焼土粒子少量
16 暗褐色 ローム粒子多量, 焼土ブロック・焼土粒子・ロームブロック少量	16 暗褐色 ローム粒子多量, ロームブロック中量
17 黒褐色 ローム粒子少量, ロームブロック・炭化物微量	17 暗褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量
18 極暗褐色 ローム粒子中量, ロームブロック微量	18 黒褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量
19 極暗褐色 ロームブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子少量	
20 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック・ローム粒子中量	
21 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土ブロック・焼土粒子・ロームブロック少量	
22 暗褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子微量	
23 暗褐色 ローム粒子多量, 黒色土粒子微量	
24 褐色 ローム粒子多量, ロームブロック・A E-K P中量	
25 褐色 ローム粒子多量, A E-K P少量	
26 極暗褐色 ローム粒子中量, ロームブロック・A E-K P少量	
27 黒褐色 ローム粒子中量, A E-K P少量	
28 黒色 ローム粒子少量, A E-K P微量	

遺物 土師器片237点, 須恵器片100点, 瓦質土器片6点, 土師質土器片1点, 陶器片7点, 弥生土器片2点及び鉄滓3点が出土している。ただし、本跡は他の4基の土坑と重複しており、調査時にこれらの土坑の遺物が混入した可能性がある。



第121图 第1号堀実測图(1)



第122图 第1号堀(2)・出土遺物実測図

所見 本跡は、その規模や形状からみて中世の城館跡に伴う堀と考えられ、その時期は、第122図6の常滑の壘が口縁部形態から13世紀後半に位置づけられることや、内耳銅片が1点も出土していないことからその出現以前の13~14世紀頃のものとして推定される。

第1号堀出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・施成	備考
第122図 1	杯 土師器	A 12.2 B 3.3 C 5.5	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁端部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	雲母・長石・スコリア 褐色 普通	P L44 P948 95% 覆土
2	皿 土師器	A 10.5 B 3.0 C 6.1	底部~口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	小礫・砂粒・長石 灰黄色 普通	P L44 P949 80% 覆土
3	皿 土師器	A {10.0 B 2.5 C 5.8	底部~口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	小礫・砂粒・長石 灰黄色 普通	P L45 P950 60% 覆土
4	皿 土師器	A {10.2 B 2.6 C { 6.0	底部~口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	長石・雲母 にぶい褐色 普通	P982 60% 覆土
5	皿 土師器	A 8.7 B 2.0 C 5.9	底部~口縁部片。平底。体部は短く、直線的に外傾して口縁端部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	長石・雲母・スコリア 褐色 普通	P L45 P951 70% 覆土
6	壘 陶器	A {36.4 B {15.1}	体部上位~口縁部片。体部上位は内傾し、口縁部はわずかに外反する。口縁端部を折り返した断面形がコの字状の縁帯が巡る。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面指頭痕。縁帯下部に凹線が巡る。体部上位外面尖輪。縁形状の押印。巻き上げ成形。	小礫・長石 (胎土)灰色 後縁褐色・オリーブ灰色 良好	P L45 P953 10% 覆土 常滑
7	煎 土師器	B { 4.6	焚口の底部片。底は「門」形に付く。	底部内・外面指頭痕。	小礫・スコリア 浅黄褐色 普通	P L45 P954 5% 覆土 底内面黒付着

第2号溝 (第123図)

位置 調査区の中央部、B3b区。

重複関係 本跡は、第34号住居跡と重複する。本跡が第34号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と形状 上幅0.3~0.6m、下幅0.2~0.4m、深さ10cm、全長5.8mである。断面形は浅いU字状で、底面は鍋底状である。

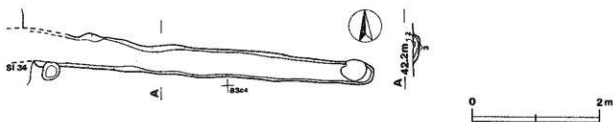
方向 N-82°-W

覆土 3層からなる。堆積状況は不明である。

土壌解説

- 1 黒褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量
- 2 黒色 ローム粒子中量、焼土粒子・ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子多量、ロームブロック少量、焼土粒子少量

所見 本跡は、平安時代(9世紀前半)の住居跡である第34号住居跡を掘り込んでいることから、時代はそれ以降であるが、出土遺物がないため詳細な時期は不明である。また、性格についても不明である。



第123図 第2号溝実測図

第3号溝 (第124図)

位置 調査区の東端部, C6d₁区。

規模と形状 本跡は、壁の北側の一部を確認しただけであるため、上幅、下幅ともに不明である。深さは46cm、確認した長さ7.7mである。断面形は逆台形と推定され、底面は平坦である。

方向 N-87°-W

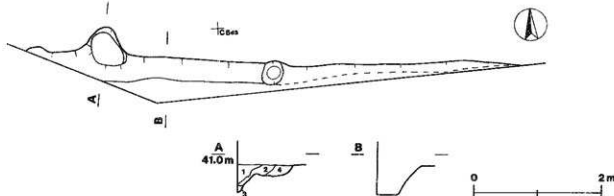
覆土 4層からなり、自然堆積とみられる。

土層解説

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色 黄土粒子・ローム粒子微量 | 3 極暗褐色 ローム粒子中量、ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子中量、ロームブロック微量 | 4 暗褐色 ローム粒子多量、ロームブロック少量 |

遺物 土師器片2点、須恵器片1点、土師質土器片1点及び鉄滓5点が出土している。

所見 本跡は、出土遺物が土器細片であり、詳細な時期は不明であるが、内耳竈と思われる土師質土器片が出土していることから中世のものである可能性が高い。性格は不明である。



第124図 第3号溝実測図

7 井戸

今回の調査では、井戸4基を確認した (SE-2~5, SE-1は欠番)。以下、その特徴や主な遺物について記載する。

第2号井戸 (第125図)

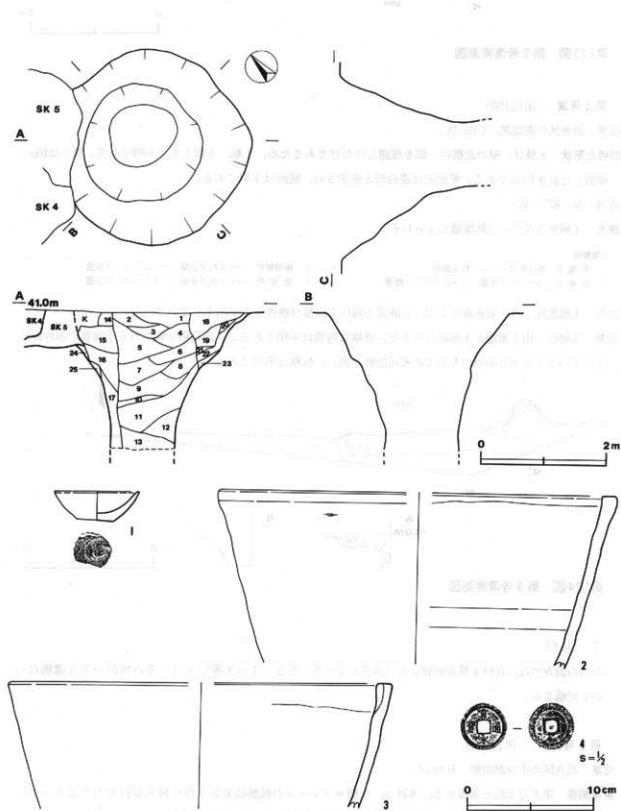
位置 調査区の中央部南側, B4d区。

重複関係 第5号土坑と重複する。本跡は、土層セクションの観察結果から作り替えが行われたとみられ、(旧)第2号井戸→第5号土坑→(新)第2号井戸の順に構築されたと考えられる。

規模と形状 掘り方の上面は径2.9mの円形である。断面形はラッパ状で、確認面から1.9mの深さまで急傾斜

を持ち、そこから下は円筒形となっている。土層の違いから、径1.2mの円筒形の井戸枠があったものと考えられる。深さは確認面から2.2mまで掘り下げたが、底面には達しなかった。

覆土 25層からなる。土層1～13は井戸の開口部で、下層にはロームブロックが多量に含まれており、一部人



第125図 第2号井戸・出土遺物実測図

為堆積である。土層14～23は井戸枠を埋めた土で、ロームブロックや礫を多く含む。土層24・25は旧井戸に伴う土層と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	14 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
2 黒褐色	炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子微量	15 黒褐色	ロームブロック・ローム粒子多量、礫少量
3 黒褐色	炭化粒子・ローム粒子・焼土粒子少量	16 黒褐色	炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子・ロームブロック微量
4 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	17 黒褐色	礫・ローム粒子少量、ロームブロック微量
5 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量	18 黒褐色	礫・焼土粒子少量、炭化粒子・ローム粒子微量
6 黒褐色	焼土粒子・ローム粒子微量	19 黒褐色	ローム粒子中量、礫・ロームブロック少量
7 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	20 暗褐色	ローム粒子多量
8 暗褐色	ローム粒子多量、ロームブロック中量、炭化物微量	21 暗褐色	ローム粒子多量、ロームブロック中量
9 黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量	22 褐色	ローム粒子多量、ロームブロック中量、炭化粒子微量
10 黒褐色	ローム粒子少量	23 黒褐色	礫多量、ローム粒子少量
11 黒褐色	礫多量、炭化物ローム・ブロック・ローム粒子少量	24 暗褐色	ロームブロック中量、礫・ローム粒子少量
12 極暗褐色	礫中量、ロームブロック・ローム粒子少量	25 極暗褐色	ローム粒子中量、A8-KP少量
13 褐色	ロームブロック多量、ローム粒子中量		

遺物 土師器片74点、須恵器片14点、土師質土器片4点及び寛永通寶1点が出土している。

所見 本跡は、底面まで掘り下げることができなかったため確実な時期は不明であるが、寛永通寶が出土していることから江戸時代（17世紀後半～19世紀頃）のものと推定される。

第2号井戸出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第125図 1	小形環土師器	A 6.7	底部～口縁部片。平底。体部は	口縁部、体部内・外面横ナデ。	長石・雲母・石英にふいば褐色	P L45
		B 2.4	内彎して立ち上がり、口縁端部に至る。	底部回転糸切り。クロコ成形。	普通	P95 60%
2	内耳鍋土師質土器	A (31.4)	体部、口縁部片。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口縁部で肥厚する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面指頭痕。	小礫・石英・スリア 黒色 普通	P L45 P956 15%
		B (13.7)				覆土 外面煤付著
3	内耳鍋土師質土器	A (30.0)	体部、口縁部片。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口縁部で肥厚する。	口縁部内面に粘土貼付。口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母にふいば褐色 普通	P L45 P957 10%
		B (10.0)				覆土

図版番号	類別	計測値			出土地点	備考
		径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
4	銅銭	2.4	0.1	3.2	覆土	P L46 M35 青銅製 寛永通寶

第3号井戸（第126図）

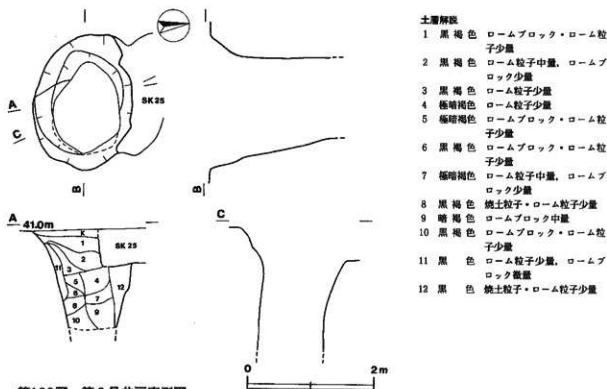
位置 調査区の中央部東側、B4d区。

重複関係 第25号土坑と重複する。本跡が第25号土坑に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と形状 掘り方の上面は長径2.1m、短径1.5mの楕円形である。断面形はラッパ状で、確認面から0.6mの深さまで急傾斜を持ち、そこから下は断面形が卵形の円筒形となっている。土層の違いから、井戸枠があったものと考えられる。深さは確認面から2.0mまで掘り下げたが、底面には達しなかった。ピンボールで探ったところ深さがまだ1m以上あることが確かめられた。

覆土 12層からなる。土層1～10は井戸の開口部で、堆積の仕方が不自然であることから人為堆積とみられる。

土層11・12は他の層が褐色土であるのに対してこの2層だけは黒色土である。堆積の仕方からみて井戸枠の外側に埋められた土と考えられる。



第126図 第3号井戸実測図

遺物 瓦質土器片1点、土師器片45点、須恵器片2点、粘土塊1点及び鉄滓2点が出土している。

所見 本跡は、底面まで掘り下げることができず、出土遺物が細片であるため詳細な時期は明確ではないが、周辺に井戸が集中していることからそれらと同時期の近世のものと考えられる。

第4号井戸（第127図）

位置 調査区の中央部西側、B2c区。

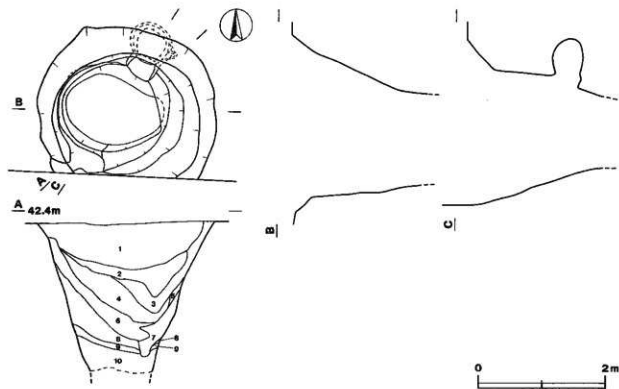
規模と形状 南側が調査区外に延びているが、掘り方の上面は径2.8mの円形と推定される。確認面から2.1mの深さまで急傾斜を持って落ち込んでいる。そこから下は断面形が卵形の円筒形となっている。深さは2.3mまで掘り下げたが、底面には達しなかった。また、北壁の深さ1.8mのところに横穴が掘られている。規模は幅50cm、高さ40cm、奥行き70cmである。性格は不明である。

覆土 10層からなる。堆積状況から自然堆積とみられる。

土層解説

1	黒褐色	小礫・焼土粒子・ローム粒子微量	5	黒褐色	ロームブロック中量、ローム粒子微量
2	黒色	小礫中量、ローム粒子少量、焼土粒子・ロームブロック微量	6	黒褐色	ロームブロック・ローム粒子中量、小礫少量
3	黒褐色	ローム粒子少量、小礫・焼土粒子・ロームブロック微量	7	黒色	ローム粒子少量、小礫微量
4	黒色	ロームブロック・ローム粒子少量、小礫・焼土粒子微量	8	黒褐色	小礫多量、ローム粒子中量、焼土粒子・ロームブロック微量
			9	黒褐色	ローム粒子多量、小礫少量、ロームブロック微量
			10	黒褐色	小礫・ローム粒子中量、焼土粒子・ロームブロック微量

所見 本跡は、出土遺物が少なく時期は不明である。



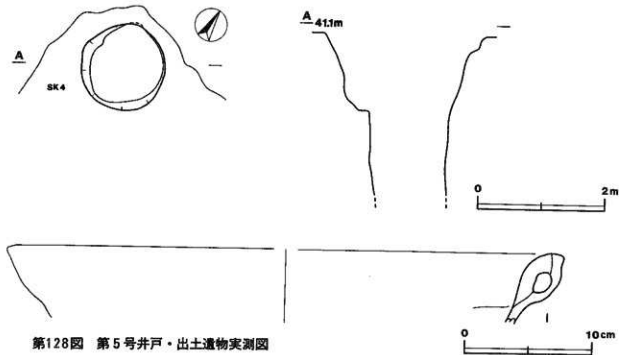
第127図 第4号井戸実測図

第5号井戸 (第128図)

位置 調査区の中央部南側, B4c区。

重複関係 本跡は、第4号土坑の覆土の礫層を取り除いたときに確認されたものである。本跡の上に第4号土坑の礫層がのっていることから本跡が古い。

規模と形状 上方の規模や形状は第4号土坑と重なっており不明である。下方は径1.3mの円形で垂直に落ち



第128図 第5号井戸・出土遺物実測図

込む円筒形である。深さは確認面から2.5mまで掘り下げたが底面には達していない。

覆土 崩れてしまい不明である。

遺物 陶器片5点、土師質土器片17点、須恵器片1点及び粘土塊5点が出土している。

所見 本跡は、底面まで掘り下げることができなかったため、詳細な時期は不明であるが、重複関係や出土遺物から近世（17～18世紀）のものと考えられる。

第5号井戸出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第128図 1	内耳筒 土師質土器	A (44.0)	口縁部片。口縁部で厚し、膨らみをもつ。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 黒褐色 普通	P L 45 P 959 15% 覆土 外面露付着
		B (5.5)				

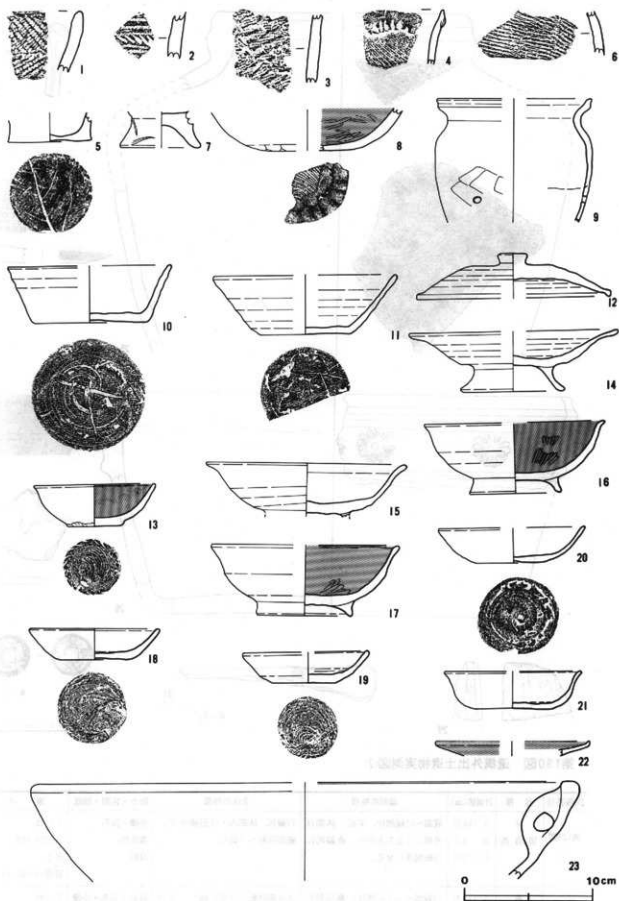
8 遺構外出土遺物（第129・130図）

当遺跡の遺構外からは、縄文時代から近世にかけての遺物が出土している。主な遺物を一覧表で記載する。

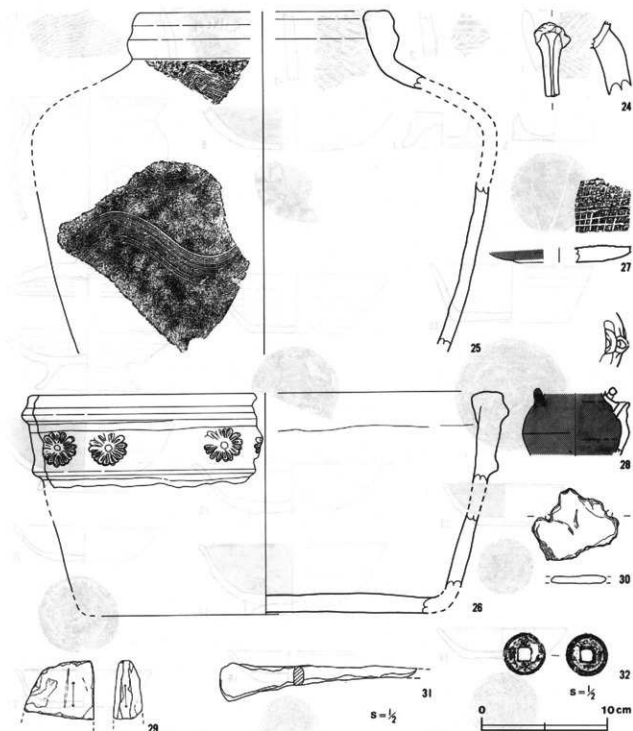
遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第129図 1	縄文土器	厚さ 0.8	口縁部片。単筋縄文が羽状に施される。	織維・石英・長石 暗褐色 普通	P L 46 T P 38 1% 表土
		厚さ 0.7			
2	縄文土器	厚さ 0.7	押圧縄文間に刻み目文が施される。	織維・長石 黒褐色 普通	P L 46 T P 39 1% 表土
3	縄文土器	厚さ 0.6	単筋の縄を撰った太い多条縄文が施される。	織維・石英・長石 暗赤褐色 普通	P L 46 T P 40 1% 表土
4	広口壺 弥生土器	厚さ 0.5	複合口縁部片。複合口縁下部に刻みが施される。地文には附加条1種（附加2条）の縄文が施される。	雲母・長石 暗褐色 普通	P L 46 T P 41 1% 表土
5	弥生土器	B (2.5)	底部、体部下片。平底で底部が横に張り出す。体部は外反して立ち上がる。体部下位に単筋縄文が施される。底部木炭質。輪襷み形で割製。	長石・雲母・スコリア 暗褐色 普通	P 1027 5% 表土
		C 6.6			
6	甕 土師器	厚さ 0.5	体部片。外面ハケ目調整。	長石・雲母 黒褐色 普通	P L 46 T P 42 1% 表土

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第129図 7	不明 土師器	B (2.5)	脚部片。脚部は八の字状に開く。	脚部外面へ削り。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄褐色 普通	P 1045 10% 表土
		D (6.4)				
8	環 土師器	B (3.1)	底部、体部片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内面、外面上位磨き。底部永切り後、外周部丁寧な手持ちへ削り。内面黒色処理。	長石・スコリア 淡黄色 普通	P 1043 20% 表土
		C (6.6)				
9	甕 土師器	A (12.2)	体部、口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部を上方につまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ削り。	長石・石英 オリーブ赤褐色 普通	P L 45 P 1052 10% 表土 体部焼成後穿孔
		B (9.8)				
		C (10.9)				
10	環 須恵器	A (13.1)	底部～口縁部片。平底。体部は外横して立ち上がり、直線的に口縁端部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へ削り。	長石・小礫 オリーブ黒色 良好	P L 45 P 1053 60% 表土 底部へ削り記号あり
		B 4.5				
		C 9.1				



第129图 濠沟外出土文物实测图(1)



第130図 遺構外出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第129図 11	環 須恵器	A (14.6)	底部へ口縁部片。平底。体部は	口縁部、体部内・外面横ナデ。	小礫・長石 黄灰色 良好	P L 45
		B 4.7	外傾して立ち上がり、直線的に	底部回転ヘラ切り。		P 1054 45%
		C (7.0)	口縁端部に至る。			表土 底部へラ記号あり
12	蓋 須恵器	A (15.0) B 3.6	口縁部へつまみ部片。断面形が 逆台形のつまみ。天井部は平坦 で、口縁端部は屈曲する。	天井部回転ヘラ削り後、つまみ 貼り付け。口縁部内・外面横ナ デ。	長石・石英・小礫 灰オリーブ色 良好	P L 45 P 1060 70% 表土

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第129図 13	環 土師器	A 9.7	口縁部一部欠損。突出した平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。内面黒色処理。	長石・スコリア にふいじ色 普通	P L45 P1028 90% 表土
		B 3.3				
		C 4.4				
14	高台付環 土師器	A (16.6)	高台部へ口縁部片。ハの字状に開く足高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。	砂粒・長石・スコリア にふいじ色 普通	P L45 P1029 50% 表土
		B 4.8				
		D 8.2				
		E 2.0				
15	高台付環 土師器	A (15.7)	体部、口縁部片。高台部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。ロクロ成形。	長石・スコリア にふいじ色 普通	P L45 P1031 50% 表土
		B (4.2)				
16	高台付環 土師器	A (14.2)	高台部へ口縁部片。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面、体部外面横ナデ。体部内面放射状の磨き。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。内面黒色処理。	砂粒・長石・雲母 にふいじ色 普通	P1032 30% 表土
		B 5.6				
		D (7.2)				
		E 1.2				
17	高台付環 土師器	A (14.7)	高台部へ口縁部片。ハの字状に開く高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内面磨き。体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。内面黒色処理。	長石・スコリア にふいじ色 普通	P1033 40% 表土
		B 5.6				
		D (7.6)				
		E 1.2				
18	皿 土師器	A 10.4	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	砂粒・スコリア 淡黄褐色 普通	P L45 P1034 80% 表土
		B 2.5				
		C 5.8				
19	皿 土師器	A (10.0)	底部へ口縁部片。やや丸味をもった平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転糸切り。ロクロ成形。	長石・スコリア にふいじ色 普通	P L45 P1037 65% 表土
		B 2.5				
		C 4.8				
20	皿 土師器	A (11.6)	底部へ口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り。ロクロ成形。	砂粒・スコリア にふいじ色 普通	P L45 P1038 50% 表土
		B 2.8				
		C 6.0				
21	皿 土師器	A (10.8)	底部へ口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り。ロクロ成形。	長石・スコリア にふいじ色 普通	P L45 P1040 45% 表土
		B 3.0				
		C 6.0				
22	皿 土師器	A (12.2)	体部、口縁部片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は上方に屈曲する。	口縁部、体部内面磨き。口縁部外面横ナデ。内・外面黒色処理。	長石・雲母 黒色 普通	P L45 P1044 5% 表土
		B 1.2				
23	内耳鏡 土師質土器	A (43.2)	体部上位、口縁部片。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母 黒色 普通	P L45 P1062 5% 表土
		B (7.7)				
第130図 24	脚付土器 土師質土器	B (5.8)	脚部片。断面形が三角形の脚部で、体部外面下端に付く。	脚部へう削り。	小礫・長石 浅黄褐色 普通	P L45 P1065 5% 表土
25	壺 瓦質土器	A (19.7)	体部、口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、体部上位で内傾する。口縁部は肥厚してほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部に襷括きの波状文が施される。	砂粒 灰黄色 普通	P L46 P1063 10% 表土
		B 18.7				
26	火鉢 瓦質土器	A (37.6)	底部、体部、口縁部片。脚部欠損。平底。体部はわずかに外傾し、口縁部で内面が肥厚する。口縁部の上下に各1条の隆帯が走る。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部の隆帯間に型押しによる菊花の文様を2つを1単位として施す。	長石 灰白色 普通	P 859 10% 表土
		B (17.5)				
		C (28.0)				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第130図 27	脚 陶 器	B (1.5) C (6.7)	底部、体部片。平底。無高台。 体部は外傾する。	見込み部分に格子目状の沈線。 底部回転承切り。見込み部分伏 軸。体部外面鉄軸。底部化粧が け。	長石 (胎土)灰白色 (備取イリーブ色・黒色) 良好	P L 46 P 1066 15% 表土 瀬戸・美濃
28	水 陶 器	B (5.2)	体部片。球形の体部で、体部中 位に境がある。体部上位に短い 注口が付き、さらにその上部に フルをかけるための耳が付く。	内・外面鉄軸。	長石 (胎土)灰黄色 (軸)黒褐色 良好	P L 46 P 1067 20% 表土 瀬戸・美濃

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第130図 29	磁石	4.6	(6.5)	2.2	(69.2)	表土	Q18 砂岩
30	不明石製品	(6.9)	(6.6)	0.6	(33.0)	表土	P L 46 Q19 緑泥片岩 孔2か所 石製模造品の未製品か
31	不明鉄製品	(10.3)	2.0	0.6	23.9	表土	P L 46 M37 鉄製
32	銅鏡	径	2.2	0.1	2.2	表土	M38 青銅製 寛永通寶

第4節 まとめ

青木遺跡の調査成果を時代ごとにまとめてみたい。

(1) 縄文時代

確認した遺構は陥し穴とみられる第129号土坑1基のみである。遺物は表土や後代の遺構から少量の土器片と石礫1点が出土している。土器片は、胎土に繊維を含むことや文様が押圧縄文や羽状縄文であることから早期末葉の条痕縄文土器、前期初頭の花積下層式、前期前葉の関山式期に比定される。第129号土坑の構築された時期もその頃と考えられる。

(2) 弥生時代

遺構は確認されていないが、土器片が表土や後代の遺構から少量出土している。土器片は細片が多く時期を特定するのが困難であるが、ほとんどが後期の十王台式のものである。他に東中根式等との関係が窺えるものがある。

(3) 古墳時代

竪穴住居跡12軒を確認した。2期に分けることができる。

第1期（6世紀後半）

第1, 2, 3, 8, 30, 38, 41, 48号各住居跡の8軒が該期の遺構である(内、第2, 3号住居跡は第1号住居跡内の貼床である)。住居跡の形態や施設等についてみると、規模と平面形は第1号住居跡は一辺が11mとかなり大形であるが、その他は一辺3.6~4.8mの方形か長方形である。柱穴は調査区外に住居跡が延びているため明確ではないが、柱穴が全く確認されない例もある。壁溝は一部だけに認められるものもあるが、すべての住居跡で確認されている。竈は第38号住居跡からは確認されていないが、北西壁中央部に付設されているのが

一般的である。これらの住居跡は調査区全体に散在しているが、配置及び主軸方向から3つのグループに分けることができる。第1及び8号住居跡は調査区の東側に位置し、主軸方向は $N-38^{\circ}\sim 47^{\circ}-W$ で、最も西に傾いている。第38、41及び48号住居跡は調査区の西側に位置し、主軸方向は $N-22^{\circ}\sim 29^{\circ}-W$ で前者に比べやや北に傾いている。第30号住居跡は調査区の中央部東側に位置し、主軸方向は $N-15^{\circ}-W$ で最も北に傾いている。これらの住居群の間には50～60mの距離がある。

第2期（7世紀前半）

第4、11、25C、29号各住居跡の4軒が該期の遺構である。住居跡は一辺4.5～7.8mの方形で、柱穴は第25C号住居跡のように全く確認されない例もあるが、4か所のものが多い。壁溝は全周するものと一部だけのものがある。竈はすべて北西壁中央部に付設されている。これらの住居跡は配置や規模等からさらに第4、11号住居跡及び第25C、29号住居跡の2つのグループに分けることができる。前者は調査区の東端部に位置し、規模が一辺6.4～7.8mの大形の方形で、主軸方向は $N-36^{\circ}-W$ 及び $N-37^{\circ}-W$ である。後者は調査区の中央部東側に位置し、前者とは30m程離れている。規模は一辺4.5～5.0mの方形で、主軸方向は $N-43^{\circ}-W$ 及び $N-39^{\circ}-W$ と前者に比べて西に傾いている。

(4) 奈良・平安時代

竪穴住居跡25軒と土坑9基を確認した。これらは、4期に分けることができる（第6号住居跡は奈良・平安時代と考えたが、遺物が細片であるため詳細な時期は不明である）。

第1期（8世紀前半）

第23、40号住居跡及び第85号土坑の住居跡2軒、土坑1基が該期の遺構と考えられる。規模は一辺3.3～3.8mと古墳時代のものに比べて小形である。柱穴は2軒とも確認されなかった。壁溝は第23号住居跡で一部確認されたが第40号住居跡では確認されていない。竈は2軒とも北西壁中央に付設されている。この2軒の住居跡は第23号住居跡が調査区の東側、第40号住居跡が調査区の西側に位置しており、両者間は110mほど離れている。また、主軸方向も前者が $N-17^{\circ}-W$ 、後者が $N-37^{\circ}-W$ と差があることなどからあるいはこの2軒は別グループである可能性も考えられる。

第2期（8世紀後半）

第9、12、15、16、20、28、46号各住居跡及び第7号土坑の住居跡7軒、土坑1基が該期の遺構である（第16号住居跡は8世紀末葉から9世紀初頭としたが便宜上8世紀後半として扱う）。住居跡は配置から調査区西端部に位置する第46号住居跡と調査区の東側に位置するそれ以外の住居跡の2つのグループに分けることができる。規模の点からも第46号住居跡は一辺5.3mであるのに対して、他の住居跡は第16号住居跡を除いて一辺2.8～3.9mと小形である。主軸方向は $N-3^{\circ}\sim 25^{\circ}-W$ とかなりの違いがみられる。

第3期（9世紀前半）

第17、32、34、36、42、45、49号各住居跡の7軒が該期の遺構である。配置等から調査区の東側に位置する第17号住居跡、調査区中央部西側に位置する第32、34及び36号住居跡、調査区の西端部に位置する第42、45及び49号住居跡の3つのグループに大別される。規模は一辺2.5～3.6mで、すべて小形である。主軸方向は第17号住居跡は大部分が調査区外にあるため不明であるが、第32、34及び36号住居跡は $N-0^{\circ}\sim 8^{\circ}-W$ で、ほぼ北方向で一致する。しかし、第42、45及び49号住居跡は北東から北西方向とばらつきがあり、第42号住居跡と第45号住居跡は近接しており、同時に存在していたとは考えにくい。これらの住居跡には時期差があるものと思われる。

第4期(10～12世紀)

この時期は須恵器が生産されなくなって、須恵器と同様の技法によって成形された土師器が生産された時期である。県内でも最近になって資料が増えつつある時期で、編年観や実年代については研究者間で相違がある。本報告中では古代末に位置づけられるという意味で10～12世紀として扱ったが、それ以降になる可能性もあることを断っておきたい。

第7, 19, 21, 25A, 25B, 37, 51, 52号各住居跡及び第124, 125, 127, 133, 142, 151, 198, 199, 200号各土坑の住居跡8軒、土坑9基が該期の遺構である。遺構は調査区の東側に広がっており、特に東側を通る道路付近に集中している。住居跡は掘り込みが浅いせいか遺存状態が悪く、床面と竈の火床面を残すだけのものが多い。規模は一辺3.2～4.6mの方形か長方形で、竈は北あるいは東に付設されている。柱穴や壁溝については各住居跡毎に違いがある。土坑は大形のものも多く、特に第198, 199及び200号土坑はいわゆる土器溜めの土坑で、多量の土器が出土している。出土遺物の中に破片資料ではあるが10世紀の猿投及び東濃産の灰胎陶器片が確認できたことは今後の該期の土器編年研究の好資料になるものと思われる。また、「万上」と墨書された内面黒色処理の高台付坏が1点出土しているが、同様な出土例が笠間市の寺崎台遺跡でも確認されており、同一の祭祀行為の存在の可能性が考えられ、注目される。⁽¹⁾

(5) 中世

堀1条、ピット群2か所、地下式墳1基、粘土貼土坑4基を確認した。2期に大別できる。

第1期(13～14世紀)

城館が築かれた時期である。第1号堀、第2及び3号ピット群が該期の遺構と考えられる。調査区が狭いため確かなことは不明であるが、調査区の中央部を南北に走る堀はその西側に段を有していることや、ピット群が堀の西側にあることから西側が郭内と考えられる。しかし、調査区の東端部にも時期不明の第1号ピット群や東西に走る第3号溝があることから、堀の東側にも城館が広がっている可能性も否定できない。とにかくこの付近に城館が存在したことは確かである。この周辺の小字は「堀ノ内」となっており、周辺には「南馬場」、「北馬場」などの小字があることから、以前から城館跡の存在が推定されていたところである。今回の調査によってそのことが実証されたことになる。

第2期(15～16世紀)

第1号地下式墳と第2, 56, 57及び152号の粘土貼土坑が該期の遺構と考えられる。粘土貼土坑は出土遺物がないため正確な時期は不明であるが、他遺跡での出土例などから地下式墳とほぼ同時期と考え、本時期の遺構とした。この時期、付近は墓域として使用されていたものと思われる。

(6) 近世

第4号土坑、第2, 3, 5号各井戸の土坑1基、井戸3基が該期の遺構である。これらの遺構は調査区の中央部南側に集中して確認されている。第4号土坑の性格は井戸と近接していること、土をほとんど含まない掘り鉢大の礫層があることなどから自然流下式の排水施設の可能性が考えられる。遺物も礫に混じって出土していることから身近にあった土器片や陶磁器の破片を礫と同様の目的で一括して埋設したものと思われる。出土陶磁器の時期は大きく分けて15世紀代のもの16～18世紀代のものに分かれている。中心は17世紀後半頃のものである。15世紀代は常滑産、16～17世紀代は瀬戸及び美濃産、18世紀になると唐津及び伊万里産のものが多くっており、時期によって産地に偏りがみられる。一括投棄であることから16～17世紀のものは18世紀まで

伝世したもので、当時付近にかなり豊かなひとの屋敷があったことを窺わせる。

以上をまとめると、今回の調査で、青木遺跡においては、縄文時代の約6,000年前頃から江戸時代（18世紀前半）の約300年前頃までの生活の痕跡を確認した。遺跡付近は縄文時代は狩猟の場として利用され、古墳時代の6世紀後半から7世紀前半、奈良・平安時代の8世紀前半から12世紀にかけては、短期間の途絶はあったものの多数の住居が繰り返し構築され、集落が形成されていたものとみられる。あるときは多量の土器を使う祭りや儀式なども行われていたようである。中世になるとこの地に城館が築かれ、この付近の支配者層が居住するようになるが、城館廃絶後、この地は幕城となってしばらくは住居も造られなかった。しかし、近世になると井戸が多数掘られ、再び居住の場として利用されるようになる。周囲には多くの人たちが暮らすようになっていたようである。今回の調査は道路幅の調査であったため遺跡の全容はつかめなかったが、調査区内の遺構の分布からみて調査区外にも多数の住居跡があるものと考えられ、当遺跡は縄文時代から近世までの大規模な複合遺跡であることが明らかになった。

注

(1) 千種重樹ほか『寺崎台地遺跡』笠間市寺崎台地遺跡調査会 1992年 3月

参考文献

赤羽一郎「常滑焼」『考古学ライブラリー 23』1984年 4月

浅井哲也「茨城県内における奈良・平安時代の土器(I・II)」『研究ノート 創刊号・2号』茨城県教育財団 1992・93年 7月

浅野晴樹「東国における中世在地系土器について—主に関東を中心にして—」『国立歴史民俗博物館研究報告第31集』1991年 3月

井汲隆夫ほか『内藤町遺跡』新宿区内藤町遺跡調査会 1992年 3月

大橋康二「肥前陶器」『考古学ライブラリー 55』1989年 10月

櫻村宣行「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート 2号』茨城県教育財団 1993年 7月

〃 「白石遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第82集』1993年 3月

佐々木義則ほか「武田IV」『勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告 第5集』1991年 3月

斎藤孝正「東海地方の施釉陶器生産—猿投窯を中心に—」『古代の土器研究会 第3回シンポジウム』1994年 9月

田口昭二「美濃焼」『考古学ライブラリー 17』1985年 11月

萩野裕悟「常北町上入野・青木・仲郷・後側・前側遺跡の発掘調査」『常北の文化 第17号』常北町郷土文化研究会 1994年 3月



作業風景 清水市築屋現場（「アーク」の中心部南側コンクリート配子架組立現場の様子）撮影：佐藤

【10】 2008年【築屋現場の状況】

【11】 2008年【清水市築屋現場の状況】（清水市築屋現場）撮影：佐藤

【12】 2008年【清水市築屋現場の状況】（清水市築屋現場）撮影：佐藤

【13】 2008年【清水市築屋現場の状況】（清水市築屋現場）撮影：佐藤

【14】

【15】 2008年【清水市築屋現場の状況】（清水市築屋現場）撮影：佐藤

【16】 2008年【清水市築屋現場の状況】（清水市築屋現場）撮影：佐藤

【17】 2008年【清水市築屋現場の状況】（清水市築屋現場）撮影：佐藤

【18】

【19】 2008年【清水市築屋現場の状況】（清水市築屋現場）撮影：佐藤

【20】 2008年【清水市築屋現場の状況】（清水市築屋現場）撮影：佐藤

【21】 2008年【清水市築屋現場の状況】

後 側 遺 跡

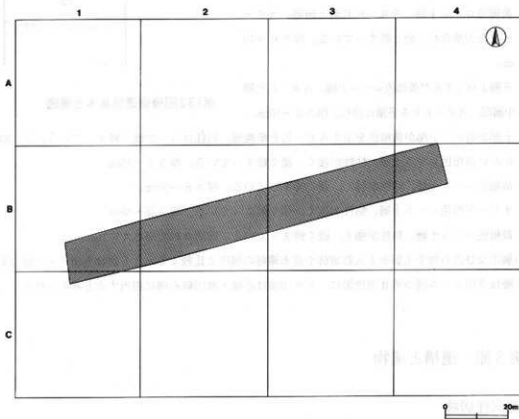
第5章 後側遺跡

第1節 遺跡の概要

後側遺跡は、青木遺跡から西に約800m離れた上入野台地の中央部に位置する。調査面積は1,645㎡で、現況は畑地である。

当遺跡は、縄文時代から中世までの複合遺跡である。今回の調査で確認した遺構は、縄文時代の竪穴住居跡1軒、古墳時代の竪穴住居跡2軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡4軒のほかに土坑26基、溝2条及び井戸2基である。

遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)で13箱出土している。主な遺物は、縄文土器、古墳時代から平安時代にかけての甕、坏、皿、瓶、高坏、盤、蓋等の土師器、須恵器類と中世の土師質土器、その他奈良・平安時代の石製の丸柄や砥石等が出土している。

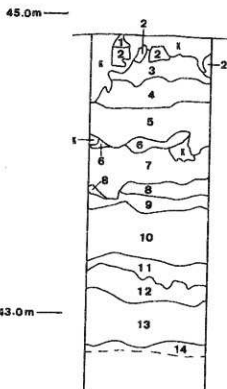


第131図 後側遺跡調査区設定図

第2節 基本層序

後側遺跡の調査区中央部北側、B2f.区にテストピットを設定し確認面から2.15m掘り下げ、土層の堆積状況を観察した。

- 1層 黄褐色ローム土層。赤褐色、白色スコリアを極微量含む。硬く締まっている。厚さ8cm程度。
- 2層 黄色ローム土層。粘性強く、硬く締まっている。厚さ8～13cm。
- 3層 明黄褐色ローム土層。硬く締まっている。厚さ4～16cm。
- 4層 3層に比べやや暗い明黄褐色ローム土層。硬く締まっている。厚さ12～20cm。
- 5層 4層よりやや赤味があった明黄褐色ローム土層。硬く締まっている。厚さ20～27cm。
- 6層 4層と同じ明黄褐色ローム土層。硬く締まっている。厚さ3～14cm。
- 7層 オリーブ褐色ローム土層。粘性強く、硬く締まっている。厚さ16～32cm。
- 8層 黄褐色ローム土層。A_g-K_p層上層部。A_g-K_pを少量含む。硬く締まっている。厚さ6～10cm。
- 9層 8層よりくすんだ黄褐色ローム土層。A_g-K_p層中層部。A_g-K_pを多量に含む。厚さ2～10cm。



第132図後側遺跡基本土層図

- 10層 上部が黄色、下部が黄褐色を呈すA_g-K_p単純層。粘性はないが硬く締まっている。厚さ30～38cm。
- 11層 ぶい黄褐色ローム土層。粘性が強く、硬く締まっている。厚さ5～15cm。
- 12層 黄褐色ローム土層。粘性が強く、硬く締まっている。厚さ8～20cm。
- 13層 オリーブ褐色ローム土層。粘性が強く、硬く締まっている。厚さ26～38cm。
- 14層 黄褐色ローム土層。粘性が強く、硬く締まっている。確認された厚さ4～10cm。

上下の層序及び含有物や土質を上野遺跡や青木遺跡の層序と比較すると、5層は立川ローム層の第Ⅰ黒色帯に、7層は立川ローム層の第Ⅱ黒色帯に、8～10層は赤城・鹿沼軽石層に相当すると思われる。

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

今回の調査では、縄文時代の竪穴住居跡1軒、古墳時代の竪穴住居跡2軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡4軒、計7軒の竪穴住居跡を確認した（SⅠ-1～8、内SⅠ-7は欠番）。以下、遺構番号順に記載する。

第1号住居跡（第133図）

位置 調査区の東端部南側、B4c区。

規模と平面形 北西側の一部を調査したのみで大部分が調査区外に延びているため正確な規模と平面形は不明であるが、竈の位置等から一辺約3.5mの方形の住居跡と推定される。

主軸方向 (N-10°-E)

壁 壁高は約30cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦。壁際を除いて良く踏み固められている。

竈 北壁に付設されている。東側が調査区外に延びているため左袖部及び火床部の一部を確認できただけで正確な形態は不明である。火床部は掘りくぼめられており、袖部は灰白色粘土で構築されている。覆土は16層からなる。土層2は天井部の崩落層と考えられる。

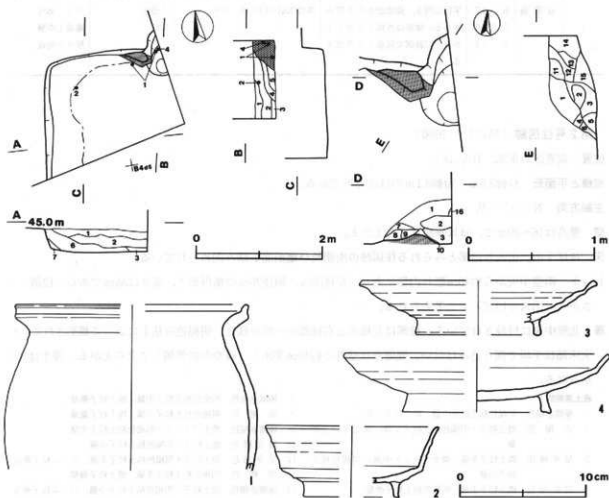
覆土層解説

- | | |
|---------------------------------|----------------------------|
| 1 黒褐色 灰白色粘土粒子中量、焼土粒子・ローム粒子微量 | 9 暗赤褐色 焼土粒子・ローム粒子微量 |
| 2 極暗赤褐色 灰白色粘土粒子中量、焼土粒子少量 | 10 褐色 含有物なし |
| 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、灰白色粘土粒子少量 | 11 黒色 灰白色粘土粒子中量、焼土粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 灰白色粘土粒子少量、焼土粒子・ローム粒子微量 | 12 黒褐色 灰白色粘土粒子中量、焼土粒子少量 |
| 5 極暗赤褐色 灰白色粘土粒子中量、焼土粒子少量 | 13 暗赤褐色 焼土粒子多量、灰白色粘土粒子少量 |
| 6 黒褐色 ローム粒子・灰白色粘土粒子少量、焼土粒子微量 | 14 暗赤褐色 焼土ブロック中量、灰白色粘土粒子少量 |
| 7 黒色 灰白色粘土粒子少量、焼土粒子微量 | 15 暗赤褐色 焼土粒子少量、灰白色粘土粒子微量 |
| 8 暗赤褐色 焼土粒子中量、灰白色粘土粒子少量、ローム粒子微量 | 16 暗赤褐色 焼土粒子多量、灰白色粘土粒子少量 |

覆土 7層からなり、自然堆積とみられる。

土層解説

- | | |
|--------------------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 4 黒色 灰白色粘土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子中量、灰白色粘土粒子少量、焼土粒子微量 | 5 黒褐色 灰白色粘土粒子中量、焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・灰白色粘土粒子微量 | 6 黒色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量 |
| | 7 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量 |



第133図 第1号住居跡・竈・出土遺物実測図

遺物 土師器片39点, 須恵器片13点, 縄文土器片1点及び支脚1点が出土している。第133図1の覆は覆覆土中層及び竈右袖部付近の床面から, 2の高台付坪は北西コーナー部付近の覆土上層から, 4の盤は覆覆土中層から出土している。

所見 本跡は, 出土遺物から奈良・平安時代(8世紀後半)の住居跡である。

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第133図 1	壺 土 師 器	A (18.4)	体部上位, 口縁部片。体部中位に最大径がある。口縁部は外反し, 口縁端部を上方につまみ上げる。	口縁部, 体部内・外面横ナデ。	霞母・石英・長石 にふい褐色 普通	P L55 P 1 10% 床面
		B (13.2)				
2	高台付坪 須 恵 器	A (13.9)	高台部~口縁部片。高台は直立し, 底部との間に壁がある。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部, 体部内外面横ナデ。高台部貼り付け後, ナデ。	長石・海綿骨針 灰色 良好	P L55 P 2 40% 覆土上層
		B 5.7				
		D (7.7)				
		E 1.2				
3	盤 須 恵 器	A (19.0)	高台部~口縁部片。高台はほぼ直立。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部で屈曲して外反する。	口縁部, 体部内・外面横ナデ。高台部貼り付け後, ナデ。	長石・海綿骨針 暗灰黄色 良好	P L55 P 3 25% 覆土
		B 4.4				
		D (10.0)				
		E 1.4				
4	盤 須 恵 器	A (21.2)	高台部~口縁部片。高台は八字状に開き, 接地面が広く窪みがある。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部で屈曲して外反する。	口縁部, 体部内・外面横ナデ。高台部貼り付け後, ナデ。	長石・海綿骨針 赤褐色 良好	P L55 P 4 35% 覆覆土中層 酸化災地成
		B 4.7				
		D (11.9)				
		E 1.5				

第2号住居跡(第134~136図)

位置 調査区の東部, B3c₁区。

規模と平面形 長軸3.5m, 短軸3.1mのほぼ方形である。

主軸方向 N-7°-W

壁 壁高は16~20cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦。出入り口部とみられる住居跡の南側及び竈前面が踏み固められている。

ピット 南壁中央から約40cm離れた内側にあり, 長径30cm, 短径25cmの槽形で, 深さは35cmである。位置や深さから, 出入り口ピットと考えられる。

竈 北壁中央に付設されている。袖部は左袖部と右袖部の一部が残りに, 明褐色の粘土によって構築されている。

火床部は平坦で掘り込みはない。煙道部は壁外に約40cm突出し, 緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は15層からなる。

覆土層解説

1 極暗赤褐色 明褐色粘土粒子中量, 焼土粒子少量

2 赤褐色 焼土粒子・明褐色粘土粒子少量, 黒色土粒子微量

3 暗赤褐色 焼土粒子多量, 焼土ブロック中量, 明褐色粘土粒子少量

4 暗赤褐色 焼土粒子少量, 明褐色粘土粒子微量

5 極暗赤褐色 焼土粒子少量, 黒色土粒子微量

6 暗赤褐色 焼土ブロック少量, ローム粒子微量

7 極暗赤褐色 明褐色粘土粒子中量, 焼土粒子微量

8 黒褐色 明褐色粘土粒子少量, 焼土粒子微量

9 極暗赤褐色 焼土ブロック・明褐色粘土粒子少量

10 暗赤褐色 焼土粒子・明褐色粘土粒子少量

11 暗赤褐色 焼土粒子・明褐色粘土粒子少量, ローム粒子微量

12 黒褐色 明褐色粘土粒子多量, 焼土粒子微量

13 極暗赤褐色 焼土粒子・明褐色粘土粒子少量, ローム粒子微量

14 極暗赤褐色 焼土粒子・明褐色粘土粒子微量

15 暗赤褐色 焼土粒子少量, 明褐色粘土粒子微量

覆土 6層からなり、自然堆積とみられる。

土層解説

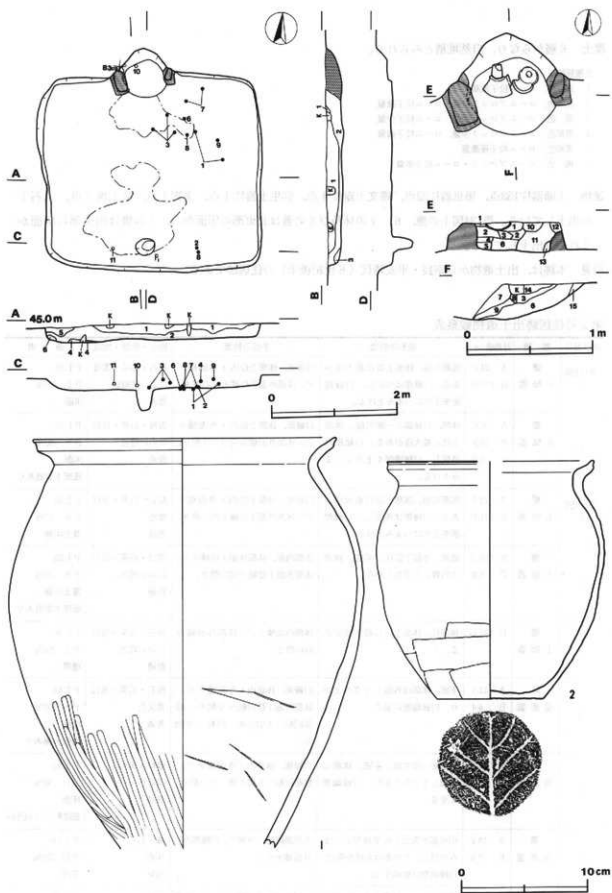
- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 黒色 ロームブロック少量、ローム粒子微量
- 3 黒色 ロームブロック少量、ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量、ローム粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子微量
- 6 褐色 ロームブロック・ローム粒子多量

遺物 土師器片133点、須恵器片32点、縄文土器片4点、弥生土器片1点、支脚1点、粘土塊4点、磁石1点
 が出土している。第134図1の甕、6、7の坏及び8の蓋は北東部の床面から、2の甕は南東部の床面から
 それぞれ出土している。

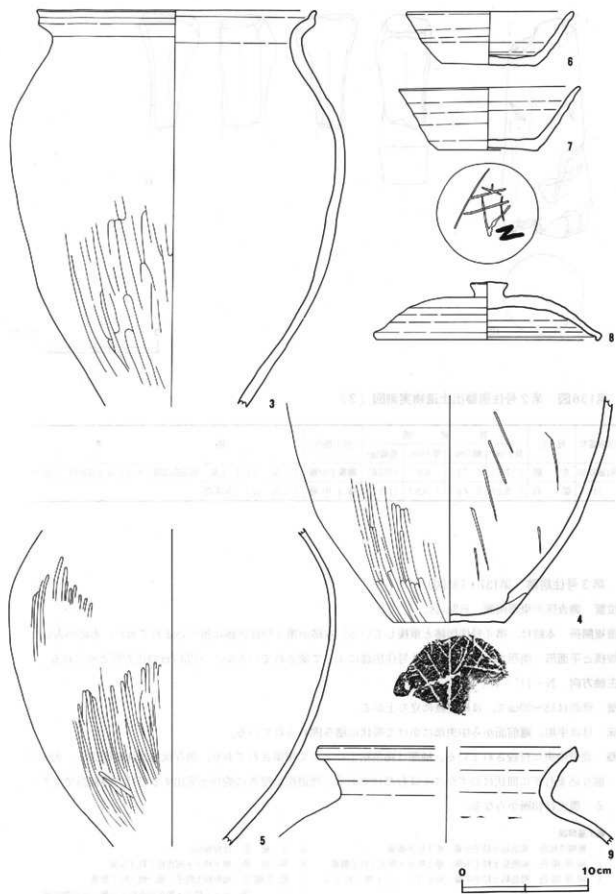
所見 本跡は、出土遺物から奈良・平安時代（8世紀後半）の住居跡である。

第2号住居跡出土遺物観察表

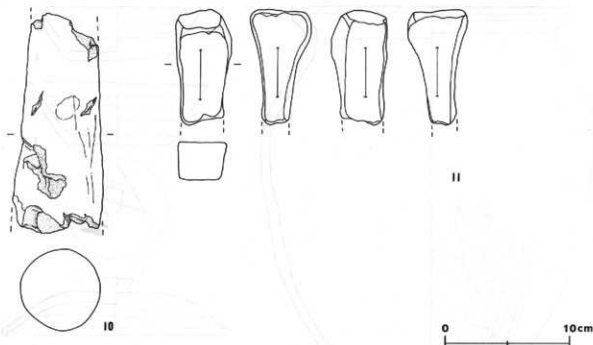
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第134図 1	甕 土師器	A 24.2	底部欠損。体部上位に最大径がある。口縁部は外反し、口縁端部を上方につまみ上げる。	口縁部、体部上位内・外面横ナデ。体部外面下位縦方向の磨き。	長石・石英・雲母 にふい黄褐色 普通	P L 55 P 5 80% 床面
		B (32.8)				
2	甕 土師器	A (16.6)	体部、口縁部一部欠損。体部上位に最大径がある。口縁部は外反し、口縁端部を上方につまみ上げる。	口縁部、体部上位内・外面横ナデ。体部外面横方向のへつ削り。	雲母・石英・長石 にふい褐色 普通	P L 55 P 7 60% 床面 底部木炭痕あり
		B 18.9				
		C 8.4				
第132図 3	甕 土師器	A 22.3	底部欠損。体部上位に最大径がある。口縁部は外反し、口縁端部を上方につまみ上げる。	口縁部、体部上位内・外面横ナデ。体部外面下位縦方向の磨き。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P L 55 P 6 70% 覆土中層
		B (31.7)				
4	甕 土師器	B (18.1)	底部、体部下位片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内面、体部外面上位横ナデ。体部外面下位縦方向の磨き。	雲母・石英・長石 にふい褐色 普通	P L 55 P 8 20% 覆土中層 底部木炭痕あり
		C (9.0)				
5	甕 土師器	B (25.1)	体部片。体部上位に最大径がある。	体部内面横ナデ。体部外面縦方向の磨き。	長石・石英・雲母 にふい褐色 普通	P L 56 P 9 20% 覆土
6	坏 須恵器	A 13.4	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁端部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。体部外面下位回転へつ削り。底部回転へつ切り後、回転へつ削り。	長石・石英・雲母 黄灰色 普通	P L 55 P 10 100% 床面 内面火燻あり
		B 4.4				
		C 7.6				
7	坏 須恵器	A 14.5	口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁端部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へつ切り後、へつ削り。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P L 55 P 11 90% 床面 底縁部「二」記あり
		B 6.1				
		C 8.2				
8	蓋 須恵器	A 18.2	中央部が突出した宝珠形のつまみが付く。天井部は丸味を帯び、口縁端部は屈曲する。	天井部回転へつ削り。口縁部内・外面横ナデ。	礫・長石 灰色 良好	P L 55 P 12 100% 床面
		B 4.6				
9	甕 須恵器	A (20.9)	体部上位へ口縁部片。体部上位は内傾して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部には縁帯が走る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面平行叩き。	長石 灰色 良好	P L 55 P 13 5% 覆土上層
		B (7.7)				



第134图 第2号住居跡・竈・出土物実測図(1)



第135图 第2号住居跡出土遺物実測図(2)



第136図 第2号住居跡出土遺物実測図(3)

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第136図 10	支脚	(17.5)	(7.1)	6.5	(715.0)	竊塚土中層 P L55 DP1 土製	側面指環痕、ヘラによる成形痕 二次焼成
11	紙石	(9.2)	(4.6)	(4.9)	(172.7)	覆土中層 P L55 Q1	凝灰岩

第3号住居跡(第137・138図)

位置 調査区の東部南側, B3d区。

重複関係 本跡は、第4号住居跡と重複している。本跡が第4号住居跡に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 南西コーナー部が第4号住居跡によって壊されているが、一辺3.7mの正方形とみられる。

主軸方向 N-11°-W

壁 壁高は18~20cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦。竊前面から中央部にかけて帯状に踏み固められている。

竈 北壁中央に付設されている。袖部は褐色粘土によって構築されており、遺存状態は比較的良好。火床部は掘り込まれずに皿状にわずかにくぼみだけである。煙道部は壁外に約10cm突出するだけで急傾斜で立ち上がる。覆土は13層からなる。

覆土層解説

- | | | | |
|---------|-------------------------|---------|-----------------------|
| 1 極暗赤褐色 | 褐色粘土粒子少量, 焼土粒子微量 | 8 赤褐色 | 含有物なし |
| 2 暗赤褐色 | 褐色粘土粒子中量, 焼土粒子・黒色土粒子微量 | 9 黒褐色 | 焼土粒子・褐色粘土粒子少量 |
| 3 暗赤褐色 | 褐色粘土粒子中量, 焼土ブロック・焼土粒子少量 | 10 暗赤褐色 | 褐色粘土粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 4 極暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 褐色粘土粒子少量 | 11 黒色 | ローム粒子・褐色粘土粒子少量, 炭化物微量 |
| 5 黒色 | 褐色粘土粒子少量, 焼土粒子微量 | 12 黒褐色 | 焼土粒子・褐色粘土粒子少量 |
| 6 褐色 | 焼土粒子・褐色粘土粒子微量 | 13 暗赤褐色 | 焼土粒子少量 |
| 7 黒褐色 | 褐色粘土粒子少量, 焼土粒子微量 | | |

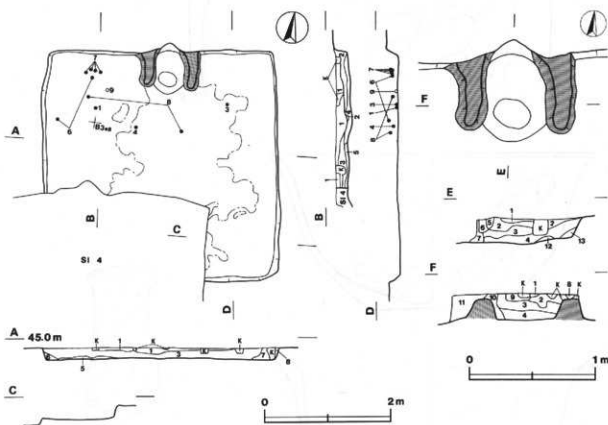
覆土 8層からなり、自然堆積とみられる。

土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化物・ローム粒子微量
- 2 黒色 ローム粒子微量
- 3 黒色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量
- 4 黒褐色 暗褐色土ブロック中量、ロームブロック少量
- 5 黒色 炭化物・ローム粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子微量
- 7 黒褐色 粘土ブロック少量、ローム粒子微量
- 8 黒褐色 ロームブロック中量

遺物 土師器片317点、須恵器片20点、縄文土器片7点、支脚7点及び粘土塊5点が出土している。第138図1の環及び9の支脚は北西部の床面から、3の環は北東部の床面から出土している。

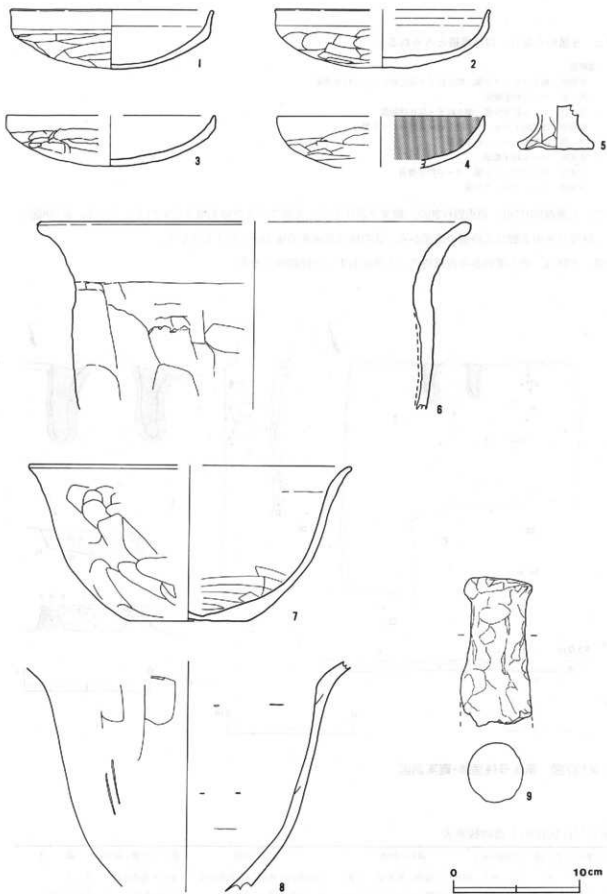
所見 本跡は、出土遺物から古墳時代（7世紀前半）の住居跡である。



第137図 第3号住居跡・竈実測図

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第138図 1	環	A 16.2	底部〜口縁部一部欠損。丸底。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面ヘラ削り。	雲母・海綿骨針にふい褐色	P L56 P15 70% 床面
	土師器	B 4.7	体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に境がある。口縁部は直立する。			



第138图 第3号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第138図 2	坏 土師器	A (17.1)	底部へ口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は直立する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面へラ削り。	雲母・海綿骨針 にぶい黄褐色 普通	P L 56
		B 4.6				P 16 30%
3	坏 土師器	A (16.6)	底部へ口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は直立する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。外面へラ削り。	小礫・長石・石英 にぶい黄褐色 普通	P L 56
		B 4.0				P 17 30%
4	坏 土師器	A (16.6)	底部へ口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。口縁部は直立する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面へラ削り。内面黒色処理。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P L 56
		B 4.1				P 16 30%
5	高 土師器	B (3.5)	中央の脚部片。台形状で、裾部でやや広がる。	脚部外面へラ削り。脚部底面指跡痕。	スコリア・海綿骨針 にぶい褐色 普通	P L 56
		D 6.1				P 23 40%
6	甕 土師器	A (34.6)	体部上位、口縁部片。体部上位に最大径がある。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向のへラ削り。	砂粒・海綿骨針 淡褐色 普通	P L 56
		B (14.7)				P 19 15%
7	鉢 土師器	A (25.7)	底形へ口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面、底部へラ削り。	砂粒・海綿骨針 にぶい褐色 普通	P L 56
		B 12.4				P 20 30%
		C 9.1				覆土中層
8	鉢 土師器	B (18.3)	体部、口縁部下位片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。体部外面縦方向のへラ削り。	雲母・海綿骨針 にぶい黄褐色 普通	P L 56
						P 21 10%

図版番号	種別	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
9	支 器	(11.8)	(5.6)	4.7	(343.8)	床 面	P L 56 D P 2 土製 側面、上面指跡痕 二次焼成

第4号住居跡(第139・140図)

位置 調査区の東部南側, B3e区。

重複関係 本跡は、第3号住居跡と重複している。本跡が第3号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と平面形 南側が調査区外に延びているため正確な規模や平面形は不明であるが、一辺約3.8mの方形とみられる。

主軸方向 (N-2°-W)

壁 壁高は18~24cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 西壁の南側の一部に認められる。上幅約20cm、下幅約4cm、深さ約5cmで、断面形はU字状である。

床 ほぼ平坦。中央部が部分的に踏み固められている。

ピット 2か所(P₁、P₂)。径30~40cmの不整形で、深さ20~32cmである。位置からみて主柱穴と考えられる。

竈 北壁中央に付設されている。袖部は褐色粘土によって構築されており、遺存状態は比較的良い。火床部は掘り込まれずに平坦である。煙道部は壁外に約20cm突出し、緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は16層からなる。

覆土層解説

- 1 極暗赤褐色 赤褐色粘土粒子中量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色 赤褐色粘土粒子中量、焼土粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、赤褐色粘土粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子少量、赤褐色粘土粒子微量
- 5 黒褐色 焼土粒子中量
- 6 赤褐色 焼土粒子・赤褐色粘土粒子少量
- 7 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量

- 8 極暗赤褐色 赤褐色粘土ブロック中量、焼土粒子少量

- 9 暗赤褐色 焼土ブロック・焼土粒子少量、赤褐色粘土粒子微量
- 10 極暗赤褐色 焼土粒子微量
- 11 黒褐色 焼土粒子少量、赤褐色粘土粒子微量
- 12 黒褐色 焼土粒子・赤褐色粘土粒子微量
- 13 黒褐色 焼土粒子中量、赤褐色粘土粒子微量
- 14 極暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・赤褐色粘土粒子微量
- 15 黒褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・赤褐色粘土粒子微量

覆土 12層からなり、自然堆積とみられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・黒色土粒子少量、焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量、ローム粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量

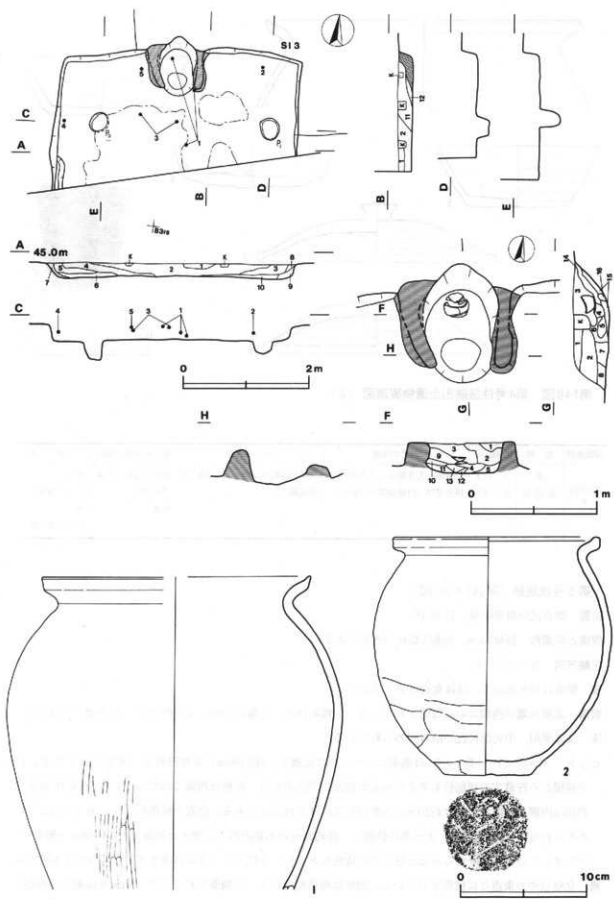
- 7 極暗褐色 ローム粒子多量、ロームブロック少量
- 8 黒褐色 ローム粒子多量
- 9 黒褐色 ローム粒子少量
- 10 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 11 極暗褐色 ローム粒子中量、灰白色粘土粒子少量、焼土粒子微量
- 12 黒褐色 灰白色粘土ブロック中量、焼土粒子・ローム粒子少量

遺物 土師器片260点、須恵器片67点、縄文土器片17点及び支脚1点が出土している。第139図1の壺は竈覆土中層から、2の壺は東部の北壁際、4の坏は西壁際の覆土中層からそれぞれ出土している。9は須恵器の壺の体部片である。外面に同心円状の叩きが施されている。

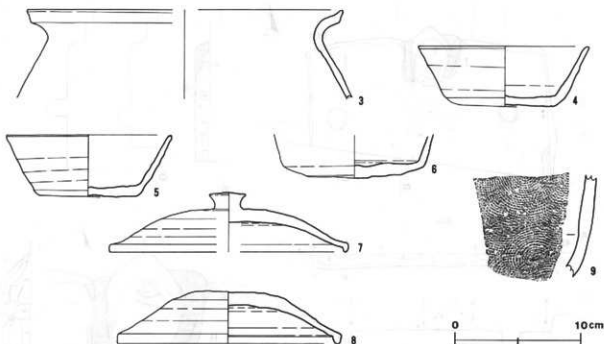
所見 本跡は、出土遺物から奈良・平安時代（8世紀後半）の住居跡である。

第4号住居跡出土遺物観察表

図表番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第139図 1	壺 土師器	A (21.4)	体部へ口縁部片。体部上位に最大径がある。口縁部は外反し、口縁端部を上方向につまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位縦方向の磨き。	長石・石英・雲母 におい褐色 普通	P 1.56 P 26 60% 竈覆土・覆土中層
		B (19.9)				
2	壺 土師器	A [16.7]	体部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、体部中位に最大径がある。口縁部は外反し、口縁端部を上方向につまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位縦方向のへう削り。	長石・石英・雲母 におい赤褐色 普通	P 1.56 P 27 80% 覆土中層 底部木炭痕あり
		B 19.1				
		C 6.8				
第140図 3	壺 土師器	A (25.1) B (7.1)	体部上位、口縁部片。体部上位は内傾する。口縁部は外反し、口縁端部を上方向につまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母 におい褐色 普通	P 28 5% 覆土中層
4	坏 須恵器	A 13.6	口縁部一部欠損。底部に段をもち、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り後、ナゲ及び外周部回転へう削り。	礫・長石・スクリア 灰黄色 良好	P 1.56 P 29 90% 覆土中層
		B 4.8				
		C 9.5				
5	坏 須恵器	A 13.2	口縁部一部欠損。底部に段をもち、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り後、ナゲ及び外周部回転へう削り。	長石・石英 灰色 良好	P 1.56 P 30 70% 覆土上層
		B 4.9				
		C 8.7				
6	坏 須恵器	B (3.5)	口縁部欠損。底部に段をもち、体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り後、ナゲ及び外周部回転へう削り。	雲母・長石・石英 暗灰黄色 普通	P 24 45% 覆土 器面全体に煤付着
		C 11.3				
7	蓋 須恵器	A [19.1]	口縁部へつまみ部片。中央部がわずかに突出したつまみが付く。天井部は丸味を帯び、口縁端部は屈曲する。	天井部回転へう削り。口縁部内・外面横ナデ。つまみ取付付け後、ナゲ。	砂粒 灰黄色 良好	P 1.56 P 31 45% 覆土
		B 4.7				



第139图 第4号住居跡・竈・出土遺物実測図(1)



第140図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第140図 8	蓋 須恵器	A 17.8 B (4.2)	口縁部～天井部片。天井部は丸味を帯び、口縁端部は屈曲する。	天井部回転へう削り。口縁部内・外面横ナデ。	胎土・長石・石英 暗灰黄色 普通	P L.56 P 25 70% 覆土 器面全体に煤付着

第5号住居跡(第141・142図)

位置 調査区の東部中央, B3d₂区。

規模と平面形 長軸3.6m, 短軸3.45mの方形である。

主軸方向 N-3°-W

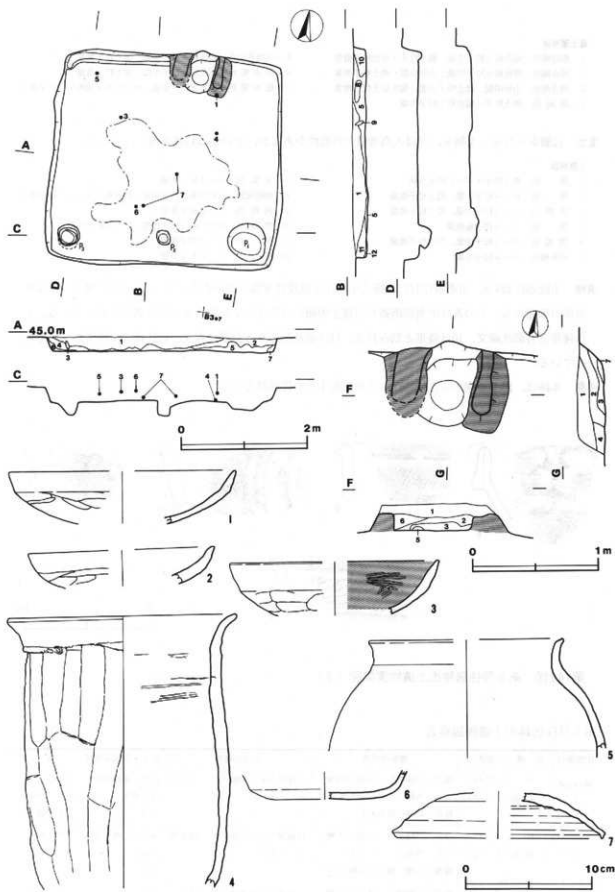
壁 壁高は18~26cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 北壁の竈の西側のみ確認されている。上幅約16cm, 下幅約10cm, 深さ約5cmで, 断面はU字状である。

床 ほぼ平坦。中央部付近が踏み固められている。

ピット 3か所(P₁~P₃)。P₁は南東コーナー部に位置し, 径約60cmの不整形円で, 深さ12cmである。位置や規模から貯蔵穴の可能性も考えられるが底面に凹凸があり, 性格は明確ではない。P₂は南壁中央部から約40cm内側に位置する。径約20cmの不整形円で, 深さは25cmである。位置と規模からみて出入り口ピットと考えられる。P₃は南西コーナー部に位置し, 径約35cmの不整形円で, 深さは20cmである。壁は一部オーバーハンクしている。位置からみると柱穴の可能性もあるが, 主柱穴とするには浅すぎるため性格は不明である。

竈 北壁のやや東寄りに付設されている。袖部は褐色粘土によって構築されている。火床部は掘り込みがなく平坦である。煙道部は壁外にほとんど突出せず, 急傾斜で立ち上がる。覆土は8層からなる。土層7は袖部が崩れた層とみられる。



第141图 第5号住居跡・竈・出土遺物実測図(1)

覆土層解説

- | | |
|-----------------------------|------------------------------|
| 1 極暗褐色 褐色粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 極暗赤褐色 褐色粘土粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 褐色粘土粒子中量、山砂少量、焼土粒子微量 | 6 暗赤褐色 褐色粘土粒子中量、焼土粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 山砂中量、焼土粒子少量、褐色粘土粒子微量 | 7 暗赤褐色 黒色土粒子少量、焼土粒子・褐色粘土粒子微量 |
| 4 暗褐色 焼土粒子・褐色粘土粒子少量 | |

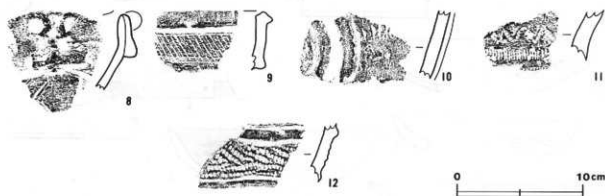
覆土 12層からなる。土層9, 10は人為堆積の可能性はあるが、その他は自然堆積とみられる。

土層解説

- | | |
|----------------------|-------------------------------|
| 1 黒色 焼土粒子・ローム粒子少量 | 7 黒褐色 ローム粒子多量 |
| 2 黒色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 8 極暗褐色 灰白色粘土粒子多量、焼土粒子・ローム粒子少量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量 | 9 黒褐色 ローム粒子微量 |
| 4 黒色 ローム粒子極微量 | 10 黒褐色 灰白色粘土粒子中量、ローム粒子少量 |
| 5 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量 | 11 黒色 ローム粒子微量 |
| 6 極暗褐色 ローム粒子少量 | 12 黒色 ローム粒子多量 |

遺物 土器器片424点、須恵器片47点、縄文土器片5点及び支脚1点が出土している。第141図4の甕は中央部東側の床面から、7の蓋は中央部南寄りの覆土中層から出土している。8～12は縄文土器片である。8, 9は隆帯と有節沈線文, 10は隆帯と刻目文, 11は連続爪形文と有節沈線文, 12は縄文に隆帯がそれぞれ施されている。

所見 本跡は、出土遺物から古墳時代（7世紀前半）の住居跡である。



第142図 第5号住居跡出土遺物実測図（2）

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第141図 1	土器器	A [18.2]	体部、口縁部片。体部は内彎しながら外傾して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り。	砂粒・海綿骨針 浅黄褐色 普通	P L.57 P.32 10% 覆土中層
		B (4.2)				
2	土器器	A (14.8)	体部、口縁部片。体部は内彎しながら外傾して立ち上がり、口縁部との境に緩やかな稜がある。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P.33 10% 覆土
		B (2.9)				
3	土器器	A [16.7]	体部、口縁部片。体部は内彎しながら外傾して立ち上がり、口縁部との境に稜がある。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面磨き。体部外面へつ削り。内面黒色処理。	長石・スコリア におい黄褐色 普通	P.35 15% 覆土中層
		B (4.2)				

図説番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・装成	備考
第141図 4	甕 土師器	A 18.3 H (22.7)	底部欠損。体形はぎん割で、中位でわずかに膨らむ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向のへう削り。	砂粒・海綿骨針 にふい橙色 普通	P.L.57 P.36 70% 床面
5	壺 土師器	A (15.6) B (9.5)	体部上位、口縁部ナデ。体部上位は内傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・スコリア・雲母 にふい橙色 普通	P.L.57 P.37 10% 覆土中層
6	環 須恵器	B (2.2) C (11.6)	底削、体部下位片。底部に段をもち、体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部回転へう削り。外周部回転へう削り後、ナデ。	長石 灰白色 良釘	P.L.57 P.34 15% 覆土中層
7	蓋 須恵器	A (16.3) B (3.6)	口縁部～天井部片。天井部は丸味を帯び、口縁部は扇曲する。	天井部回転へう削り。口縁部内・外面横ナデ。	長石・海綿骨針 灰白色 良釘	P.L.57 P.38 30% 覆土下層

第6号住居跡 (第143・144図)

位置 調布区の東部南側、B3e区。

規模と平面形 南側が調査区外に延びているため正確な規模や平面形は不明であるが、柱穴の位置などから推定すると長軸約5.6m、短軸約4.6mの長方形と考えられる。

主軸方向 N-27°-W

壁 壁高は27～30cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦。竈前面から南に向かって帯状に踏み固められている。

ピット 3か所 (P₁～P₃)。径約20～30cmの不整形ないしは楕円形で、深さは25～45cmである。位置や規模からみて主柱穴と考えられる。

竈 北壁中央に付設されている。袖部は褐色粘土によって構築されており、火床部は掘り込みがなく平坦である。煙道部は壁外に約60cm突出しており、緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は20層からなる。土層10, 19は天井部の崩落層と考えられる。

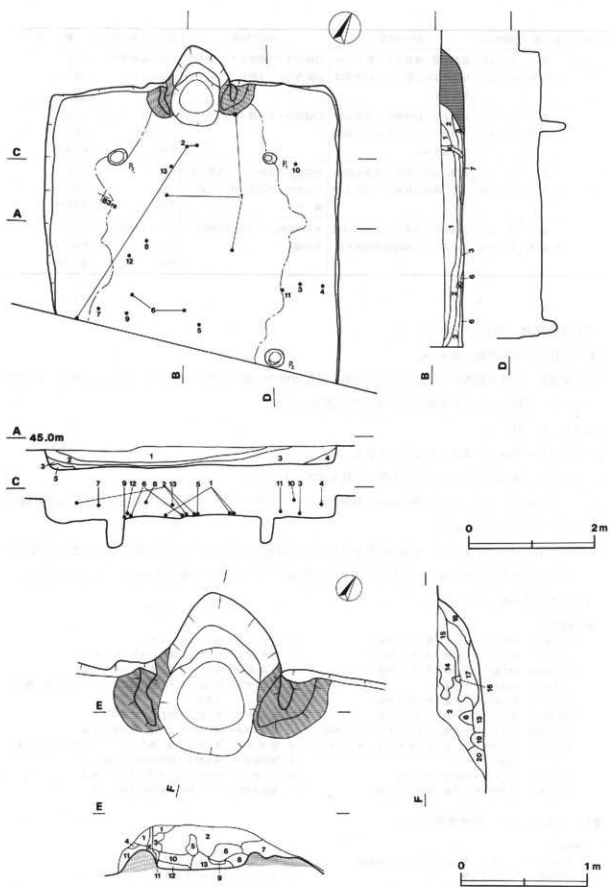
覆土層解説

- | | |
|--------------------------------|------------------------------------|
| 1 暗赤褐色 褐色粘土粒子少量、焼土粒子微量 | 11 暗赤褐色 褐色粘土粒子中量 |
| 2 暗赤褐色 褐色粘土粒子中量、焼土粒子微量 | 12 暗赤褐色 焼土粒子少量、褐色粘土粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 褐色粘土粒子中量、焼土粒子微量 | 13 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土ブロック少量 |
| 4 暗赤褐色 褐色粘土粒子中量 | 14 暗赤褐色 褐色粘土粒子中量、褐色粘土ブロック少量、焼土粒子微量 |
| 5 黒褐色 褐色粘土粒子少量、焼土粒子微量 | 15 暗赤褐色 焼土粒子・褐色粘土粒子中量 |
| 6 暗赤褐色 褐色粘土粒子中量、焼土粒子少量 | 16 暗赤褐色 褐色粘土粒子多量、焼土粒子微量 |
| 7 暗赤褐色 褐色粘土粒子中量、焼土粒子・ローム粒子微量 | 17 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土ブロック・褐色粘土粒子少量 |
| 8 暗赤褐色 焼土粒子中量、褐色粘土粒子少量、黒色土粒子微量 | 18 暗赤褐色 焼土粒子・褐色粘土粒子少量 |
| 9 暗赤褐色 焼土粒子・褐色粘土粒子少量 | 19 黒褐色 褐色粘土粒子多量、焼土粒子微量 |
| 10 暗赤褐色 褐色粘土粒子多量、焼土粒子少量 | 20 暗赤褐色 ローム粒子・褐色粘土粒子少量 |

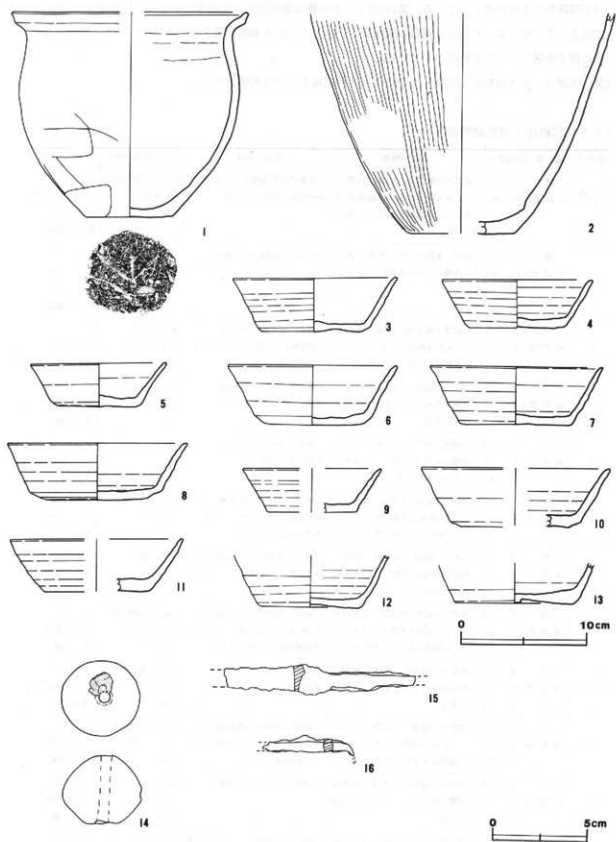
覆土 7層からなり、自然堆積である。

土層解説

- | | |
|--------------------------|------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量 | 5 暗赤褐色 ローム粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 ローム粒子少量 | 6 黒褐色 ローム粒子少量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子微量 | 7 暗赤褐色 ロームブロック中量 |
| 4 黒色 ローム粒子微量 | |



第143图 第6号住居跡・竈・实测图(1)



第144图 第6号住居跡出土遺物実測図(2)

遺物 土師器片531点、須恵器片115点、縄文土器片37点、弥生土器片4点、支脚10点、土玉1点、刀子1点及び不明鉄製品1点が出土している。第144図1、2の甕は蓮前前から中央部にかけての床面から破片になって出土している。5、6の環は南部の床面から、3、4の環は東部の覆土中・下層から、7、8の環は南西部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、出土遺物から奈良・平安時代（8世紀後半）の住居跡である。

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第144図 1	土師器	A (18.8)	底部～口縁部片。平底。体部中位に最大径がある。口縁部は外反し、口縁端部を上方にまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位横方向のへら削り。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P L 57
		B 16.3				P 39 40%
		C 7.1				床面 底部木炭痕あり
2	土師器	B (17.5)	底部、体部下位片。平底。体部は内増しながら外傾して立ち上がる。	体部外面下位横方向の磨き。	長石・石英・雲母 におい黄褐色 普通	P L 57
		C (8.0)				P 40 10%
						床面 既部木炭痕あり
3	須恵器	A 13.1	口縁部一部欠損。底部に段をもち、体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へら切り。外周部回転へら削り後、ナデ。	長石・石英 灰オリーブ色 良好	P L 57
		B 4.4				P 41 90%
		C 9.0				覆土下層
4	須恵器	A 12.0	体部、口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へら切り後、ナデ。	長石・海綿骨針 黄灰色 良好	P L 57
		B 3.9				P 42 95%
		C 7.8				覆土中層
5	須恵器	A 19.8	口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へら切り後、ナデ。	長石 灰色 良好	P L 57
		B 3.6				P 43 96%
		C 6.2				床面
6	須恵器	A 13.6	体部、口縁部一部欠損。底部に段をもち、体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へら切り後、へら削り。外周部回転へら削り後、ナデ。	長石・海綿骨針 灰色 良好	P L 57
		B 4.8				P 44 75%
		C 9.2				床面
7	須恵器	A 13.7	体部、口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へら切り後、へら削り。	長石・陶 灰白色 良好	P L 57
		B 4.7				P 45 70%
		C 8.8				覆土中層
8	須恵器	A 14.3	体部、口縁部一部欠損。底部に段をもち、体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へら切り後、へら削り。外周部回転へら削り後、ナデ。	長石・海綿骨針 灰色 良好	P L 57
		B 4.5				P 46 70%
		C 10.3				覆土中層
9	須恵器	A 11.1	底部～口縁部片。平底。体部は外反気味に立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へら切り後、へら削り。	長石・海綿骨針 灰白色 良好	P L 57
		B 3.5				P 47 55%
		C 7.2				床面
10	須恵器	A (15.1)	底部～口縁部片。底部に段をもち、体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へら切り。外周部回転へら削り後、ナデ。	長石・海綿骨針 オリーブ灰色 良好	P L 57
		B 4.7				P 48 25%
		C (10.2)				覆土上層
11	須恵器	A (13.8)	底部～口縁部片。平底。体部は内増気味に立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。	長石 灰色 良好	P L 57
		B 4.2				P 49 20%
		C (8.2)				覆土下層
12	須恵器	B (4.2)	底部～体部片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部回転へら切り。	長石・石英・スフィア 灰色 良好	P L 57
		C 8.0				P 50 40%
						覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第144図 13	環 須臾器	B (3.2) C 9.4	底部～体部 ₁ 。平底。体部は外 傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部白転 ヘラ切り後、ナデ。	長石・石英 灰白色 良好	P L 67 P 51 30% 覆土中層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径	重量(g)		
14	土玉	3.6	径 4.1	孔径 0.6	52.5	覆土	P L 57 DP 3 ソロバン5形
15	刀子	(10.2)	1.6	0.6	12.3	覆土	P L 57 M 1 鉄製
16	不明鉄製品	(4.9)	1.1	0.5	5.2	覆土	P L 57 M 2 カスガイカ

第8号住居跡(第145・146図)

位置 調査区の西部南側, B1j区。

規模と平面形 南側が調査区外に延びているため正確な規模や平面形は不明であるが、径3.5m程の円形か楕円形と推定される。

壁 壁高は8～11cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほほ平坦。硬化面は認められない。

炉 炉体土器を伴う石組炉で、住居跡のほぼ中央に付設されているとみられる。石組は長軸0.7m、短軸0.5m程の楕円形で、長軸方向はN-90°である。石は20～30cmの細長いものや握り拳大の河原石や凹石を11個使用している。炉体土器は底部を欠失する小形深鉢を石組の東端にやや内側に傾けて埋設している。覆土は2層(土層1, 2)で、掘り方の上層は5層(土層3～7)からなる。火床面は土層3の上面とみられる。

が覆土及び掘り方土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・白色スコリア粒子微量
- 6 黒色 ローム粒子少量、焼土粒子・白色スコリア粒子微量
- 7 ぶい黄褐色 ローム粒子多量、白色及び赤褐色スコリア粒子微量

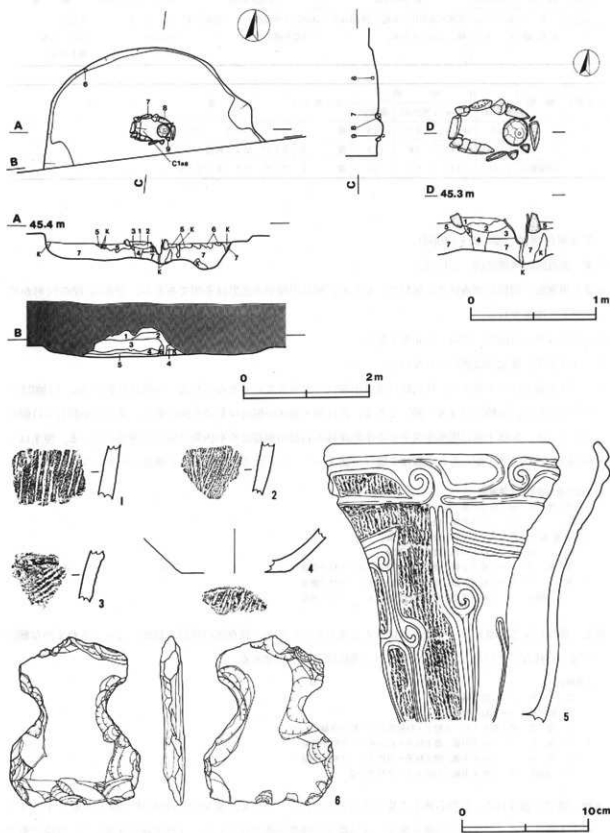
覆土 耕作による攪乱によって覆土はほとんど失われているが、調査区の壁面を観察したところわずかな範囲で覆土が残存していた。6層からなるが、堆積状況は不明である。

土層解説

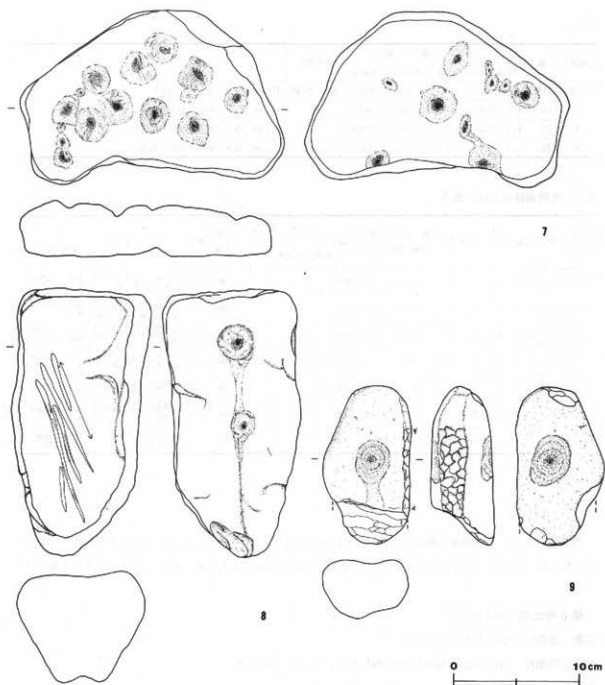
- 1 黒褐色 ローム粒子極微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子・白色スコリア粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・白色スコリア粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・白色スコリア粒子微量
- 6 ぶい黄褐色 ローム粒子多量、白色スコリア粒子少量

遺物 縄文土器片13点、打製石斧1点及び凹石3点が出土している。第145図5は炉体土器である。1～4は縄文土器片である。1, 2は撚り糸文, 3は縄文と隆帯が施されている。4は浅鉢の底部片で、底面に敷物の繊維痕が残されている。7～9は凹石で炉石として使用されていた。

所見 本跡は、出土遺物から縄文時代中期中葉(加曾利EⅡ式期)の住居跡と考えられる。



第145图 第8号住居跡・炉出土遺物実測図(1)



第146図 第8号住居跡出土遺物実測図(2)

第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第145図 5	深鉢	A 17.4	底部及び口縁部の一部を欠損。キャリバー形で、体部中位でわずかにくびれる。口縁部は平縁で、内彎する。地文に縦位の捺糸文を施し、太沈線によって口縁部文様帯と体部文様帯に2分する。口縁部文様帯は隆帯と沈線による横位の尚色文で3単位の区画文を構成する。体部文様帯は2単位の構成となり、3条の沈線によって曲折文を描き、曲折部には棘を突出する。沈線間には丁寧な磨きを施す。	砂粒・窯母・スコリア にふい黄褐色 普通	PL58
	縄文土器	B (22.3)			伊体土器 底部は粘土接合部 で割離する。 加曽利EⅡ

図取番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第140図6	打製石斧	13.4	10.3	2.0	290.8	覆土中層	P.L.58 Q.2 粘板岩 分銅形
7	凹石	13.9	21.1	4.6	1487.5	砂	P.L.58 Q.3 砂岩 伊石に転用
8	凹石	21.3	11.1	8.9	2571.8	砂	P.L.58 Q.5 砂岩 溝状の溝痕あり 伊石に転用
9	凹石	12.8	7.1	6.2	546.7	砂	P.L.58 Q.4 砂岩 伊石に転用

表6 後遺跡居住跡一覧表

住居番号	位置	軸方向	平面形	取積(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	内部施設				階・土	出土遺物	備考 参照(図説・志・書)		
						扉	破損	持戻	力能				穴	入口
1	B4c,	N-10°-E	方形	3.5×-	30	平垣	-	-	-	-	1	白土	土師器20 須恵器13 縄文土器17 支脚1 燧石1	奈良・平安時代(8世紀後半)
2	B3c,	N-7°-W	方形	3.5×3.1	20	平垣	-	-	-	-	1	白土	土師器133 須恵器30 縄文土器4 弥生土器1 支脚1 土器4 磁石1 燧石1	奈良・平安時代(8世紀末)
3	B3d,	N 11°-W	方形	3.7×3.7	20	平垣	-	-	-	-	1	白土	土師器25 須恵器20 縄文土器7 支脚7 磁土器1 燧石1	古墳時代(7世紀前半) 本館→G14
4	B3c,	N-2°-W	方形	3.8×	24	平垣一部	(2)	-	-	-	1	白土	土師器260 須恵器67 縄文土器17 支脚1 燧石1	奈良・平安時代(8世紀後半) S13→本館
5	B3d,	N-3°-W	方形	3.6×3.45	26	平垣一部	-	-	-	2	1	一部入土	土師器424 須恵器47 縄文土器5 支脚1 燧石1	古墳時代(7世紀前半)
6	B3c,	N-27°-W	長方形	3.6×4.6	30	平垣	(3)	-	-	-	1	白土	土師器531 須恵器116 縄文土器27 弥生土器4 支脚1 土器17 刀石の柄	奈良・平安時代(8世紀後半)
8	B1j,	-	ほぼ半円形	3.5×	41	平垣	-	-	-	-	不明	縄文土器13 打製石斧1 石臼1 燧石12	縄文時代中期中葉(加納川B15B16)	

2 土坑

当遺跡からは、土坑26基を確認した(SK-1~53, 内SK-4, 8, 9, 16, 18~23, 25~28, 30~35, 37, 40, 42, 43, 47~49, 51は欠番)。ここでは、時代が推定できる主なものを記述し、他は一覧表に掲載する。

第6号土坑 (第147図)

位置 調査区の東部中央, B3c,区。

規模と平面形 長径1.6m, 短径1.4mの楕円形で、深さは34cmである。

長軸方向 N-38°-W

壁面 一部内傾するほかは外傾して立ち上がる。

底面 ほぼ平坦である。

覆土 5層からなり、自然堆積とみられる。

土層解説

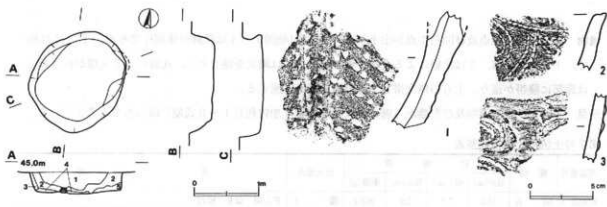
- | | |
|-------------------------------|-------------------------|
| 1 黒色 ローム粘土・白色粒子微量 | 4 褐色 ローム粘土中量, ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 ローム粘土・白色粒子微量 | 5 褐色 ローム粘土中量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック・ローム粘土少量, 白色粒子微量 | |

遺物 縄文土器片3点が出土している。第147図1, 2は深鉢の波状口縁部片で、3は深鉢の体部片である。

隆帯と有節沈線によって文様が描出される。

所見 本跡は、出土遺物が少ないため断定はできないが、複列の有節沈線や幅の広い有節沈線及び断面形がマボコ形の隆帯等が施されていることから、縄文時代中期前葉(阿玉台Ⅱ~Ⅲ式期)頃のものとみられる。

性格については規模や平面形から、墓坑あるいは貯蔵穴の可能性が考えられる。



第147図 第6号土坑・出土遺物実測図

第7号土坑 (第148図)

位置 調査区の東部北側, B3c, 区。

規模と平面形 径約2.1mの円形で, 深さは約50cmである。

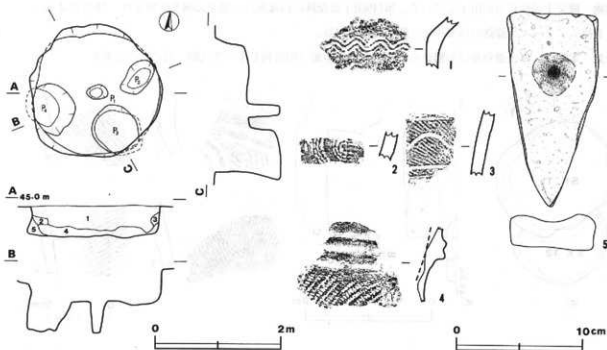
壁面 一部内傾するが, ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 緩やかな凹凸があり, 4か所のビット (P₁~P₄) をもつ。ビットは土坑中央に1か所 (P₁)、壁際に3か所 (P₂~P₄) 配されている。P₁は長径35cm, 短径25cmの楕円形で, 深さは50cmである。P₂は長径60cm, 短径35cmの楕円形で, 深さ25cmのくぼみ状のビットである。P₃, P₄は径60~85cmの不整形形で, 土坑中心から外側に向かって斜めに掘り込まれている。深さは45~50cmである。

覆土 5層からなり, 自然堆積とみられる。

土層解説

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1 稀暗褐色 ローム粒子中量, 白色粒子微量 | 4 暗赤褐色 ローム粒子多量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子中量 | 5 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 3 稀暗褐色 ローム粒子少量 | |



第148図 第7号土坑・出土遺物実測図

遺物 縄文土器片22点及び凹石1点が出土している。第148図1～4は深鉢の体部片である。1, 2は無文地で、1は有節沈線、2は沈線による文様が施される。3は縄文を地文とし、沈線による文様が施される。4は頸部に隆帯が走り、上方の無文帯と下方の縄文帯を区画する。

所見 本跡は、出土遺物及び形態から縄文時代中期中葉（加曾利E I～II式期）頃のものと考えられる。

第7号土坑出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値			出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
第148図 5	凹石	15.5	7.4	2.9	363.4	覆土 P L58 Q 6 砂岩

第11号土坑（第149図）

位置 調査区の中央部南側、B3f区。

規模と平面形 径約2.1mの円形で、深さは約50cmである。

重複関係 本跡は、第12号土坑と重複している。本跡が第12号土坑に掘り込まれており、本跡が古い。

壁面 内傾して立ち上がる。

底面 ほぼ平坦である。

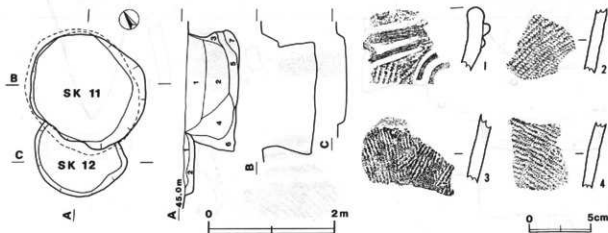
覆土 7層からなり、自然堆積とみられる。

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量、白色粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量、ロームブロック少量、白色粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ロームブロック少量、白色粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量、白色粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ローム粒子・ロームブロック少量
- 7 褐色 ローム粒子中量、ロームブロック少量

遺物 縄文土器片17点が出土している。第149図1は深鉢の口縁部片。地文に縄文が施され、隆帯による文様を描く。2～4は深鉢の体部片で、縄文が施される。

所見 本跡は、出土遺物及び形態から縄文時代中期中葉（加曾利E I～II式期）頃のものである。



第149図 第11・12号土坑・出土遺物実測図

第13号土坑 (第150図)

位置 調査区の中央部南側, B3d₁区。

規模と平面形 径約2mの円形で、深さは約50cmである。

壁面 垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

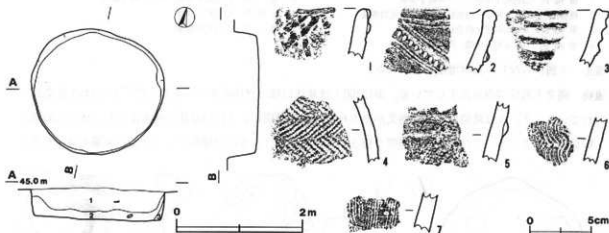
覆土 3層からなり、自然堆積とみられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 白色粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子微量

遺物 縄文土器片50点が出土している。第150図1～3は口縁部片, 4～7は体部片である。1は地文に縄文が施され、その上に格子目状に粘土紐が貼付されている。2は刻み目のある隆帯に沿って2条の有節沈線が施されている。3は縄文を地文とし、口縁に沿って4条の隆帯が施されている。4は幅の狭い羽状縄文が施されている。5は縄文を地文とし、隆帯が貼付されている。6は櫛歯状の施文具によって縦位の波状沈線が施されている。7は縦位の撫糸文が施されている。

所見 本跡は、出土遺物及び形態から縄文時代中期中葉(加曾利E I～II式期)頃のものと考えられる。第150図1及び4は縄文時代前期の土器で、混入品とみられる。



第150図 第13号土坑・出土遺物実測図

第14号土坑 (第151図)

位置 調査区の中央部北側, B3d₁区。

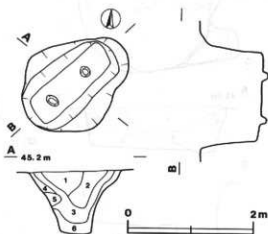
規模と平面形 長径1.9m, 短径1.5mの卵形で、深さは約95cmである。

長軸方向 N-45°-W

壁面 北東及び南西壁はほぼ垂直に、北西及び南東壁は外傾して立ち上がる。

底面 長軸1.5m, 短軸0.5mの長方形で、ほぼ平坦である。

長軸上に2か所のピットをもつ。ピットは径15～20cmの円形と楕円形で、深さは10cmである。



第151図 第14号土坑実測図

覆土 6層からなり、自然堆積とみられる。

土層解説

- | | |
|----------------------|-------------------|
| 1 暗褐色 白色粒子中量、ローム粒子少量 | 4 褐色 ローム粒子・白色粒子微量 |
| 2 黒褐色 白色粒子中量、ローム粒子少量 | 5 明赤褐色 ロームブロック層 |
| 3 暗赤褐色 ローム粒子・白色粒子少量 | 6 暗褐色 ローム粒子少量 |

所見 本跡は、その深さや形状から陥し穴と考えられ、底面のピットは逆茂木を立てたものとみられる。出土遺物がなく正確な時期は不明であるが、覆土の状況から縄文時代のものと思われる。

第15号土坑 (第152図)

位置 調査区の中央部東側、B3e区。

規模と平面形 径約2.3mの円形で、深さは約65cmである。

壁面 はほぼ垂直に立ち上がる。

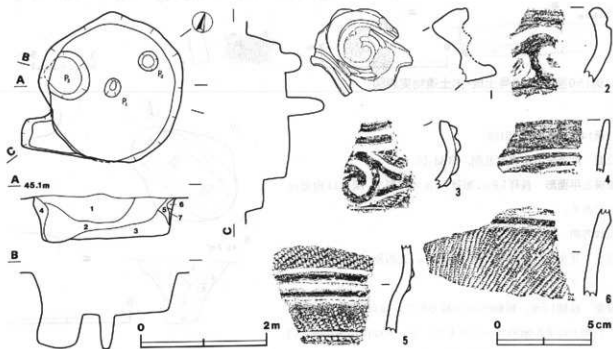
底面 平坦で、3か所のピット (P₁~P₃) をもつ。ピットは土坑中央に1か所 (P₁)、壁際に2か所 (P₂、P₃) 配されている。P₁は長径30cm、短径25cmの楕円形で、深さは60cmである。P₂は径30cmの円形で、深さ25cm。P₃は径約70cmの不整形円で、土坑中心から外側に向かって斜めに掘り込まれている。深さは50cmである。

土層解説

- | | |
|---------------------------|---------------------|
| 1 暗褐色 白色粒子中量、ローム粒子少量 | 5 褐色 白色粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 極暗褐色 ローム粒子・白色粒子中量、炭化物微量 | 6 明褐色 白色粒子少量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子・白色粒子中量 | 7 褐色 白色粒子微量 |
| 4 暗褐色 ローム粒子中量、白色粒子少量 | |

覆土 7層からなり、自然堆積とみられる。

遺物 縄文土器片57点が出土している。第152図1は波状口縁の立体把手片である。把手上には渦巻文が施されている。2、3は隆帯による渦巻文が施されている口縁部片。4は口縁部を無文帯とし、体部との境に沈線が施されている。5は縄文及び隆帯が施されている体部片。6は口縁部下位の2条の隆帯を境にして異なる



第152図 第15号土坑・出土遺物実測図

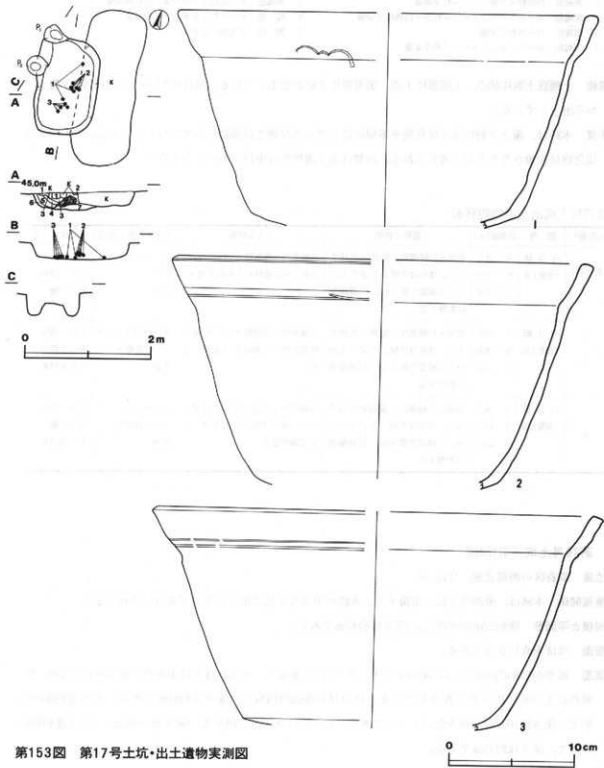
る縄文が施され、体部には沈線による文様が描かれている。

所見 本鉢は、出土遺物及び形態から縄文時代中期中葉（加曾利EⅠ～Ⅱ式期）頃のものと考えられる。

第17号土坑（第153図）

位置 調査区の中央部，B2f区。

規模と平面形 長軸約1.5m，短軸約0.9mの隅丸長方形で、深さは約25cmである。



第153図 第17号土坑・出土遺物実測図

長軸方向 N-6°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 ほぼ平坦である。2か所のピットをもつ。北西コーナー部(P₁)及び西壁際(P₂)にある。径25~30cmの不整円形、深さは約20cmである。

覆土 7層からなる。上層5~7は灰や炭化物が含まれることから一部が堆積とみられる。

土層解説

- | | |
|----------------------------|-----------------------|
| 1 黒褐色 白色粒子少量、ローム粒子微量 | 5 黒褐色 ローム粒子・灰中粒、炭化物少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子・白色粒子少量 | 6 褐色 ローム粒子多量、炭化物少量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子少量 | 7 黒色 炭化物・灰多量 |
| 4 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子多量 | |

遺物 土師質土器片40点、土師器片1点、須恵器片2点が出土している。第153図1~3の内耳鏡は覆土下層から出土している。

所見 本跡は、覆土下層に灰や炭化物を多量に含んでいるが焼土が確認されていないことから、これらの灰や炭化物は投棄されたものと考えられる。時期は出土遺物から中世のものともみられる。

第17号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第153図 1	内耳鏡 十層十器	A (33.5)	底部~口縁部片。底部に丸味をもつ。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で膨らむ。口縁端部は肥厚する。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部外面下位に環状の工具痕を残す。	長石・石英・炭灰 褐色 普通	P L 58 P 56 15% 覆土下層
		B (17.0)				
		C (21.8)				
2	内耳鏡 土師質土器	A (33.6)	底部~口縁部片。底部に丸味をもつ。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で膨らむ。口縁端部は肥厚する。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部外面下位に2本の浅い沈線が通る。	長石・石英・スクリヤ にふい黄褐色 普通	P 55 15% 覆上下層 外面腐付者
		B (18.1)				
		C (19.2)				
3	内耳鏡 土師質土器	A (36.0)	底部~口縁部片。底部に丸味をもつ。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で膨らむ。口縁端部は肥厚する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。口縁部外面下位に2本の浅い沈線が通る。	長石・石英・スクリヤ にふい黄褐色 普通	P 54 15% 覆土下層 外面腐付者
		B (17.3)				
		C (20.5)				

第39号土坑(第154図)

位置 調査区の西部北側、B1h区。

重複関係 本跡は、第38号土坑と重複する。本跡が第38号土坑に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 径約2.5mの円形で、深さは約45cmである。

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 緩やかな凹みがあり、5か所のピット(P₁~P₅)をもつ。ピットは土坑中央やや東寄りに1か所(P₁)、壁際に4か所(P₂~P₅)配されている。P₁は径約20cmの円形で、深さは約20cmである。P₂は径約50cmの円形で、深さ約10cmのくぼみ状のピットである。P₃, P₄は径50cmの円形で、深さ25~40cm、P₅は径約90cmの円形で、深さは約75cmである。

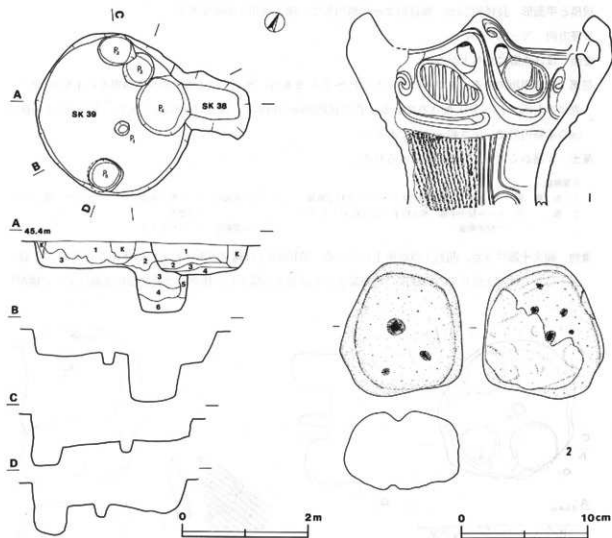
覆土 6層からなり、自然堆積とみられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・白色粒子微量
- 2 黒色 ローム粒子少量、白色粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・白色粒子微量

遺物 縄文土器片26点、凹石1点が出土している。

所見 本跡は、出土遺物から縄文時代中期中葉（加曾利E I～II時期）のものと考えられる。



第154図 第38・39号土坑、第39号土坑出土遺物実測図

第39号土坑出土遺物観察表

図記番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第154図 I	深鉢 縄文土器	A 16.7	体部上位、口縁部片。キャリバー形。体部上位で開き、口縁部で内彎する。4単位とられる波状口縁で、波頂部には三方に孔をもつ立体把手が付く。地文に縦位の撫承文を施し、隆帯と沈線によって口縁部と体部文様帯を画す。口縁部文様帯を横位の褐色文で区画し、内部には縦位の太い沈線を充填する。体部には3条の沈線による文様を施す。沈線間の磨り消しは縦である。	砂粒・長石・雲母にふい褐色 普通	P L 58 P 58 25% 覆土 内面に煤付着 加曾利 E I
		B (15.2)			

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第154図2	凹石	10.8	9.8	6.3	626.3	覆土	P L58 Q 7 砂岩

第45号土坑 (第155図)

位置 調査区の西部南側, B2i区。

規模と平面形 長径約2.4m, 短径約2mの楕円形で, 深さは40~50cmである。

長径方向 N-40°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

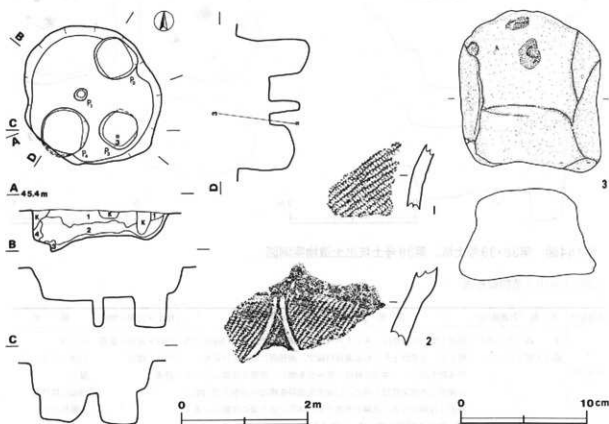
底面 ほぼ平坦である。4か所のピット(P₁~P₄)をもつ。ピットは土坑中央やや西寄りに1か所(P₁), 壁際に3か所(P₂~P₄)配されている。P₁は径約20cmの円形で, 深さは約45cmである。P₂~P₄は径60~75cmの不整形円で, 深さ40~65cmである。

覆土 4層からなり, 自然堆積とみられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------|----------|------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・スコリア粒子微量 | 3 におい黄褐色 | ローム粒子多量, ロームブロック少量, スコリア粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子・スコリア粒子微量 | 4 におい黄褐色 | ローム粒子多量 |

遺物 縄文土器片9点, 凹石1点が出土している。第155図1は縄文が施されている体部片である。2は口縁部下位から体部上位片で, 口縁部には隆帯による渦巻文が描かれ, 体部には縄文地に沈線による文様が施さ



第155図 第45号土坑・出土遺物実測図

れている。

所見 本跡は、出土遺物及び形態から縄文時代中期中葉（加曾利E I～II時期）のものと考えられる。

第45号土坑出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第156図 3	凹石	12.7	11.4	7.2	1314.0	底面	PL58 Q8 砂岩

第46号土坑（第156図）

位置 調査区の西部南側，B11a区。

規模と平面形 径約2.1mの円形で、深さは45～60cmである。

壁面 はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 緩やかな凹凸があり、8か所のピット（P₁～P₈）をもつ。ピットは土坑中央に1か所（P₁）、壁際に7か所（P₂～P₈）配されている。P₁は径約30cmの円形で、深さは約50cmである。P₂、P₃は径50～70cmの楕円形で、深さは約60cmである。P₄は長径40cm、短径25cmの楕円形で、深さ約15cmのくぼみ状のピットである。

P₅～P₈は径20～25cmの不整形円で、外側に斜めに掘り込んでいるものがある。深さは10～35cmである。

覆土 6層からなり、自然堆積とみられる。

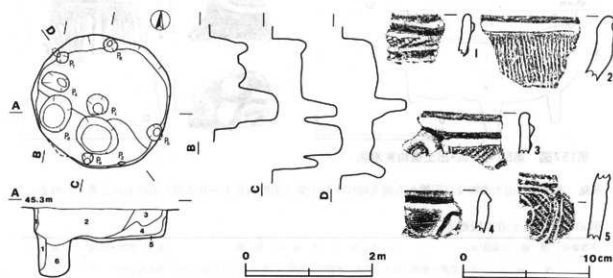
土層解説

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1 赤褐色 ローム粒子少量 | 4 極暗褐色 ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子中量、白色粒子少量 | 5 黒褐色 ローム粒子少量 |
| 3 黒色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 6 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量 |

遺物 縄文土器片18点が出土している。第156図1、3は縄文地に降帯による文様が描かれている口縁部片。

2は縦位の撚り糸文と横位の沈線が施されている口縁部片。4は無文地に降帯による文様が描かれている口縁部片。5は縄文地に沈線による文様が描かれている体部片である。

所見 本跡は、出土遺物及び形態から縄文時代中期後半（加曾利E I～II時期）頃のものと考えられる。



第156図 第46号土坑・出土遺物実測図

第50号土坑（第157図）

位置 調査区の西部中央，B11a区。

規模と平面形 径約2.7mの円形で，深さは50～55cmである。

壁面 ほぼ垂直かあるいは外傾して立ち上がる。

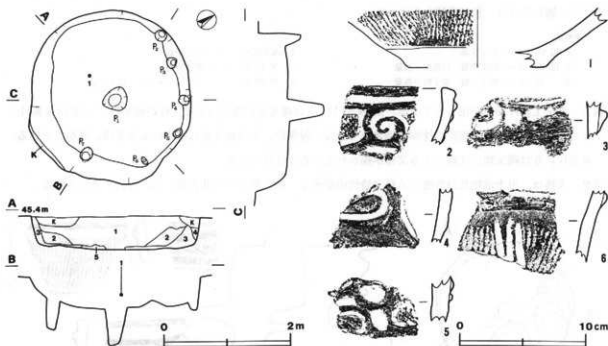
底面 ほぼ平坦であるが，一部に凹凸がある。7か所のピット（ $P_1 \sim P_7$ ）をもつ。ピットは土坑中央に1か所（ P_1 ），壁際に6か所（ $P_2 \sim P_7$ ）配されている。 P_1 は径約25cmの不整形円で，深さは約60cmである。 $P_2 \sim P_7$ は径10～20cmの円形あるいは楕円形で，外側にやや斜めに掘り込まれたものもある。深さは15～45cmである。

覆土 5層からなり，自然堆積とみられる。

土層解説

- | | |
|---------------------------|---------------|
| 1 極暗褐色 ローム粒子少量，白色粒子微量 | 4 褐色 ロームブロック質 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量 | 5 褐色 含有物なし |
| 3 黒褐色 ローム粒子少量，粘土粒子・白色粒子微量 | |

遺物 縄文土器片37点が出土している。第157図2は撚糸文を地文とし，隆帯による渦巻文が施されている口縁部片。3，4，5は隆帯による文様が施されている口縁部下位片。6は横位の隆帯下に縄文を地文とし，沈線が垂下する体部片である。



第157図 第50号土坑・出土遺物実測図

所見 本跡は，出土遺物及び形態から縄文時代中期中葉（加曾利E I～II時期）頃のものと考えられる。

第50号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文種の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第157図 1	浅鉢 縄文土器	B (4.6) C (11.0)	底部～胴部下位片。胴部は直線的に外傾しながら立ち上がる。地文に縦位の撚り糸文を施し，胴部下端及び底部に磨きを施す。	長石・石英・スクリヤ 褐色 普通	PL58 P59 5% 覆土 加曾利E I

第53号土坑 (第158図)

位置 調査区の西端部南側, B1j区。

規模と平面形 長径約3m, 短径2.6mの楕円形で, 深さは30~40cmである。

長径方向 N-42°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 ほぼ平坦で, 4か所のピット (P₁~P₄)をもつ。ピットは土坑中央北寄りに1か所 (P₁), 壁際に3か所 (P₂~P₄)配されている。P₁は径約25cmの不整形形で, 深さは約50cmである。P₂~P₄は径15~35cmの円形あるいは楕円形で, 深さは15~20cmである。

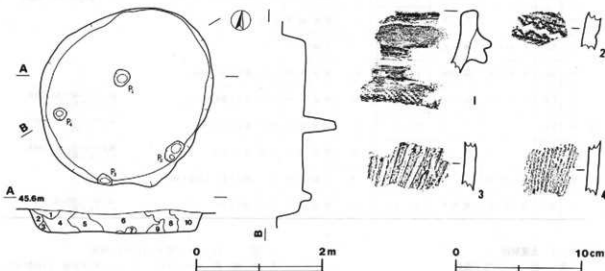
覆土 10層からなり, 堆積状況から人為堆積とみられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------|--------|-------------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 白色粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | ローム粒子微量 | 7 暗赤褐色 | ローム粒子少量, 白色粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子微量 | 8 極暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・白色粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | 9 暗赤褐色 | ローム粒子少量, 白色粒子微量 |
| 5 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・白色粒子微量 | 10 黒褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・白色粒子微量 |

遺物 縄文土器片9点が出土している。第158図1は口縁部片で, 口縁に沿って太い隆帯が巡る。隆帯上には太い沈線をもち, 隆帯下部には縄文が施されている。2は太い沈線による波状文が施される口縁部下位片。3は縦位の浅い太沈線が施されている体部片。4は縦位の縞糸文が施されている体部片である。

所見 本跡は, 出土遺物及び形態から縄文時代中期中葉 (加曾利EⅠ~Ⅱ式期) 頃のものと考えられる。



第158図 第53号土坑・出土遺物実測図

表7 後側遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)	図版番号
				長径×短径(m)	深さ(m)						
1	B4b	-	円形	0.5 × 0.45	20	外板	凹凸	自然			159
2	B4c	-	円形	0.75 × 0.7	15	外板	編証	自然	土器器1 須恵器1 燗1		159
3	B3b	-	円形	1.0 × 0.95	40	垂蓋	平坦	自然	縄文土器1		159

7. 坑番号	8. 位置 (方位)	9. 長径方向 (長軸方向)	10. 平面形	11. 規模		12. 壁面	13. 底面	14. 積土	15. 出土遺物	備考 新出図録(方一新)	16. 図説 番号
				17. 長さ×幅(m)	18. 高さ(cm)						
5	B3d.	-	円形	1.2×1.1	55	垂直	平坦	自然	縄文土器1		150
6	B3c.	N-38°-W	楕円形	1.6×1.45	34	外傾	平坦	自然	縄文土器3 燗1	縄文時代中期中葉(加曾利 E1~E3式期)	147
7	B3c.	-	円形	2.1×2.1	50	垂直	凹凸	自然	縄文土器22 凹石1	縄文時代中期中葉(加曾利 E1~E3式期)	148
10	B3e.	-	不整形	0.9×0.8	25	外傾	崩壊	自然	縄文土器2 土師器1 燗1		159
11	B3f.	-	円形	2.1×2.1	50	内傾	平坦	自然	縄文土器17 燗10	縄文時代中期中葉(加曾利 E1~E3式期) 本館-SK12	149
12	B3f.	-	[不整形]	1.5×-	15	外傾	平坦	自然		SK11~本館	149
13	B3d.	-	円形	2.0×2.0	50	垂直	平坦	自然	縄文土器50 燗11	縄文時代中期中葉(加曾利 E1~E3式期)	150
14	B3d.	N-45°-W	楕円形	1.9×1.5	55	垂直	平坦	自然		縄文時代の地し穴	151
15	D3c.	-	円形	2.2×2.3	65	垂直	平坦	自然	縄文土器57 燗4	縄文時代中期中葉(加曾利 E1~E3式期)	152
17	D2f.	N-6°-W	真八角形	1.5×0.9	35	垂直	平坦	一部 人工	土師器土器40 1.5号燗1 須恵器2	本館	153
24	B2c.	N-4°	長方形	2.0×1.25	65	垂直	平坦	人為	縄文土器8 弥生土器2 土師器2 須恵器2		149
28	B2f.	-	[不整形]	1.3×-	22	外傾	崩壊	人為	縄文土器24 土師器2 燗1		159
36	B2g.	-	[円形]	1.6×-	55	垂直	平坦	自然	縄文土器10 土師器1 燗2		139
38	B1h.	N-67°-E	長方形	1.55×0.85	30	外傾	崩壊	自然		SK39~本館	154
39	B1h.	-	不整形	2.3×2.5	45	垂直	凹凸	自然	縄文土器36 凹石1 燗7	縄文時代中期中葉(加曾利 E1~E3式期) 本館-SK38	151
41A	B1i.	-	円形	1.3×1.3	35	垂直	崩壊	自然			159
41B	B1i.	N-42°-E	楕円形	1.3×1.0	15	外傾	凹凸	自然			139
44	B2i.	N-22°-W	真九方形	1.9×1.9	65	垂直	平坦	人為	縄文土器3 土師器3		159
45	B2i.	N-40°-W	楕円形	2.4×2.0	50	垂直	平坦	自然	縄文土器9 凹石1	縄文時代中期中葉(加曾利 E1~E3式期)	155
46	D1i.	-	円形	2.1×2.1	60	垂直	凹凸	自然	縄文土器18 燗2	縄文時代中期中葉(加曾利 E1~E3式期)	156
50	B1i.	-	円形	2.7×2.7	55	垂直	平坦	自然	縄文土器37	縄文時代中期中葉(加曾利 E1~E3式期)	157
52	B1h.	(N-10°-W)	[方形]	[1.8]×-	15	外傾	平坦	自然	縄文土器7 土師器9 燗5		150
53	B4i.	N-42°-E	楕円形	3.0×2.6	40	垂直	平坦	人為	縄文土器9	縄文時代中期中葉(加曾利 E1~E3式期)	155

SK-1 土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 極暗褐色 ローム粒子微量

SK-2 土層解説

- 1 黒色 ローム粒子中量
- 2 黒色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子散在

SK-3 土層解説

- 1 黒褐色 白色粒子少量, ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子散在

SK-5 土層解説

- 1 黒色 ローム粒子・白色粒子微量
- 2 黒褐色 白色粒子少量, 炭化粒子・ローム粒子微量

- 3 黒色 ローム粒子・白色粒子微量

- 4 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子少量, 白色粒子微量

SK-10 土層解説

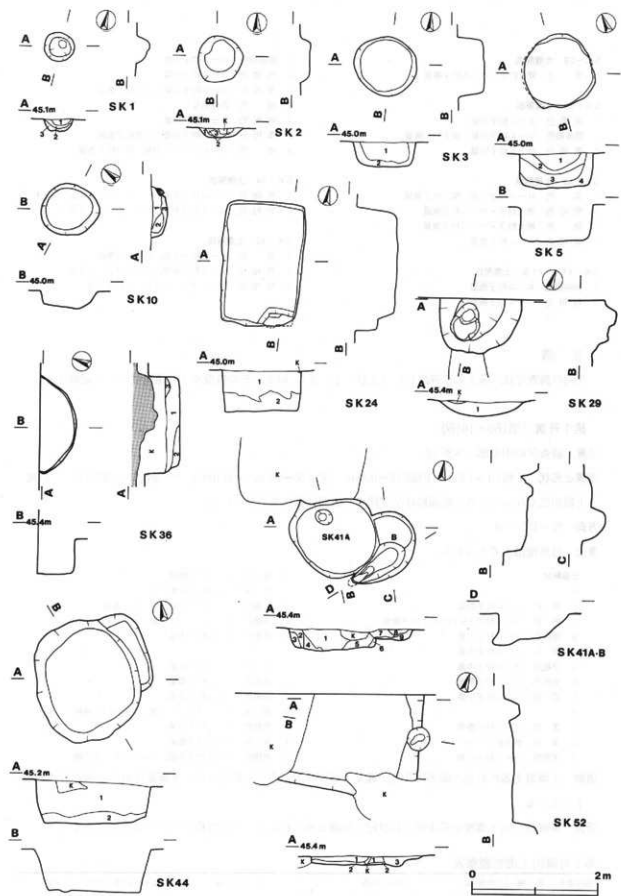
- 1 黒褐色 ローム粒子・白色粒子微量
- 2 極暗褐色 白色粒子少量, ローム粒子微量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子中量

SK-12 土層解説

- 1 暗褐色 白色粒子少量, ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, ローム粒子・白色粒子微量

SK-24 土層解説

- 1 黒色 ロームブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化物微量
- 2 オリーブ褐色 ロームブロック・ローム粒子多量



第159图 第1~3·5·10·24·29·36·41A·41B·44·52号土坑·出土物实测图

SK-29 土層解説

1 黒色 焼上粒子・ローム粒子微量

SK-36 土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量

2 暗赤褐色 ローム粒子少量、焼上粒子微量

3 黒褐色 ローム粒子少量

SK-38 土層解説

1 黒色 ローム粒子少量、焼上粒子微量

2 黒褐色 焼上粒子・ローム粒子微量

3 黒色 焼上粒子・ローム粒子微量

4 黒褐色 ローム粒子微量

SK-41A・41B 土層解説

1 暗褐色 ローム粒子微量

2 暗褐色 ローム粒子極微量

3 暗赤褐色 ローム粒子少量

4 暗褐色 ローム粒子少量

5 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

6 褐色 含有物なし

7 暗褐色 ローム粒子微量

8 黒褐色 ローム粒子少量、白色粒子微量

9 褐色 ロームブロック中品、白色粒子微量

SK-44 土層解説

1 黒褐色 ローム粒子多量、ロームブロック中品、炭土粒子少量

2 黒褐色 ローム粒子多量、ロームブロック少量

SK-52 土層解説

1 黒色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

2 黒褐色 ローム粒子中品、ロームブロック少量

3 出褐色 ロームブロック・ローム粒子少量

3 溝

今回の調査では、溝2条を確認した(SD-1, 2)。以下、その特徴や主な遺物について記載する。

第1号溝(第160・161区)

位置 調査区の中央部, B3f区。

規模と形状 上幅1.1~1.9m, 下幅0.15~0.35m, 深さ70~90cm, 全長10.9mの直線状で、南側に行くに従って上幅が広がっている。断面形はV字状で、底面は丸味を帯びている。

方向 N-15°-W

覆土 自然堆積と考えられる。

土層解説

A

1 黒色 ローム粒子微量

2 黒色 ローム粒子・灰白色粘土粒子微量

3 黒褐色 ローム粒子少量

4 黒色 ローム粒子少量

5 黒褐色 ローム粒子中量

6 黒褐色 ローム粒子微量

7 黒色 ローム粒子中量

B

1 黒色 ローム粒子微量

2 黒色 焼上粒子・ローム粒子微量

3 黒褐色 ローム粒子少量

4 黒色 ローム粒子微量

5 黒色 ローム粒子少量

6 黒褐色 ローム粒子中量、焼上粒子微量

7 黒褐色 ロームブロック少量、ローム粒子微量

8 黒褐色 ローム粒子中量

C

1 黒色 ローム粒子微量

2 黒褐色 ローム粒子微量

3 黒褐色 ローム粒子少量

4 黒色 ロームブロック少量、ローム粒子微量

5 黒褐色 ローム粒子中量

6 黒色 ローム粒子微量

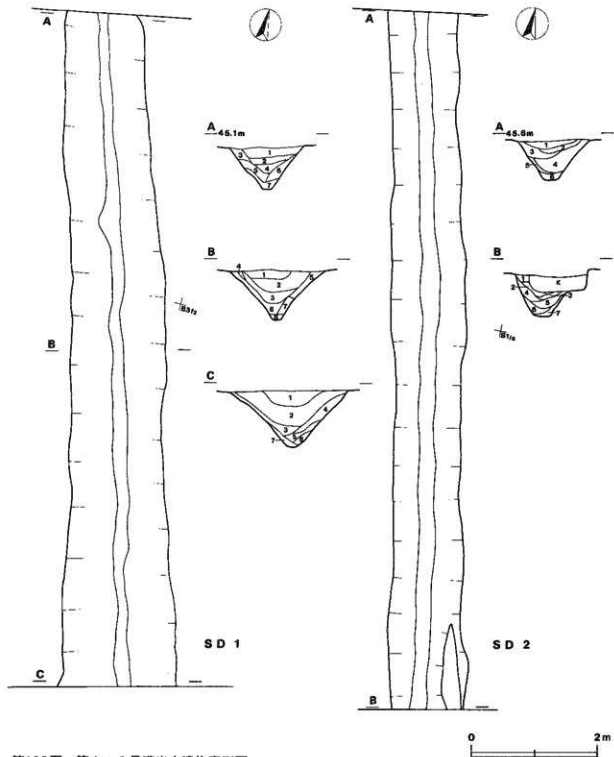
7 黒褐色 ローム粒子中量、ロームブロック少量

遺物 七師質土器片41点、陶器片3点、縄文土器片16点、弥生土器片3点、土師器片31点、須恵器片8点が出土している。

所見 本跡は、出土遺物から中世(15世紀)の溝とみられるが、その性格については不明である。

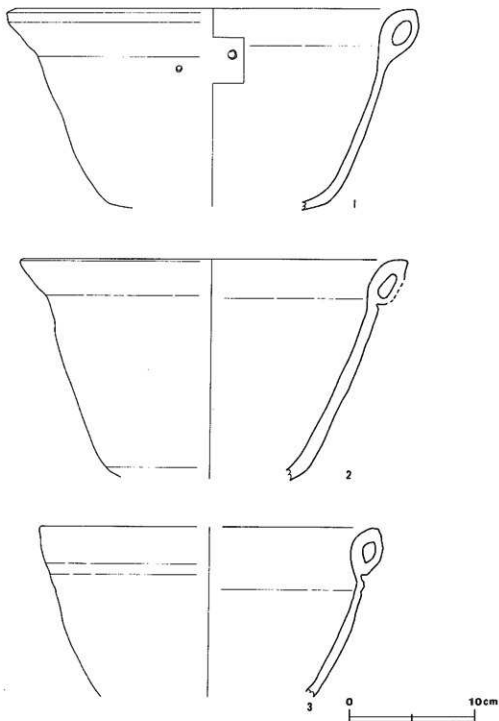
第1号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第161区 1	内耳 網 土層質土器	A (32.9)	底部~口縁部一部欠損。底部に丸味をもつ。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で膨らむ。口縁部は肥厚する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。	長石・石英・スコーア にふい黄褐色 普通	P.L.59 P.61 63% 覆土 外面煤付着 体部2か所穿孔
		B (16.0)				
		C (17.8)				



第160図 第1・2号溝出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第160図 2	内耳銅 土質土器	A (30.5)	底部へ口縁部片。底部に丸味をもつ。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で膨らむ。口縁端部は肥厚する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。底面外周部へう削り痕、磨き。	長石・海綿骨針 ふい黄褐色 普通	P L 59 P 62 50% 覆土 外面多量の炭付着
		B (17.5)				
		C (16.1)				
3	内耳銅 土質土器	A (27.2)	体部へ口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は肥厚する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。内耳部外面に指頭による窪みを施す。	長石・海綿骨針 赤褐色 普通	P L 59 P 63 15% 覆土 外面炭付着
		B (13.4)				



第161図 第1号溝出土遺物実測図

第2号溝（第160・162図）

位置 調査区の西端部，B1i区。

規模と形状 上幅1～1.2m，下幅0.2～0.35m，深さ約60cm，全長11.2mの直線状である。断面形はUあるいはV字状で，底面は丸味を帯びている。

方向 N-13°-W

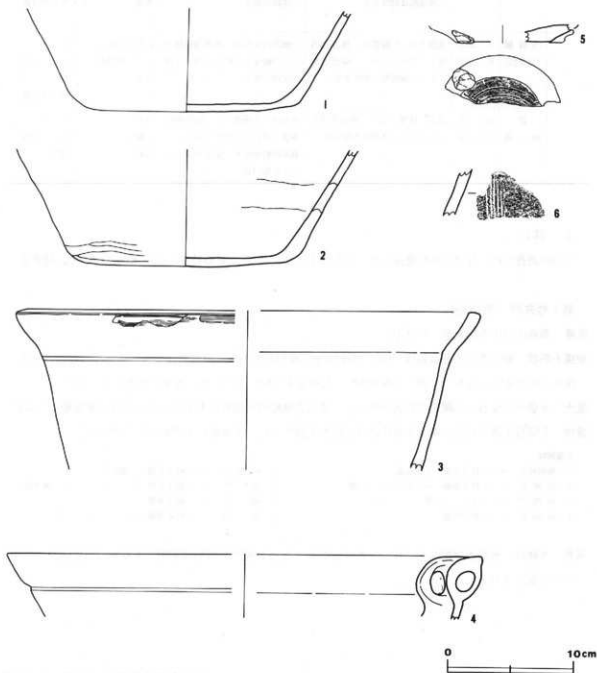
覆土 自然堆積と考えられる。

土層解説

A		B	
1	黒色 焼土粒子・ローム粒子極微量	1	黒褐色 ローム粒子極微量
2	黒色 ローム粒子中量	2	黒色 ロームブロック少量, ローム粒子微量
3	黒色 ローム粒子極微量	3	黒色 ローム粒子中量, ロームブロック少量
4	黒褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量	4	黒色 ロームブロック・ローム粒子少量
5	黒色 ローム粒子少量	5	黒色 ロームブロック中量, ローム粒子少量
6	極暗褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量	6	極暗褐色 ロームブロック中量, ローム粒子少量
		7	黒色 ローム粒子少量

遺物 土師質土器片80点, 陶器片3点, 縄文土器片51点, 土師器片34点, 須恵器片9点が出土している。第162図6は土師質土器の播鉢片である。

所見 本跡は, 出土遺物から中世(15世紀)の溝とみられる。その性格については不明であるが, 第1号溝と時期や方向が同じで, 規模や形状も近似していることから一連のものである可能性がある。



第162図 第2号溝出土遺物実測図

第2号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・検成	備考
第162図 1	内耳副 土師質土器	B (8.3)	底部～体部下位片。底部に丸味をもち、体部は外横して立ち上がる。	体部内面横ナデ。体部下端へラ削り後、ナデ。	長石・石英・スコリア にふい黄褐色 普通	P L 69
		C (18.0)				P 64 10%
2	内耳副 土師質土器	B (9.3)	底部～体部下位片。底部に丸味をもち、体部は外横して立ち上がる。	体部内面横ナデ。底面外周部へラ削り後、ナデ。	長石・石英 にふい黄褐色 普通	P L 58
		C (17.6)				P 65 10%
3	内耳副 土師質土器	A [35.4]	体部、口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部で膨らむ。口縁端部は肥厚する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。口縁部と体部との境に1条の比線が走る。	長石・石英 にふい黄褐色 普通	P 66 10%
		B (12.6)				覆土 外面煤付着
4	内耳副 土師質土器	A [38.0]	体部上位、口縁部片。体部は外横して立ち上がり、口縁部で膨らむ。口縁端部は肥厚する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。口縁部と体部との境に1条の比線が走る。	長石・石英 にふい黄褐色 普通	P L 59
		B (5.0)				P 67 10%
5	皿 陶器	B (1.4)	底部、体部下位片。底面外周部に足をもち、体部は外横する。	体部内・外面横ナデ。足貼付後、棒状工具による押圧を加える。底部回転糸切り。見込み部にわずかに煤付着。	長石 灰黄色 良好	P L 69
		C (7.5)				P 68 5%

4 井戸

今回の調査では、井戸2基を確認した（SE-1, 2）。以下、その特徴や主な遺物について記載する。

第1号井戸（第163図）

位置 調査区の中央部北側、B2f区。

規模と形状 掘り方の上面は長径2.9m、短径2.4mの楕円形である。断面形はラッパ状で、確認面から1.2mの深さの所に膨らみをもつ。深さは確認面から1.95mまで掘り下げたが、底面には達しなかった。

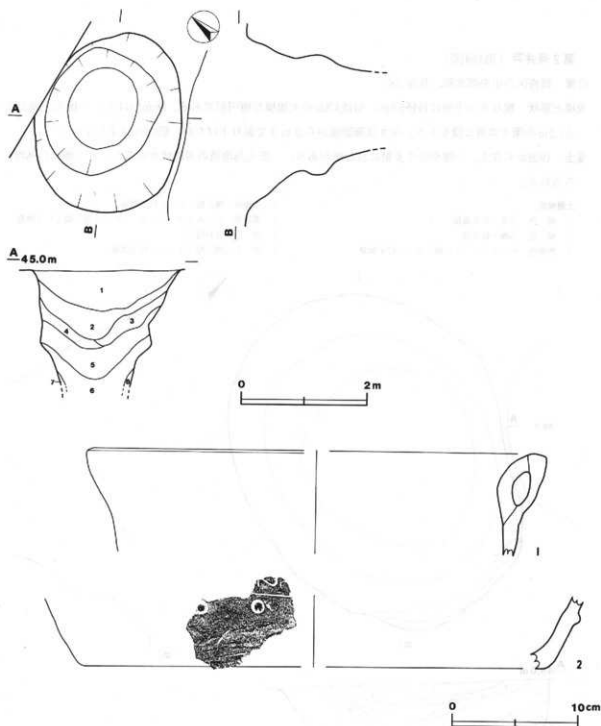
覆土 8層からなる。小礫を含む層があり、一部人為堆積の可能性があるが、その他は自然堆積とみられる。

遺物 土師質土器片18点、縄文土器片21点、弥生土器片1点、土師器片1点が出土している。

土層解説

- | | |
|-------------------------|---------------------------|
| 1 極暗褐色 ローム粒子少量、小礫微量 | 5 暗褐色 ローム粒子多量、小礫少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子多量、ロームブロック少量 | 6 褐色 ローム粒子多量、ロームブロック・小礫少量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量 | 7 褐色 ローム粒子多量 |
| 4 暗褐色 ローム粒子中量 | 8 褐色 ローム粒子多量、ロームブロック少量 |

所見 本跡は、底面まで掘り下げることができなかったため確実な時期は不明であるが、出土遺物から中世の井戸と推定される。



第163図 第1号井戸・出土遺物実測図

第1号井戸出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第163図 1	内耳 網 土師質土器	A (36.0) B (8.2)	体部、口縁部片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で膨らむ。口縁端部は肥厚する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。	金雲母・スコリアにふい橙色 普通	P69 5% 覆土 外面煤付着
2	火 鉢 土師質土器	B (5.9) C (37.0)	底部～体部下位片。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面横ナデ後、横S字状の沈線文及び円形の刺突を伴う小突起を貼付する。	長石・石英・雲母 浅黄橙色 普通	PL59 P71 3% 覆土

第2号井戸（第164図）

位置 調査区の中央部北側，B2g区。

規模と形状 掘り方の上面は長径5.5m，短径4.3mの大規模な楕円形である。断面形はラッパ状で，確認面から1.2mの深さの所に段をもつ。深さは確認面から2mまで掘り下げたが，底面には達しなかった。

覆土 19層からなる。小礫や砂を多量に含む層があり，一部人為堆積の可能性はあるが，その他は自然堆積とみられる。

土層解説

1 褐色 A E-K P 微量

2 褐色 小礫・砂多量

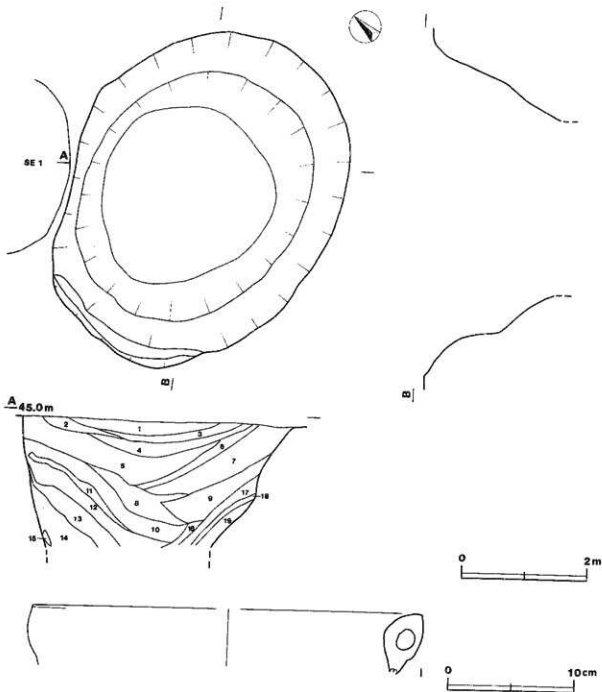
3 黒褐色 ロームブロック少量，ローム粒子微量

4 黒褐色 塵少量，ローム粒子微量

5 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量

6 褐色 含有物なし

7 黒色 焼土粒子・ローム粒子微量



第163図 第1号井戸・出土遺物実測図

8 褐色	小礫・砂多量	14 黒色	ローム粒子多量, A E-K P微量
9 黒色	炭化した・ローム粒子微量	15 褐色	A E-K P多量
10 褐色	A E-K P微量	16 黒褐色	ローム粒子少量
11 褐色	含有物なし	17 明褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子微量
12 褐色	含有物なし	18 黒色	ローム粒子微量
13 黒色	ローム粒子多量, ロームブロック中量, 焼土粒少量	19 褐色	含有物なし

遺物 十師質土器片15点, 縄文土器片2点, 須恵器片1点が出土している。

所見 本跡は, 底面まで掘り下げることができなかったため確実な時期は不明であるが, 出土遺物から中世の井戸と推定される。

第2号井戸出土遺物観察表

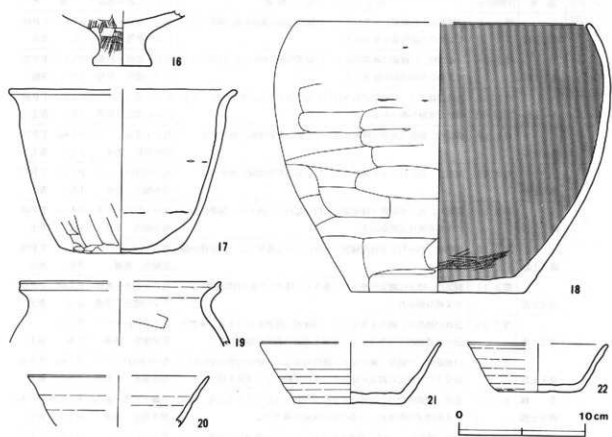
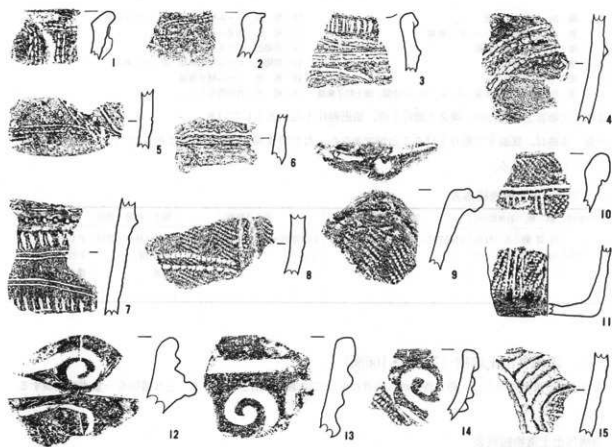
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第164図 1	内耳 割 土師質土器	A (31.0) B (4.8)	口縁部片。口縁部に膨らみをもつ。	口縁部内・外面, 体部内由横ナデ。	小礫・長石・雲母 浅黄褐色 普通	P L 59 P 72 3% 覆土 外面僅付着

5 遺構外出土遺物 (第165・166図)

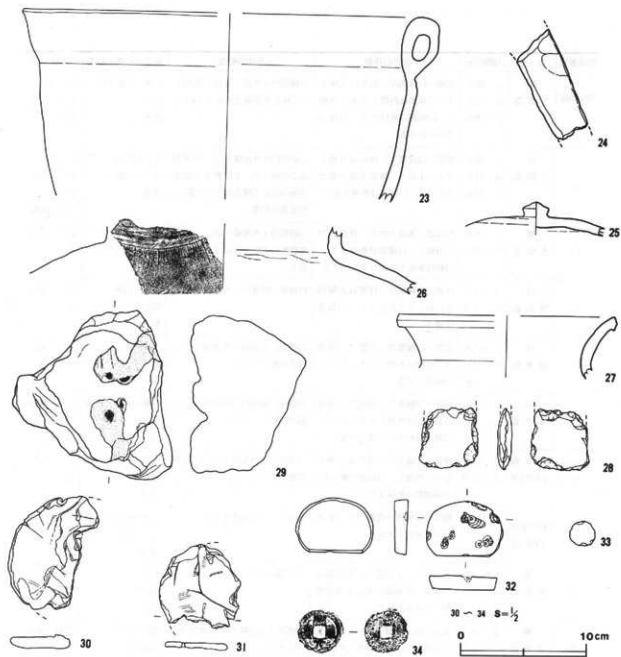
当遺跡の遺構外からは, 縄文時代から中世にかけての遺物が出土している。主な遺物を一覧表で記載する。

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第165図 1	縄文土器	厚さ 0.9	口縁部片。口縁部に隆帯が走り, 口縁部内面に綾がある。隆帯に沿って2条の有節沈線が施される。	長石・雲母・石英 にぶい褐色 普通	P L 60 T P 66 1% 表土
2	縄文土器	厚さ 1.0	口縁部片。口縁部に隆帯が走り, 口縁部内面に綾がある。隆帯に沿って2条の有節沈線が施される。	長石・雲母・石英 にぶい褐色 普通	P L 60 T P 73 1% 表採
3	縄文土器	厚さ 0.9	波状口縁部片。口縁部に刺る目のある隆帯が走り, 隆帯にそって不明瞭な沈線が施される。	長石・雲母 にぶい褐色 普通	P L 60 T P 64 1% 表土
4	縄文土器	厚さ 1.0	胴部片。断面三角形の隆帯に沿って1条の有節沈線が施される。	長石・雲母 暗赤褐色 普通	P L 60 T P 75 2% 表土
5	縄文土器	厚さ 0.9	胴部片。刺る目のある隆帯に沿って2条の有節沈線が施される。	長石・雲母・スクリヤ 暗赤褐色 普通	P L 60 T P 77 1% 表土
6	縄文土器	厚さ 0.7	胴部片。低い不明瞭な隆帯間に弧状の貼付文が施され, 隆帯に沿って2条の波状沈線が走る。	雲母・長石・石英 暗赤褐色 普通	P L 60 T P 68 1% 表7
7	縄文土器	厚さ 1.0	胴部片。刺る目と平行沈線及び刺る目のある隆帯によって文様が描かれる。	雲母・長石・スクリヤ 黒褐色 普通	P L 60 T P 76 2% 表土
8	縄文土器	厚さ 1.1	胴部片。地文に縄文が施され, 垂下する隆帯と2条の有節沈線によって文様が描かれる。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P L 60 T P 67 2% 表土
9	縄文土器	厚さ 0.9	波状口縁部片。縄文を地文とし, 口縁部に隆帯を貼付する。隆帯上面には波頂部で高巻文となる沈線と円形の刺突が施される。	長石・雲母・スクリヤ 灰黄褐色 普通	T P 63 2% 表土
10	縄文土器	厚さ 0.9	口縁部片。口縁部に縄文をもつ隆帯が走り, 口縁部内面に綾がある。隆帯下には地文に縄文が施され, 平行沈線による文様を描く。	長石・雲母・スクリヤ 暗赤褐色 普通	P L 60 T P 65 1% 表土
11	深鉢 縄文土器	B (5.7) C (8.0)	底部, 胴部下位片。体部はわずかに外傾しながら立ち上がる。地文に単節縄文が施され, 3条の平行沈線が通下する。	小礫・石英・長石 暗赤褐色 普通	P L 59・60 P 85 10% 表土
12	縄文土器	厚さ 1.3	波状口縁部片。口縁部に隆帯を貼付し, 上面には波頂部で高巻文となる沈線が施される。胴部は縄文を地文とし, 沈線による文様を描く。	長石・石英・スクリヤ 灰黄褐色 普通	P L 60 T P 71 2% 表採



第165图 遺構外出土遺物実測图(1)



第166図 遺構外出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第166図 13	—	厚さ 1.0	口縁部片。隆帯による渦巻文が施される。	小礫・長石・雲母 にふい橙色 普通	PL60 TP74 1% 表土
	縄文土器	厚さ 0.7	口縁部片。縄文を地文とし、隆帯による渦巻文が施される。	長石・雲母・スコリア 灰黄褐色 普通	PL60 TP72 1% 表土
	—	厚さ 1.0	胴部片。縄文を地文とし、激隆起線による文様を描く。	長石・雲母・スコリア 灰黄褐色 普通	PL60 TP69 1% 表土
14	縄文土器	厚さ 0.7	口縁部片。縄文を地文とし、隆帯による渦巻文が施される。	長石・雲母・スコリア 灰黄褐色 普通	PL60 TP72 1% 表土
15	—	厚さ 1.0	胴部片。縄文を地文とし、激隆起線による文様を描く。	長石・雲母・スコリア 灰黄褐色 普通	PL60 TP69 1% 表土
16	高 環 土 師 器	B (4.4) E 2.3	脚部、環部片。断面形が台形の 低い脚部をもつ。環部は外傾し て立ち上がる。	環部、脚部外面ハケ目整形。底 面丁寧なナデ。 長石・スコリア・石英 にふい橙色 普通	PL59 P74 20% 表土 蓋の可能性あり

図版番号	器種	計測値(cm)		器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ	幅				
第165図 17	鉢 土師器	A (18.2)		底部へ口縁部片。底部に丸味をもつ。体部は内彎しながら外傾し、口縁部は外反する。口縁にゆがみがある。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面縦方向のヘラ削り。	小糠・海緑青針 褐色 普通	P L 59 P 76 40% 表土
		B 13.1					
		C (9.5)					
18	鉢 土師器	A (23.0)		底部へ口縁部片。体部は外傾して立ち上がり、体部上位で最大径となる。口縁部は内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面上位横ナデ。下位磨き。体部外面中位以下横方向のヘラ削り。内面黒色処理。	長石・雲母・スコリア ぶい黄褐色 普通	P L 59 P 75 40% 表土 外面上位磨付着
		B 21.5					
		C 13.8					
19	壺 土師器	A (16.0)		口縁部、体部上位片。体部上位で内傾し、口縁部で外反する。口縁端部を上方につまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。口縁端部側面に棒状工具による沈線が通る。	長石・雲母・スコリア ぶい褐色 普通	P 77 5% 表土
		B (5.1)					
20	環 須恵器	A (14.3)		体部、口縁部片。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。	長石・石英 明オリブ灰色 普通	P 80 20% 表土
		B (4.1)					
21	環 須恵器	A (14.0)		底部へ口縁部片。平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	小糠・長石 灰オリブ色 良好	P 84 50% 表土
		B 4.9					
		C 8.6					
22	環 須恵器	A (11.2)		底部へ口縁部片。平底で、体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転ヘラ削り。	小糠・長石・石英 灰色 良好	P 86 30% 表土
		B 3.8					
		C (7.0)					
第166図 23	内耳 土師器	A (33.0)		体部へ口縁部片。体部は内彎しながら外傾し、口縁部で膨らむ。口縁端部は肥厚する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向のナデ。	長石・雲母・スコリア 褐色 普通	P 78 10% 表土
		B (15.0)					
34	脚付土器 土師器	B (8.8)		胴部片。胴部は直線的で、断面形が三角形である。	表面ナデ。指頭痕を残す。	長石・砂粒・長石 ぶい褐色 普通	P L 55 P 83 3% 表土
25	壺 須恵器	B (2.6)		天井部、つまみ部片。天井部は平坦で、中央部が突出する宝珠形つまみが付く。	天井部回転ヘラ削り。	長石 褐灰色 良好	P 87 10% 表土
26	壺 須恵器	B (5.1)		体部上位、頸部下位片。体部上位は内傾し、頸部は直立する。	頸部内・外面横ナデ。体部外面平行叩き。	長石・石英 黄褐色 良好	P 82 5% 表土
27	壺 須恵器	A (17.2)		口縁部片。口縁部は外反し、口縁端部に縁帯が通る。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英 黄灰色 良好	P 88 5% 表土
		B (4.9)					

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
28	打製石斧	(4.9)	(4.8)	1.1	(33.4)	表 採	P L 59 Q13 粘板岩
29	凹石	12.9	13.5	9.2	1301.2	表 採	Q12 砂岩
30	丹波原石製品	(6.1)	(4.6)	0.8	(19.0)	表 土	P L 59 Q10 緑部片岩 孔及び抉りあり 石製模造品か
31	丹波原石製品	(4.4)	(4.3)	0.3	(13.1)	表 上	P L 59 Q11 粘板岩 孔及び抉りあり 石製模造品か
32	丸碇	4.1	2.9	0.8	15.8	表 土	Q 9 粘板岩 裏面に3か所の縫孔あり
33	鉄碇玉	径	1.4		10.3	表 土	M 3 鉛製
34	銅鉄	径	2.3	0.1	3.0	表 上	M 4 青銅製 開元通貨

第4節 まとめ

後側遺跡では、縄文時代から中世に至るまでの各時代の遺構や遺物を確認した。それらの調査成果を時代ごとに記載してまとめたい。

(1) 縄文時代

第8号住居跡1軒と第6、7、11、13、14、15、39、45、46、50、53号土坑11基が該期の遺構である。第8号住居跡は炉体土器を伴う石組炉で、東北地方南部の中期人木式等にみられる複合炉と同様な構造をもつ。また、炉体土器についても体部の文様に大木8b式の影響が強く認められることから、当時当地域が東北地方南部の人木式文化の影響下にあったことを示す好例である。土坑については阿玉台式期の第6号土坑と時期不明の陥し穴である第14号土坑を除いて、時期は加曾利E I～II式期のものと考えられる。その形態には、(a)円形で壁が内傾するフラスコ状のもの、(b)円形で壁が直立するもの、(c)円形あるいは楕円形で壁は直立し底面中央部に深い小ピットをもつものがある。さらに(c)には壁際に大小のピットをもつものがあり、形態はさらに細分される。これらの土坑はその形態から貯蔵穴の可能性が高いが、同時期に多様な形態をもつことは該期がそれ以前に盛行したフラスコ状土坑から(c)のような中央部に小ピットをもつ形態の土坑に変化する時期であることと関係していると思われる。つまり、該期が貯蔵穴形態の変換期であり、その試行錯誤の状況が当遺跡の土坑の多様性につながっていると考えられる。

今回の調査では、該期の住居跡は1軒しか確認されなかったが、遺構の配置から考えて調査区の南西制台地上にはさらに多数の住居跡があるものと推定される。

(2) 弥生時代

遺構は確認されず、土器片が表土及び後代の遺構覆土中から少量出土しているのみである。土器片は細片が多く時期を特定するのが困難であるが、大半は後期の十王台式のものと考えられる。

(3) 古墳時代

第3及び5号住居跡の2軒が該期の遺構である。出土遺物からみると、両住居跡とも7世紀前半に位置付けられ、規模及び平面形は一辺約3.7mの方形ではほぼ同様である。また、竈の構造についても火床部に掘り込みがなく、煙道部が壁外に突出しないで急傾斜で立ち上がるなどの共通性がみられる。しかし、両住居跡は2mしか離れておらず同時に存在していたとするには近接し過ぎており、主軸方向や竈の位置などにも若干の違いが認められることから時間差があるものと考えられる。

(4) 奈良・平安時代

第1、2、4及び6号住居跡の4軒が該期の遺構である。出土遺物から、4軒とも8世紀後半に位置付けられる。4軒は竈の構造については、古墳時代のものに比べて煙道部が壁外に突出し、緩やかに立ち上がるという共通性をもつ。しかし、第1、2、4号住居跡と第6号住居跡では、前者が一辺約3.5～3.8mの方形であるのに対して、後者は長軸(5.6)m、短軸4.6mの長方形であり、規模や平面形において大きな違いがある。主軸方向についても、第6号住居跡は他の住居跡より大きく西に傾いており違いがみられる。また、第4号住居跡と第6号住居跡は2mしか離れておらず同時に存在したとしては接近し過ぎており、これらのことから両者の

間には時間差があるものと考えられる。

注目すべき遺物としては丸柄がある。表土中からの出土品であるため明確ではないが、今回の調査で確認された奈良・平安時代の住居跡が8世紀後半の時期に限られていることから、この丸柄もほぼ同時期のものと考えられる。当時、当地域に律令制に規定された役人が存在していたことの証拠となろう。また、粘板岩という軟らかい岩石を使用しているとはいえ、非常に丁寧な仕上げがなされていることや裏面に紐孔があり帯帯本体への取り付け方が推定できる例として、当時の工芸技術を知る上でも貴重な遺物である。

今回の調査では該期の住居跡は調査区の東側だけに偏って確認されたことから、調査区の東側に集落が形成されていたものと推定される。

(5) 中世

第17号土坑、第1、2号溝及び第1、2号井戸が該期の遺構である。第1、2号溝は出土遺物の時期が同様であること、規模や形態が近似すること、また方向も一致していることから、一連のものである可能性が高い。あるいは方形に巡っている溝なのかもしれない。その性格については城館跡に伴う堀、あるいは墓域を画する溝などが考えられるが明確ではない。ただし、該期のものとみられる焼土や炭化物が投棄された性格不明の第17号土坑や第1、2号井戸はこの溝の区内に存在しており、溝と何らかの関係があるものと考えられ、その性格を考える上で重要である。

以上をまとめると、後制遺跡においては、今回の調査で縄文時代中期の約4,500年前頃から中世（15世紀）の約500年前頃までの生活の痕跡を確認することができた。当遺跡では、縄文時代中期には集落が形成され、多数の貯蔵穴を構築して定住生活を営んでいたことが明らかになった。その後3,000年ほどの間集落が形成されることはなかったが、古墳時代後期（7世紀前半）及び奈良・平安時代（8世紀後半）には再び集落が形成されるようになり、多数の住居が構築された。住人のなかには役人であったものもいたようである。9世紀以降になると集落は途絶え、当遺跡は中世（15世紀）になって城館あるいは墓域として利用されるようになったのである。

参考文献

- 浅井哲也「茨城県内における奈良・平安時代の土器(I・II)」『研究ノート 創刊号・2号』茨城県教育財団 1992・93年 7月
- 海老原郁雄「北関東加曾利E土器様式」『縄文土器大観 3 中期II』小学館 1988年 10月
- 樫村宣行「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート 2号』茨城県教育財団 1993年 7月
- 〃 「白石遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第82集』1993年 3月
- 萩野谷悟「常北町上入野・青木・仲郷・後制・前制遺跡の発掘調査」『常北の文化 第17号』常北町郷土文化研究会 1994年 3月